
IS～インフィニット・バスターズ！～

結城葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〜インフィニット・バスターズ！〜

【Nコード】

N5118X

【作者名】

結城葵

【あらすじ】

織斑一夏と篠ノ乃箒は、リーダー棗恭介率いるリトルバスターズのメンバー。家庭の事情で恭介は外国へと旅立ってしまうが、彼女達の入学するIS学園で、相変わらず自由な彼と再会する！SFだったリバトルだったリラブコメだったリする一夏たちリトルバスターズの日常が始まる！

プロローグ（前書き）

やってしまった……。

ワルクラもなのはも全然なかなか進まないのに一つ増やしちゃった……。 まあワルクラは完結間近だけどリメイク版もあるし……。

でも書きたくなっただから仕様がな！ っていうことにする！

どうか『IS〜インフィニット・バスターズ〜』をよろしくお願ひします！

プロローグ

あの日。私達の世界は変わった。

小学一年生のとき、私と私の友達、篠ノ乃箒はいわゆるイジメという奴にあっていた。

私は千冬姉が。箒は少し女の子っぽくない喋り方から。

理由なんて本当にくだらない事だけど、彼らにとったらイジメを正当化出来る理由のようだった。

千冬姉みたいに強くない、私はただそれだけ。それだけで彼らは暴力を振るって来た。

そして、そんな日々が続いて数ヶ月が経ち、小学一年生初の夏休みがあと数週間と迫って来た頃。

あの、いままでで一番辛かった日々。

毎日千冬姉に悟られないように頑張って笑い、千冬姉の見てない所で、箒と二人して俯いていた日々。

いつものようにいじめられていた私たちの前に、五人の男の子達が現れた。

「ああ？　なんだてめー！」

「てめえら！　よわいものいじめして楽しいか！！　そんな奴らは、おれたちがせーばいしてやる！　行くぞ！　りき、まさと、けんご、りんー！」

真ん中に立っていたすらつとした男の子が叫ぶと、その子の左にいたまさに勉強より運動が好きそうな、黒髪でツンツンした男の子が「ううおおおらあああああああ！！」と、雄叫びをあげながらいじめっ子五人に突進していった。その雄叫びに怯んだ二人がその子の突進をもろに受けて吹き飛ぶ。

今度は彼の反対側に立っていた、竹刀を持ったオールバックの男の子が「めー！ー！んー！」と叫びながらいじめっ子の一人の頭に

竹刀を打ち付けていた。……打たれた子はもの凄く痛そうにのたうち回りながら泣いていた。

その二人のと真ん中に立っていた、さっきの男の子が一人のいじめっこを蹴り跳ばしていると、箒みたいにポニータールにした男の子が一人のいじめっ子にハイキックを打ち込んでいた。

最後の一人は最後まで申し訳なさそうな顔をしながらそれを見ていた。

「くっ……いつてええ……な、なんなんだよ！ お前らは！！」

ひとりのいじめっこがそう叫ぶと、リーダーっぽいさっきのすらっとした男の子がニヤリと笑った。

「おれたちか？ おれたちは悪をせいはいする正義の味方。ひとよんで……」

自信満々、と言った風に胸を張り、いじめっこにむけて手を突き出し、叫んだ。

「リトルバスターズさ！！」

いじめっ子たちは何故か驚いていた。

「り、リトルバスターズだって！？ あ、あのイジメとかしてるやつをせいはいしに行ったり、たまにクマをたおしに山に入っておこられた事ー〇回以上とか意味不明な記録を作ってるあのリトルバスターズ！？」

「だ、だめだ！ かないっこねーよ！」

「にげるー……！」

そう言っただけで彼らは逃げ帰った。

彼らが逃げていくのを笑いながらしばらく見ていると、リーダーっぽい男の子が、

「さて。本来のミッションにもどるぞ！」

そう言っただけで彼は私たちの元に歩いて来た。そしてこちらに手を伸ばす。

「強敵があらわれたんだ！ きみたちの力がひとつようなんだ！」

私達は思わず呆氣にとられた。

「きみたちの名は？」

「え……あ……お、おりむら……いちか」

「……ほうきだ」

「よし、いくぞ、いちか！ ほうき！」

そう言つて彼は一方的に私たちの手を掴んで、私達を引きずるように走り出す。私達は抵抗するという思考すら奪われていた。そしてようやく開いた口から出たのは、

「ね、きみたちは！？」

それを聞いた彼は、聞いてなかったのか？ と意外そうな顔をしたらかと思うと、再び笑顔に戻つて、

「おれたちは悪をせいはいする正義の味方。ひとよんで……リトルバスターズさ！！」

私達がたどり着いたのは、知つてはいたけど来た事のない神社、の裏だつた。

そこには蜂の巣があつた。まさしく強敵だつた。

「よし、いくぞー！！」

とリーダーっぽい男の子が言つと、五人全員が蜂に効く殺虫剤をどこからともなく取り出し、蜂の巣に向かつて行つた。私達は再び呆氣にとられて、隠れていた草の中でただ呆然と彼らを見ていた。

……結果は当然惨敗だつた。

私たちの元に戻つて来た彼らは息を切らしてボロボロだつた。

悔しそうに蜂の巣を睨みつけ挫けかける彼らの中で、いち早く復活し、再び戦う決意をしたのは、あの黒髪ツンツン頭で大柄な男の

子だった。彼は突然上着を脱ぎ出し（何故かは今でも分からない）、身体に陽動用のハチミツを塗りたくって振り返り親指を突き上げて見せながら言った。

「あとは、たのんだぜ」

そう言うつと彼は蜂の巣に向かって果敢に突撃していった。雄叫びをあげながら。

当然のように蜂に群がられた。

それを見たリーダーっぽい子を取り出したるはチャッカマン。そしてその向けられた先には、さつき竹刀を持っていた子がノズル付きの殺虫剤を向けていた。彼が奮闘している蜂の巣に。

「まさと、おまえの犠牲は忘れん！」

竹刀を持っていた子が殺虫剤を発射し、さらにリーダーっぽい子がチャッカマンのスイッチを押して火を出す。その先は……当然火炎放射となる。火が向かって言った先にはさつきの男の子。

ボウッ！！ と、蜂の巣は彼ごと燃えた。

「うおおおおおおお！！　んなこと頼むかああああああー
ーッ！！」

……あの火柱となりながらツツコミを入れる彼、井ノ原真人の姿は今でも忘れられない。

その後は、当時男の子だと思っていた女の子、棗鈴が真人を蹴りとばした。まあ結果的にそのおかげでゴロゴロと転がり、火は消えて彼は助かった訳だが。

正直、最初から最後まで私達二人は啞然としていた。言葉なんかでなかった。一方的にリーダー、棗恭介に入れられた、マスコミの人がとった記念写真（？）でも、私達は驚き続けていた気がする。

あの日から私と箒は、リトルバスターズのメンバーとなっていた。半ば強制的なものだったが、後悔はしていない。イジメはすっかり無くなったし、彼らとの日常は毎日がお祭り騒ぎでとても楽しかった。箒がお姉さんの事情でどこかに行ってしまった時も一緒にいてくれた。その後に来た鳳 ふあん・りんいん 鈴音のイジメも私達で解決した。当然な

から彼女もリトルバスターズのメンバーになった。

そして　一歳年上の恭介がそろそろ中学生になろうかと言う時、恭介と鈴がお母さんの事情でフランスへと引っ越す事になった。

そのとき鈴音（同じ『鈴』だから、私達は鈴音と書いて『すずね』と呼んでいる）が泣きながら何やら恭介と話していたが、何を話していたかは聞けなかった。戻って来た時はやけに嬉しそうだったけど……。

私が恭介の事が好きだ、って自覚したのは恭介がフランスに行って五日経った後だった。そのとき、きっと鈴音も篤も恭介の事が好きなんだろう、となんとなく分かってもいた。それは二人も同じ事だと私は思う。

恭介がいない。それだけでリトルバスターズのみんなは少しだけ元気がなくて、不安げだ。でも……誰も寂しくはない。鈴音は途中で一回中国に帰ってしまったけど、理樹や鈴たち、残ったリトルバスターズのメンバーもいる。それに、

『俺はリトルバスターズを世界にまで広げ、世界の正義を守ってやる！！　だから、また会うその時まで、日本の正義はお前たちに任せる！！』

恭介はそう言ってフランスへと旅立っていった。

あれは私だけに向けられた物じゃない。リトルバスターズのみんなに向けられた言葉だ。

でも、私にはなんとなく、この言葉が特別に思えたんだ。そうでなければ、今この瞬間までの心の支えにする事は出来なかったに違いない。

『IS学園』。

私はそこに入学する。

最初はあまりいつもと変わらない。いつも通り、とつまらなそうに思っていたが、今ではとにかく楽しみでしうがない。

だって、帰って来たらしい篤も一緒だ。それに、

『世界で唯一ISを使える男、棗恭介』

大好きな彼も、一緒なんだから。

第1話「初日と再会と窓から現る我らがリーダー」（前書き）

恭介の専用機どうしようかな。00とW、どちらも考えてあるんだけど……。中の人的に言ったらWなんだろっけどなあ……。

あと恭介の喋り方うまく書けるか心配です。

第1話「初日と再会と窓から現る我らがリーダー」

IS学園初等科一組では、ホームルームが始まっていた。

教壇に立っているのは身長とバストが釣り合っていない、グリーンのショートヘアーで眼鏡をかけた女性だ。

「皆さん、入学おめでとう。私は副担任の『山田^{やまだ}真耶^{まや}』です」

……と、真耶は言ったのだが、クラス全員全く別の方に思考が行っていた。

当然。棗恭介に。

「あ、え……きよ、今日から皆さんはこのIS学園の生徒です。この学園は全寮制。学校でも放課後も一緒です。仲良く助け合って、楽しい三年間にしましょうね」

涙目だった。

「じゃ、じゃあ、自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で

……」

真耶がそう言うつと、隅の方の席の一番前に座っている女生徒から自己紹介が始まる。

その頃、一夏は全く別の事を考えていた。

（恭介いない……って、よく考えたら恭介って私達より一個上だから二年生だよな。同じクラスじゃないのは残念だけど……あとで探しにいつてみようかな）

「……斑さん。織斑一夏さん!!」

「!?!? はっ、はい!?!?」

思考の海から無理矢理引き戻された一夏は、思わず裏返った声を出してしまった。

周りの女生徒たちがくすくすと笑う。

「ご、ごめんね? 大声出しちゃって……。で、でも、『あ』から始まって、今『お』なんだよね。だからね? その……自己紹介

してくれるかな？　だ、ダメかな？」

「い、いえ、あの、そんなに謝られなくても自己紹介はします……すいません、ちょっと考え事してた物で……」

「ほ、本当？　本当ですね？　約束ですよ！　絶対ですよ！？」

「いや、あの、はい。ちゃんとします……」

一夏は一度咳払いをして、

「えっと、織斑一夏です。趣味は料理、好きな事は剣道、特技はマッサージ……かな？　とにかく、よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げて一夏は席についた。ふう……と安堵の息をつく。

と、同時に教室のドアが開いた。そこからは一夏の見知った黒髪の女性が。

「あ、先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けて済まなかったな」

言いながら女性は真耶の斜め前に立ち、

「諸君、私が織斑千冬だ。きみたち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない物には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠一五歳を十六歳までに鍛え抜く事だ。逆らっても良いが、私の言う事は聞け。いいな」

千冬が放った暴君のような言葉に返って来たのは、何故か黄色い歓声だった。一夏は思わず耳を塞ぐ。

「キヤーーーーーーッ！！　千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！　北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私……千冬様のためなら死ねます！！」

「あれ？　じゃあ織斑さんって千冬様の妹……？」

……千冬姉の人氣もここまでくるともはや宗教レベルかもしれない……と、一夏は思った。

千冬はうんざりした風にため息をつき、呆れた声を出した。

「……毎年よくもこれだけのバカが集まる物だ。感心させられる。それともなんだ？ 私のクラスにだけ馬鹿者どもを集中させてるのか？」

本当に嫌そうに言う千冬に、思わず一夏は苦笑した。

と、千冬は表情を元に戻し、クラス内を見渡す。

「……チツ、あの『ヴァカ』め……まだ来ていないのか。昔から思っていたが本当に自由な奴だな」

（あれ？ 今確実にバカの言い方がおかしかったよね？ 『バ』が『ヴァ』になつてたよね？）

千冬の言葉に一夏がそんな事を思っていると、真耶が口を挟んだ。
「あれ？ 誰か来てない人がいるんですか？」

「ああ……おそらくもうすぐ来るだろうが……ッ！」

千冬表情が固まった。まさに開いた口が塞がらない感じで。

千冬の視線は真つすぐ窓の方。

そこから、タン、と音を立てて何かが大きな物がその窓を塞いだ。それは、いや、その人は右手にロープを持ち、左手で窓枠を掴み、黒い制服を着てニヤリと笑っていた。

「すいません、遅れました」

静寂が支配した教室に、よく通る声でその人は言った。

その人は 彼は。

「早く来過ぎて屋上で昼寝してたんですけど、気付いたらこんな時間ですわねー。いやー、どうもすいません、千冬さん、あーいや。織斑センセ」

まさしく、棗恭介だった。

スタン、と教室の床に着地し、彼が話したロープは機械音を鳴らしながら上へと巻かれていった。

（ああ……そういえば小学校の時も、自分の教室からロープを使っ

思わず笑う一夏の耳に、恭介の言葉が通る。

「なああああつうううめええええー」

瞬歩！？　　と思ってしまうほどに高速移動した千冬から繰り出さ

「なっ……！ 白羽取りだと！？」

「ぬ、ぬおおおおお——ッ!?!?」

それをうまく空中で体勢を整え、何事もなかったかのように着地

「くっ……無駄に身体能力と戦闘能力を上げおって……!!」

「織斑先生と呼ばんかアアアアアアア！」

突如繰り出される北斗百烈拳の打ち合い（？）。二人と席に座つ

なかつた。

* * *

二人がボロボロ になる前に、時間が来そうだったので二人の殴り合いは中断された。

恭介の席は何故か一夏の隣だった。名前順のはずだから普通はもっと離れた席のはずなのに、なんで？ と思つて、自分の姉の方を見ると、ニヤリと笑っていた。

（千冬姉の仕業か……）

心の中でサムズアップしながら、授業に集中する。ホームルーム後は話す暇がなかった。

一時間目が終わり、一夏は隣にいる我らがリーダーに視線を向けた。恭介もこちらを向いていた。

「久しぶりだな、一夏」

「久しぶり。相変わらず元気だね、恭介は」

「俺が、というよりはリトルバスターズ全員が、という方が正しいな。俺達から元気をとったら何も残らないと言っても過言じゃない」

「あはは、確かに。特に真人とかはそうかも」

「いや、アイツには筋肉が残るぞ。というよりアイツにとってはどつちも同じなんだろうな」

「……ちよつといいか」

と、恭介の後ろから聞き慣れた声がした。

二人の幼馴染み、篠ノ乃箒だ。

「ああ、箒。久しぶりだな」

「久しぶり、六年ぶりだな」

「六年か……。成長期の人間が成長するには十分な時間だな。一夏も箒も美人になってて、さすがのおにーさんもびつくりしたぜ」

「そ、そうかな……？」

「う、うむ……。しかし、相変わらずお前は私達を子供扱いするんだな」

「子供扱いはしてないさ。一応年上だからな、兄貴分として振る舞ってるだけだよ」

ふと浮かべた恭介の笑顔に、箒はもちろん、周りの女生徒も顔を赤らめる。

……恭介の顔立ちはいわゆる『イケメン』、という部類に入るのだろう。そろそろ死語化してきている言葉ではあるが、この整った顔立ちを指すならばこの言葉が一番になると思われる。

顔だけでもそこそこモテルのだが、リトルバスターズ、なんて正義の味方をやっていた物だから、小学生の頃はかなりモテていた。まあ、半分以上は理樹と謙吾にも行っていたが。

真人は……残念な物だ。

「ああ、そういえば。箒、お前剣道の全国大会優勝したんだってな。おめでとう」

「！？ な、なんで知っているんだ！？」

「新聞だよ、新聞」

「な、なんで新聞なんか読んでいるんだっ！」

「四コママンガ探してる途中で見つけただけさ。結構大きく載ってたぞ」

「やっぱり四コマ目当てだったんだ……」

変わってないなあ……と呟きながら、赤くなる箒を見て笑っていた。

キーンコンカーンコン、とチャイムがなった。箒は変わらず頬を赤く染めながら席に戻っていった。

二時間目。隣を見れば恭介がノートを取っていた。

いや、まあ当然と言えば当然なのだが、なんだか一夏には恭介が真面目にノートを取る姿がなんとなくイメージ出来なかったので、少し新鮮に感じた。

というのも、恭介は昔から頭が良かった（その頭も無駄な事に使っていたが）。それはもう、彼が言った『俺はノートを取った事が

ない！』というアホ過ぎる嘘を信じてしまつくらいには頭が良かったのだ。

別に今でもそれを信じてる訳ではないが、その出来事のせいかなんとなくイメージが付かなかった。

そんな恭介に真耶は、

「棗君、なにか分からない事がありますか？」

と、質問した。

恭介は余裕そうに、

「いえ、今の所は大丈夫です。ありがとうございます」

「そうですか、じゃあもし分からなかったら遠慮なく聞いてくださいね！」

そう交わすと、真耶は再び黒板に向かった。

「……というより、一応IS開発にかかれるくらいの知識はあるんだけどな……」

……やっぱり恭介の頭は良かったようだ。

二時間目が終わって休み時間。一夏はなんだかんだで聞きそびれていた事を聞いてみた。

「そういえば恭介。なんで制服IS学園のじゃないの？」

そう。彼が来ているのは黒い制服。形も何もかもIS学園の制服とは思えない代物だ（リトバスのいつもみんなが来ている制服を思い浮かべると簡単かと）。

恭介は、ああその事が、と、

「どういう訳か、制服が俺の家に届いてなかったんだ。仕様がなかった前の学校の制服を着て来たんだ。千冬さんの話だと、ちよつとした手違いがあったらしい。あとで渡してくれるってさ」

「へえ……でも、その制服カッコいいね。共学だったの？」

「ああ。女子の制服も結構可愛かったと思うぞ。今度写真見せてやるよ」

「本当？　じゃあお願い」

「ちよつとよろしくて？」

「ん？」

恭介が振り返ってみると、そこには金色の神を縦ロールにした、何だか偉そうにしている少女がいた。

彼女は続ける。

「聞いてます？ お返事は？」

「ああ、すまない。代表候補生に話しかけられるなんて光栄があるとは思ってなかったんでな。少し驚いてしまった。許してくれ、ミス・オルコット」

確実に今時多い部類の女子だ、と見抜いた恭介は少し下手に出る事で流す事にした。

彼女、セシリア・オルコットはそんな恭介を見て少し気分を良くしたようだった。

「あら、分かっていらつしやる殿方みたいですね？」

「イギリスの代表候補生という事を抜きにしても、淑女相手に紳士になるのは男の義務だろう？ それに、入試主席の君がむさ苦しい男である俺に話しかけてくれるだけでも光栄なんだ、これくらいは普通さ」

ますます気をよくしたらしいセシリアは、満面の笑みで、

「ふふ、気に入りましたわ。もしも、ISの事で分からない事があれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。

何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「おお……そいつは凄いな。なるほど、さすがは主席という訳か」

と、恭介が言うと同時に、三時間目の授業開始のチャイムがなった。セシリアは「また来ますわ」と言い残し、セシリアは席に戻っていった。

入れ替わるように、教室に千冬が入ってくる。

「それではこの時間は、実戦で使用する各種装備の特性に付いて説明する」

教団について早々に千冬は授業を始めた。真耶はというと、手にノートを持ってメモを取る体勢だ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス代表とは、いわゆる学級委員やクラス長といった物と同じ役職だ。仕事としてはクラス対抗戦意外にも生徒会の会議や委員会への出席などがある。

対抗戦の方が重視されるので、基本的に強い生徒が選ばれる事が多いが、

「はい！ 棗くんを推薦します！」

「私もソレが良いと思いまーす」

「あ、私は織斑さんが良いと思うー」

「ええ！？」

「では候補者は棗恭介と織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

当の選ばれた本人達、恭介は「やっぱり来たか……」とため息をついている。拒否権がない、と察しているのかもしれない。

一夏はと言うと、突然過ぎる展開についていけずにオロオロしている。

すると、突然甲高い声が響いた。

「待ってください！ 納得いきませんわ！」

バン！ と机を叩きながら立ち上がるセシリア。その表情からは少しばかり怒っているのが見て取れた。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ わたくしに……このセシリア・オルコツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリアは続ける。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までES技術の修練に来ているのであって、サー

カスをする気は毛頭ございませんわ！」

……この女……。と、一夏は心の中で呟いた。

一夏のこめかみに青筋が立っていた。残念ながら、一夏は自分の好きな人を極東の猿と言われたあげく、

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！ 大体、文化も後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては堪え難い苦痛で」

「イギリスだつてたいしたお国自慢ないでしょ。世界一まずい料理で何年覇者やつてるの？」

自分の国を侮辱されて黙ってられるほど、心が広い女でもなかった。

「なっ……！？ 貴女！ わたくしの国を侮辱しますの……！」

「先に侮辱して来たのはそっちでしょ？ 自分が侮辱されたらキレるのにこっちはキレちゃいけないのかな？」

「くっ……！ 貴女ねえ……！」

「そこまでだ」

「……！」

間に入った声は千冬の物ではなかった。

「恭介？」

「ミス・オルコット。こちら君の国を侮辱したのは悪かったが、君も立場をわきまえた発言をした方が良い」

「なんですって？」

「君はイギリスの代表候補生なんだろう？ 言い換えれば君の言葉はイギリスの言葉、そうとられても文句は言えない立場だ。君の発言一つで戦争勃発、なんて事になりかねないんだがな」

「ッ……！」

「君の言いたい事は分かるが、他国への侮辱は君の場合思つてはいても口には出さない方が良い。と、言う訳で」

恭介は席から立ち上がる。

そして一夏や箒にとつてはいつもの動作を。つまり、相手に向け

て手を突きつける。

「決闘だ!!」

「……は？」

クラス全員が呆氣にとられていた。思わず一夏と箒も声を漏らしたほどだった。千冬だけは「ほう……」と、何かを察したような表情をしている。

当然、セシリアも呆氣にとられている訳で。

「……突然何を言ってますの、あなたは」

「君の言い分だと、強い奴がクラス代表になるべきらしいな？」

「ええ、そうですね。ですから」

「だからこそ決闘だ」

「だからなんでそうなりますの!？」

「分からないか？ クラスから推薦された俺と、クラス最強を名乗るミス・オルコット。強い方がクラス代表になるべきと言うなら、俺とミス・オルコットが決闘すれば強い方が自ずと分かると思わないか？」

ニヤリ、と恭介は笑う。

セシリアは呆氣にとられながらも、返すようにニヤリと笑った。

「言いますわね、あなた。良いですわ。その決闘、受けて立ちましよう。ハンデは欲しくて？」

「いや、必要ない。ハンデ無しに自分より強い奴に勝つ、そういう展開の方が燃えてくる」

「面白い、面白いですわね……。いいですわ、わたくしに勝つというのならやってみなさい。わざと負けたりしたら貴方を小間使い……いえ、奴隷にして差し上げますわ!」

「望む所だと言わせてもらっぜ」

双方自信満々に笑いあう。

「……話はまとまったな。それでは勝負は次の月曜……第三アリー

ナで行う。第一回戦は棗とオルコット。二回戦は勝った方と織斑だ」

「私も!？」

「お前も推薦されているだろう？」

……なんだか大変な事になった……、と、一夏は頭を抱えた。

第2話「BATTLE STRAT!」

放課後。恭介は教室に残っていた。

別に教室自体に用があつた訳ではなく、とりあえず誰もいなければそれでよかつた。恭介は携帯に耳を当て、遙か遠くにいる仲間と連絡を取っていた。

「そっちはどんな感じなんだ？ 特にクリスカとイーニアだ。アイツらはいいい加減慣れたか？」

「フツ……彼女たちなら楽しそうにやっているよ。まあ、何故か相変わらず私の事は避けるがね」

「……まあ、それは仕様がな。慣れなければお前はただの不審者、いや変態だからな。いい加減自覚しろ、グラハム」

会話の相手、グラハム・エーカーは携帯の向こうでハッハッハ！と笑っていた。彼は美少女よりも美少年に意識の向く、いわゆる『ホモ』の類に類されるであろう男で、恭介の仲間はいいい加減慣れたので普通に接せられるし、数人ほどいる腐女子は仲良く話している。が、やはり慣れないと避けてしまう人物だった。

『変態とは言つてくれるな少年。だが君にならそう言われるのも良しでしょう。私は、いや、正確には私達か。私達は君に心奪われた存在だ。少年がその視線を私達に釘付けにしてくれるならば、私達もそう言われるのは本望だ！』

「いや、確かにうちにはバカばかりいるが、いくらなんでもそんな事言う奴はお前だけだ」

『そうか？ 理樹少年などは結構そっちの趣味がありそう』

「やめろ！ その話をする西園辺りが反応するだろー！」

はあ……、とため息をつき、本題に入る事にした。

「ところで、例のアレはどこまで進んだ？ あれのためにわざわざ木星まで行ってもらつたんだ。そろそろ数は揃つたか？」

『ふむ。その辺りはタバネやカタギリ辺りに聞いた方が詳しく聞け

るだろうが……数自体は揃ったようだ。現在は君の切り札とケルデ
イム・サバーニヤ、アリオス・ハルートを平行制作中だったはずだ」
「そうか……マイスターは近々見つかるから、出来れば夏休み前ま
では完成していると嬉しいと伝えてくれ。俺のは特に、な。ゼロ
ではそろそろ限界だ。俺に付いて来れなくなつて来ている」

『了解した、伝えておこう。ああ、それと。イーニア君だがね、お
土産を所望しているようだ。今度来れる時にでも持つてくると良い』
「分かった。多分ぬいぐるみ辺りがいいだろ。クマのミーシャが大
好きだからな」

『妥当かもしれないな。まあ、地球付近まで来た時にはまた連絡す
る。ではな』

「ああ、じゃあな」

ピッ、という電子音と共にグラハムとの連絡を切る。

恭介は一息つくと、荷物をまとめ始めた。

そして荷物を持ち、教室から出ようとドアに手をかけようとする
と、独りでにドアが開いた。その先にいたのは 真耶だった。

「山田先生？」

「ああ、棗君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

見ると、真耶は片手に書類と何かを持っている。真耶の存在に関
しては気配が分からなかったのではなく、単純に気にするほどの物
じゃない、と判断していたからだった。

「……部屋でも決まりましたか？」

「あれ、知ってたんですか？」

「いや、俺の事情が事情ですから。無理矢理にでも寮に入れた方が
安全です」

「ああなるほど。そこまで察してくれていたなら話が早いです。こ
れ、部屋の鍵と、部屋の番号です」

言つて真耶は恭介に鍵と紙を渡して来た。

「荷物は……運んであります？」

「ああ、手配してある」

と、言いながら真耶の隣から出て来たのは千冬だった。

「そうですか。服とか以外に簡易メンテのとかもですか？」

「ああ。入っていた」

「簡易メンテ？」

二人の会話についていけずに、首を傾げながら口を挟む真耶。

千冬は、ああ、山田君は知らなかったな、と簡単に説明した。

「え、ええ！？　な、棗君って自分の専用機持つてるんですか！？」

「はい。その簡易的なメンテも任されてます」

「す、凄いことじゃないですか！」

「コイツは『ヴァカ』だが頭はいい。ISに関してならそこその知識は持っているぞ」

「母親と父親がIS開発者だったから勉強する機会が多かっただけです」

「今ではその知識がかなり重要なようだがな？」

「さて、どうですかね」

HAHAHAHA、と笑いあう二人はどこか不気味だった。

「あつ、そうだ。棗君、お風呂なんだけど、棗君は大浴場はまだ使えませんか」

「大丈夫、分かってます。使えるようになったら教えてくれるんですよね？」

「はい、大丈夫です」

「なら十分です。じゃあ、部屋に行つて来ます。荷解きとか、簡易メンテの奴のセッティングとかもあるんで」

「ふむ、そうだな。とつとと行つてこい」

「はいはい」

「『はい』は一回……いや、お前には言つても無駄だな」

「分かってますね」

「分かりたくはなかったがな……」

ため息をつく千冬を見ながらニヤニヤしつつ、恭介は寮の部屋に向かった。

「1025号室……ここだな」

恭介は鍵を差し込む……前に、とりあえずノックしておいた。コンコン、という小気味よい音が響く。

「誰か居るかー？」

……。

返事はない。

気配はなんとなく感じるのだが、聞こえていないのかもしれない。着替えとかされていて困るので、とりあえずもう一回ノックしておく。

……。

やはり返事はない。

仕様がないので鍵を差し込みひねる。と、鍵は開いていたように開いた音かと思いきや閉まった音だった。反対側に鍵をひねり、ドアを開ける。

部屋に入って行くと、目についたのは荷物だった。簡易メンテはデータ状でしか行わないので、そんなに巨大な物はない。専用のPCだけが箱には入っているはずだ。

そのまま荷物に近寄り、荷物を確認する。予想通りPCが一つ入っていた。あとは大体服だったり、先日届かなかったIS学園の制服だったり、生活用品ばかりだ。極めて最低限ではあるが。

「千冬さんだな……別に良いけど」

PCに関しては同居人と相談しておく場所を決めなければならないのでとりあえず箱に入れておく。

と、さっきからあった気配が近づいた。

「誰か居るのー？」

……聞き覚えのある声だ。

直感的に振り返るのは危険だと判断する。が、不意打ち気味の声に反射運動を止める事は難しかった。思わず振り向いてしまう。

「同室になった人だよ。これから一年間よろしく」

そこには……湿った綺麗な黒髪をセミロングの長さにした見知った美少女、

「こんな格好でごめんね？ シャワー使わせてもらっちゃった。私は織斑いち……か……」

「……一夏」

の、タオル姿だった。

お風呂上がり、いや、シャワー上がりの一夏は上気した肌が赤く染まり、いつも見るより露出度の高いせいか、かなり色っぽく見えた。

「きよ、きよきよ、恭介……？」

「ああ……」

ボン！ という音でも聞こえそうなほど一気に顔が真っ赤になった。

恭介は凝視したい欲望を押さえつけ、目をそらす。

「あ、あう……み、見られた……？」

「あ、あー。その、何だ。一応ノックと声をかけたんだが……聞こえなかったか……？」

「……うん」

「そうか……。と、とりあえず、服着ろ。後ろ向いてるから」

「う、うん……」

視線を荷物へと向け、身体の奥から沸き上がる興奮を押さえつける。心頭滅却すれば火もまた涼し、などと言うが、まさにその通り。落ち着けば上がった体温が一気にもとに戻っていく。

「も、もう大丈夫……だよ？」

「ああ……」

くるりと身体ごと一夏に向ける。

「えつと……恭介もこの部屋？」

「ああ。ここだ。千冬さんの仕事みたいだな」

「そっか……千冬姉ナイス……！」

「？」

何故かガッツポーズをとる一夏に、頭に？をうかべる。

「そうだ同室なんだったら、シャワーの時間決めなきゃね」

「そうだな……じゃあ、一夏が先で良いぞ。俺はISのメンテを毎日しなきゃならないからな」

「IS？　って、専用機持つてるの！？」

「まあな。多分、お前にも来ると思うぞ。オルコットと戦う日辺りにな」

「え、わ、私！？」

「ああ。束が作ってるって言ってた」

「束さん……かあ」

不安でも覚えているのか、それとも別の何かがあるのか、何やら微妙な顔をする一夏。

その後は特別何かがある訳でもなく、恭介がフランスに行っただけが、何があつたかを恭介が語ったり、逆に恭介がいないときリトルバスターズはどうしていたか、などの話で盛り上がり、IS学園初日は終わったのだった。

* * *

翌朝。恭介と一夏は一緒に朝食をとっていた。

恭介は昨日の黒い制服ではなく、IS学園の真っ白な制服を見に纏っていた。

二人が他愛無い話をしながら朝食をとっていると、簞がやってきた。

「おはよう、恭介、一夏」

「ああ、おはよう」

「おはよう簞」

簞は一夏の隣に座り、朝食の載ったプレートテーブルに置く。

「二人は早いな」

「俺が早起きなだけさ。それに釣られて一夏も起きる」

「……何？」

ピクリ、と箒は肩眉を吊り上げる。

「どういうことだ」

「何が？」

「だから！ それではまるで一夏とお前が同室みたいじゃないか！」

「いや、同室だけど」

「は……？」

「だから、同室だ。一夏と俺は」

「えっと……ごめんね？」

ぐぐぐ……と何やら唸りながら羨ましそうに一夏を睨む。苦笑いしながら隣の親友に謝罪しか返せなかったのだが、特に反省した様子は無い。

箒は大きくため息をつき、自棄になったのか白米をかき込む。

「箒……そんなに急いで食ったら詰まるぞ」

「そんなヘマはしなんツ！？ ん、ん……！！！」

「ほら、言わんこっちゃない。そら、大丈夫か？」

水を差し出しながら箒の背中をトントンと叩く。水を受けとった箒は一気に飲み干し、詰まった白米を流すと、流し込むように空気を飲み込む。

「はあ……はあ……」

「箒、大丈夫？」

「ああ……なんとか。恭介、すまない」

「気にするな。仲間は助け合ってこそだろ？」

「フッ……毎回同じことを言う」

箒は席に座り直し、味噌汁を一口。

すると、聞き慣れた大声が食堂に響いた。

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻したらグラウンドー〇周させるぞ！！」

それを聞いた瞬間、食堂中の女生徒達が朝食を急いで食べ始めた。目の前の箒も同じだ。まさに悪戦苦闘。何度か詰まらせそうになり

ながらも朝食を食べ終えた箒と共に、恭介達は教室へと急ぎ足で向かった。

今日の授業はセシリアが絡んでくる事もなく、順調に進み、あっという間に放課後になった。

今、恭介と一夏、箒は剣道場にいる。恭介は壁に寄りかかり、一夏と箒は防具をつけ、若干肩で息をしながら、竹刀をそれぞれ中段に構え相対していた。

「むう……少しばかり弱くなっていないか？ 一夏」

「あははは……最近ISの事とかであまり竹刀を振る時間なかったからね。結構鈍っちゃって……」

「仕方ない。私が鍛えなおしてやろう。今のままでは月曜日に恭介に一撃与えられるかも怪しい」

「勝てる事前提なんだ……」

「何を言っている。恭介があんな女に負ける訳がないだろう。勝つて当然だ」

「んー……まあ、確かにそうかもね」

「期待大だな。おにーさんプレッシャー感じちゃうぜ」

「お前の辞書にプレッシャーなどという言葉はない」

「おいおい、俺だっていつも完璧な訳じゃないんだぞ？」

「そう言いながら自分が完璧だ、って言ってる辺り恭介らしいけどね」

「俺は完璧だ、そう思ってた方が楽しいだろ？」

はっはっは、と笑いながらそう言う恭介。それに釣られて笑みがこぼれるのはやはり恭介だからなのか、と二人は思う。

防具を外しながら、一夏がそういえばと切り出す。

「恭介の専用機ってどんなの？ 持ってるって言ってたよね」

「それは内緒だ。理由はもちろん、その方がカッコいいからだ」

「いや意味分かんないけど……」

「つまり、決闘当日のお楽しみってことだ」

「いじわるだなあ」

「楽しみは取っておかなくちゃつまらないだろ？」

「まあ良いじゃないか。どうせ月曜日に見られるのだ」

「むう……まあ、それもそうだね」

垂れまで防具を外し終わり、綺麗に片すと、二人は更衣室へと入っていった。

* * *

一週間後。

恭介は第三アリーナのピット搬入口にいた。現在恭介は自分の専用機の最終調整を行っている。

「マグネットコーティング……OK。翼状同調システム……OK。

ツインドライブ同調率……安全領域。ゼロシステム……OK。各武装異常なし。全システムオールグリーン……。行けるな……」

「終わったか」

恭介の後ろから声をかけて来たのは千冬だった。隣には真耶、一夏、箒がいる。

「異常なし。いつでも行けるぞ」

「そうか……。なら棗、ISを展開しろ」

「了解」

恭介は簡易メンテ用のPCに繋いでいた、猫が丸い杵から顔を出したエンブレムの付いたネックレスを手取る。

「行くぞ……ゼロ」

恭介の声と共に、待機状態だったISが展開した。

恭介の身体を青と白の装甲が包んでいく。

「これは……全身装甲！？」
フルスキン

「凄い……」

頭部はV字のアンテナが立ち、緑に輝くツインアイ。そして一番目を引くのはその背中にある巨大な白く輝く八枚の翼だった。緑の

粒子を放つ翼が揺れるたびに、何故か羽が落ちているような光景を
幻視する。その姿はまるで、

「天使みたい……」

一夏が小さく呟く。

「よし……行けるな、ゼロ」

恭介はそう呟きながらピッチゲートの前に立つ。

「恭介……勝ってこい」

「当然。俺を誰だと思ってるんだ？」

顔の白い装甲の中でニヤリと笑う。

恭介は視線を前に戻し、自信に満ちた声で言う。

「棗恭介、ウイングガンダムゼロ・パーフェクトカスタム。出る！

！」

白き翼を持つ天使は、戦いの場へと飛び立った。

第3話「破壊天使と蒼い雫と白き騎士と」

「あら、逃げずに来ましたのね……ふ、フルスキ全身装甲？」

待っていたセシリアは蒼いISを身にまとい、少し戸惑った声を出した。

『ブルー・ティアーズ』

特徴的な四枚のファン・アーマーが背に従うように浮遊し、その手には二メートルを超す銃器、『スターライトmk?』。射撃主体の機体である第3世代型ISだ。浮遊しているファン・アーマーは機体名と同じ名称の兵器、試作BT兵器『ブルー・ティアーズ』というビット型兵器だ。

「決闘に誘っておいて来ない訳にはいかないさ」ダンス

「ふふ、その度胸だけは認めて差し上げますわ。それに免じて最後のチャンス差し上げましょう」

「ほう……どんなチャンスをくれるんだ？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、今ここで謝るというのなら、許してあげない事もなくてよ」

試合開始の音が鳴っているにも関わらず、セシリアは腰に手を当てて人差し指を恭介に向けながらそう言った。

そんなセシリアに対し、恭介は特に怒る訳でもなく、余裕を全く崩さずに返事を返す。

「何を謝らなければならないのか分からないが、まあ個人的に謝りたいと思っている事はあるから、そっちを謝らせてもらおうか」

「あら、なんですか？」

フツ、と恭介は笑い、

「仲間が見てる」

「は？」

「一夏が、篝が、千冬さんが今この試合を見ているんだ。そして俺はリーダーとして無様な戦いは出来ない」

だから、

「圧倒させてもらっぞ、セシリア・オルコット」

ゾクリ、とセシリアは一瞬冷たい空気が背筋を通るのを感じた。

恭介が放つ、威圧感。それは強がりでもなんでもないという事を直感的に感じた。それに対しセシリアは一瞬『恐怖』に似た感覚を感じたのだ。

（気圧された……？ 男ごときにこのわたくしが！？ そ、そんなこと）

「そんなこと……ありませんわッ！！」

叫ぶと同時に、セシリアは『ブルーライトmk?』のトリガーを引き絞る。キュインツ！ という独特の音と共に銃口から閃光が走る。ウイングゼロへの直撃コースを通るそれは、しかしその巨大な翼にバシユウ！ と弾かれた。

「なっ……！ 拡散した!？」

「ゼロのこの八枚のうち、でかい四枚にはエフィールドジェネレーターが搭載されている。残念だがその機体とゼロでは相性が悪いな。武装はビーム兵器ばかりなんだろう？」

ミノフスキー粒子と呼ばれる粒子に電磁波を流す事で生じる磁場、『エフィールド』。ビームを偏向させる特性を持つ対ビームバリアだ。ウイングゼロはその『エフィールド』を翼に沿うように展開させており、ビーム兵器はよほどバカ出力の物でない限りはほとんど防いでくれる。

「くっ……、な、ナメないでいたたきだいすわね!!」

背後に浮遊していた四枚のファン・アーマー、『ブルー・ティアーズ』が発射される。高速で動く『ブルー・ティアーズ』はウイングゼロに向けてオールレンジ攻撃でビームを放つ。が、それら全てはどの方向から放つても巨大な四枚の翼に弾かれ、エネルギーが反発、拡散させられる。

「さて……行くぞゼロ。俺を導いてくれ……！」

言うと同時、ゼロの八枚全ての翼から特殊な導力であるGNドライブの緑色に輝く粒子を放出する。ゼロはそれによって大きく飛翔する。

「……！ 速い！？」

「オルコット、ビットを使っただけで動けなくなっているんじゃないか？ 転倒だ。ちゃんと操りながら動けないと致命的だぞ？ ウイング・ファンネル……！」

『エフィールド』付きの巨大な方の翼の先端に付いていた、七、四、合計二八の『ウイング・ファンネル』が展開される。ゼロシステムのサポートによって完璧に操られる二八の『ウイング・ファンネル』がそれぞれ、四機の『ブルー・ティアーズ』に襲いかかる。

「な……なんですの！？ その数のビットは……！」

「並列思考、処理能力を鍛えられるだけ鍛えたおかげで普通に戦闘しながらこれだけのファンネル……ビットを操れるようになってな多少、機体のシステムのサポートは受けちゃいるが、これだけ出来れば十分だろう？」

二八機の砲門から放たれるビームによってあっという間に『ブルー・ティアーズ』は全滅し、動揺するセシリアの手に持つ『スターライトmk？』も破壊され、残った二機のミサイル用『ブルー・ティアーズ』も破壊される。

恭介はその隙に『ツインバスターライフル』を展開し、エネルギーチャージに入る。

「くっ……なんて数ですの……！！ よ、避けきれない！」

「言っただけだぜ？ 圧倒させてもらっただけ。ターゲット、ロックオン……！」

ピピピピピピ、という電子音と共にロックオンシステムが起動され、セシリアの駆るブルー・ティアーズをロックする。シールドエネルギーを一撃で○にするだけの出力に調整し、『ウイング・ファンネル』に翻弄されるセシリアに銃口を向けた。

「破壊する……！　ってか？」

瞬間、『ツインバスターライフル』から巨大な閃光が走った。それと同時に射程外へと『ウイング・ファンネル』は飛び去る。閃光がセシリアを飲み込んだ。

そして、

『試合終了。勝者、棗恭介』

＊ ＊ ＊

「す……凄い……」

「ふん。まあ、アイツならこれくらい当然だろう」

驚愕する真耶の隣で、千冬はまさに当たり前、と言った感じで腕を組んでいた。

その後ろの方で一夏と箒は汗をダラダラとかいていた。

「……箒」

「……何だ」

「……一撃当てる、っていうのを目標にしてたよね、私達」

「……そうだな」

「……あんなのにどうやって当てるの？」

「……」

「目をそらさないでよおっ！！」

おもわず涙目だった。

「さて、織斑。ファーストシフト一次移行は済んでいるな？」

「う、うん……じゃなくて、はい」

「よし、ならば準備しておけ。棗が補給と簡易整備を終え次第、棗を織斑の試合を開始する」

「は、はい！」

一夏は自分の専用機、白式の待機状態である右手のガントレットにどこか感慨深そうに左手を当てる。

すると、恭介がピットに戻って来た。

「ああ、素。とつとと整備を補給を開始しろ」

「了解」

恭介は再び簡易メンテ用のPCにウイングゼロをセットする。ゼロはISの世代的に一、五世代とも言える機体だ。あくまで世代的には、なのであつて性能や武装的には第三世代にも劣らない物である。

恭介用にカスタムされたガンダムタイプと呼ばれる機体の内の一機ではあるが、中学二年から高校二年までの三、四年でウイングゼロの反応速度が追いつけなくなってしまっていた。

故にマグネットコーティングと呼ばれる強制的に反応速度を早くする応急処置的な強化をしている物の、マグネットコーティングは少しばかり機体に負荷がかかる。それが三、四年ともなればかなりたまる訳だ。

なので一戦一戦後すぐの整備は、不具合を確実に出さない為に必要な事なのだ。例え無傷であろうとも。

「……よし、全システムオールグリーン。簡易整備終了、つと。いつでも行けますよ」

「そうか。なら先に出ておけ。すぐ織斑も出る」

「了解です」

恭介はウイングゼロを展開し、再びピットから飛び立った。

「さて、織斑。準備は良いな？」

「はい！」

「よし、ならばISを展開。出撃しろ」

「はい！……来て、白式……！」

一夏の声と共に白式が展開される。

それはまさに『白』だった。

武装が『雪片式型』ゆきひらにがたという近接戦闘用の刀剣だけしか無いと言う意味不明な機体だが、スペックだけは高い、という意味不明な機体だ。

「よし……織斑一夏、白式、行きますッ……！」

「お、来たな一夏」

「うん。恭介、一撃くらいは貰うよ」

「おにーさんからの一撃は高いぜ？」

「それでもだよ。一撃くらいは貰えないと、恭介に少しでも近づけてるって思えないから」

「……そうか」

恭介は嬉しそうに笑うと、小さい方の翼に収納されている『ビームサーベル』を右手で抜き放つ。

「なら、見せてみる！ 俺にお前の成長具合を！」

「うん！！」

一夏は『雪片式型』を振りかぶり、恭介のウイングゼロに突撃した。

ガキン！ バチバチバチバチバチ！ と、『雪片』と『ビームサーベル』がぶつかりあう。出力調整された『ビームサーベル』は『雪片』を溶かし斬らずに鰐迫り合いとなった。

しかしパワーではウイングゼロの方が上だった。

「おおおおおおおッ！！」

恭介に押し返され少し体勢を崩した一夏は、流れるように振り下ろされる『ビームサーベル』を避けきれずに直撃する。

「きやあッ！！ くっ……！ はあああああッ！！」

一夏はしかし怯まず、そのまま斬り掛かる。再び鰐迫り合いになるが、今度は一夏が『雪片』にかける力を緩め、恭介の押してくる力を利用する形で『ビームサーベル』受け流した。そのまま光刃の下をすり抜けるように『雪片』の剣身をウイングゼロの胴体へと吸い込ませる。

「！ ほう、やるじゃないか」

「なっ！？」

しかし、それが恭介に当たる事は無かった。ウイングゼロの『ビームサーベル』は計四本。その内二本は翼に収納されている。が、もう二本は量子化されているのだ。

恭介は迫り来る『雪片』を残った左手で量子化した『ビームサーベル』を展開し受け止めたのだ。更に恭介は一夏がやってみせたように相手の力を利用し、その剣身を流し、胴体を斬り捨てる。

「ぐうッ……………!!」

「どうした一夏。お前が過ごした四年間での成長はこんな物か？」

「そんな訳……………無いでしょッ!!」

振り返り様に大きく『雪片』を振り切る。当然のように恭介は避ける。

一夏はそれに追従するように接近し、『雪片』を振るう。が、二刀流になったウイングゼロには一太刀も通らず、全て弾かれ、流され、受け止められる。そして一定感覚ごとに斬られていく。『雪片』を溶かし斬らないほどに出力の落とされた『ビームサーベル』は、当たってもシールドエネルギーを大きく削る事は無い。しかし、それが何度も何度も続いていけば、無くなって行きもする。

五分、一〇分と続く斬り掛かり捌くを繰り返す試合。そのとき、白式の残るシールドエネルギーはもはや半分ほどしか残っていないかった。

* * *

「うわ……………織斑さん、完全に遊ばれちゃってますね……………」

静かに二人の試合を見守るピットに通る真耶の声。

それに反応するように箒が声を上げた。

「恭介……………！ 手加減して遊んで……………一夏を侮辱でもしている気が！？」

「落ち着け馬鹿者」

バシン！！ と、出席簿アタックが箒の脳天に直撃する。「いた

あッ！!?」と、可愛らしい悲鳴を上げた。

「……別に棗は織斑で遊んでいる訳でも、侮辱している訳でもない」
「え? じゃあ何で……」

「アイツは『ヴァカ』ではあるが、『馬鹿者』ではないという事だ。
少なくとも 仲間を侮辱するような奴ではな」

「……あ……」

「アイツはいつだってお前達の兄貴分だったはずだ。そしてアイツ
自身もお前達の兄貴分であろうとしている。なら、そんな事はない。
あれにはアイツなりの考えがあるのだろう」

「はあ……織斑先生って、棗君の事よく分かってるんですねっ。
って痛たたたたたた!!」

「山田君。私はからかわれるのは嫌いだ」

「ご、ごごめんなさー……い!!」

千冬にこめかみをグリグリされる真耶は涙目で謝っていた。

「……一夏。頑張れ」

箒のつぶやきはそんな真耶の声にかき消されていた。

* * *

「はあ……はあ……はあ……」

シールドエネルギーは残り五分の二程度。しかし体力の限界は残
念ながら否めなかった。

「……そろそろ限界か」

「ッ……! ま……まだ大丈夫……! 行ける!!」

「無理はしない方が良い。身体壊すぞ」

「無理じゃないよ!!」

疲労困憊のはずの一夏は、それでも吠えてみせた。

「止まらない……止まらないんだ。私はいつだって守られて来た。

千冬姉にも、恭介にも、リトルバスターズの人々にも。ずっとず
っと守ってもらってばかり。でも……っ、そんなのは嫌なの! 守

られっぱなしじゃない、私だってみんなを守りたい！」

『雪片』を握るその手にもう一度力を込める。その目からはまだ闘志は消え失せていない。

「そのためにも止まれないんだ！ 私はまだ弱い、誰かを守れるほど強くない！ だから　ッ！！」

一夏の白式がポウ、と淡く光り始める。それは儚くも力強い、希望を示しているような光だった。

それは一夏が叫ぶごとに強くなっていく。

（あの装甲……サイコフレームか……！？）

「だから　っ！　こんな所で諦められない！　諦められないんだあああああー！ー！ー！ーッ！！」

ボバツ！　と白式のスラスターが火を吹いた。今までで一番速い。「はああああああああああああああああ！！」

「！！」

バチィー！　と、『ビームサーベル』が火花を散らす。

（パワーが上がっている……なるほど、まさに思いを力にするISって訳だ……！）

パワーはウイングゼロと互角に並んだ。

しかしそれだけではない。

突如『雪片式型』がガシャン！　と音を立てて変形し始めたのだ。そこからエネルギーの刃を形成し始める。

フッ、と『ビームサーベル』の光刃が消え失せた。

「なっ！！」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

『雪片』から形成されたエネルギー刃はそのままウイングゼロを捕らえ、

「トランザム！！」

ふっ、と目の前からウイングゼロの姿が消えた。

「え」

「お前の一撃 確かに届いたぞ」

『試合終了。勝者、棗恭介』

第3話「破壊天使と蒼い雫と白き騎士と」(後書き)

セシリア戦よりも一夏戦の方が長くなりました。

実際のサイコフレームがどんな物かは知らないけど、とりあえず本作『インフィニット・バスターズ!』では搭乗者の思いが高まる事で光り輝き、性能を向上させる。条件によっては、『逆シヤア』みたいになることもある。みたいな設定にしておこうかと思っています。本物とちやうやん! と思っても、出来れば我慢していただきたいです。

ウイングゼロと白式（前書き）

結構適当に設定作ったけど、変な所とかないですかねえ……？

ウイングゼロと白式

『ウイングガンダムゼロ・パーフェクトカスタム』

搭乗者

- ・ 棗恭介

武装

- ・ ツインバスターライフル
- ・ ビームサーベル×4
- ・ マシンキャノン×2
- ・ ウイング・ファンネル×28（大型の翼一枚につき七機×四〃28）

特殊機能

- ・ ゼロシステム
- ・ エフィールド
- ・ ツインドライブシステム
- ・ マグネットコーティング

特殊技能

- ・ TRANS-AMシステム

特殊導力

- ・ GNDライブ（オリジナル）

ワンオフ・アビリティ

単一仕様能力

- ・ ????

ウイングガンダムゼロを恭介の成長にあわせてカスタムを限界まで繰り返して来た機体。

恭介の反応速度に追いつかせるためにマグネットコーティングを施してある。

ウイングガンダムゼロ・パーフェクトカスタムの二つの内一つ目の特徴である『Zoning and Emotional Range Omitted システム（領域化及び情動域欠落化装置）』。通称ゼロシステム。この装置は搭乗者の脳波に直接干渉し、予測される全ての未来を見せる事で『完全な勝利』を目指す。

しかし、この『完全な勝利』には搭乗者の生死は勘定に入ってはならず、また搭乗者の事情や勘定などを無視して弾が直撃して爆死などといった最悪の状況も見せてしまう。故にこのシステムの仕様にはかなり強靱な精神力を必要とし、これに欠ける場合はシステムによって精神を崩壊させられてしまう。

二つ目の特徴は『TRANS-AMシステム』。機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放することで、一定時間スペースを三倍以上に引き上げる事が出来る。しかし、このシステムは大量のGN粒子を消費するため、使用後は粒子の再チャージまで機体性能が大幅に低下する諸刃の剣である。

待機状態はリトルバスターズマークのついたネックレス。

『白式』

搭乗者

・織斑一夏

武装

- ・雪片式型

特殊機能

- ・サイコフレーム

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力

- ・零落白夜

装甲にサイコフレームを使用した白式。

（実際は少しばかり違う設定ですが）サイコフレームは人の思い、意志に反応し様々な未知の現象を引き起こす。白式で使われているサイコフレームは束の手が多少加えられているようで、搭乗者である一夏の思い、意志に反応し、それによって機体性能を向上させるというものとなっている。ただし、搭乗者と周囲の大人数の人間の意志が一つに纏まると、その意志に感応し、膨大な力を発揮するという性質は変わっていない。この力は束でも計り知れないほどの力を秘めているらしい。

白式は一夏の専用機の性能の一部を実験的に搭載した試作機であり、完全に実験機扱いされている。現在本当の専用機を製作中である。

待機状態は右腕の白いガントレット。

第4話「代表決定と現る鈴の音」

シャワーから出る暖かいお湯が白いセシリアの肌に当たり、弾け、流れていく。

あの後、ISが解除されたセシリアはさほど高くはないにしても落ちれば痛い高度から落下していた。そんな中、意識が飛ぶ前の一瞬に目に入ったのは、真っ白な翼を羽ばたかせ、緑のツインアイの奥にうつすらと見えた力強い光を持った瞳。

そして気がつけば保健室にいた。

保健室から部屋に戻ったセシリアはシャワーを浴びている。

（棗……恭介……）

今までに無い感情だった。

常に勝利への確信や自己の向上への欲求ばかりを抱き、追い続けていた彼女が初めて感じた気持ち。

自信、強い意志、無垢、少年っぽさ。様々な物を最後に見た瞳からは感じた。

初めて出会った自分より強い男。

「棗恭介……」

彼の事をもっと知りたい。

呟くだけで心に響くこの暖かい物はなんなのか知りたい。

彼女の頭の中にあるのはただただそれだけだった。

* * *

翌日。朝のホームルーム。

「では、一年一組代表は棗恭介君に決定です」

真耶の発表にクラス的女子達はパチパチと大きめの拍手をした。当の恭介は笑いながら「サンキュー」と言った。

グラウンドの端に一組の生徒達が集まる。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実戦してもらう。棗、織斑、オルコット。試しにとんで見せろ」

千冬の言葉に、一夏は若干時間がかかった物の、三人ともISを展開する。

「よし、では飛べ」

瞬間、ウイングゼロとブルー・ティアーズは一気に上昇し、上空で静止する。が、一夏の白式は二人に比べて格段に遅かった。

「何を遊んでいる。ウイングゼロはともかく、基本スペックではブルー・ティアーズよりも上なんだぞ」

「そんな事言われても……。角錐をイメージ、っていうのがよく分からないんだよね。そもそもなんでこれで飛べるんだか」

「一夏、イメージは所詮イメージだ。慣れていけばその内自分のやりやすい飛び方を身体が覚えていくさ」

「ん……そんなものかなあ」

「そんなものですわ。なら、どうして飛ぶのか説明して差し上げましょうか？ 半重力力翼と流動波干涉の話になって長くなりますが」

「ごめん……結構です」

「そう。残念ですわ」

ふふつ、とセシリアは特に残念には見えな笑みを浮かべていた。

あの決闘から、セシリアは恭介達に友好的になった。まあ一夏としてはちゃんとした謝罪もしてくれたので、特に拒む理由も無いと言えは無いのだが……。どう考えても恭介絡みであるうことは、箒を含む恋する乙女には火を見るよりも明らかなので、大喜び出来るような物ではなかった。

『恭介っ！ いつまでそんな所にいる！ 早く降りてこい！！』

突如として通信回線に箒の土星が響いた。見てみると箒は真耶のインカムを奪って叫んでいた。当の真耶は軽く涙目でオロオロしている。

「あ、叩かれたな」

恭介とセシリアは一夏の元に駆け寄る。

「一夏、大丈夫か？」

「お怪我はありません？」

「う、うん。何とか……」

「……確かに降りてこいとは言ったが、誰がグラウンドに穴を空けると言った」

「……すみません」

千冬はため息を一つつく。

「まったく……では次に武装を展開しろ。まずは棗、手本を見せてやれ」

「りょーかい」

言つと同時に、『ツインバスターライフル』が右手に、左手に『ビームサーベル』が展開された。

「よし。では織斑、オルコット、武装を展開しろ」

「は、はいっ！」

一夏は剣を構えるモーションを取ると、両手から光の粒子が放出される。それはゆっくりと形を成していき、『雪片式型』がその手に展開された。

ちなみにセシリアは横に突き出した手に『スターライトmk?』が展開していた。

「遅い。○、五秒で出せるようになれ。そしてオルコット、さすがは代表候補生と言った所だがそのポーズはやめる。横に銃口を向けて誰を撃つ気だ？ 棗か？」

「うつ……で、ですがこれはわたくしがイメージを纏めるために必要な」

「直せ。いいな？」

「はい……」

「ではついでにオルコット、近接用の武装を展開しろ」

「え？ あ、は、はい」

言われてすぐにセシリアは武装の展開を試みる。が、基本的に遠

中距離戦闘を得意とするセシリアはほとんど近接用武装を使わない
せいか、イメージが固まらず、光の粒子が手の中で漂っていた。

「くっ……」

「……まだか？」

「も、もうすぐです……あぁもう！『インターセプター』……！」
自棄になったセシリアがそう叫ぶと、ようやくその手に短剣が展
開された。

「……何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待ってもらうのか
？」

「じ、実戦では近接の間合いには入らせません！ですから問題あ
りませんわ……！」

「ほう、素相手にそんなことが言えるか？」

「そ、それは……あの……」

セシリアは言葉を濁すと、がくりと肩を落とした。

「まったく……素、この中ではお前が一番ISに詳しく扱える。し
っかり指導してやれ、いいな？」

「了解。ま、俺なりにやらせてもらいます」

「よろしい。では今日の授業はここまでだ。織斑、グラントを片付
けておけ。素、穴埋めくらいは手伝ってやれ」

「は、はい……」

「はい。んじゃ、やるぞ一夏」

「うん」

* * *

夕食後、食堂では一組の生徒達が集まっていた。

「それでは……素君、クラス代表決定おめでとう……！」

『おめでとう……！』

「ああ、ありがとう」

クラスメイトの一人のかけ声と共にクラッカーの音が一斉に鳴ら

され、恭介はクラスメイトの祝福に躊躇い無く返事を返す。

クラスメイト達はやけに盛り上がり、無駄にテンションが高かった。

壁には『棗恭介クラス代表就任パーティ』と書かれた横断幕が張られている。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねー」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー、同じクラスになれて」

「ホントホント」

そんな感じの会話が食堂の至る所でされている中、篤が恭介に話しかけて来た。

「人気者だな、恭介」

「そうか？ 普通だと思っただけだな。なんだ？ 嫉妬か？」

「んなっ！ ばっ！ そんなわけないだろう！！」

篤は赤面しながらそっぽを向いてお茶をすすった。

恭介はそんな篤を見ながら笑っている。

すると突如として一人の女性が恭介の前に現れた。

「はいはい、新聞部です！ 話題の新生にインタビューしてきましたー！」

女性は笑顔で続ける。

「あ、私は二年の黛薫子、まゆずみ かおるこよろしくね。新聞部の副部長をやっている。はいこれ名刺」

「どうも。知っているとは思いますが棗恭介だ、こちらこそよろしく」

「よろしくねー。じゃあ早速、クラス代表としての意気込みをどうぞー！」

「意気込み？ そうだな……」

うーむ、と考え込む素振りを数秒見せると、

「実は俺、知り合いから『あらゆる日常をミッションにするリーダー』って言われててな」

「は？」

恭介のあまりに脈絡の無い話に思わず抜けた声を漏らす薫子。しかしそんな事も気にせず恭介は続ける。

「故に俺はこのクラス代表戦すらも『任務^{ミッション}』として扱わせてもらう！ 全ては等しくミッシヨンだからな！ そして俺はあくまで本気でミッシヨンの成功を目指すつもりだ。そう、つまりは優勝を目指させてもらうぜ！」

高校二年（年齢的に）になっても未だ残る無垢な少年心を、脈絡の無い話から無理矢理つなげられた恭介の台詞と笑顔から感じ取ってしまった薫子含める食堂に集まる女生徒達は、自分でも訳が分からないが思わず赤面していた。

……前からこんな事は日常茶飯事だったとはいえ、やはり面白くはない一夏と筈。かといって本気で純粹に言っているらしいだけに本気で怒れもしないのだった。

「……はっ！ えーっと、あのー、そのー、そ、そくだ！ セシリアちゃんもコメントちょうだい！」

「え！ わ、わたくし！？ え、えと、そ、そうですわね。あまりこういった事は好きではありませんが、仕方ないですわね」

コホン、と咳払いをし、

「ではまず、どうしてわたくしと恭介さんが決闘することになったかというそれはつまり」

「あ、長くなりそうだからいいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさいっ！」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、棗君に惚れたからって事にしよう」

「なっ、な、なな……っ!？」

赤面……どころか身体中を真っ赤にするセシリアを他所に、薫子は話を進める。

「じゃあほら。二人とも……じゃなくて、織斑さんも並んで。写真撮るから」

「えっ!？」

「私も？」

と、真っ赤だったセシリアが急に元に戻って嬉しそうな声を上げた。セシリアは嬉しそうにニコニコ笑いながら、座っている恭介の隣に並ぶ。それに続いて一夏も反対側に並ぶ。

「ほらほら、もつとくつついて」

「そ、そうですか……そう、ですわね」

「そうだね……えいっ」

「なっ！！？ 何してますの一夏さん！！」

おずおずと恭介の近くに寄るセシリアとは正反対に、一夏は思いきり恭介に抱きついていた。

「おっと……大胆になったな、一夏」

「そうかな？ 昔もやった事あると思うけど」

「子供の頃はともかく、成長すればあまりそんなくつつかないだろう？ 恋人でもない限りは」

「恭介だからしてるだけだもん」

「そいつは光栄だ、お姫様。あぁいや、お姫様ならこっちの方が良いか？」

「え？ つて、ひゃっ……！」

突然恭介が腰に左手をやり引き寄せ、膝裏に手を回して抱え込んだ。いわゆる”お姫様だっこ”という奴だった。

「なっ なっ な……！」

「きよ、きよきよきよ恭介！！ な、な、な、何をしている！？」

「何、つて。見れば分かるだろ、お姫様だっこだ」

「何故そんなことをする必要がある！！」

「お姫様、って言ったたらお姫様だっこだろ？」

「相変わらず意味不明な理論だな！！」

「あうあうあう……」

周りが羨ましそうな視線を向ける中、一夏は耳まで真っ赤にしてうまく声も出せなかった。

「きよ、恭介……は、恥ずかしいよ……」

「俺だつて恥ずかしいさ。だけどな……お前ならそれでも良い、つて思つたんだよ」

「そ、そんな強引な……」

「ああ強引さ。だから俺のせいにして良い。そのまま何もかも俺に委ねちまえ」

「あう……」

抵抗という選択肢を完全に失われた一夏は、赤面したまま黙り込んでしまった。ただ力を抜いて恭介の胸板に頭を預けている辺り、本当に委ねる事にしようだ。

薫子も若干赤くなりながらも、「じゃ、じゃあ撮るよー」と恭介達に声をかける。

その声に反応してセシリアと何故か箒も二人の横に並ぶ。

「じゃ、じゃあ、 $35 \times 51 \div 24$ は？」

「74、375だ」

「せいかーい！」

カシャツ、とシャッターが切られた。

「あ、あなた達！ な、何故入っているんですの！？」

「まーまーまー」

「セシリアと織斑さんと篠ノ乃さんだけ抜け駆けは無いでしょー。

特に織斑さんはお姫様だっこまでされちゃってるんだし」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

「う、ぐ……」

完全に丸め込まれたセシリアは少し呻くだけで何も言えなくなつてしまった。

この後、このパーティーはハイテンションなままで一〇時過ぎまで続いた。

終了後、寝る準備諸々を済ませてベッドに潜り込んだ一夏がしばらく眠れなかったのは、言うまでもなかった。

* * *

翌日、いつも通り恭介と一夏は一緒に登校し、一緒に教室に入ると、一人の女生徒が話しかけて来た。

「棗君、織斑さん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？」

「ああ、そういえばそんな話をどこかで聞いたな。確か中国の代表候補生だったか」

「そうそう」

「中国……ねえ」

まさか……という一夏を他所に、セシリアが話に加わってくる。

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

「それだけで送り込んでくるかと言えばそうそう無いと思うぞ。考えられるとすると……」

俺か、と恭介は思った。

別に自意識過剰とかナルシストとかそういう意味ではない。

恭介は唯一ISを操縦出来る男だ。それは歴史的な事件であり、今までのISの歴史を覆さんとする人物でもある。そんな恭介を各国が欲しがらない訳が無い。ならどうすれば効率的に手に入れられるか。話は簡単、男が相手なのだから女で落としてついて来させれば良い。

代表候補生ともなれば、他クラスだろうと「同じ専用機持ち、それも男のあなたに会ってみたかった」などと理由は多少なりとも増えるし、それがなくとも会える可能性は高くなってくる、という訳だ。

（まあ……俺は早々簡単には落ちやしないけど）

IS学園に来るずっと前、ウイングゼロを使うために精神修行的な訓練をして来た。

ウイングゼロに搭載されているゼロシステムはありとあらゆる未来を見せるというとてもないシステムだ。が、その見せられる未

来には自分が落とされる未来なども、事情、感情関係なく見せられる。故に強靱な精神力を持たない者がこのシステムを使うと、精神崩壊を起こす者すら出てくるのだ。

そんなゼロシステムを使うために精神修行的な訓練をして来た訳だが、その中には、いわゆる『ハニートラップ』やら『すたいるばつぐん』な女性が水着姿で囲んでくる』などという意味不明な内容もあつた（専用のシュミレーションによってそういった状況を体感させられていた）。

故に、あからさまにそのために惚れさせようとしてくる女性にはほとんど、確実にと言って良いほど惚れはしない。と、恭介は自負している。

ちなみに、かつて一夏のタオル姿と出会った時、昔の自分だったら案外襲いかかっていたんじゃないか、などと思つた事もあるかないとか。

閑話休題。

「このクラスに転入してくる訳でもないのだろう？ 騒ぐほどの事でもあるまい」

が、残念ながらそういうので騒ぐのが女子高生だったりする。特にこの一組は。

「しかし中国か。アイツを思い出すなあ、一夏」

「ああ、鈴音だね。中二の終わり頃に中国に戻っちゃってからは会っていないんだよねえ」

「鈴音……？ とにかく恭介。お前ならやってみせるだろうが、昨日あれだけ大見得きつたのだ。ちゃんと優勝してみせろよ」

「そうそう！ 棗君が勝つとクラスみんなが幸せだよ！」

「フリーパスのためにも！」

思いきり欲が漏れていた。

「それに専用機持つてるのは一組と四組だけだから楽勝だよ！」

「その情報、古いよ」

と、教室の入り口からそんな声が聞こえて来た。

それも、恭介と一夏には聞き覚えのある声が。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単に優勝出来ないから」

「鈴音……？　もしかして鈴音！？」

ドアにもたれかかった、髪をツインテールにした小柄な少女はニヤリと笑う。

「久しぶりね、一夏。中国代表候補生、鳳鈴音^{ふうあん・りんいん}。今日は宣戦布告に来たって訳」

ドアから体を離し、恭介の目の前まで来て、

「ひ、久しぶり恭介……。元気にしてた？」

「当然。鈴音こそ元気だったか？」

「う、うん……。！　と、当然でしょ！」

もじもじしていた鈴音は笑顔で答える。

と、その脳天に思いきり出席簿が炸裂した。

ズゴッ！！　と、頭から鳴ってはいけなさそうな音が響く。

「ギャッ！！　な……。なんなのよお」

と、振り返る先にいたのは　千冬だった。

「もうショートホームの時間だ。さっさと戻れ。そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生だ。もう一発いくか？」

「す、すみません織斑先生……」

「よろしい。とつとと行け」

「は、はい……」

小走りで鈴音は入り口から出て行き、

「また後で来るからね！　逃げないでよ恭介！」

と言に残し、去っていった。

相変わらず元気な奴だな、と恭介は思う。

「……恭介。今のは誰だ？ 知り合いか？ えらく親しそうだったな？」

「きよ、恭介さん！ あの子とはどういう関係で！？」

「あははは……」

簞、セシリアが恭介に問いつめる中、一夏だけは苦笑いしていた。スパンっスパンっスパンっ！ ひらり。

「席につけバカ共。ついでに避けるな棗」
「いや痛いし」

こうしてまた賑やかな一日が始まった。

第4話「代表決定と現る鈴の音」（後書き）

鈴音登場！ 私は結構好きなキャラなので出せて嬉しいです！

そして恭介恐ろしい……書いてなんてんだけど、本当にわざとじゃないだろうな？

第5話「RANKING BATTLE START!!」

「お前のせいだ!」

「あなたのせいですわ!」

「いや、おにーさんでも常に読心術は使うわけじゃないぞ……?」
「使える時があるの!」

昼休み。鈴音が現れた事が原因か、箒とセシリアが授業に集中出来ずにいたらしく、千冬さんの愛の鞭を受けたりしていた以外、特に何もなく昼休みまで時は進んだ。

脈絡も無く言われの無い責任の押し付けに、心でも読んで理解しろと言つて来ているのかと勘違い(?)をした恭介は思わずそんな事を言つた。

さて、昼休みという事で食堂に向かう四人を待っていたのは、食券自販機の前にラーメンをのせたプレートを持って仁王立ちしている鈴音だった。

「待つてたわよ、恭介、一夏!」

「鈴音……そこにいたら他人が食券買えないよ?」

「わ、わかつてるわよ!」

なら何故そこにいた、とツツコミたくなった一夏だったが、なんとか我慢する。

鈴音が道を空け、恭介達は食券を買う。

「鈴音は相変わらずラーメンが好きだな」

「いいじゃない、本当に好きなんだから」

「なら先に食べてた方が良くぞ、麺がのびる」

「いいの! 第一、ちよつと経とうが経つまいがもうあんまり変わらないわよ」

食券を食堂のおばちゃんに渡し、少し待つてから頼んだ料理を受けとる。そして五人揃つて座れる席を探し、座つた。

「さて……改めて久しぶりだな鈴音。四年ぶりくらいか?」

「まあね。それにしても、相変わらず元気みたいじゃない。たまには病気になるったりしない訳？」

「残念ながら生まれてから今日に至るまで風すら引いた事無いぜ！」
「アンタらしいわね……」

楽しげに話す二人を見て、箒とセシリアは眉を吊り上げる。

「そういえばいつ日本に帰って来たの？ おばさん元気？ いつ代表候補生になったの？」

「質問ばっかしないでよ一夏。一夏こそ、なんかいつの間にか専用機持ちになってるみたいじゃない。恭介なんか、男なのにIS使えちゃって。テレビに出た時びっくりしたじゃない」

「俺は自分の事ながらそこまで驚かなかったな。案外俺なら使えるんじゃないか？ とか一時期思ってた事もあったし」

「……まあ、使えるそうではあるわね」

と、いい加減我慢出来なくなったのか、箒達が口を挟んできた。

「恭介、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「そうですね！ 恭介さん、まさかこちらの方と付き合ってたらしいの！？」

「んな……！ べ、べべ、別にあたしは付き合ってる訳じゃ……」

「そうそう、鈴音と恭介はそんな関係じゃないよ。ただの幼馴染み」

「ちよっ……余計なことを……」

「幼馴染み……？」

初耳だぞ、という感情を込めて恭介を睨む。

「あれ？ 言った事無かつたっけ。えっとね、箒が引越していったのが小四の終わりだったよね。鈴音が転校して来たのは小五の頭なんだよ。まあなんだかんだあってリトルバスターズのメンバーになったの。まあ、恭介は一年後、まあほとんど二年後だけどフランスに行っちゃって、鈴音は中二の終わりに国に帰っちゃったんだ。恭介は四年ぶり、私とは一年ぶりかな」

さすがの箒ももう一人幼馴染みがいた事と知らぬ間に新メンバーがいたことに驚いた様子だった。が、セシリアは別の所が気になっ

たようだ。

「リトルバスターズ……？　って、なんですか？」

「えっと、恭介が小学生の時に作った友達グループ、で良いのかな？　とにかく、恭介が集めたメンバーで、何かを悪に仕立てているやったりしてたんだよ」

「へえ……そうだったんですの」

「ちなみに、俺的にはリトルバスターズはまだ健在だ」

「奇遇だね、私もそう思ってるよ」

「当然だろう、リトルバスターズは不滅だ」

「そうね。消えられちゃあたしも困るし悲しいわ」

「そうか、と恭介は小さく嬉しそうに呟く。

セシリアは何だか四人に流れる暖かい空気が羨ましいのか、「でしたら！」と、叫び出した。

「わたくしもそのリトルバスターズに入れてくださいな！」

「？　何言ってるんだ、もう入ってるだろ？」

「は？」

「俺と友人＝リトルバスターズのメンバー、だろ？」

「……………（パクパク）」

「諦める、こいつはこういう理論を振りかざすのが得意なんだ」

「ええ……今更でしたわね……」

箒がセシリアの肩に手を置き、セシリアは何かを諦めたようにため息を一つついた。そんな中一夏と鈴音は苦笑い。恭介は？を頭に浮かべていた。

「まあ、とにかく。アンタが前に一夏が言ってたもう一人の幼馴染みだったのね。初めまして、これからよろしく」

「ああ、こちらこそ」

握手をして友好的な笑みを浮かべあう……あっているはずなのに、何故か火花を散らしている風にしか見えない。

箒は目だけは笑わず、睨みつけ、鈴音は箒の胸を見て笑みを引きつらせた。

「んんっ！ わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわね。中国代表候補生、鳳鈴音さん？」

「……さっきから思ってたけど、アンタ誰？」

「なっ！？ わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですよ！ まさかご存じないの！？」

「うん、あたし他の国とか興味ないし」

「なっ、なっ、なっ……！？」

怒りのあまり顔を赤くするセシリアに対し、鈴音は涼しげにスル―した。

「い、い、言っておきますけど、わたくし、あなたのような方には負けませんわ！」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

と、鈴音はセシリアから視線を外し、恭介へと戻す。

「ところで恭介！ アンタクラス代表なんだって？」

「ああ、いろいろと面白そうだしな」

「だ、だったらさあ、ISの操縦見てあげてもいいけど？」

恭介をちらちらと見ながら顔を背ける鈴音。恭介はそれに気付いているのかいないのか、苦笑いしている。

「恭介に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは私だ」

「あなたは二組でしょう！？ 敵の施しは受けませんわ！」

「いや、俺は逆にお前らに教えろって言われたんだがなあ。千冬さんに」

が、そんな恭介のつぶやきも無視して話は加速する。

「あたしは恭介に言ってるの。関係ない人は引っ込んでよ」

「か、関係ならあるぞ。私が恭介にどうしても頼まれているのだ」

あー、これは何言っても俺が教えられる側って事で話進むなー、と諦めつつ味噌汁を口に含む。

一夏は置いてけぼりだった。

「一組の代表ですから、一組の人間が教えるのは当然ですわ！ あなたこそ、後から出て来て何を図々しい事を――！」

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いし」
「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！ それに恭介は」
話の中心のはずの恭介を置いていき、彼女たちの話は昼休みが終わるまで続いたのだった。

……その後、教室に遅刻して来た箒とセシリアが一撃貰ったのは言うまでもない。

＊ ＊ ＊

放課後。恭介達は第三アリーナに集まっていた。

昼は昼であんな話になっていたが、最終的に教える側となるのは恭介なのは変わらない。

「箒、申請が通ったみたいだな」

「ああ。今日は私も訓練に参加するぞ」

「くっ……このままではわたくしのアドバンテージが……！」

「えーっと……と、とりあえずよろしくね？」

以前から出していたISの使用申請が通り、箒は打鉄うちがねを身につけている。

「んじゃ、始めるとするか。まずはそうだな、セシリアの『ブルー・ティアーズ』の制御時に動けなくなるのを克服する方法だけどな、やっぱり並列処理能力マルチタスクを鍛えるのが一番だと思うんだ。だからお前は飯を食べながら勉強しつつフティングする、みたいな訓練から始めようと思う。まあ、これは例えだから本当に飯を食べながら勉強しつつフティングさせるわけじゃないが」

「ほっ……さすがのわたくしでもそれはキツイですわ……」

「次に箒だが……大方ISは動かせるんだよね？」

「ああ。まあ人並み程度にはな」

「だったら実戦訓練あるのみだ。お前の事だから接近戦中心に射撃型相手を想定したのをまずはやっていくぞ。で、次に一夏だが」
恭介は少し考える素振りを見せると、

「基本操縦に慣れる」

「アバウト過ぎる!？」

「いや、だってお前まだISに慣れてないだろ？ 動かしたのこの前が初めてだったんだし。だったらまずはそこからだ。基礎も固まってるのに応用とかしたって意味が無い」

「ううっ……正論過ぎて反論出来ない……」

「と、言う訳で筈は俺と出来る限り様々な想定をした模擬戦。セシリアはとりあえず歴史の勉強でもしながらリフティングしろ。ポールはこれだ」

「食事が抜けただけ!？」

「一夏は そうだな。とりあえずその辺を飛び回ってISで飛ぶのに慣れておけ。他はとりあえずそれからだな」

「分かった」

「よし、んじゃ始めるぞ！」

* * *

「というわけだから部屋代わって」

「なにがというわけなのかさっぱり分からないよ!？」

寮の部屋では午後八時。鈴音は恭介と一夏の部屋、1025号室の前にいた。

恭介は一夏の後ろで腕を組みながら話を聞いている。

「一夏だって男と同室なんて嫌でしょ？ 気を遣うし。のんびり出来ないし。その辺、あたしは平気だから代わってあげようかなって思ってる」

「わ、私だって平気だよ！ それに、男の人は男の人でも恭介ならむしろ一緒が良いです！」

「むう……頑固で大胆になったわね一夏……。まあいいわ、あたしもここで暮らすから」

「ここは二人部屋！ だから無理！」

「じゃあどいてよ。あたしが恭介と同じ部屋になるんだから」

「どうしてもっていうなら千冬姉を呼んで来てよ!」

「ところでさ、恭介。約束覚えてる?」

「ガン無視!? 親友をガン無視なの!?!」

啞然とする一夏を他所に恭介へと話を振る鈴音。

「約束ってあれか? 俺がフランスに行く時に涙目で言っただけだあれ」

「余計なことは付け加えていいのよ! そう、それよ。覚えてる?」

「俺は仲間との約束は忘れない男だ。あれだろ? 料理が上手になつたら毎日酢豚を作ってくれる、ってやつ」

「そうそう! それよ!!」

「あ、あのときそんな約束してたのおっ!? な、なんて油断も隙もない……!」

……でも何で酢豚? と呟く一夏。

「ああ。結構楽しみにしてたんだ。酢豚は結構好きだからな。で、どうだ? 上手くなったか?」

「あ、当たり前じゃない! 近いうちに作ってあげるから楽しみに待ってなさい!!」

「おう。頼むぜ」

「という訳で一夏。私と部屋代わって」

「急にそこに話が戻るの!?!」

「誰もこの話無し、なんて言っただけじゃない」

「うう……で、でも! 私はぜったいに代わらないからね!」

「頑固ねえ……」

「鈴音、そんなにここに住みたいのか?」

「え? え、ええ。ま、まあ一夏のためだけだね?」

「だから私は」

「だっただけ……バトルだ!」

「断つても無駄なんだろうな……ああ、きつと無駄だ……」

「ち、千冬姉が諦めてる……！？」

「と、言う訳でまずは五位の一夏VS四位の鈴音だ。ピ・ポ・パ、集まれ！ バトルだ！！」

「ザザっ！ と、一夏の周囲にIS学園の生徒達が現れた！

「くっ……やるしか無いみたいね……！」

「そうだね……でも負けないよ！」

『同室のためにも！！』

「それじゃ……バトルスタート！！」

何故か女でした

第五位 織斑一夏

VS

帰って来たもう一人の『鈴』

第四位 鳳鈴音

「って、私の称号なんなの！？」

BATTLE START！！

周囲の生徒達から様々な武器が投げられる！

「こ、これで行くよ！」

一夏の武器……竹刀

「これで勝負！！」

鈴音の武器……うなぎパイ

「ちよっつっつと待ちなさいよおおおお！！ 何これ！？ 何でこれが！？ 真人と同じ結末をたどれと！？」

「行くよ！ 鈴音！！」

「ちよ、ちよつとまっ！」

一夏の攻撃！

「せいっ！」

バシっ！ 鈴音に三六二のダメージ！

「ええい！ もうやけくそよ！！ 真人は殴ってたから良いのよねえ！！」

鈴音の攻撃！

「そうりゃあ！！」

ぼすっ。一夏に〇のダメージ！ うなぎパイは折れてしまった！
「きゃあああああああ！！ やっぱりうなぎパイがあああああ
ああああ！！」

一夏の攻撃！

「いくよ……！！ 千冬姉秘伝……某アサシン流必殺技！」

「ちょ、ちよつと！！」

「秘剣……燕返し！！」

バシバシバシッ！！ 鈴音に四二一のダメージ！ 五三七のダメージ！ 四九三のダメージ！

「きゃ、きゃああああああああああああ！！」

鈴音は倒れた！

「やった！ 私の勝ち！！」

「くっ……煮るなり焼くなり好きにしなさい！！」

「じゃっ、これにしーよおっと！」

鈴音は『帰って来た負け犬娘』の称号を得た！

「ちよつと酷すぎない！？」

「ルールだよ、ルール。真人の『クズ』よりマシでしょ？」

「ううううう……」

「よし！ 一夏VS鈴音のバトルは、一夏の勝ち！！」

こうして。恭介の思いつきにより段々とお祭り騒ぎな学園生活になつていくのだった。

ランキング表

第一位	織斑千冬	称号：バトルランキング暫定
王者		
第二位	篠ノ乃箒	称号：剣道娘筆頭
第三位	セシリア・オルコット	称号：エレガント（自称）な
お嬢様		
第四位	織斑一夏	称号：何故か女でした
第五位	鳳鈴音	称号：帰って来た負け犬娘
第六位	棗恭介	称号：あらゆる日常をミッシ
ヨンにするリーダー		

第5話「RANKING BATTLE START!」(後書き)

ランキングバトル、始めました。

武器募集中です！ 面白そうなのがあつたら使わせてもらいます！
まあ、次のバトルはいつか決めてませんが……。

残ったシャルロット（シャルル）と、ラウラの称号も一応募集しておきます！

……更識姉妹も参加する？

第6話「天使と龍と時々乱入者」

ランキングバトルスタートから翌日。クラス対抗戦日程表が張り出された。リーグマッチ

その一回戦に示された組み合わせは、何の因果か偶然か。はたまた誰かの差し金か『棗恭介VS鳳鈴音』だった。

五月。来週からクラス対抗戦という事で周りが段々盛り上がって来ている頃。恭介達は放課後いつも通り訓練に向かっていた。

「さて。アリーナは試合用の設定に調整されるから実質最後の特訓だ。まあ、対抗戦が終わればまた再会出来るけどな」

「恭介、準備は万端なのか？」

「当然。ゼロの調子もいいし、体調も万全だ」

「そうか……ならいい」

篤はそれだけ言っと、一人少し前へと歩み出た。

しばらく歩いてピットのドアの前に着くと、一つの気配を後ろから感じた。

「ん……？」

「恭介さん？ どうしましたの？」

「ああ、悪い。少し用を思い出した。五、六分で済ませてくるから中で待っていてくれ」

「お手洗い？」

「そんな所だ。じゃ、すばつと行ってくる」

小走りで来た道を戻る。

そして二つ目の曲がり角を曲がった所に、その人は居た。

「あら。やっぱり気付いた？」

「気付くようにしてたんだろ？」

「あなたにだけよ。リトルバスターズ裏執行組織『ソレスタル・ビーイング』の創設者にして部隊長。コードネーム『時風瞬』、いえ、『ヒイロ・ユイ』の方が良いかしら」

「どっちでも良いさ、『更識楯無』。どっちも俺だからな」

「ふふ……そうね。じゃあ時風、って呼ばせてもらおうかしら。まったく、彼女たちも、自分たちがいるお友達グループに裏執行組織なんて物があるとは思ってもみないでしょうね」

女、IS学園最強を謳われる現生徒会長『更識楯無』は、妖しい笑みを浮かべつつ言った。

「で、今日は何のようだ？ 朱鷺戸ときどからの報告でもしに来たか」

「いいえ。東さんからよ」

「……マジ？」

「マジよ。彼女からの伝言を預かってるわ。ほら、ピッ」

彼女が取り出したボイスレコーダーのスイッチを押すと、電子音と共に聞き覚えのある厄介の塊な“天災”の声を発し出す。

「はろはろー、久しぶりだねきょーくん。あなたの東さんだよー」

「誰が俺のだ誰が……」

「実は報告とお知らせの二つがあるのだ、ぶい！ まずは報告の方だねー。ケルディム・サバーニヤとアリオス・ハルト。ついでにセラヴィー・ラファエルはほぼ完成。きょーくんの『スクウェア』も、あとはきょーくんが同調させてくれれば完成かなー。私とカタつちで頑張っちゃった！」

「早いな……」

「後はそれぞれ調整が完了次第お届け出来るよー。他のガンダム、ナタクとエンドレスフリーダムは六〇から七〇パーセント。いつちゃんのはまだ五〇パーセントくらいかな。まだ白式から送られてくるデータが少なくてねー。もっとガンガン使わせちゃってね」

「一夏ちゃんの真の専用機……『U・B』の完成データを見たけど、あれはまさに化け物ね。あれを使いこなされたら私でも勝てるかど

うか、って感じ」

「当然だ。あれは対ガンダム級戦を想定して作ってるんだ。少なくとも、俺のゼロの性能くらいは抜いてくれるさ」

「ウイングゼロまで抜いてくれるとなると……相当ね」

『さて、次はお知らせの方行くよー』

東は一呼吸置き、

『クラス対抗戦の日に魔改造したゴーレム？送るから頑張って戦ってねー？ 東さんからのプ・レ・ゼ・ン・ト きやはっ！』

「「ぶー………！………ッ！………！」」

『それじゃ、またねきょーくん！ あでゅー』

ブツッ……。

「……………。……………。……………。オイ、楯無。お前この中身知らなかったのか？」

「え、ええ………知ってたら対処くらいはしたわよ……。でも聞く時はあなたと一緒にやなきゃダメ、って言うものだから………」

「？ 降りて来てるのか？ リトルバスターズ？ 背中のネコ園から」

「みたいよ。私の所に直接来た時はびっくりしたわ、突然ニンジンが落ちて来て………」

「ああ………あれ未だに使ってるのか………」

『あ、追伸』

「「うおっ（きゃっ）！？」」」

突然、ボイスレコーダーが再起動した。

『ちーちゃんには言っちゃダメだよ？ 私がゴーレム？送る、ってこと。じゃっ！』

ブツッ……。

……嫌な沈黙が流れた。

「……あー、その、なんだ。とにかく俺は行くぞ。一夏達が待ってるからな。ごくろーさん」

「そ、そうね……。私もそろそろ行くわ。仕事もあるし」

「じゃあ……。また何かあったら来い。……。出来れば束さん関係以外で」

「ええ……。次来れる時がそれ以外である事を願ってるわ」

「おう。妹によろしく、今度会いにいつて打鉄式型を見てやる、つて言つといてくれ」

「ええ、分かったわ。じゃあね」

楯無は言つて踵を返し、小走りに去つていった。

恭介も同じく、一夏達の待つピットに戻る。

「待つてたわよ、恭介！」

「あれ、なんでいるんだ？」

恭介がピットに入ると、鈴音が腕を組んで待ち構えていた。一夏達はというと、追い出すのは諦めたようだ。

「あー、で、何でいるんだ鈴音。お前も俺の訓練を受けに来たのか？」

「どうしてアンタの訓練受けなきゃなんないのよ。ちよつとした賭けを持つて来ただけよ」

「賭け？」

そうよつ、と胸を張つて言つ鈴音。

「来週のクラス対抗戦。^{リーグマッチ}そこで勝つた方が負けた方になんでも一つ言つ事を聞かせられる、つていう賭けよ！」

『ええ（なんだと）（なんですつて）ッ！？』

「ほう……。面白そうじゃないか。乗らせてもらおう」

「ちよつ、恭介良いの！？」

「なーに。要は負けなければいいだけだ。覚悟しろよ、鈴音。俺は強いぞ？」

「ふんだ！ 小学生の頃は負け続きだったけど、高一、それもISでの戦いなら負けはしないわよ！」

「なら、中国代表候補生としてのお前の実力。見せてもらおう」

「ええ、覚悟しなさい！」

嬉しそうな鈴音とは裏腹に、一夏、箒、セシリアは、

（無いと思うけど負けたらどうしよう……）

などと考えていた。

＊ ＊ ＊

試合当日。第二アリーナ第一試合。『棗恭介VS鳳鈴音』。

鈴音と恭介はアリーナ内にいた。

鈴音のISである『^{シエンロン}甲龍』。

赤みがかった黒の機体の一番の特徴は非固定浮遊部位。^{アンロック・ユニット}第三世代のISであることを示している。

その手に持つは近接武装である大型の青龍刀、『^{そつてんがけつ}双天牙月』だ。

「来たわね恭介。今手加減して欲しい、って頼むんなら、手加減してあげるわよ？」

「ふっ、俺がそう言われて言う訳が無い、って分かってるんだろ？全力で来い。叩きのめされたくなければな。もしかしたら、この身に届くかもしれないぞ？」

「言ってくれるわね……だったらお望み通り、ボコボコにしてあげるわー！」

『では、試合を開始してください』

ピーっ、という試合開始の合図であるブザーなると同時、鈴音は動いた。

ガキン！ バチバチバチ！ と、鈴音の『双天牙月』と『ビームサーベル』がぶつかりあう。

「ふうん、初撃を防ぐなんてやるじゃない。大見得きるだけはある、って訳ね。でも」

鈴音はもう一本の『双天牙月』を展開し、バトンのように回転させながら突撃し、上から、下から、横からと縦横無尽に攻撃を繰り返して来た。

「おっと」

「圧倒的な攻めの前に何もさせなければ、アンタでも大した事は無いのよ！！　でやあああああッ！！」

縦に斜めに真横に、と連続で繰り出される鈴音の『双天牙月』による連激。しかし恭介は涼しげにそれら全てをさばく。直接受け止めるような事はせず、全て風の様に受け流していく。

すると鈴音は『双天牙月』を連結させて、さらに縦横無尽に攻撃してくる。

ガッキン！　と、今度は流さずに受け止めた。

「そら、鈴音。油断大敵だ」

「はあ？　つて、きゃっ!？」

ズダダダダダダダダダ！　と、ウイングゼロの首の近くに装備されている『マシンキャノン』が火を吹いた。近距離から四銃身式の機関砲の直撃を受けた鈴音は、その衝撃で後ろに吹き飛ばされる。

それを恭介は大型の翼四枚を広げ、設置された『ウイング・ファネル』を設置したまま鈴音の甲龍へと向け、放つ。計二八砲門から繰り出されるビームの連激が鈴音を襲う。

「うわっ！　ちょ、ちよっと！　何よそのバカ多いビーム砲は！」

「ビット兵器として使わず単なるビーム砲として使ってやってるんだからマシだと思うぞ？」

「そっいう、問題じゃ、ない、わよっ！！　このっ！」

鈴音は甲龍の非固定浮遊部位を解放する。瞬間、見えない弾丸が放たれた。ガキン！　と、ウイングゼロの翼が防ぐ。ガンダニウム合金Gで作られた翼は傷一つつかない。

『衝撃砲』。

空間自体に圧力をかけ砲身を作り、衝撃を砲弾として打ち出すという物だ。

見えない砲弾は次々に恭介のウイングゼロに襲いかかるが、全て翼によって防がれる。

「くっ……なんて装甲してんのよ！ その羽！！」

「でかいつて事は狙われやすい、ってことだろ？ だったら硬くしなきゃな」

「こっんのおおおおおおー！！」

鈴音は再び突撃する。

* * *

恭介と鈴音が戦っている頃、一夏達はピットにいた。

「あれ……って、何？」

「あれはおそらく衝撃砲ですわね」

「衝撃砲？」

セシリアの口から出たのは聞き慣れない武装の名称だった。セシリアは真剣な表情で続ける。

「ええ。空間自体に圧力をかけ砲身を生成し、そこから余剰に生じた衝撃そのものを砲弾として打ち出す。『ブルー・ティアーズ』と同じく第三世代の兵器ですわ」

「空間に砲身を生成する、って……射角限界とかが無い、て事？」

「そういうことになりますわね。空間その物に砲身を生成するのですから。だから」

「前後左右上下、真後ろだろうが真下だろうが、場所を選ばずに発射出来る　ということか」

「その通りですわ」

それを聞いて険しい顔になる筈と一夏。

そこに、千冬が口を挟んだ。

「だが、あの翼がある限りはウイングゼロには傷一つつかんだろう。あれはガンダニューム合金Gで出来ている。ブルー・ティアーズの『スターライトmk?』をエフィールド抜きで受けても一時間以上かけないと一〇センチ溶かせないという、ガンダニューム合金Gが、な」

「な、なんですって!？」

「前に見たけど……あれって結構凄い威力だったよ？」

「あの翼はウイングゼロの武装を使うにあたって重要な導力である物をオーバードロッドさせないために装備されている。はつきり言つて『ウイング・ファンネル』はついでだ。一枚残つていれば役目を果たすとは言え、あれは絶対に壊されてはならない。だからこそ、それだけの装甲を持たせている」

「重要な導力……？　って、なんですか？」

「残念だが機密事項だ山田君。少なくともこいつらの前では教えられん」

くいつ、と一夏達を指差す。

「まあ、見ていろ。破壊天使と呼ばれた奴のISと、奴の実力は、伊達ではないさ」

「くつ……ダメ、全然通らない……」

「どうした鈴音？　まだダメージ○だぞ？」

「う、うつさいわね！　これから本気出すのよ！」

（とは言つてみた物の……あの羽、メチャクチャ硬い……！　衝撃砲を『龍咆』をこれだけくらつておいて傷一つつかないなんて

……。やっぱ接近戦でやるしかない？　でも連激で攻めてもアイツにはさばかれる。打ち込んで真つすぐ受け止められてもあの機関砲が……それ以前にあんな数のビーム砲をかくぐれるの？　ああもう！　恭介め……ISでも強いじゃない！）

「どうした、来ないのか？　なら、こっちから行くぞ！」

「ッ……」

恭介は手に『ツインバスターライフル』を展開し、二つに分離し、片方を鈴音へと向ける。

瞬間、閃光が走った。

『ツインバスターライフル』の状態よりも太さも威力も無いとは言え、十分な威力と太さを持った『バスターライフル』の一撃が鈴音に迫る。

「っ……！ あ、危ないじゃない！ なんて物使ってんのよ！！」
「コイツは全距離対応、微妙に射撃特化な機体なんだ。仕様がないだろ。そら、まだまだ行くぞ！」

右の『バスターライフル』を撃ち、更に連続で左の『バスターライフル』を撃つ。

鈴音は光の奔流をギリギリで避ける。が、余波ですらダメージを受けてしまう。

「くっ……！！」

「さて……そろそろ行くぞ！ 『ウイング・ファンネル』！」
ウイングゼロの大型の翼から二八機のウイング・ファンネルが発射される。それらは一気に鈴音を囲む。

「ちっ……この！ この！！」

鈴音は『ウイング・ファンネル』に向けて『龍咆』を連射する。

すると、ひらりひらりと避けながらビームを撃ってくるファンネルの一機に、一発当たりそうになる。が、

「おっと、危ない。凄いだろ、こいつらはこんな使い方も出来るんだぜ？」

その一撃は『ウイング・ファンネル』四機が円形状に並び、展開した障壁によって防がれた。

「ちよつと！ 何よ、それっ……は！ 聞いてないわよ！？」

「言ってないからな。そら、行くぞ！」

ビームの雨をかくぐりながらファンネルを攻撃する鈴音に恭介が迫る。器用に自分のいる場所だけギリギリにビームを避ける様に撃たせながら『バスターライフル』をしまい、『ビームサーベル』を抜き放つ。

そして『ウイング・ファンネル』が一斉にビームを放った。それら全てが鈴音を動けなくするように腕、足、胴体すれすれに放たれ、

さらに恭介が近づく隙間を与える。

「ッ！！　しまっ！」

「終わりだ！　すず　」

瞬間、ドオオオオオオオオオオオオオオオ　ッ！！
と、アリーナのシールドを突き抜けた巨大なビームがアリーナの
地面に着弾した。

「なっ……何！？」

「アレは……（まさか……このタイミングで送って来たのか！？

束！）ッ！！　鈴音！」

「ッ！！」

爆発によって出来た黒煙の中から桃色に輝く極太のビームが飛来
する。恭介は鈴音の前に飛び出し、大型の翼を四枚全て防御にまわ
した。

バシューウウウウバリバリバリ！！　と、ウイングゼロ
のフィールドが悲鳴を上げる。

「くっ……ゼロの『フィールド』でギリギリか……ッ！　なんて
出力してやがる！」

「なによあのIS……どこのなの！？」

警告。所属不明ISにより、ロックされています。

「所属不明……？」

「ちっ……鈴音！　来るぞ！！」

恭介の言葉と同時に、黒煙の中から一機のISが飛び出して来た。

一言で言えば異形だった。

黒い全身装甲で身を包み、首が無く爪先よりも長い両腕。肩やら
手先やらには砲口が覗いている。何よりも特徴的なのはその背に浮
かぶ黒い縦横に砲台が取り付けられた非固定浮遊部位であるボック
ス。恭介の知識は無い物だった。

（なんだ……？　あのボックスは。俺の知ってるゴーレム？にはあ

んなもの」

「ちっ……仕方ない。鈴音！あのIS迎撃する！援護してくれ！」

「しょ、仕様がないわね……！援護してあげる……！」

『ダメです二人とも！早く脱出してください！先生達が敵ISを制圧しにかかります！』

と、二人の通信を聞いていた真耶が口を挟んだ。

「でも山田先生、先生方が来るまで時間を稼がないと被害がどうなるか分からない。それに」

ウイングゼロのゼロシステムが言う。アリーナの遮断シールドレベルが4まで上がっている、と。

「しばらく入って来れそうにないんですよ？逆もまた然りだ」

『そ、そうですけど……！』

「だったらやるしかない！行くぞ！鈴音……！」

「ええ！任せなさい……！」

二人は黒いIS、『ゴーレム？』に突撃していった。

* * *

「棗君！鳳さん！？聞こえてますか！？もしもし！」

「落ち着け山田君」

「きゃっ……！」

スパン！と、どこからか取り出した出席簿によって繰り出される出席簿アタックが真耶の頭に直撃した。

（（痛そう……））

「本人達がやると言っているのだ。やらせてやれ」

「織斑先生！なにを呑気な事を言ってるんですか……！」

「だから落ち着け。コーヒーでも飲め、糖分が足りないからイライラする」

そう言っただけであつたコーヒーに白い粉を入れる。……塩を。

「そうしたい所だが……棗の言う通りすぐには入れも脱出も出来ん。見る」

千冬の視線の先には、第二アリーナスステータスチェックと書かれたモニターが出ていた。そこにはゲート遮断シールドがレベル4まで上がっている、そう書かれていた。

「遮断シールドが……レベル4に設定!?」

「しかも……扉が全てロックされて……! まさか、あのISの作業……?」

「……そのようだ。これでは避難する事も、救援に向かう事も出来ない……」

と、セシリアが声を上げた。

「でしたら! 緊急自体として、政府に救援を!」

「やっている。現在も、三年の精鋭がシステムク拉克を実行中だ。遮断シールドを解除出来れば、すぐに部隊を突入させる」

「はあ……結局、待っている事しか出来ないですね……」

「何、どちらにしても、お前は突入部隊には入れないから安心しろ」

「えっ!? な、なんですってえ!?!」

声を荒らげるセシリアに、千冬は真剣な表情で返す。

「お前のブルー・ティアーズの装備は、一対複数向きだ。お前が複数の側に入ると、むしろ邪魔になる」

「そんなことありませんわ!! このわたくしが邪魔などとっ!」

「では連携訓練はしたか。その時のお前の役割は? 味方の構成は? 敵はどのレベルを想定してある? 連続稼動時間は?」

「ううっ……わ、分かりました……もう結構です……」

「うむ……分かればいい」

セシリアは肩をがくりと落とした。

そんな中、箒は光学映像を心配そうに見つめていた。そして何かを決意したようにピットから飛び出す。

ドン！ ドオン！ ドオン！ と、甲龍の『龍咆』が火を吹く。ゴーレム？はそれらを一発もかする事無く全て避ける。

「くっ……こいつ、強い……！」

「鈴音、突撃する！ 援護しろ……！」

「了解……！」

言って恭介は『ビームサーベル』を構えゴーレム？に突撃する。後ろからは鈴音の衝撃砲がゴーレム？に向けて撃たれるが、全て回避される。

「オオオオオオオオオオ……！」

恭介が『ビームサーベル』を振り下ろす。

すると、ゴーレム？の手に装備された方向からビームが放出された。『ビームサーベル』の様に。

バチバチバチ！ と、二つのビームサーベルがぶつかりあう。

「くっ……このっ……！」

もう一本『ビームサーベル』を取り出し、振り下ろすが、ゴーレム？も残った片方の手から『ビームサーベル』を展開する。二つの『ビームサーベル』同士で打ち合い、火花を散らす。

すると、ゴーレム？が距離を取り出した。

「？ 何だ？」

瞬間、背後に浮いていた黒いボックスが開いた。そこから小さな何かが大量に飛び出す。

「……！ ファンネルだと……！」

『ウイング・ファンネル』よりも遥かに小さなビット型の『ファンネル』。黒く小さい砲台は大量に恭介へと向かい、ビームを放つ全方向からのオールレンジ攻撃。しかも相手は制御しながら動いてくる。

「くっ、数は……四〇機！？ 積み過ぎだろ……！」

体全体を包み込むように大型の翼を展開しながらそう毒づく。大

きなエフィールドの反応音がする事から、制御しながら動いている事は明白だった。

すると、ピー、ピー、ピー、と電子音が鳴った。

「これは……ゼロか。『敵ISが無人機である可能性、及び搭乗者の戦闘データを使用している確率九八パーセント』……！サンキユーゼロ、これで口実が出来た！鈴音！離れてろ！」

「はあ！？何言ってるのよ……！」

「巻き込まない自信が無い！千冬さん！聞こえますか！？」

『棗か。どうした』

「ゼロのリミッター解除の許可を！ゼロがああISは九八パーセントの確率で無人機だと言いました！なら手加減する必要はないはず！」

『ふむ……そうか。なら許可する。ゼロの判断なら信用出来る。ただし、完全破壊はするな。回収する』

「了解、ありがとうございます！」

言って恭介は翼を開き一気に飛翔する。それを追うように『ファネル』が迫る。

「恭介……！」

「安心しろ、俺は負けない！だから離れて見てろ！お前らのリーダーの勇姿をな……！」

「なっ……あーもう！分かったわよ！でも、負けたら承知しないからね……！」

「分かってる！」

『恭介えッ！』

「……？」

『男なら……男ならそのくらいの敵に勝てなくてなんとする！』

「第！？ヤバイ！」

ゴーレム？は声を上げた第に狙いを付けた。その巨大な上から高出力のビームを放つ。

「させるかあああああああああああッ……！」

恭介は『ファンネル』のオールレンジ攻撃を避けながら、第へ迫るビームを翼で受け止める。そのまま恭介はウイングゼロのリミッター解除に取りかかった。

「ゼロ！ リミッター解除！ 解除用コードは……『Gundam
ガンダムに is not allowed defeat！』」
敗北は許されない

言うと同時に、ピーっ、という電子音があった。

すると、ウイングゼロのツインアイが緑色に光る。更に、ウイングゼロの『ビームサーベル』の出力が最大まで上がった。実は、ウイングゼロは“スポーツ用”に全てリミッターがかかっていたのだ。そして、リミッターが解除されると同時に、『ゼロシステム』が真に解放される。

ゼロシステムが恭介の脳波に直接干渉し、敗北と勝利、二つを織り交ぜた予測される全ての未来を見せ始める。

「さあ……行くぞ。戦闘レベル、ターゲット確認、排除 開始ッ

！！」

モニターに『TRANS-AM』と出ると同時に、ウイングゼロの翼から緑色に輝くGN粒子が大量に放出され、ウイングゼロが赤く輝き始める。

フッ、とウイングゼロが消えた。次の瞬間、四〇あった『ファンネル』が、二八落とされた。さらに続けて残りの一二機が撃ち落とされる。

トランザムによって強化された『ウイング・ファンネル』の仕業だった。

「はああああああああああッ！！」

いつの間にか懷に潜り込んでいた恭介が、ゴーレム？の両腕と黒いボックスを切り捨て、胴体を蹴り跳ばす。そして更に、ゴーレム？へと『ウイング・ファンネル』六機で足と胴体を撃ち抜いた。

ゴーレム？はそのまま火を吹きながら地面へと落ちていった。

トランザムが解除され、元に戻ったウイングゼロが着陸する。その近くに鈴音も着陸して来た。

「な、何よ。メチャクチャ強いじゃない。アンタ」

「死ぬほど努力したからな」

すると、笑いあう二人に、

警告、敵ISの再起動を確認。ロックされています。

「……！」

背後を見ると、ギギギ、と鈍く動くゴーレム？が、腹部のビーム砲を撃とうとしていた。が、

「フッ……狙いは？」

『完璧ですわ！』

瞬間、ゴーレム？の腹部に青白いビームが突き刺さった。

今度こそ、ゴーレム？は完全に機能停止したのだった。

* * *

千冬と真耶は、学園地下五〇メートルにある、一般には知られていない『LEVEL4』書かれた、最高機密室と呼ばれる部屋にいた。

中央にあるテーブルには、恭介達を襲った無人IS、ゴーレム？が置いてあった。

「……素君の言う通り、やはり無人機ですね。登録されていないコアでした」

「そうか……」

「ISのコアは全部で四六七機……でもこのISに使用されているのは、そのどれでもない物でした」

「……………」

「？ 織斑先生？」

真耶が読んでも千冬は反応せず、ただディスプレイの映像を見続けるだけだった。

第6話「天使と龍と時々乱入者」(後書き)

戦闘シーン……難しい。

リミッター解除の英文、あってるかな？

「そのようだ。褒、お前は別の所でそれを読んでいる。織斑の準備は我々が手伝う」

「りょーかい。じゃあ、一夏。短かったけど同室の間楽しかったぜ」それがトドメになったらしい一夏は、がくり、と崩れ落ちた。恭介はそのまま寮の外へと向かう。

恭介は寮の裏へと回り、封筒から手紙を取り出す。すると、ポウ、と手紙の中の文字が光り出した。暗闇で読む事を前提とした特殊なペンで書いたらしい。

「やっぱり朱鷺戸か……」

手紙の一番下には、朱鷺戸沙耶とさよと書かれていた。内容はこうだ。

『ちよつとした情報が入ったから報告させてもらっわ。近々、というより今月中か来月の前半にIS学園、それもあなたの組に転校生が来るはずよ。それも二人。一人はラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの特殊部隊、シュヴァルツェア・ハーゼ『黒ウサギ部隊』の隊長よ。まあ、ぶっちゃけ彼女自身にはおそらく性格的な問題しかない。でも、彼女のIS『シュヴァルツェア・レーゲン黒い雨』は少し危険ね。残念ながら詳しくは調べられなかったけど、結構ヤバイもの積ませてるみたい。

次にシャルル・デュノア。デュノア社社長の息子、って事で、二人目の男性IS操縦者として転校してくるみたいね。まあ、時風なら分かるだろうけど、このシャルル・デュノアは『彼』、ではなく『彼女』よ。デュノア社社長には息子なんていないもの。おそらくあなたのISのデータが欲しいんでしょうね。ま、ゼロなら心配は無いでしょうけど。

とにかく気をつけなさい。大抵の事じゃあアンタはビクともしないでしょうけど、一応ね。絶対に連中が手を出してこないとは限らないんだから。じゃあ、今度は直接会いましょ？

闇の執行部 副部長

第一部隊『

恭介が読み終わると同時、光る文字は消え失せた。

「用意周到だな……相変わらず」

どうやらこれからまた、忙しくなりそうだ。

＊ ＊ ＊

時が流れ六月。

土日をまたぎ月曜日の朝。クラスメイトのみんなはISスーツのカタログを見ながら談笑していた。既に専用スーツのある恭介には関係のない事だが、来週からISスーツの申込期間が始まるらしい一応、生徒達には学園指定のスーツがあるのだが、申し込むスーツには個人にあわせた機能をもっているらしい。

まあ、女性、ということもあってデザイン的な物も気になっている者の方が多いかもしれないが。水着みたいな形状なのは変わらないにしても、ISスーツには様々なデザインが存在する。

「ねえねえ、なっつーはどこの会社のスーツなのー？」

「俺か？」

「そーそー」

やけに間延びした声で恭介に話を振って来た少女は布のほしけ仏ほんね本音。一

夏から曰く『のほほんさん』だったか。袖丈が異常に長い制服を着て、なんだか眠そうでゆったりした、まさに『のほほん』とした少女だった。

「あ、私も聞きたーい」

「棗君のスーツもどっかの改造品なの？」

談笑好きで珍しい物好きな女子高生達は、すぐさま恭介の席周辺に集まり出した。

「あー、俺のは特注品だ。知り合いに作ってもらった」

「知り合いー？」

「ああ。ま、その辺は秘密って事で」

「えー、どーしてー？」

「その方がカッコいいからだ」

「そっかー。じゃあ仕様がなないねー」

「いいの！？ と、周りの女子達が騒ぐ。

と、教室のドアがガラガラと開いた。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

入って来たのは当然、千冬。その後ろに真耶も続く。

「さて、今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので、各人、気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまで学校指定の物を使うので忘れないように。忘れた物は代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもない者は、まあ下着で構わんだろう」

「いや構うだろー！！ と、恭介含むリトルバスターズ五人は思わず叫びそうになったが、叩かれても嫌なのでぐっと堪える。おそらく恭介を信頼して言っているのだろうが……鋼の理性（自称）を持つ恭介でも、目のやり場に困る時は困る。

「というか本当に水着まで忘れたら下着でやらせるのだろうか？」

「では、山田先生。ホームルームを」

「は、はいっ！」

眼鏡を拭いていた真耶は、言われると慌てて千冬と場所を交代した。

真耶は一つ深呼吸をし、

「えーとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ なんと二名です！」

『えええええええっ！？』

突然の転校生発言に、クラスの生徒達が一気にざわめく。まあ、転校生が来る、という話に盛り上がりがない所はあまりないだろうが、

やはりこの学校の生徒達は一回りも二回りも騒がしくなる。

と、再び教室のドアが開いた。

「失礼します」

瞬間、クラスのざわめきがぴたりと止んだ。

転校生の一人は、ある程度改造が許されるIS学園の制服を軍服風に改造し、左目に眼帯をした、まさに軍人といった風な銀髪の少女。

もう一人は。

セシリアよりも少し濃いめの金髪で、背中まである髪を首の下辺りで纏め、男子の制服を来た、少女のような少年。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

シャルル君が一礼する。クラス全員が啞然とし、開いた口が閉まらずにいた。

「お、男……？」

誰かが、少なくともリトルバスターズ以外の誰かが呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいる、と……聞いて……え」

シャルルは固まった。恭介を見て。

「きよ……恭介……？」

「お、おう。久しぶりだな。えーっと……」

「きよ、恭介！ あ、ああ、後で久しぶりあったついでに積もる話があるからまた今度ね！？ ね！？」

「あ、ああ……別に良いけど」

「ほっ……」

そっと胸を撫で下ろすシャルル。

と、ようやく固まっていた生徒達が解凍された。すつ、と恭介は耳に耳栓をする。

『きゃあああああああああああーーーーー』

「……………」

「ひゃあっ!？」

まさにバインドボイス。窓でも割れそうな声だった。

「男子! 二人目の男子っ!!!」

「しかもうちのクラス!」

「美形! 棗君が守ってもらいたくなる系なら、守ってあげたくなる系の!!!」

「しかも棗君と知りあい!? 棗君×デユノア君ね!? それとも逆!？」

恭介は自分が元気だ、ということを見ずにはいるが、ここまで元気が、と言われたら首を傾げてしまう所だ。少なくともパーティーや祭りなど以外でここまでハイテンションになる事は少ない。

それをこのクラスは…… すごいな! と恭介は内心で何故か賞賛していた。

ちなみに、最後に言葉に関しては聞かなかった事にした。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬が言う。

「み、皆さんお静かに! まだ自己紹介は終わってませんから!?!」

まるで忘れ去られないようにしているかの様に、存在感を示さんばかりの大声で真耶は叫ぶ。

当のもう一人の転校生は、騒ぎ立てる生徒達を侮蔑するような目で見つめていた。

「……………」

「……挨拶しろ、ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました。…… ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

「あ、あの…… 以上、ですか……?」

「以上だ」

これで何回目かの涙目だった。

「！……貴様がッ！」

ラウラが突然一夏を睨み、近づいてくる。

え？ 私？ と何が何だか分かっていない一夏は、ただ呆然とラウラを見つめる。

瞬間、突然ラウラが手を振り上げ、振り下ろした。彼女の掌は一夏目掛けて飛んでくる。

「！！！」

「え？」

が、その手は別の誰かに掴まれ止められた。

「……恭介？」

「貴様……邪魔をするな！！」

「別に邪魔はしてない。ただ意味も分からず殴られようとしている幼馴染みを助けただけさ」

にやりと笑う恭介。だが、いつものような笑みではなく、目だけは笑っていないかった。

「……ッ！」

「どうした……？ 呆然として。具合でも悪いのか？」

（コイツ、なんて殺気を……っ！ 周りは気付いていないのか！？）
が、周りの生徒と真耶は頭に？をうかべ、何も気付いてはいない様子だった。千冬だけは冷や汗をたらりと流していたが。

「くっ……！」

と、ラウラは恭介の手を振り払うと、踵を返して振り返り、再び一夏を睨みつける。

「私は認めない。貴様があの人の妹であるなど、認めるものか」

は？ 何言ってるの？ と、一夏を含め回りの生徒達は口をぽかんと開けて呆気にとられている。

「あー……ゴホンゴホン！ では、ホームルームを終了する。各人は着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦

を行う。解散！」

千冬が手をパンっ！と叩くと、クラスの生徒達が一斉に行動を起こす。

すると、千冬とシャルルと一緒に恭介の元へと近づいて来た。

「おい棗、デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子の上、一応知り合いないだろうか？」

「分かってますよ。ほら、行くぞ」

「え、あ、うん」

元に戻った恭介はシャルルの手を引き、教室から出る。

「えーっと……？」

「女子が着替えるんだ。一応、男にな……てるお前がいたら変態扱いだぞ？」

「あ……そっか」

「とつととアリーナの更衣室まで行くぞ。実習の時はいつもこうだからな。いつまでそうなのは知らないけど、戻る時まで慣れとけ」

「う、うん……」

「ま、一応詳しくは聞かないでおいでやるよ。でも話せる時になったら、おにーさんに話してくれよ？」

「あはは……相変わらずなんだね、恭介は」

瞬間、恭介センサー（？）がキュピーン！と反応した。

「邪気が来たか……！」

「は？」

すると背後から、

「ああっ！ 転校生発見！」

「しかも棗君も一緒！」

動く障害物

IS学園女子生徒達が現れた！

正直言って彼女たちはかなり迷惑だった。恭介もシャルルも、周りの女子達と同じように制服の下にISスーツを来ているから着替えは早い。が、それでも彼女達で時間を取られると移動時間的に授業に遅刻する可能性が高くなる。

恭介は避けられるがシャルルは避けられない出席簿アタックを受けるはめになってしまう。それだけは避けたかった。

「いたっ、こっちょよ！」

「者共！ 出合え出合えいつ！！」

どこぞの武家邸にでもいる悪代官のような台詞を誰かが吐くと、たちまち女生徒達が集結し、柔肉の壁を造り出してくる。

「棗君の茶色い髪も良いけど金髪つてのも良いわねっ」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああっ！ 見て見て！ あの二人、手！ 手繋いでるっ！！」

「日本に生まれて良かった！ ありがとうお母さん！ 今年は河原の花以外のを上げるね！」

いや、花くらいはちゃんとしたのをプレゼントしろ、とかいろいろとツツコミどころのある発言をしてくる女生徒達。

包囲は完成しつつあった。

「仕方ない…… ちよつと失礼するぞ！」

「え？ って、ちよつと！？」

と、恭介は突如シャルルをお姫様だっこしだした。周りの女生徒達から黄色い声で歓声が上がる。

そして恭介は適当な教室に入り、机に飛び乗って飛び移っていき

「ちよ、ちよつと！？ まさか ！！！」

「そおら！ いくぞ！！！」

「ちよ、ちよつとーーーーー！？ きゃあああああああああ
あーーーーーッ！！！」

開いた窓から飛び降りた。空気の壁が思いきり肌を通り抜け、二人の髪を逆立たせる。

スタン、と恭介は綺麗に着地した。そのまま恭介は第三アリーナへと向かう。時間は 間に合いそうだった。

* * *

「遅い」

スパン！ ひらり。と、出席簿アタックが飛んでくる。例によつて恭介は避けたが。

しかし千冬は続けて恭介に向けて出席簿アタックを放ってくる。

「ちっ……だから！ 避けるなど！ 言つて！ いるだろうが！！」
「いや、だって当たつたら痛いじゃないですか」

「このっ！ このっ！ このおおおお！！！」

瞬間、脳天をブチ抜いたかに思えた一撃は、恭介が分身でもしたかの様にふつと消えた。

「！？」

「故に、避けるための努力をは欠かしていません。おかげでこんな芸当まで出来るようになりました」

「うぐぐぐ……おのれ、無駄な特技を……」

千冬は悔しそうに恭介を睨み、恭介はふつつふ、とニヤニヤ笑っていた。ただ一人、銀髪ウサギはそんな恭介を睨んでいた。

と、そんな恭介にセシリアが話しかけてくる。

「そう言えば恭介さん。今日の朝に一夏さんがボーデヴィツヒさんに叩かれそうになっていましたが、何か心当たりはありませんの？」

「いや……ないけど。一夏は無いのか？ 心当たり」

「な、ないよお！ 第一あの人とは初対面だもん！」

「何？ 一夏が何かやったの？」

「こちらの一夏さん、転校生の女子に殴られそうになりましたの」

「はあ？ なんで？ バカじゃないの」

「だからそれが分からないんだつてばあ。あとバカじゃ

「ふんっ！！！」

スパパパン！ ひらり。

「ちっ……またか」

「恭介に当てるためにわざわざ何も言わずに叩いて来たの！？」
「それもある」

「それが一番でしょ!？」

が、千冬はそんな一夏の叫びを無視して、生徒達の前へと出た。

「では、本日から格闘、及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

『はいっ!』

一組と二組の合同演習なので、人数はいつもの二倍。故に返ってくる返事の音量も気合いも全てが二倍となっていた。

「くうっ……何かと言うとすぐにポンポンと人の頭を……っ!」

「……恭介のせい恭介のせい恭介のせい……」

何やら文句と呪いのような呪詛が聞こえてくるが、恭介はあえて無視した。

「鈴音……少し静かに」

「だって仕様が無いじゃない! 恭介のせいなんだから!」

「いや意味が……」

「今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力溢れんばかりの十代女子もいることだしな……。鳳^{ふあん}! オルコット!」

「な、何故わたくしまで!？」

「専用気持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」

セシリアと鈴音は渋々前に出る。

そんな二人に千冬が何かを囁いた。すると、何故かやけにやる気を出して、

「やはりここはイギリス代表候補生のわたくしセシリア・オルコットの出番ですわね!」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね。専用機持ちの!」
と言った。

「それで、相手はどちらに? わたくしは鈴音さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん、こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるなバカ共。対戦相手は」

突如、キィイン……という何かが飛んでくる音が鳴った。

音の方向。上空を見ると、IS、『ラファール・リヴァイブ』

セシリアと鈴音、そして真耶はそれぞれ並び、配置に付いた。

「では……始め！」

そう言われると同時に、真耶は空中へと飛翔し、セシリアと鈴音も真耶を追いかけて、空へと飛び出していった。

「さて、今の間に……そうだな、ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あ、はい」

空中で行われている三人の戦闘を見ながら、シャルルはすらすらと答える。

「山田先生の使用されているISは、デュノア社製『ラファール・リヴァイブ』です。第二世代開発後期の機体ですが、そのスペックは初期第三世代にも劣らない物で、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型のISの中では、最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七力国でライセンス生産、一二カ国で正式採用されています」

シャルルは更に続ける。

「特筆すべきはその操縦性の簡易性で、それによって操縦者を選ばない事と、多様性役割切り替えを両立しています。装備によって格闘、射撃、防御といった全タイプに切り替えが可能で、参加サイドパーティーが多い事でも知られています」

「ああ、一旦そこまで良い。終わるぞ」

上空では、真耶が射撃でセシリアを誘導し、そこで鈴音と衝突。そこを狙い、グレネードを発射。二人は爆発の中に消え、数瞬すると煙の中から二人が落下し、地面に激突した。

「くっ……うう……まさかこのわたくしが……ッ！」

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ！」

「す、鈴音さんこそ！ 無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわー！」

「こっちの台詞よ！　なんですぐビットを出すのよ！　しかもエネルギー切れるの早いし！！」

「ぐぐぐぐ……っ！」

「ぎぎぎぎ……っ！」

……睨み合い、あーだこーだ、ガミガミガミガミ、と二人はいがみ合い続けた。スパン！　と二人は当然の様に出席簿アタックをくらう。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の實力は理解出来ただろう。以後は敬意を持って接するように」

パンパン！　と手を叩いて千冬は全員の意識を切り替えさせる。

「専用気持ちは、棗、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、鳳だな。ではグループ分かれて実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちが行う事。いいな？　では分かれる」

千冬が言つと、女生徒達は恭介とシャルルに群がってくる。他の四人には誰も行かなかった。

「棗君一緒に頑張ろう！」

「デュノア君！　わかんないとこ教えて〜！」

「ね、私も良いよね？　同じグループに入れて！」

さすがの二人も苦笑だった。

が、そこで千冬の出番が再び来る。

「このバカ共が……出席番号順に一人ずつ各グループに入れッ！

順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンドー〇〇周させるからな！！」

瞬間、シュバババババ！　と、女生徒達は一瞬で並び終える。

「最初からそうしろ、バカ者共が」

千冬は大きくため息をつく。そんな千冬を他所に、女生徒達はバレないように小声で呟く。

「……やった、棗君と同じ班だつ。名字のおかげねっ……」

「……うー、セシリアかぁ……。さっきはばる負けしてたし……はあ……」

「……鳳さんよろしくね。後で棗君のお話聞かせてよ……」

「……デュノア君！ 分からない事があつたらなんでも聞いてね！
ちなみに私はフリーだよ！ ……」

「……………」

専用機持ち達は気付いているのか、いないのか。少なくともセシリアは聞こえていたようだがくり、と肩を落とした。

が、一つ代わった班があつた。

無言。ひたすら無言。授業中では良い事なのだろうが、周りがこれだけベラベラ喋っていると逆に不気味な印象を持たせる。

喋りたくても喋れない。話しかけたくても話しかけられない雰囲気になつている一つの班、言うまでもなく、ラウラの班だった。「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一機ずつ取りに来てください。数は、打鉄うちがねとリヴァイブが三機ずつです。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

こうして、騒がしくも一部静かな授業が始まった。

第8話「ウサギ隊長と時の風」(前書き)

恭介も無敵ではなかった……

第8話「ウサギ隊長と時の風」

実戦訓練では、特に何事もなく進み、終了した。ラウラに関しては終始恭介と一夏を睨みつけていたが、一夏は気付かず、恭介はそのフリをしていた。恭介としては、向こうから何かしてこない限りは何もするつもりは無かった。

そして昼休み。恭介は箒に誘われ、昼食に向かったのだが……。
「……どういことだ」

と、箒は恭介の後ろにいる一夏達を睨みながら言った。

「何が」

「何故こいつらまでいる」

「大勢で食べた方が美味しいじゃないか」

「それはそうだが……！ くっ……こいつがこういう奴だということを失念しているとは……！」

「ふんだ！ 抜け駆けしようとするからそうなるのよ！」

「ぬぐぐ……っ！」

胸を張ってふふん、と鼻を鳴らす鈴音に、思わず拳を握りしめる。すると、恭介の隣にいたシャルルが申し訳なさそうな顔で言う。

「えーっと……本当に僕が同席してもよかったのかな？」

「友達同士で気を遣うな、良いに決まってるだろ」

「そっか……ありがとう」

にこり、とシャルルが可憐に微笑む。そんなシャルルに、恭介は思わずときめいてしまうが、男にときめくな、などと言われても嫌なので、何とかポーカーフェイスを保つ。

あ、そうだ。と、鈴音が唐突に言い出し、手に持っていたタッパを開く。

「お、それって……」

「そう、酢豚。今朝作ったのよ。食べたい、って言ってたでしょ？」
すると、隣にいたセシリアが咳払いをしだし、

「恭介さん？ わたくしも今朝は偶々、偶然早く目が覚めまして、
こつという物を用意してみましたの」

と言いつつ取り出したるはランチボックス。中に入っているのは、
色とりどりのサンドイッチ達。「イギリスにも美味しい物があると
納得していただきませんか」と、セシリアは笑顔で言う。

「へえ……言うだけあるじゃないか。じゃ、とりあえず順番的に鈴
音の酢豚から……」

恭介は鈴音からタッパ―と箸を受け取り、一口頬張る。

「どう？ 美味しい？」

「ん……ああ、美味しい。やるじゃないか、見直したぞ」

「えへへ そっか」

「きよ、恭介！」

「恭介！！」

「どうした？ 箸に一夏」

言うと同時に差し出して来たのは一夏が持つ弁当一つ。

「一つ……？ 共同か？」

「う、うん……箸と一緒に作ったの……」

と、一夏が開けると、中には胡麻が少々振りかけられたご飯と、
唐揚げ、卵焼き、ほうれん草にきんぴらごぼう。極めつけは一つだ
け入っているウサギ型のリンゴ。

（恭介的に）まさに弁当、と言った感じだった。

「へえ、美味そうだな。どれも手が込んでそうだ」

「つ、ついでだついで！ あくまで、私達が自分で食べるために、
時間をかけたただけだ！」

「それでも嬉しいさ。サンキュー箸、一夏」

「ふ、ふん……！」

「えへへ……」

箸は微妙に嬉しそうに頬を染めながらそっぽを向き、一夏は恥ず

かしそうに頬をかいた。恭介はそんな二人を見ながら暖かい笑顔を浮かべ、一夏の持つ弁当から唐揚げを一つ挟み、

「じゃあ、いただきます」

頬張る。

「……………」

「うん、普通に美味しいぞ。これはどっちが作ったんだ？」

「わ、私だ……！ 味付けはショウガと醤油、おろしニンニク、それとあらかじめ胡麻を少しだけ混ぜてある。隠し味には大根おろしが適量だな！」

「へえ……聞いているだけでも手が込んでそうだな。一夏はどれを作ったんだ？」

「えっと……この卵焼き」

「これか。あむ……」

「……………（どきどき）」

「んん、美味い。さすがだな」

「そ、そう？ よかったー！」

と、やけに楽しそうに話す三人を、鈴音とセシリアはムツとした表情で睨む。恭介の横にいるシャルルは、少し羨ましそうにその光景を見ていた。

「んー、本当に美味しいけど……でも何で一個しか無いんだ？ まさかその弁当一個でお前ら二人分だったりしないよな？」

「え？ えーっと……」

「失敗したのは全部自分で食べたからな……」

「ん？」

「あ、あああっ！？ だ、大丈夫だ！ まあ、その、なんだ……美味しかったのなら良い」

笑顔で慌てて誤魔化す筈。

しかし恭介はそれで良しとしなかった。

「オイオイ、ちゃんと食べないと午後キツイぞ。ほら、食え」

と、恭介は唐揚げを一つ挟んで箸に差し出した。

「「「「!?!?!」」」」

「え、ええ!?!」

「ほら。食べつて」

「あ、ああ……そ、それでは……」

差し出された本人は、ちよつと赤くなりながら、少し躊躇いつつその唐揚げを頬張った。美味しそう……というよりは嬉しそうに咀嚼し……飲み込む。

「良い……良いものだな」

「だろ? この唐揚げもつと誇つていいと思うぜ」

「唐揚げではないが……うん、良いものだ」

うつとり、といった感じで言う筈。

そんな中シャルルは、テンパっているのかなんのか分からないが、

「あ、ああ! こ、これでもしかして、日本ではカップルがするつていう『はい、あーん』つていうやつなのかな? な、仲睦まじいね」

そういうシャルルの言葉に、一夏達は過剰に反応する。

「何でコイツらが仲良いのよ!?!」

「そ、そうだよ!?!」

「そ、そうですね! やり直しを要求します!」

「いや、何のやり直しだよ」

それなら、とシャルルが切り出す。

「みんなで一つずつおかずを交換しようよ。食べさせあいっこなら良いでしょ?」

シャルルのそんな提案に、五人は黙り、一夏達はお互いの顔を見合い、その手は思いつかなかった……、と心の中で呟く。

「ん? まあ、俺は別に良いぞ。おかず交換は弁当の定番だし。ほら、俺が作った分」

「つてアンタ、自分の分作つてた訳?」

「まあな」

「ああ、今日やけに早く起きてると思ったたらそれ作ってたんだ？」

「ああ。ま、一夏達が弁当やら酢豚やらを作って来てくれてるとは思わなかったけど、こういう事なら結果オーライだ」

そう言つて恭介は弁当を開ける。中には日の丸なご飯と生姜焼き、レタスとトマトを間につめて、ポテトサラダが入っていた。

「ほう……」

「恭介さん、料理出来ましたのね」

「人並み程度にはな。母さんが開発者で、父さんと一緒に研究室にこもる事が多かったから、自分たちで作んなきゃなんなくてさ。妹も居ただけど、アイツはまだそんな時料理出来なかったから」

「ああ、鈴だね。鈴音の事を鈴音、って呼ぶ事になったのも鈴がいたからだっけ」

「そういえばいたわね。人見知りだったけど、最後にはそこそ話してくれるようになったわ」

「私は……どうだったんだろうな。いつの間にか多少話す関係にはなっていたが」

「あー、僕はフランスで恭介と一緒に会ったなあ。恭介の後ろに隠れちゃって、可愛かったけど」

と、シャルルが言つと、

「そういえば二人つて知り合いなんだよね？　もしかして小六の終わり頃にフランス行ったとき……」

「ああ。フランス行つてから……その翌日辺りだったか」

「恭介のお母さん……美夜子みやこさんが僕のお母さんに会いに来たんだよね？」

「へえ……それで……」

一瞬、恭介にはシャルルの表情が悲しげに見えたが、それについては今言及はしない。

「まあいいわ。とにかく食べさせあいっこよね。恭介が良い、っていうなら私は構わないわよ」

「わたくしは、本来ならばそのようなテーブルマナーを損ねるよう

恭介さん・セシリアさんがログアウトしました。

＊ ＊ ＊

何とかログ^{復活}インを果たした恭介は授業に途中から参加し、顔色が若干悪いままにやり過ごした。ちなみにセシリアはログ^{復活}イン出来なかった。

さて、部屋に戻って来た恭介とシャルルは、テーブルに向かい合って座り、茶を飲みながら話していた。と言っても、主に恭介がこれまでにあった事を一方的に語り、シャルルが相槌を打つだけなのだ。

「へえ……恭介ってやっぱり昔からメチャクチャだったんだね。蜂の巣に喧嘩売って……」

「そうか？ 俺は仲間とやったら楽しい事を全力で追求して来ただけなんだけどな。そうしたら蜂の巣にケンカを売る、って事になっただけの話さ」

「どこをどう辿ったらそこに行き着くのさ……」

「子供の頃の一番の強敵は親を覗けばやっぱり蜂だろ？ だからそれを打ち破ったら気持ちいいだろうと思わないか？」

「いや全然理解出来ないんだけど……」

「むう……シャルにはまだ早かったか……」

「いや時期とか関係ないと思うんだけど！？」

「シャルは優等生過ぎるんだよ。もう少し緩まってくれりゃ、ちゃんと理解出来るようになるはずだ。少なくともアイツらは理解出来るはずだ」

「そうなの！？ え、僕がおかしいの！？」

などと話し、しばらくすると適当にシャワーの順番を決める。とりあえず恭介が先に入り、シャルルが先に入る事になった。

そしてそれぞれシャワーに入り、上がり、ベッドに座って再び話

し始める。

「ところでシャル。さっきのお前の反応でなんとなく分かったけど、お前の母さんは……」

「……うん。恭介達がフランスから別の国に行った後すぐに、ね……」

恭介の母親、棗美夜子は前述したようにシャルル　シャルロットの母親に会いに来ていた。言わずもがな二人は知り合いだったように、そろそろ危ないかもしれない、という話を聞いて会いにいったようだ。

シャルロットの母親は、真っ白な顔に、シャルロット似の金髪で、無理矢理作った笑顔ではなく、心から浮かべた笑顔で恭介と鈴、美夜子を迎えた。

あの時から彼女は危険な状態だった。

「……おばさんは、笑って逝ったか？」

「うん……絶対に辛いはずなのに……綺麗な笑顔で、ね……」

「だろうな……あの人は強い人だった。母親としても、一人の人間としても……」

短い間ではあったけど、学ばせてもらう事はとても多かった、と恭介は付け加える。

「だったら……俺は泣けないな。笑ってやらないと。泣いてたらあの人に説教されちまうぜ」

「ははっ……そうかもね。母さんだから……」

「でも……お前は泣いとけ」

え？　と、シャルロットは思わず恭介の顔を見る。

「おばさんが亡くなったとき泣いたのかもしれないけど、今もかなり泣きそうな顔してる。実際溢れてるしな……」

恭介は指で流れる涙を拭う。

「今は俺しかいないんだ。存分に泣いとけ」

「……あ……そう、だね……。じゃあ……ちょっとだけ……」

1025号室。

そこでは少しの間、少女の泣き声が響いていた。

* * *

あれから一週間ほど過ぎたある日の放課後。恭介達リトルバスターズはIS訓練のため、アリーナにやって来ていた。近頃鈴音も参加し出したが、それ以外はいつもとあまり変わらない。

セシリアは最近だと、勉強（主に本格的な世界史か日本史）をしながらサッカーボールをリフティングしつつ、テキストを持っていない方の手で、テニスラケットでテニスボールをリフティングが出来るようになった。「もう淑女じゃなくなね？」マルチタスクと言いたくなるような状況だが、それでもなんだかんだで並列処理能力は鍛えられているのか、『ブルー・ティアーズ』を制御しながら動く事は出来るようになって来た。

箒に関しては射撃の雨をかくぐりながら接近戦を仕掛けられるようになった。

鈴音はまあ単純に模擬戦するだけなので、特には無いが、段々と強くなつて来ている。

そして一夏だが、

「えっと、織斑さんが恭介はともかく、オルコットさんや鳳さんふうあんに勝てないのは、主に射撃武器の特性を把握していないからだろっね」「んー……一応分かっているつもりだったんだけど……」

今日は土曜日。という訳で、今日はISに多少なりとも慣れて来た一夏を集中的に鍛えよう、ということで、まず最初にシャルルと一夏で模擬戦してもらっていた。

結果は当然ボロ負け。

「知識だけで実戦した事はない、って感じかな？ さっき僕と模擬戦したけど、ほとんど距離をつめられずに終わったよね？」

「うう……確かに、『瞬間加速』イクゼンシュウシュツも発動タイミングと軌道も予測さ

れてみたいだし……」

「織斑さんのISは近接オンリーだからね。だからこそ、射撃武装を主体としたISと戦う時には、より深く射撃武装の知識を知る事も大事だけど、『瞬時加速』自体の軌道は直線だからね。実際に対応するのはそんなに難しい事じゃないんだよ。軌道予測もしやすいから」

「直線的かあ……」

「あ、でも『瞬時加速』中は無理に軌道を変えようとか考えちゃダメだよ？ あんな速度の状態で無理に軌道を変えようとしたら、最悪の場合は骨折しちゃう事もあるみたいだし」

「……なるほど」

思わず想像したのか、青くなる一夏。

「それにしても、シャルル君の説明は分かりやすいなあ」

「そうかな？ 僕は普通に説明してるだけなんだけど……」

「いやいや、分かりやすいよ……」

言いながら一夏は遠い目をする。

今まで一夏は、箒達にIS講座を受けていたのだが、

『こうガキツとしてズバーンといった感じだ！』by箒

『なんとなく分かるでしょ？ 感覚よ感覚』by鈴音

『防御の時は右半身を斜め上前方に五度傾けて、回避の時は後方へ二〇度反転ですわ』byセシリア

と、行った感じだったのだ。本人的には分かりやすく言っているつもりなのだろうが、一夏には一ミリも理解出来ずにいた。

あれは俺でも分からん……と、恭介は思う。

ちらり、と箒達の方を見ると、

「ふん、まあ私のほどではないが分かりやすいな」

「あたしの方がもっと上手く出来るわ」

「分かりやすくはありますが、わたくしの理路整然とした説明の方がもっと分かりやすいですわ」

反省するどころか分かりにくさにもさっぱり気付いていなかった。

「だけど、織斑さんのISって『後付武装』^{イコソイザ}がないんだよね？」

「みたい。恭介は、零落白夜の仕様のただけに領域が消費されて使えないのかもしれない、って言ってたけど」

「そうだろうね。『単一仕様能力』^{ワンオフ・アベリティー}である零落白夜の為に全部遣われちゃってるんだと思う」

「わんおふ・あびりていー？ …… って、なんだっけ」

「言葉通りだ。単一仕様の特異能力、才能の事だよ」

恭介がそう説明してやると、なるほどー、と納得したような顔を
した。

「ん？」

なんだか突然周りが騒がしくなって来ていた。

「ねえ…… ちょっとアレ……」

「うそっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国のトライアル段階だ、って聞いてたけど……」

恭介達はそれを警戒しながら見た。

黒いカラーのISがそこにはいた。

装備しているのは ラウラ・ボーデヴィツヒだ。

「おい」

「えっと…… 私？」

「そうだ。貴様、専用機持ちだそうだな。私と戦え」

ラウラの一方的な物言いに、一夏はムッとして、

「やだよ。私に戦う理由なんて無いもん」

「貴様に無くても私にはある」

「また今度でいいでしょ」

「ふん。ならば…… 戦わざるを得ないようにしてやる！」

瞬間、ズドン！！ と、肩のレールガンが火を吹いた。

それを前に出て防ごうとするシャルロット。しかし、それを恭介
は手で制した。

ドオン！ と、放たれた弾丸が空中で何かに衝突し、爆散した。

「…… こんな密集空間で、いきなり大火力の砲撃を撃つとは……」

黒 ウサギは Ist der siede punkt an allen
沸点が chwarzen 低い Kaninchen niedring? I
俺の st ein Typ 知っている der Geburt お前と ahnlich
産まれの wer mit Ihnen, weil ich scho
ぞ ner?」

「ッ！ 貴様あつ！！」

ラウラは再びレールガンを撃とうとするが、

『その生徒！ 何をやっている！！ 学年とクラス、出席番号を
言え！！』

騒ぎを聞きつけたらしい先生が、スピーカー越しに怒鳴って来た。

「くっ……今日は引いてやろう」

ラウラはそう言い残し、ISを解除して去っていった。

……今日の訓練は、とりあえず終わり、という事にした。

* * *

夜。

恭介は今部屋におらず、シャルル一人だ。なんでも何か用がある
らしいが、今のシャルルにはあまりにも好都合だった。

シャルルは恭介がいつも使っている簡易メンテ用のPCを立ち上
げる。

「……ごめんね、恭介……」

申し訳なさそうに、泣きそうな顔でPCを操作し、ウイングゼロ
のデータを発見する。

シャルルはUSBをPCに差し込み、データのコピーにかかった。

カチリ、という音と共に、後頭部に硬い何かが当てられた。

「ッ……!?!」

『……シャルル・デュノアだな?』

その声はボイスチェンジャーでも使っているらしく、機会じみた声だった。それでも男っぽい声だから男か。いや、自分のような者もいるのだから実は女性という事もありえる。

ここまで来れば、シャルルでも後頭部に当てられているのが拳銃の類だと言ふ事は理解していた。

「は、はは……ドアも窓も鍵は閉まっていたはずなんだけど……」

『そんなものは俺には関係ない。残念ながらも。コピーを中断し両手を上げ、ゆっくりこちらを向け。余計な真似をしようとするな。すればお前は母親の元に行く事になるぞ』

「……ッ！ ど、どうして母さんの事を……！」

『早くしろ』

「くっ……」

シャルルはデータのコピーを中断し、USBを引き抜く。そして両手を上げてゆっくりと後ろを向く。

そこにいたのは仮面の男だった。

細く黄色い縁の取られたワイシャツに青緑のネクタイ。その上に赤く縁取った襟付きの黒い上着を着て、ズボンも黒。そして頭には学生帽をかぶっていた。

「だ……誰、なの……？」

思わずそう聞いていた。

男はただこちらに銃を向けたまま、

『ソレスタル・ビーイング第一部隊、『闇の執行部』部長、時風瞬』
ときかぜ しゅん

そう、一言だけ言った。

第8話「ウサギ隊長と時の風」(後書き)

今更だけど、これプロットも何も無いんだよね……。途中で行き詰まったらどうしよう……。

なんかいつつも二次創作だとプロット書かないなあ……。

ついでに……結構同じ言葉使ってる事多い。何とか直したい所だ……。

今度はドイツ語…あってるか分からないけど、違ってたなら教えてください。

あと、ルビ文字読みづらくてごめん。なぜかここまで分割しないと反応しなかった。パソコンのせいなのかやり方が間違っているのか……

第9話「背中のネコ園」（前書き）

背中のネコ園…なのはでも使っちゃってるけど大丈夫かな…

第9話「背中のネコ園」

時風とシャルロットが出会っている頃、学生寮のとある所では…。

「勝負だよっ！ セシリアー！」

「望む所ですわー！」

一夏がさすらっていた。

何故か女でした

第五位 織斑一夏

VS

エレガント（自称）なお嬢様

第四位 セシリア・オルコット

周囲の生徒達から様々な武器が投げられる！

「これだっ！」

一夏の武器……ボディーシャンプー 現在の最小・最大Hit数

1 - 1

「これですわっ！」

セシリアの武器……クリップ式小型扇風機 現在の最小・最大H

it数 1 - 2

BATTLE START!!

セシリアの攻撃！

「行きますわー！！ えいつ！」

セシリアはクリップ式小型扇風機を一夏の顔に挟んだ！

合計一個のクリップ式小型扇風機を挟んでいる！

一夏に五〇のダメージ！

「行くよ！」

一夏はボディースャンプーで全身を泡立てている！

セシリアに五三のダメージ！

「行きますわ！！！」

セシリアは一夏の顔にクリップ式扇風機を挟んだ！

合計二つのクリップ型扇風機を挟んでいる！

一夏に六二のダメージ！ 一夏に五四のダメージ！

「こうだ！」

一夏はボディースャンプーを泡立てている！

「行きますわ！」

セシリアは攻撃しようとして泡で滑った！

セシリアに一一二のダメージ！

「行くよ！」

一夏はボディースャンプーで全身を泡立てている！

セシリアに五七のダメージ！

「なるほど、こうやるんだね」

一夏は『泡立てる』のコツを覚えた！

1 - 1 1 - 2

クリップ型小型扇風機が全て落ちた。

「行きますわ！」

セシリアは攻撃しようとして泡で滑った！

セシリアに六一のダメージ！ セシリアに五二のダメージ！

「それっ！」

一夏はボディースャンプーで全身を泡立てている！

「私の番ですわね！」

セシリアはクリップ型小型扇風機を一夏の顔に挟んだ！

合計一個のクリップ型扇風機を挟んでいる！

一夏に四九のダメージ！

「使い込むと可愛くなって来ますわね……」

セシリアは『挟む』のコツを掴んだ！

1 - 2 1 - 3

「行くよ！」

一夏はボディーシャンプーで全身を泡立てている！

セシリアに五三のダメージ！

「行きますわよ！」

セシリアは攻撃しようとして泡で滑った！

セシリアに六四のダメージ！ セシリアに七〇のダメージ！

「それっ！」

一夏はボディーシャンプーで全身を泡立てている！

セシリアに

「行きますわ！」

セシリアは攻撃しようとして泡で滑った！

クリティカル！

セシリアに一〇七のダメージ！ セシリアに一〇一のダメージ！

「きゃあああああああッ！！！」

セシリアは倒れた！！

「やった！ 私の勝ち！！！」

セシリアは『金ドリルの化身』の称号を得た！

「く、屈辱ですわあ！！！」

ランキング表

第一位 織斑千冬

称号：バトルランキング

暫定王者

第二位 篠ノ乃箒

称号：剣道娘筆頭

第三位 織斑一夏

称号：何故か女でした

第四位 セシリア・オルコット

称号：金ドリルの化身

第五位 凰鈴音

称号：返って来た負け犬娘

第六位 棗恭介

称号：あらゆる日常をミ

ッションにするリーダー

＊ ＊ ＊

『ソレスタル・ビーイング第一部隊、『闇の執行部』部長、時風瞬^{ときかせ しゅん}』
「や、『闇の執行部』……それに、時風^{ときかせ}って……！」

シャルロットの記憶にソレスタル・ビーイングなる組織は知らない。が、デュノア社の関係で、『闇の執行部』とその部長、時風瞬の存在を知る事は必然であつたとも言える。

公にはされていない『闇の執行部』。

しかしその存在はほとんどの大手会社が知っていると云っても過言ではない。

彼らはその名の通り闇よりの執行者。

重い犯罪、特にIS関係の物に対し、直々に裁断を下しにかかる謎の組織。時として誰かの護衛をやっていたり、時としてどこその警備員をしている など、裏世界では噂は絶えない。しかも、『コアが作れる』、『大量のISを保有している』、『男の操縦者が何人もいる』などの噂があるにも関わらず、その存在はIS保有数や動きなどを監視する、国際IS委員会ですら黙認しているという噂すらある。

そして。そんな『闇の執行部』の部長^{リーダー}であるのが時風瞬と名乗る仮面の男。

常に仮面と学帽、そして制服姿で現れる謎に包まれた男であり、その正体は誰も見た事が無いとか。

そんな男が目の前にいる。

が、シャルロットは最後の足掻きとばかりに言葉を発した。

「き……君が時風瞬だ、っていう証拠はあるのかな……？」

『証拠？』

が、時風は何の動揺も見せずに鼻で笑ってみせさえた。

『俺達の噂の中にこんな物があるだろう。奴らは影の兵士を使うと。これが証拠にならないか？』

瞬間、時風の足下から二つの何かが出て来た。

それは 人間。しかも顔も手も何もかもが真つ黒なまさに『影』の人間。唯一色があるのは、着ている時風と同じ制服だけ。完全に現れた二つの『影』は、シャルロットに銃を向ける。

腰が抜けそうになった。

「なっ……なっ……」

『これが証拠だ。理解したか？』

「ど……どうなっ……」

『ISなんて、^{メカニカル}科学的な兵器すら存在するほど技術が進歩した時代だと、^{オカルト}神秘が役に立つ事もある そう言う事だ』

神秘だつて？ 何をバカな 、などと言う気も起きなかった。

「……それで……なんで僕の所なんかに着みたい人が……」

『それは自分が一番よく分かっているはずだ、シャルル・デュノア。いや シャルロット・デュノア』

「……」

何故それを……！

『何故、とでも言いたげだな。答えは簡単だ。「闇の執行部」の諜報能力を甘く見るな。お前がここに何故いるかも分かっているぞ。父親の命令で、棗恭介のウイングガンダムゼロ・パーフェクトカスタム、あわよくば織斑一夏の白式のデータを取ってこいと言われたのだろう？』

「そ……そこまで……」

『同じ事を二度も言わせるな。第一、たかが一組織がこの程度の諜報能力を持たずに国際IS委員会に黙認などされる訳が無いだろう』

それは……そうなのかもしれない。

『もっと詳しく説明してやろうか？ お前は父親の愛人の子だ』

「やっぱりそれも……」

『二年前、母親が亡くなるまでは父と別に暮らし、その後デュノアの家に引き取られる。その際様々な検査をする過程でIS適正が高い事が判明し、非公式のテストパイロットをする事になる』

「……………」

『父親に会つのも会話するのも数回程度。本邸に呼ばれば本妻に罵倒を浴びせられる　　などなど、家庭事情は良いか悪いかと言えは悪いな』

「僕にしてみたら最悪だけどね……………」

時風は更に続ける。

『それからしばらくすると、デュノア社は経営危機に陥る。ラファール・リヴァイブがどれだけ優れていると所詮は第二世代。『イグニッション・プラン』から除名されているフランスにとって、第三世代の開発は急務だ』

『イグニッション・プラン』とは、欧州連合の統合防衛計画だ。今では第三次『イグニッション・プラン』の次期主力機の選定中。

しかし『イグニッション・プラン』からフランスは除名されている。故に自国の防衛は自国でしなければならない。だからこそ、フランスには第三世代の開発を急ぐ必要があるのだ。

そんな中デュノア社は第三世代の開発に難航している。そのせいで国からの予算は大幅にカットされ、次にトライアルに選ばれなかった場合は援助を全面にカット。その上ISSの開発許可すらも剥奪されてしまう。

量産機のシェアが世界第三位という、今の所安泰なデュノア社も、これからの事を考えると会社の存亡に関わる危機だという事だ。

『そのため、さっきも言ったがお前は棗恭介のウイングゼロ、チャンスがあれば織斑一夏の白式のデータを奪いに来させられた。男装しているのは　　どうせ広告塔として扱われただけだろう』

「そう……………だね。その通りだよ。さすがは『闇の執行部』、と言った所かな」

シャルロットは自嘲的な笑みを浮かべる。

『さて。バレたからには本国に呼び戻される。デュノア社はつぶれ、他企業の傘下となる　　か。まあ、お前には関係のない事だな』

今ここで死ぬお前には。

「……え？」

『そのためにここに来た……という予想くらいは立てられそうな物だがな？ まさかそこまで頭が回らなくなっているのか？』

「……ここで銃なんか撃つたら」

『安心しろ。今この部屋は俺の部下が特殊な装置を使い、空間ごと隔離している。つまり……俺がここでRPGをぶつ放そうが、お前が大声を上げようが誰にも聞こえないし助けになど来ない。お前のリーダーですら、な』

「……あ」

脳裏に浮かぶ恭介の顔。

彼が来れない。

それだけで胸が締め付けられるような痛みと、どうしようもない不安がこみ上げてくる。

しかし……シャルロットの頭には、既に諦めで埋め尽くされようとしていた。

「……そっか……。じゃあ……仕様がなかもね。君達に目を付けられるような事をしてたんだから……」

『……つまらない女だ』

「え？」

仮面の中の表情は読み取れない。が、声だけはボイスチェンジャー越しでも、何か呆れたような雰囲気があった。

『見た所好きでやっている訳でもなさそうだ。父親の言う事に対し何の抵抗もせず従いに来たという訳だな。本妻の不当な扱いにすら何の抵抗もしなかったそうじゃないか。本当につまらない女だ。そんなものは人間でもなんでもなく、ただの人形だ。生きながら死んでいる 矛盾した存在だ』

「……っ」

『楽なのか楽だろうな、そうしていれば。少なくともただ抗うよりは楽だ。周りの流れに身を任せ、ただただ流されていく。それはそれは楽だろう。限りなくつまらなくはあるがな』

の仲間になれ。今以上にスパイ三昧だろうが、少なくとも人形ではなくなる。仕事は選べるからな」

銃口を顎にさらに押しつけ、

「ここで死ぬか。生きるか。どうする。選ぶ勇気の無いビビリではないというのなら選んでみせろ……ッ！」

そして時風は黙った。

数秒、数十秒、もしかしたら数分かもしれないとも思えるような数瞬が過ぎる。

そして……シャルロットの口が開く。

「……たい……」

「聞こえないな」

「……生きたい……ッ！」

涙をぼろぼろと流し、シャルロットは答える。

「僕は……まだ言っていない……恭介に……こんな僕を友達って呼んでくれてありがとう、って……言っていないんだ……ッ！ だから……まだ……死にたくないよお……」

「……なら、俺達の仲間になるか？」

「…………」

「どうした？」

「……ならない。君達の仲間になんか……なるもんか……」

「………そうか。なら」

時風はシャルロットの胸ぐらを離し、銃口を向ける。

「……っ……」

そして トリガーを引いた。

思わず目を閉じる。

ポンッ！ という銃声とは地球と木星ほど離れた音が鳴った。

「………は？」

「ふう………ったく、このキャラ疲れるぜ……。なんで時風のキャラ

こんな感じにしたんだ？ 俺。あ、スクレボ読んだからだった……」
さっきまでと全く違う喋り方に、驚いていいのかツツコミを入れれば良いのか黙っていれば良いのか分からなくなるシャルロット。そんな彼女に気付いているのかいないのか、時風は好き勝手に続ける。

『おい朱鷺戸。いつまで隠れてる、とつとと出てこい！』

「あら、やつと出番かしら？」

「うわぁッ！！？」

突如シャルロットの隣から女性が現れた。

その女性は……一言で言うなら美少女だ。シャルロットと同じような金の長髪を白いリボンでツインテールにして、真ん中だけ余らせた髪を黒いリボンで纏めている。服装は……時風が来ている制服の女性版だろうか。同じく細い黄色の線の入ったワイシャツとピンク色のリボン。赤で縁取られた襟のブレザーと、チエックのスカート。

座り込んでいるからこそ見えるのだが、彼女が翻したスカートの中には銃のホルスターといくつかのマガジンが入っている。

「さて……まあ、入る入らない以前に、あなたには『ソレスタル・ビーイング』に入ってもらおうわ」

と、自己紹介も無く女性はそんな事を言った。

「ちよっ、僕は……！」

「安心しなさい。別に『闇の執行部』に入れて言ってるんじゃないわ。私が入れて言ってるのは、リトルバスターズ裏執行組織、ソレスタル・ビーイングよ」

「……………」

「……は？」

理解不能だった。

なんて言った今この女。

「ほら、さっさと仮面取りなさいよ時風 じゃなかった。恭介」

「は？ 恭介」

気がつけば窓に宇宙が見えていた。

「……は？」

「よし。ついたな」

「え？　ちょ、こ、ここどこ！？」

「その話も纏めてする。とりあえず付いてこい」

「ええ！？　も、もう！！」

相変わらずというかなんというか、とにかく一方的な恭介に、とにかく付いていくしか無いシャルロット。

ここがどこなのかさっぱり皆目検討が付かないが、見た所どころの施設……のようだった。

通路の壁は灰色の、なんだかハイテクそうな感じがする鉄の壁。と言っても何だか鉄っぽくない、とも言えそうなものだった。

取り付けられている大きな窓には宇宙が広がっている。そこには当然、あの青き地球も映っている。

「ん？　恭介じゃないか。その娘が例の新入りか？」
むすめ

と、話しかけて来たのは、ラウラとはまた違った銀髪をオールバックにし、胴着に袴な男性だった。年齢はおそらく恭介と同じくらい。腰には何故か竹刀がさされている。

それだけならまだ良いのだが、何故かその上に赤と青のカラーをしたジャンパーを着ている。

「そうだ謙吾。シャルロットという。俺のクラスメート兼ルームメイトだ」

「なるほど。ふむ……」

すると謙吾と呼ばれた男性は、シャルロットをまじまじと見つめ始めた。

「あ、あの……何か？」

「いい目をしている」

「は？」

「復活したて……と言った所か。恭介に喝を入れられたようだな。まだ今の理樹には少しばかり遠いが、近い目をしている」

「は、はあ……（理樹って誰？）」

「まあ、ソレスタル・ビーイングに入ったのならこれから何度も会うだろう。よろしく頼む」

「は、はい……こちらこそ」

握手を求められたので、反射的に握手する。

いや、別に入った訳じゃないんだけど……と思いつつも、今は黙っておく事にした。

そのまま謙吾はどこかに去って行く。

「ここだ」

と、恭介はドアを開ける。……と言っても、自動ドアのようで、勝手に開いたのだが。

それに続くようにシャルロットは部屋に入　ろうとしたら、突

然風が吹いたかと思うと誰かに胸を揉まれ始めた。

「ひ、ひゃああっ！？」

「ふむ。私ほどではないがそこそこあるようだな。C……？　いや、Dか？」

「ちよ、ちよつと……んっ……！　だ、誰ですかあ！？」

「来ヶ谷唯湖という。よろしく頼む。そしてこのまま揉ませてくれしばらく」

「ちよっ……やめっ……ひあっ！？」

「何してんじやボケエー……っ！？」

「ドリフっ！？」

ドカツ！　という音と共に、唯湖は吹き飛ばされた。……かに見えたが、ゆるやかに着地していた。

誰がやったのかと思い見てみると、そこにいたのは数年ぶりの友人だった。

「り、鈴！？」

「ん？　なんだシャルか。大丈夫だったか？」

「うん、なんとか……」

「全く。突然人の側頭部にハイキックとは酷いじゃないか鈴君」

「くるがやがせ、せ、せくはら？　をしてるからじゃボケっ」

「セクハラは地位的な差などを利用して部下等に性的嫌がらせなどをしたり強要したりすることだ。私と彼女には地位的な差も権力的な差もない。故に今のはセクハラではなくただの触れ合いだ」

「そうなのか？」

「信じるの！？」

「おいシャル。何してるんだ？」

と、恭介が部屋から出てくる。

「来ヶ谷……なるほど。大方の事情は把握した」

「さすがだな恭介氏。私を見ただけで状況を把握するとは。だがいささかム力つくぞ」

「日頃の行いを思い返してみる。分かってても仕様がないだろ」

「ふむ……正論ではある」

どうやらこのようなやり取りが日常茶飯事らしかった。

* * *

「つと、こういう事だ。分かったか？」

「う、うん……何とかね」

シャルロットは恭介から、ことの次第を聞かされていた。

ソレスタル・ビーイングとは、恭介が作った秘密組織だそうだ。

創設理由としてはかつて出会った事件がきっかけらしいが、そのあたりははぐらかされた。

そしてここは『リトルバス　ターズ？背中のネコ園』と呼ばれる、ソレスタル・ビーイングの宇宙にある秘密基地らしい。

シャルロットに関しては、どうやらさっきいた女性、しやうり朱鷺戸沙耶率いる諜報部隊がシャルロットの事を嗅ぎ付け、いろいろと調べていたそうだ。

恭介としてはリトルバスターズがメンバーがそのような事態になっているのは見過ごせなかった。と、言う訳でソレスタル・ビーイングの第二世代、IS的には第三世代のデータを渡す代わりにシャルロットをソレスタル・ビーイングに引き取ったという訳だ。

あの茶番劇は、謙吾が言っていたように喝を入れるため。ちゃんと自分の足で立って、ちゃんと自分で未知を選んで歩けるように再びするために、だそうだ。

なんとか……びっくりした。

「まあ、その……なんだ。そのためとは言え、さっきも言ったが大分酷い事を言った。すまん」

「良いよ恭介。本当の事だったんだし……それに」
「それに？」

「こうして私は思惑通りになったんだから、結果オーライでしょ？」
皮肉を混めたつもりはない。

それを察したらしい恭介は、いつものように笑った。

「そうか……ありがとう」

「こちらこそ、ね」

二人して手を差し出しあい、握手をする。

と、さっきから傍観していた唯湖が口を開く。

「そうと決まれば、とりあえず専用機を渡さなくてはならないのではないか？ 彼女に適正が出た機体はもう仕上がっているのだろう？」

「まあ……な」

それを聞いた恭介は、少し暗い顔をする。

「？ どうしたの？」

「……シャル。俺はお前を助けるためとは言え、危険な世界に巻き込んでしまった。それこそ命をかけるような……」

「恭介……」

ソレスタル・ビーイングがどんな組織かはまだ分からない。が、彼がこんな顔で冗談を言う時はほとんどない。一年ほどフランスで

遊んでいて、なんとなく芝居か芝居でないかも分かるようになって来たシャルロットは、おそらく本当に危険な世界にいることを察した。

それも、戦争並みに。

しかしシャルロットは笑顔で返す。

「良いんだよ、恭介。時風の時にはああ言っただけど……でも、そういう事なら僕は迷わない。うん……僕は、自分の意志でソレスタル・ビーイングに入るよ。それに、案外ほっとけないしね、恭介って」

「……ありがとう」

「……さて、格納庫へ行こうか。君の専用機を出すよう今連絡した」

* * *

格納庫へと向かいながら、シャルロットは唯湖と恭介から、敵や適正についての話を聞いていた。

敵については……もう少し時が経ってから、ということでも、かつて起きた『198号IS襲撃事件』という、旅客機を襲い撃墜したという事件を起こした犯人である　という事だけを聞いた。

適正というのは、『純粹種のイノベーター』としての適正、及びその上でどの機体に合っているかの適正のようだ。イノベーターというのがイマイチよく分からないが、簡単に言えば人が進化して寿命とかが長くなった人間、らしい。まだ他にもありそうではあるが、そうした説明を終えると同時、格納庫についた。

そこには、『深緑』がいた。

「名称　『ガンダムケルデイル・サバーニャ』。超射撃特化の機体で、全身にGNミサイルポッドと無駄にビットをつけた機体だ。まあ、詳細データはこれを見てくれ」

シャルロットは　今日からガンダムマイスターとなった。

第9話「背中のネコ園」（後書き）

どうしよう……グダグダになってないかな？

ガンダムケルデム・サバーニヤ（前書き）

なんか……子供が考えた過剰装備な機体っぽくなってる気が……。

ガンダムケルディム・サバーニャ

『ガンダムケルディム・サバーニャ』

搭乗者

・シャルロット・デユノア

武装

- ・GNホルスタービット×28機
- ・GNライフルビット?×10機
- ・GNライフルビット?×4機
- ・GNシールドビット?×12機
- ・GNミサイルポッド×数百発

特殊機能

- ・ツインドライブシステム
- ・マルチロクオンシステム
- ・ケルディム・サバーニャ専用サポートAI『ハロ』×3

特殊技能

- ・TRANS-AMシステム

特殊導力

- ・GNドライブ（オリジナル）

ワンオフ・アビリティ
単一仕様能力

- ・弾丸量子化

詳細

無駄にビットを積み込んだ機体。

ホルスタービットは腰に二枚重ねでアームに装備されており、二〇機。肩に四機ずつで八機。計二八機装備されている。

ライフルビット？は腰のホルスタービットの、二枚重ねの内一枚にだけ一機ずつ搭載されている。計一〇機。

ライフルビット？は、後ろ肩に二機ずつ。計四機。

シールドビットは、手足に三つずつで、計一二機。

全ビット数五四機というあほらしい数。三つ搭載されたハ口は、ほぼこのビットの制御のために積まれた。

ライフルビット？は格納されたセンサーとグリップを展開する事で、手持ちか気としても使用可能。その際、遠距離射撃用のスナイプモードと、近距離格闘射撃用のトンファーマードがある。トンファーマードの時は、スナイプモードの銃身が途中から畳まれ、トンファーマードになる。畳まれた方の切れ目に小型ナイフがあり、スナイプモードの銃身の上方から刃が飛び出す（それぞれ粒子強化済）。

マルチロック等は映画版と同じ。

単一仕様能力の『弾丸量子化』はその名の通り弾丸を量子化する。と言っても、手持ちの弾丸の事で、簡単に言えば身体中にあるミサイルポッドの中身が切れたら、オートで装填される……という事だ。正直、単一仕様能力にする必要は無いが、長期の戦闘も考慮して、とりあえずこうしておいたようだ。

ちなみに、ケルデイル・サバーニャはシャルロットのラファール・リヴァイブ・カスタム？に上書きされているため、待機状態は十字

マークのついたオレンジ色のネックレス・トップ。
ラファールの方を使う事も可能。

第10話「初起動とキレる我らがリーダー」(前書き)

他のと比べるとちょっと短め。ついでに展開が早い……かも。

第10話「初起動とキレル我らがリーダー」

リトルバスターズ？

背中のネコ園にある訓練場は、IS学園にあるアリーナと同等の大きさを有している。更に、背中のネコ園を囲む五重のバリアによって宇宙とは遮断されているので、訓練場は基本的に屋根が開いており、宇宙を垣間みながらの訓練が可能となる。

ちなみに、五重のバリアはウイングゼロがフルパワーで『ツインバスターライフル』を撃つても破る事は不可能である。

さて、そんな場所であるこの訓練場では現在、シャルロットの機体となったガンダムケルデйм・サバーニヤの初起動テストが行われている。

フルスキン

全身装甲のケルデйм・サバーニヤの前方には、数百のターゲットとなる丸いガジェットが浮いている。

「よし……ハロ！ ビット全機展開！」

【リョウカイ、リョウカイ！】

ハロがそう返事すると、様々な部位に装備されたビット達が展開される。その内二機の『ライフルビット？』がシャルロットの手元に近づき、格納されたセンサーとグリップが展開する。それをシャルロットは掴む。

『うん、ちゃんと動いてるね。じゃあ、目の前にあるガジェットをマルチロックでロックオンして、乱れ撃ちしてくれるかな？ 動かないでね』

と、言うのは開発副主任であるらしいビリー・カタギリ。男性としては珍しく（？）長く伸ばした髪の毛をポニーテールにしている。『あ、ガジェットはそこそこ速く動くから。じゃ、頑張つて』

「はい！」

シャルロットは『ライフルビット？・スナイプモード』をまだ動いていないガジェットへ向ける。

『じゃあ、スタート！』

カタギリが言うと、目の前にいたガジェット達が一斉に動き出した。

三六〇度を動き回るガジェット達は、なるほどそれなりの速度である。おそらく打鉄^{うちがね}くらいの速度だろうか。特に何かしてくる訳ではないが、単純な機動をしている訳ではないので、多少狙い辛いかもしれない。

シャルロットはマルチロックオンシステムを起動させ、それら全てをロックオンする。シュピンシュピン、と一気に全てのガジェットがロックされていく。

マルチロックオンはともかく、この速度はその辺のISには無理そうだ。

そして最後に一機もロックオンが完了する。

「よし……ケルデйм・サバーニヤ、乱れ撃つッ！」

瞬間、ケルデйм・サバーニヤは五四の砲を一斉射した。

ズドドドドドドドドドオオー……！　と、全てが命中しガジェットが爆散する。しかしシャルロットは射撃の手を止めずに次々に撃墜する。シャルロットが銃口を向けたガジェットにはビット達は意にも介さず、別の機体へと五二の銃口を向け、撃墜する。数百のガジェットが全滅したのは、一分にも満たず、たった数十秒だった。

『うん、まあ及第点かな』

「あの程度ならもつと早く全滅させられる　ってことですよね」

『まあね。でもその辺は経験と慣れが必要になっていくから、今はこのくらいで十分だと思うよ。それにまだこれだけの敵と戦う事なんて無いだろうし。とりあえず今日はこのくらいで良いかな。じゃあ、ケルデйм・サバーニヤを解除して。IS学園の寮に送るよ。』

あ、恭介君はもういるから』

「はい、分かりました」

言ってケルデйм・サバーニヤを解除し、訓練場の地面に着地する。

『あ、そういえば気になってたんだけど』

「？　なんですか？」

『君も恭介君が好きなのかい？』

「ぶっ！？　ゲボゴホー！！　な、何言ってるんですか！？」

『ははは、ごめんごめん。でも背中（うしろ）のネコ園にも何人か好きだ、っていう人がいるからね。好きなんだったら頑張ってアプローチするか、結託してハーレム化させるとかした方が良いよ。誰かに取られる前にね。ちなみに、後者を選んだ娘たちが前にもいるんだ。相手は別の人だったけどね』

はっはっは、とカタギリは笑いつつ、転移システムを起動させる。すると、シャルロットの足下に魔法陣らしき文様が光り出す。

『じゃあ、また今度用があつたら呼ぶよ。あ、学年別トーナメントで使ってくれると嬉しいな。戦闘時のデータが取れるからね。じゃ』
カタギリがそう言い終えると、シャルロットの視界は光に包まれた。

シャルロットは帰ってくると、すぐにベッドへ倒れ込んだ。隣では恭介がお茶を飲みながら、お疲れ、と言ってくれる。それだけでなく心が暖かくなる。

……シャルロットは、恭介が好きか嫌いか、で聞かれれば確実に好きだと答えるだろう。それも恋愛的な意味で。

だが、今はまだ勇気が貯まっていない。

でも近いうちに言えるようになる気がする。

そんな気がしている。

* * *

翌日。恭介とシャルルは、同室になってから日常となった一緒に登校時、自分たちの教室から何やら女生徒たちのいつも通りの騒が

しい声が聞こえて来た。

「本当だってば！ この噂、学園中で持ち切りなのよ！？ 月末の学年別トーナメントで優勝したら棗君と交際でき」

「俺がどうかしたか？」

「きやあああああああああつ！？」

「うおっ……」

突然悲鳴を上げる女生徒に、思わず驚く。当の女生徒はそそくさと自分の席の方へと走っていった。

「……で、何の話だったんだ？ 俺の名前が拳がってたけど」

「う、うん？ そうだっけ？ き、気のせいじゃない？」

「さ、さあ？ どうだったかしら。き、気のせいじゃありませんの？」

何故かやけに慌てふためき、作り笑いを浮かべて誤魔化す。当然さっぱり気のせいではない事は分かっているが、知られたくないなら特別聞く理由も無いので「なら良いけど」と、返しておく。

「じゃ、じゃあ、あたし自分のクラスにもどるからっ！」

「そ、そうですね！ わたくしも自分の席につきませんとっ！」

若干安心した感を垣間見せながらよそよそしくその場を離れていた。それじ便乗して、集まっていた数人の女生徒たちも自分たちのクラスや席に戻っていく。

「……なんだったんだろうな」

「さ、さあ……」

いつも通り何事も無く放課後。

シャルルと恭介は第三アリーナへと向かっていた。

「ごめんね、付き合ってもらっちゃって」

「気にするな。今のうちに機体に慣れておくのは大事なんだし」

実は、シャルルが恭介にケルディム・サバーニャに慣れるために模擬戦をして欲しい、と頼んで来たのだ。恭介としても断る理由は

無く、二つ返事で了承した。
すると後ろから、

「第三アリーナで代表候補生四人が模擬戦やつてゐるって！」

と、数人の女生徒たちが恭介たちを乗り越しながらそんな事を言

「何……？」

「代表候補生四人……って、織斑さんたちかな？ でももう一人って……」

「とにかく行くぞ。もしかすると……」

「……！　そうか……、急ごう！　恭介！」

「ああ！」

二人はすぐ様その女生徒たちの後を追ひ、第三アリーナへと向かう。

*
*
*

二人が第三アリーナへとたどり着く。瞬間、ドゴオンッ！！と、セシリアと鈴音が地面に叩き付けられていた。

「！！ 凰さん！ オルコットさん！！」

「ふは、ふははははつははははッ！！ どうしたあ、その程度かッ！　織斑一夏アツ！！」

「!.....」

ラウラは一夏の右腕に『ワイヤーブレード』を絡ませて引き寄せ、『プラズマ手刀』で身を丸ませて防御に回る一夏を殴りつけまくる。サイコフレームを使用した装甲はプラズマ手刀とは言え、殴られただけではそう簡単に攻撃を通しはしないが、あそこまで蛸殴りにされてしまえば、限界くらいは来る。

すると、絡ませた『ワイヤーブレード』を解いて蹴り跳ばし、体勢を崩した一夏に向けて『大口径レールガン』を撃ち込む。

ドッガアアアン！！ と、白式が吹き飛ばされる。

「……行くぞ三人とも。一応保健室に行っておいた方が良い」

「そうだよ。そんなにボロボロなんだから」

が、恭介もシャルルも意にも介さずに一夏たちをISの腕で抱え上げる。

「私は無視するとは……良い度胸だなッ!!」

ラウラは言って全速で恭介に突撃し、プラスマ手刀を思いきり振り下ろす。

それを恭介は一瞥し、正面から受け止めた。

「なっ……!?!」

「……やめとけ。今の俺はギリギリ感情があふれるのを抑えてるだけだ。そっちに集中し過ぎてて手加減は出来ない」

思わず殺しちまっても知らないぞ……?」

ゾクリ、と背筋が凍った。

思わずラウラは飛び退く。

(恭介……本気でキレてる……)

と、一夏は恭介を見ながら内心で呟く。

瞳孔が開きかけている恭介からは、一夏たちにも感じられるほどの殺気が漏れていた。周りにいる鈴音たちですら冷や汗をかいている。

「……行くぞ、四人とも」

ラウラは恭介が立ち去りしばらく経つまで、動く事が出来なかった。

第11話「2nd BATTLE START!」

恭介たちは、一夏たちを担ぎ、アリーナから急いで保健室へ向かった。

そしてなんだかんだで一時間が経過していた。怪我事態はそれほど大したものではなかったが、保健室で治療を受け、しばらく休む事になった。何故かセシリアと鈴音はムスツとしていたが。

「でも三人とも大した怪我じゃなくてよかったよ」

シャルルが安堵の息をつく。前述した通り大けがは全くしておらず、精々打撲や痣程度で済んでいた。

「別に助けてくれなくても良かったのに……」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「バカ。そうしたらもつと大けがだったかもしれないだろうが」

「そ、そんな事無いわよ!」

「そうですわ!」

「じゃあ何であんなにボコられてたんだ? しかもボーデヴィツヒは無傷だったじゃないか」

「……」

「それに、一夏を殺されかけてたんだ。お前らがあの後勝てたかどうかよりも、そっちの方が重要だろ」

「そ、それを言われると……」

「何も言えせんわね……」

気まずそうに一夏をちらりと見ながら縮こまる二人。鈴音の隣で寝ている一夏は、安らかに眠っている。大怪我したとかではなく、一瞬感じた死の恐怖から解放された安心感から思わず眠ってしまったようだ。

今更ながらに、もし間に合っていなかったら　と考えると、少し身震いがした。

「はぁ……もう、小学校の時からアンタには守られてばかりだわ。」

たまにはギャフンと言わせてやりたいのに……」

「わたくしはそこまでしてもらった事はございませんが……その意見には同意ですわ」

「はっはっは、そんな日が来るのを楽しみにしてるぜ」

（（どうしよう……全然来ない気がする……））

すると、恭介は少し残念そうな顔をした。

「しかし……ISのダメージレベルがCを超えてたし、一夏含めお前らトーナメント参加は出来ないな」

「「え」「」」

汗をダラダラとかく二人。どうやらISのダメージレベルの事をすっかり忘れ去っていたようだ。

ISは戦闘経験を含む全ての経験を蓄積する事で、より進化した状態へと自らを移行させる。その蓄積経験には損傷時の稼働も含まれ、ISのダメージレベルがCを超えた状態で稼働させると、その不完全な状態での特殊なエネルギーバイパスを構築してしまう。それらは逆に平時での稼働に悪影響を及ぼす事があるのだ。

恭介は、やれやれ、と苦笑を浮かべる。

「まあ、今回は残念だが、まだ来年があるんだ。一年待ってろ、案外早く来るぞ。一年なんてのはな」

二人は肩を落としながら静かに頷く。

すると、突如ドドドドドドド……！ と、地鳴りのような音が響き始めた。

「な、何？」

シャルルが保健室のドアに目を向けた瞬間。

ドンガラガツシャーン！！ と、保健室のドアが吹き飛び、室内の机やらガラスやらにぶち当たる。シャルルは恭介に抱き寄せられたため、避ける事が出来た。

「あ……きよ、恭介、ありが」

『棗君（デュノア君）！』

「どうしたんだ？ そんなに慌てて」

すると、雪崩れ込んで来た女生徒たちは、一斉に何かを出して来た。

そこには……。

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとす。締め切りは

』」

「ああそこまででいいから！ とにかくっ！！」

『私と組もう！ 棗君（デュノア君）っ！！』
なるほど……と、恭介は思った。

おそらく前回のゴーレム？の件のせいだろう、と恭介は結論づける。あれだけの事があれば警戒して当然。あの時はたまたまどちらも専用機持ちだったが、今回もそうとは限らない。第一参加人数が圧倒的に違う。

ならば一試合ごとの人数を増やそう　そういうことなのだろう。どうせ千冬か楯無辺りがやったのだろうが、まさかここまで盛り上がるうとは。

が、恭介としては困んでいる女生徒の誰とも組む気はない。

「みんな悪い。俺はシャルルと組む事になっているんだ」

「ふえ！？ あ、えつと、うん！　そ、そうなんだ！」

しいん……と、いきなり全員沈黙する。

「まあ……そういうことなら」

「他の女子と組まれるよりは良いし……」

「男同士つてのも絵になるし……ごほんごほん」

と、各々何やら呟きつつ保健室を後にしていく。

「くうっ……ダメージレベルさえ……ダメージレベルさえCを超えてなければあっ……！」

「何故あのときボーデヴィツヒさんのケンカを買ってしまったの！？　あのときそんな事さえしなければ……！」

何やら横で悔しがっているが、恭介はあえて無視する。

「じゃあ、俺達はそろそろ部屋に戻るぜ。安静にして明日の俺達の応援に備えてくれ」

「はあ……分かったわよ。ただし、負けたら承知しないからね!」
「分かってるさ。じゃあな」

恭介とシャルルは揃って保健室を後にした。

「……なんか、最近アイツら仲いいわね。ム力つくけど恋人みたい
に。元々知り合いだったみたいだけ……」

「はっ……まさか恭介さんがそっちの趣味に!？」

「そ、そんなことあるわけ いや、待ってよ……そういえば理樹
との関係もどうたらこうたら言われてたし……ま、まさか……」

……一瞬、想像した。

「「いやあああああああああああ——————
——ッ!?!?」」

恭介とシャルル、二人は部屋に入ると、二人してそれぞれのベッ
ドに腰掛ける。

「恭介」

「ん? どうした」

「ありがとね。僕と組んでくれて」

「なに、別にそんな事で礼を言う必要は無いさ。他の女子と組んで
バレたりしたらヤバいからな」

「それでもだよ。ありがとう」

にこり、とシャルロットは可憐に笑う。

それに対して恭介は、ああ、と一言返すだけ。

「そういえば、今回のトーナメントではケルディム・サバーニヤを
使うのか？」

「うん。カタギリさんも、戦闘データとかが欲しい、って言ってた

から丁度いいしね」

「なんていうか……シャルに乱れ撃たれたら俺の出番が無くなるな」
「あはは……まあでも、全ビット展開で行く気はないよ。精々ライフルビット？と？のスナイプモードで行くくらいかな」

「それでも十分強いさ。ガンダムはな」

ガンダムはただのISではなく、ソレスタル・ビーイングの技術を総結集して造り出した最強格のISだ。ウイングゼロを始め、数体いるガンダムはそれほど搭乗者が強くなくとも、常人の乗るIS程度なら性能でカバーしてくれるため、圧勝出来る、と言えるほどの性能をガンダムたちは持っている。

そもそもコアからして違っただが……その辺りの話はまた今度とする。

「さて……そろそろ寝よつか」

「ああ」

言っただけ二人は布団の中に潜り込む。夕飯もシャワーも歯磨きも、とつくに済んでいる。

しばらくして、二人の意識は深い眠りへと落ちていく。

もうすぐ……トーナメントである。

* * *

六月の最終週。すなわち学年別トーナメントの開催である。学園内は活気に溢れ、ドキドキ、わくわく、と言った感じだ。

そんな中恭介とシャルルは男子更衣室にいた。二人は室内にあるモニターを見つめ、トーナメント表の発表を心待ちにしているのだ。

まあ、ラウラがその辺の誰かに負けるとはそうそう思えない。確実に上り詰め、自分たちと当たるであろう事は、二人とも理解していた。が、さほど緊張している訳でもない。それは自分たちの駆る機体が優秀であり信頼出来る事もあるし、背中を預けられるパート

ナーのおかげでもあった。

「しかし、かなり来ているな。三年のスカウトに二年の成長確認、そして一年の気になる奴のチェック、か。ご苦労な事だな」

「でも他人事じゃないんじゃない？ 恭介とかは唯一の男子IS操縦者だし結構強いし。確実にマークされると思っけど」

「別に気にする事じゃないさ。勝手にマークしておけば良い。何やっただって、俺は引き込めないんだからな」

「はは、そうだったね」

恭介は知っている者こそ少ないが、ソレスタル・ビーイングの創設者であり『闇の執行部』の部長だ。故に恭介を引き込もうとする国へは妨害が入るし、強硬手段にでも出ようものなら『執行』されること間違い無しである。まあ、各国はそんな事には気付いていないかもしれないが。

「でも、ガンダム力を見せる良い機会だ。存分に見せつけてやるうぜ」

「良いのかなあ……一応ガンダムってソレスタル・ビーイングの機密事項なんですよ？」

「力を示すくらいは大丈夫さ。どれだけ調べたって、ゼロとケルデイル・サバーニヤのデータは出てこないし取れもしない」

そもそも調べたとしても、詳細データはこのデータバンクにも載っていない。ただその存在を示しているだけだ。

「おっと、そろそろ発表されるな」

と、恭介が言つと、モニターにトーナメント表が現れる。

一年Aブロック一回戦、棗恭介、シャルロット・デュノアペ
アVS

ラウラ・ボーデヴィツヒ、朱鷺戸沙耶ペア……と。

「……は？」

＊ ＊ ＊

「……何故いる朱鷺戸」

「悪いわねー、今日だけ私はここの生徒でこの子のペアよ？」

ラウラのペアとなっていた少女、朱鷺戸沙耶ときとさやは、何の悪びれも無くそう言った。

おそらく『闇の執行部』の能力を使って一時的に生徒として登録し、意図的にラウラとペアになれるよう仕向けたのだろう。観客たちは、あんな専用機持ちいた？ などとひそひそ言いあっている。すると、シャルルに個人間秘匿通信プライベートチャネルが開かれた。

『ま、実際は君の実力テスト、ってところなのよねー。シャルロットちゃん』

「！……なるほど。背中を預けられるほどなのかそうでないか、ってことだね」

『そう言う事よ。まあその他にも、『ストライクノワールG 戦闘用IS』の実戦テストと
かもあるんだけどね』

そう言って沙耶は個人間秘匿通信を切った。

「ふん。貴様からか」

「俺から、というのは間違いだな。このトーナメントに一夏は参加してない」

「何っ!？」

「お前がボコボコにしたんだろう？ 参加不可能なダメージレベルCを越えさせてよ」

「くっ……まあ良い。貴様も排除対象だ。私の邪魔をする者は全て排除させてもらう」

「出来るならやってみろ。俺を倒すのは相当キツイぜ？」

「ふん！ 言われなくても……」

ケンカの売りあい買いあいをする恭介とラウラ。

瞬間、開始の合図がなった。

「叩きのめす」

「やってみる」

* * *

ガキイン！！ と、ケルディム・サバーニヤの『GNライフルビ
ット・トンファーマード』と、ストライクノワールGの『ビームラ
イフルショーティー』がぶつかりあう。二人は開始早々に銃による
接近戦を繰り広げ始めたのだ。

相手の銃を弾き撃ち、叩き付けて弾き撃ち返し、近距離で頭に向
けて、胴体に向けて、となんともレベルの高い銃の近距離戦に、観
客たちが息をのむ。

そうした近距離戦の中、沙耶が突然距離を取り、『二連装リニア
ガン』を撃ち放つ。黄色く光る弾丸がシャルルに迫るが、難なく避
け、トンファーマードによる桃色の弾丸をマシンガンか、と思うほ
どの速度で連射する。

幾数にも迫るビームを避けながら沙耶は『ビームライフルショ
ーティー』を量子化させ、ストライクノワールの専用追加装備『ノワ
ールストライカーG』のウイング外側にマウントされた、ビームエ
ッジ内蔵型大型対艦刀、『フラガラツハ3ビームブレイド』を手に
取り、シャルルに急接近する。

バチバチバチ！ と火花を散らす『GNライフルビット？・トン
ファーマード』と、『フラガラツハ3ビームブレイド』。粒子強化
されているトンファーマードの刃は、溶け斬らせる事を許さない。

しかし右のフラガラツハの力を抜き下げたかと思うと、今度はハ
イキックをしてきた。瞬間、膝から足首辺りにビームブレイドが発
生する。

「！」

シャルルはそれを避けずに受け止め、吹っ飛ばされる形で避ける。それを追従するように『二連装リニアガン』を放つ。

それらをシャルルは巧みに避け、トンファーモードと展開した『GNライフルビット?』を沙耶に向けて放つ。当然、彼女は避けてみせる。

「へえ、結構やるじゃない。多少手加減はしてるけど、ここまでやつてくれるとはねえ」

「伊達に恭介に鍛えてもらってないからね。まだメンバーのみんなには全然届かないけど……これくらい出来ないで戦場にいられるつもりはないよ。まあ、まだまだ足りないんだろうけど」

「自覚してるなら良いわ。じゃあ……まだまだ行くわよ！ 手加減したあたしくらい倒して見せなさい！ シャルル・デュノア！ コードネーム、ロックオン・ストラトスうっ!!」

「行くよっ!! ハロ！ 全ビット展開!!」

【「【リヨウカイ、リヨウカイ!】】】

様々な部位にセットされたビットたちが解放され、展開される。その数まさに五四機。ブルー・ティアーズなどものの数ではない。観客たちはそのあまりのビット数に戦慄している。

「あら、全展開するの?」

「沙耶さんと戦うんだったら、出し惜しみしてられないからね。僕が持てる全力で行かせてもらうよ」

「そう……だったら来なさいっ!!」

再び二人の戦いが始まる。

シャルルはハロに制御されたビットたちの恩恵を受けながらスナイプモードにした『GNライフルビット?』を撃ち、圧倒的な弾幕の元、沙耶を近づけさせないようにする。

一方沙耶はそれらをほとんど避け、たまに擦らせながら避ける。いつの間にやらフラガラツハはしまわれ、フラガラツハのグリップ部に搭載された『ビームサーベル』に武装が変わっている。

ストライクワールGは、元々ブルデュエルとヴェルデバスター

という試作機との集団戦を目的として作成された、ストライクノワールの改造機である。簡単に言えば、集団戦目的から変更し、単体戦目的として再開発したのだ。機動性も速度も火力も、ストライクノワールを大きく上回る。

故に避けられる。ただのストライクノワールでは全く避けきれそうにない前方一八〇度から振ってくるビームの雨を、沙耶は左右に上下にと避け続ける。そのまま『二連装リニアガン』を放つが、シールドビットが作る三枚組シールド二枚によって防がれた。

「ちっ……本当に、厄介な、数の、暴力ねっ!!」

「多数相手なら乱れ撃って殲滅し、単体相手なら数で翻弄する……それがケルデйм・サバーニヤの本領!」

「でも、ね! 当たらなければ! どうという事はないのよ!!」
「ならもつと数を増やすまで!!」

シャルロットのケルデйм・サバーニヤのほぼ全身に装備されている緑色の箱。それらはビットではない。

「ハロ! 全部撃つたら常にオールロードだからね!」

【「リヨウカイ、リヨウカイ!」】

「行っけえっ!!」

ケルデйм・サバーニヤの全身から大量のGNミサイルが発射された。ビットたちはミサイルの軌道にあわせて勢いを緩めず、ミサイルに当てずに絶えずビームを放ち続ける。

「ちっ……これはさすがに無理ね。GNミサイルじゃフェイズシフトでもダメージ受けちゃうし……。仕方ない。トランザム!」

瞬間、ストライクノワールGの全身が赤く光り出す。機体内部に蓄積されていた高濃度圧縮粒子を全面開放させ、ストライクノワールGのスペックを三倍以上に引き上げる。装甲内に流れるGN粒子の赤色化と、量の増大によりストライクノワールGが移動するたびに残像を放つ。

沙耶は通常の三倍の速度でビームの雨の中を一気に脱出し、猛スピードでケルデйм・サバーニヤの真下に潜り込み『二連装リニア

ガンを撃ちながら懐へと潜り込まんとする。

シャルロットもそれをただ待っているほどバカでもなかった。スナイプモードにしたライフルビット？をトンファーマードにして撃ちつつ、後退し、量子化されたミサイルを展開しリロードしてある。『GNミサイルポッド』からGNミサイルを全弾発射する。

沙耶の後方からは追尾してくるGNミサイルが更に飛んでくる。

ズドドドドドドドオオオオオオオオン！！ と、GN
ミサイルが全弾爆発する。

が、その爆発によって起こった煙を突き破って、赤く輝くストライクノワールGが現る。

「うおおりゃああああああああ——
——ッッ!!」

迫る沙耶が『ビームサーベル』を左から右へと振り抜く。

バチバチバチ！ と、トンファーモードの刃と光刃がぶつかりあ

フツ、と沙耶の姿が消えた。

次の瞬間、沙耶はいつの間にか真後ろにおり、『ビームサーベル』を振り下ろさんとしていた。

「そりゃっ!!」

避けきれずに直撃する。

ウイングゼロと違い、リミッター有り状態での最大出力が絶対防
御を貫通するほどではないストライクノワールGの『ビームサーベ
ル』が、大幅にケルディム・サバーニャのシールドエネルギーを削
る。

吹き飛ばされたシャルロットの機体が土煙を上げながら滑り着地する。

「くっ……あと二、三回くらったら負けだ……！」

「そろそろ！ 止まってる暇はないわよ！」

いつの間にか『ビームサーベル』をしまい、『ビームライフルシヨーティー』を展開して連射しつつ、『二連装リニアガン』を撃つ。

それを後退しながら上昇し避けつつ、こちらにも撃ち返す。相手の射撃をホルスタービットとシールドビットが防ぎながら、時折ホルスタービットを円形に並べ、高出力のビームを放つ。

沙耶は高速で動きながら『フラガラッハ3ビームエッジ』を抜き放ち、片方地面に投げ捨て突き刺す。

ガキン！　と思いきりトンファーモードとフラガラツハが激突する。しかし沙耶はそこでは止まらず、そのままシャルロットを弾き飛ばし、ノワールストライカーの中央部に設置された小型有線アンカー、『アンカーランチャー』を放ちケルディム・サバーニヤの右足に巻き付け、

「しまっ……！」

「そおりや ああああ——」

「——ッ!」

思いきり振り回す。そしてその状態で急降下を始め、地面に着地と共にスキーの様に足を滑らせシャルロットを投げ飛ばす。グンッ！ と、投げ飛ばされたシャルロットは抵抗出来ずに真横に軽く回転しながら後方へと飛ばされる。その際にワイヤーは解除された。

警告、後方に危険物あり。

「え
ツ!
?」

バチバチバチつつつ！ と、地面に突き刺さったフラガツハの光刃がシャルロットをくの字に曲げ斬り裂かんとした。

「うわああああああああああああああああ！？」

しかし絶対防御は破れずにそのまま倒れ、ケルディム・サバーニはそこから数メートル先で転がり、土煙を上げる。

「あらら、ちよつとやり過ぎちゃったかしら」

沙耶は巻き上がる土煙に近づき、そんな事を言った。

「んー、まあ及第点って所かしら。まだまだだね」

警告、敵ISからロックオンされています。

などとのたまわった。

「は？」

『GNライフルビット？・スナイプモード……ハイパーブラスト！』

瞬間、沙耶の視界は桃色に染まった。同時、トランザムの限界時間に到達する。

ストライクノワールG。

シールドエネルギー、〇。

土煙の晴れた先にいたのは、ギリギリシールドエネルギーが残った、ケルディム・サバーニヤだった。

* * *

ラウラは焦っていた。

さつきから何度も何度も攻撃しているが、相手である棗恭介の駆るウイングガンダムゼロ・パーフェクトカスタムに傷一つつける事が出来ない。

アクチオギンダラ

『AIC』、ラウラ自身には慣性停止結界と呼称される、相手一体を任意に停止させる事が出来る。これは、ISに搭載されている『PIC』を発展させたものだ。

それで何度も恭介の動きは止めている。が、その度に展開された『ウイング・ファンネル』に攻撃される。かといって接近戦を挑んでも全てさばかれてしまう。

軍人としての訓練を受けているラウラにとって、このIS学園にいる生徒たちは皆意識が甘く、危機感に疎く、ISをファッション

かなにかと勘違いしている程度の低い者しかない　そう思っていた。

だが。

（この男……教官並だと……！　そんなこと……そんな事がっ！！）
「ありえる訳が無いッッ！！」

『ワイヤーブレード』を弾き、『大口径レールガン』を全て避け、ラウラの攻撃は全てさばき避け、一瞬もスピードを緩めずにラウラへ急接近する。

すると、恭介が『ビームサーベル』を投げ捨てた。

「な……っ！？」

（なんだ！？　どういうつもりだ！）

しかし恭介は止まらない。ラウラは「何のつもりか分からないが、バカめ！」と叫びながら『プラズマ手刀』を恭介に対し振り下ろす。

瞬間、腹に突然衝撃を感じた。

「んなっ！？」

「バーカ。俺が何も考えずに『ビームサーベル』を捨てる訳が無いだろう」

突き出したウイングゼロの手から伸びるのは『ツインバスターライフル』。恭介はその銃身を展開しながら黒い雨の腹にぶつけたのだ。
シュウアルツゲア

既にチャージは完了し、銃口の中からは光が漏れていた。

「ッ！？」

「終わりだ」

恭介がトリガーを引く。

ラウラの全身を、光り輝く閃光が包み込んだ。

* * *

（負ける……私が負ける……！？　こんな奴に！？）

視界全てが光に包まれ、視界の端でシールドエネルギーを示した数字が急激に〇へと近づいていく中、ラウラは負けたくない、という感情を爆発させていた。

（力が……力が欲しい……！　こんな男に負けないほどの力がッ！）

すると、突如頭の中に声が響いた。

『願うか？　汝、より強い力を欲するか？』

ラウラは躊躇わずに頷く。

（よこせ……！　力を！　比類無き最強を……！）

瞬間、眼帯に隠された金色の瞳に、謎の文字が浮かび上がる。

Damage
損傷状況……D

Mind Condition
精神状態……昂揚

Certification
最終認証……確認

Valkyrie Trace System……Boot

黒い雨は、青白い電撃に包まれた。

ストライクノワールG（前書き）

武器多っ。11話じゃ全然使っていないの結構あるけど……。

ストライクノワールG

『ストライクノワールG』

武装

- ・ビームライフルショーティー×2
- ・ビームサーベル×2
- ・フラガラツハ3ビームエッジ×2
- ・二連装リニアガン×2
- ・アンカーランチャー×1
- ・グリフォンビームブレイド×2
- ・GNシールドクロー×1
- ・シャイニングエッジビームブーメラン×2
- ・ノワールストライカーGブレフェイスラケルタ×1

特殊機能

- ・ストライカーパックスシステム
ヴァリアント
- ・VPS装甲

特殊技能

- ・TRANS-AMシステム

特殊導力

- ・GNドライブ（オリジナル）

ワンオフアビリティ
単一能力

- ・なし

詳細

ストライクEに特殊専用追加装備『ストライカーノールストライカーG』を装備した機体。

ノールストライカーGは、ウイング内部に『二連装リニアガン』、ウイング外側に内蔵型大型対艦刀『フラガラツハ3ビームブレイド』、ビームブレイドのグリップ部に搭載された『ビームサーベル』、ストライカー中央部に設置された小型有線アンカー『アンカーランチャー』、中央部の上部に設置された『シャイニングエッジビームブーメラン』。

さらに、ノールストライカーGを分離させ、ファトゥムIS支援空中機動飛翔体^{モード}に変形時に、両翼フラガラツハを展開してすれ違い様に斬撃したり、『二連装リニアガン』を一八〇度折り畳み使用可能となる『ブレフィスラケルタ』で突撃させ、ビームスパイクとして使用する事も出来る。

ストライクノールG自体には、左右の膝から爪先間に設置された『グリフォンビームブレイド』を始め、『ビームライフルショーティー』や『GNシールドクロウ』を装備している。

リミッター時は全身装甲^{フルスキン}ではなく、普通のISと同じ状態。その場合ノールストライカーGは非固定浮遊部位^{アンロックユニット}となっている。

ストライクノールGはツインドライブではなくGNドライバー機。しかしそれでも元々集団戦にあわせて作成されたストライクノールを十二分に単体で戦えるようにされている。使い手次第ではツインドライブ使用機でも互角に戦えるようにされている。

装甲は、一定の電圧の電流を流す事で相転移する特殊な金属で出来た『フェリットPS装甲』の改良版である、『ヴァリアントVPS装甲』を使用している。

『VPS装甲』は、『PS装甲』とは違い、装甲に流す電流の量を変化させる事が可能。これによって装備や状況ごとに装甲へのエネルギー配分を調整、最適化する事で電力消費のロスを抑える事が出来る。が、導力であるGNドライブは半永久動力機関。つまりバッテリー切れは存在しないため、常時展開可能。

第12話「暴れる雨と暴走の天使」

『何故教官はそこまで強いのですか？ どうしたら強くなれますか？』

かつて、尊敬する教官にそう問うた事があった。

識別状の名前であるラウラ・ボーデヴィツヒ。元々の名前 いや、記号は遺伝子強化試験体Cー アドヴァンスト 三七。人工合成された遺伝子から作られ、鉄の子宮から生まれた……いわゆる試験管ベビーという奴だ。生まれた瞬間から彼女は闇の中にいた。

兵器として生み出され、育てられたラウラは優秀であった。いかに人体を攻撃すれば効果的か、どうすれば敵軍に打撃を与えられるか、という知識を覚えさせられ、徹底的に『兵器』として鍛えられて来た。

しかし……予期せぬ事態が起きた。

IS……インフィニット・ストラトスの出現だ。

ラウラたちはISの適合向上の為に、脳への視覚信号伝達の爆発的な速度向上と、超高速戦闘状況下に置ける動体反射の強化を目的とした、肉体へのナノマシン移植を施した。そうして処置された目を、疑似ハイパーセンサーとも呼べる『ヴォーダージュエ越界の瞳』と言う。

危険性は全くない そのはずだった。

だがラウラは『越界の瞳』に適合せず、左目は金色へと変色し、常時稼働状態となってしまった。

おかげで部隊のトップから転落し、隊員達からは出来損ないの烙印を押された。

しかしそんな彼女にも、女神は慈悲をくれた。

織斑千冬。ラウラが誰よりも尊敬する人物であり、教官。

彼女は出来損ないなどとは一言も言わず、侮蔑の視線も向けず、普通に話しかけてくれた。

「ここ最近の成績は振るわないようだが、なに、心配するな。一月

もあれば最強の地位に戻るだろう。なにせ、私が教えるのだから」

嘘など一辺も混じっていなかった。

彼女の教えを忠実に実行し、訓練し、ただただ彼女についていく。それだけだった。だというのに、彼女の言う通りたった一ヶ月で、部隊最強にまで再び上り詰めた。

が、己が教官は『最強』である自分より尚『最強』だった。

だから問うたのだ。『何故』、と。

その時に見た初めての優しい笑みを、今でも忘れられない。

「私には妹がいる」

「妹……ですか？」

「ああ。そいつの一個上のガキが作ったお友達グループがあつてな。まあ肝心のそいつは親の事情でどこかに行ってしまったが、そんな事は問題じゃない」

千冬は空を見上げ、何か懐かしむように続けた。

「アイツがいなくとも、そのグループは壊れなかった。常に、どんな時も一緒だったさ。そしてアイツを待っていた。私も人望はあるほうだと自負しているが、アイツほどではないだろうな。おそらく私はいつまでたってもアイツの強さにはたどり着けなさそうだ」

「教官が……！？」

「ああ。まあ、お前の言っている強さと、私が言っている強さは残念ながら別物のようだが」

「……よく分かりません」

「今はそれで良い。だが、機会があれば日本に来ると良いぞ。しかし、もしその時にアイツがいたならば……一つ忠告しておこう。アイツは」

再び笑う。優しく、恥ずかしそうに。

（違う……それは違う。私が憧れるあなたではない。あなたは強く、凛々しく、堂々としているのがあなたなのに……）

故に彼女には許されなかった。千冬にそんな表情をさせる存在が。

そんな千冬にしてしまった妹と男が。

だから　　！

（力を……比類無き最強を……！）

D
Damage Level
損傷状況……D

Mind Condition
精神状態……
昂揚

Certification
最終認証……
確認

Valkyrie Trace System……Boot

* * *

「ああああああっつつつつっ！！」

ラウラが突如として苦しげな叫びをあげた。

すると、彼女の纏う黒い雨に異変が起きた。ぐにやり、と装甲が溶けて個体と液体の中間のようなスライム状の物に変わり、ラウラを包み込んでいく。まるでシュヴァルツェア・レーゲンがラウラを取り込もうとしているかの様に。

「……シャル、そこでくたばってる朱鷺戸を安全な場所へ。起きてリミッターを外すまではストライクノワールGも使えないだろうしな。お前は外しておけ。半分だけな」

「うん、分かった」

ガンダムには二重のリミッターがかかっている。一つは出力のリミッター。もう一つはIS戦においての殺傷モード封印、だ。つまり、半分だけ、というのは片方外すという事。どんな攻撃をしようとも、絶対防御だけは貫通させずに搭乗者は無事に済ませる……という事だ。

ケルデイル・サバーニヤの第一リミッターが外れる。GNドライブが完全稼働し、シールドエネルギーが意味をなさなくなるため、表示が消える。同じく第一リミッターを解除した恭介からも表示が消え、GNドライブとゼロシステムが完全稼働する。

恭介の視界の中で、シユヴァルツェア・レーゲンは、青白い電撃を放ちながら未だに変質を続けている。

そして……その変質が終わりを遂げようとしていた。

「さーて、何が出る？ 蛇か鬼か、はたまた龍でも出てくるか？」
瞬間、頭が一気に冷えた。

そこにあり、それが持っている物は 『雪片』 だった。

「なるほど……まさかとは思っていたが、VTシステムとは……。どうやら出て来たのは蛇どころかゴミ以下なクソったれたっただけだ」

VTシステム。正式名称ヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロツソ（二の国と地域が参加して行われるIS同士での対戦の世界大会）の部門受賞者の動きをトレースするシステムだ。しかし、このシステムはアラスカ条約で現在どの国家・組織・企業においても研究、開発、使用全てが禁止されている。

しかし、実際にはこうして目の前に存在している。今まで見て来たラウラの事を考えると、このシステムを良しとしそうにはない。ということはおそらく誰かが無断で搭載したと考えるのが妥当だろう。それも特殊な条件下、それこそ精神状態や機体の蓄積ダメージなどの条件で発動する、などの事をしてだ。

そして登録されていたのは、総合優勝者、『ブリュンヒルデ』の称号を持つ織斑千冬と愛剣『雪片』。零落白夜が使えるかどうかは分からないが、千冬の動きをトレースして来るはず。千冬の劣化版だと言えるだろうが、その辺の操縦者にとっては脅威だ。

恭介の心は怒りに燃えていた。が、それでも冷静さを欠かないのはさすがと言うべきか。

すると、千冬から連絡が入る。

『棗、今事態を沈静化するために部隊を編成中だ、その間の時間稼ぎを頼む』

「終わらせても良いんでしょう？」

『やってくれるならな。デュノアも良いな？』

「はい！ やります！」

『では頼む。……慎重にな、少し嫌な予感がする』

「……了解」

ふっ、と千冬の映ったモニターが消える。

「嫌な予感、ねえ。嫌な事言ってくれるぜ」

「確かにね。でもとにかく、早く終わらそう。被害とかが出る前に再度VTシステムを見直す。明らかに千冬と同じ構えだった。」

「……他人の力で戦って勝って、嬉しいのか？ だとしたら見直さず、悪い意味でな」

瞬間、VTシステムが斬り掛かって来た。

バチバチバチ！ と、『ビームサーベル』と『雪片』がぶつかりあう。

が、

「悪いが、速攻でケリをつけさせてもらう。面倒だからな」

言って恭介は思いきりVTシステムの腹を蹴り跳ばす。飛ばされた後方にはシャルロットのケルデйм・サバーニヤが全ビットを展開し、『GNライフルビット』はスナイプモードで待っていた。

「いらっしやい」

ビームの雨がVTシステムを襲う。全五四の砲口がVTシステムに向けて火を吹き、全てのビームが直撃する。ズドドドドドドドドドドドドドドドド！ と、VTシステムの装甲が悲鳴を上げる。

ビームの雨が止むと同時に、恭介が『ビームサーベル』で斬り抜ける。上下左右と連続の上高速で斬り抜け、途中で蹴り飛ばしそれをシャルロットがトンファーモードで殴り飛ばす。恭介が回り込んで斬りつける。

もはやフルボッコだった。

「終わりだ！」

左手に『ツインバスターライフル』を展開し、地面へと蹴り落としたVTシステムへ銃口を向ける。

「破壊するっ！！」

瞬間、閃光が走った。

『ツインバスターライフル』から発せられたビームの奔流がVTシステムを飲みこむ。アリーナの地面はえぐれ、爆発が起き黒煙が舞い上がった。恭介はその中に飛び込み、VTシステムの元へと向かう。視界が真っ黒に染まる。恭介は視界を暗視モード

「……いた」

爆発の中心。そこにラウラはいた。もっと近くに寄り、暗視モードのレベルを上げる。VTシステムが鮮明に見える。機体は動こうとしているらしく、ガガガ、と音を立てながら腕が若干動いている。恭介は『ビームサーベル』を胸元に突き刺した。ガガ、ガ、とVTシステムは沈黙する。

すると、VTシステムがドロドロと溶け出し、ラウラを吐き出した。

彼女を抱え、黒煙の中から飛び出す。

ラウラは弱々しい表情をしていた。

「……ったく、そんな顔されてちゃ怒鳴りたくても怒鳴れないぜ……」

* * *

恭介はアリーナの地面にラウラを寝かせると、黒煙の方に視線を向けた。

（……ゼロがまだ警戒してる。再び動く未来を見せてくる……。油断は出来ない、ってことか）

『恭介！』

と、ピットから下に降りて来た一夏達と千冬達が恭介の元に走っ

てくる。シャルルは恭介の隣に着地し、ケルディム・サバーニヤの胴体と頭部アーマーだけ解除する。

「……山田君。ラウラを保健室へ」

「は、はい！」

言って真耶はラウラを抱え、保健室へと走っていった。一夏達はとりあえず、転ばないと良いけど……と心配する。

すると、千冬が、

「……棗。ゼロが何か言っているか？」

「まだ警戒しています。再起動する未来を見せてくる」

「み、未来？ 何を言ってますの？」

「ああ、お前らは知らなかったな」

恭介が千冬の方を向きアイコンタクトをする。ため息をつきながら千冬は話し始める。

「ウイングゼロにはゼロシステムというのがある」

「ゼロシステム……？」

「流れを説明すると面倒だから簡単に言うが、こいつは未来を見せるシステムだ」

『ええええええええええ！？』

「み、未来って……じゃあ、私達がどう動くか分かる、って事ですか！？」

と、箒が目を見開いて詰め寄る。

「普段はリミッターがかかっていて未来は見せない。特に授業中や模擬戦はな」

「そりゃあ、そんなんじや絶対勝てっこないし……」

「あくまで想定される全ての未来を見せてくるだけだ。それに、周りの状況や事情、ありとあらゆる情報を取り込み、ゼロが考えうる全ての未来を搭乗者に見せる……確かに一見反則的なシステムだが欠点もあってな」

「欠点？」

「ああ。それは」

「恭介！ 今度は超高エネルギー反応！ 大きいのが来る！！」
言うと同時に、黒煙の中から緑色に輝くエネルギーの奔流が飛び出して来た。

恭介は大型ウイング全て全面に出し、エフィールド全開でそれを受け止めた。が、偏向させる事が出来ず、ただエネルギーが拡散させるだけだった。

それらは当然背後に向かう。

「しまったッ！！？」

爆発と爆風が機体を襲う。

機体が吹き飛ばされるような事は……ない。

爆発と爆風が止むと同時に、一夏たちの方を見た。

誰もいなかった。

ビットは健在。だがそれすらもぐり抜けた物があつたらしい。さっきまで千冬達がいたところにはただの焼け跡しか無かった。

「……あ……」

声が出ない。のどの奥がチリチリと熱い。心の底から冷気が吹き出しているかの様に体が冷める。

瞬間。

恭介の意識は何かに取り込まれた。

* * *

一夏達と千冬は、恭介のいる所から離れていた。

「ふうー……間一髪ねー」

「沙耶、助かったよ」

「良いのよ、当然でしょ」

あの瞬間、シャルロットはトランザムを発動し、最大出力で一夏達の元へと飛んだ。一夏の右腕と千冬、一夏、セシリアを抱えて飛

び立つ。が、残りの鈴音と箒だけは抱えられなかった。

そこにジャストなタイミングで沙耶が現れて救出された、ということだ。

「リミッター解除で何とかトランザムも使えたしね、良かったわ。それより……」

沙耶の視線の先には血の海に沈んだ一夏がいる。

「……早く病院に連れて行かないとヤバいわね……。仕方ない、背^リ中のネコ園に連れて行くわ」

沙耶は一夏の周りにいるセシリア達を押し退けて一夏を抱え上げ、右腕を持つ。

「良いですね？」

「……ああ……。頼む……」

「じゃ、急いで行ってきます。それと、大分ヤバくなってるみたいよ、あつちは」

「ヤバイ……？！まさか……！」

沙耶以外の全員が恭介のいる方に視線を移す。その隙に沙耶は転移。

ウイングゼロは硬直していた。が、唯一違う点がある。

両腕と胸にある緑色のセンサー、そしてツインアイ、それらが真っ赤に染まっていた。

「アイツ……呑まれたか……！！チィっ……！！」

『うおおおおおおおおおおおッッッッ！！』

恭介がウイングゼロの中で叫ぶ。その声は大分離れたここまでも届いた。

「ど、どうしたんだ！？」

「……ゼロに呑まれた」

「はあ！？」

「ゼロシステムに呑まれたのだ。アイツは……」

訳が分からなくなっている箒に、千冬が続ける。

「ゼロシステムは未来を見せると言ったな」

「は、はい……」

「だが見せる未来は全てが良いものではない。事情、感情、搭乗者の全てを無視して自分が撃墜される未来を見せてくるのだ」

『！？』

「ゼロシステムは搭乗者の脳波に直接干渉し、予測される全ての未来を見せ、『完全な勝利』を目指す物だ」

「か、完全な勝利……」

「そうだ。だが、この『完全な勝利』には搭乗者の生死など勘定に入っていない」

「そ、そんな……なんでそんな物をアイツが使ってるのよ……」

「……アイツにとってはそれが必要だったのだろう」

「必要って……！」

「その辺の事情などアイツに聞け。私が語る事ではない」

千冬は鈴音を睨みつけて黙らせる。

そして続ける。

「ゼロシステムは弾が直撃して爆死……などという最悪の状況すら見せる。故に強靱な精神力を必要とする……でなければ精神が崩壊させられるのだ。まあ、精神崩壊は最終的な結末でしかないがな」

だが、と千冬は付け加える。

「奴はゼロシステムを克服する為に精神修行をしたり、システムを使った訓練をしたりと完全に克服した」

「じゃあ……なんで」

「その強靱な精神力が崩れ去った……そう考えるほかあるまい」

「なんでそんな事……あ……！」

「そう……私達だ」

千冬達が死んだ……爆発の中突然消え去った千冬達を見て、恭介がそう思っても仕方が無いのかもしれない。それ故に一瞬の隙を見せた。その隙をゼロシステムが見逃すはずも無い。

「……止めなければならぬ。全く……まさかこいつを使うはめになるとは思いも寄らなかったが……」

言いながら内ポケットから一つの懐中時計を取り出す。蓋には二振りの刀が描かれている。

「それは……IS?」

「そうだ。……来い、スサノオ……!」

瞬間、懐中時計が光り、IS『スサノオ・零式』が展開される。
フルスキン

全身装甲であるスサノオ・零式は、一言で言うならまさに侍、と言った風だった。兜のような頭部アーマーに鎧のような胴体、腕部、脚部装甲。黒と白の機体はまさに千冬のためだけの物……そんな印象すら受ける。

「……『シラヌイ』、『ウンリユウ』、私に力を……」

両手に展開した強化サーベルにそう呟く。

そして、

「行くぞ！ デュノア、ついてこい!!」

「はいっ!」

第二ラウンドは幕を開ける。

ウイングゼロは『ツインバスターライフル』を黒煙の中に向けて放った。エネルギーの奔流が黒煙を突き破り振り払う。

その中にいたのは、さっきまでのVTシステムではなかった。

右肩に長い砲身を乗せ、左肩に巨大な剣持った灰色の装甲をした全身装甲の機体だった。一番特徴的なのは頭部アーマー。ウイングゼロと同じガンダムヘッドをしている。

「敵ISをガンダムタイプと断定。ゼロとの戦闘下でシステム内にデータを構築し独自のタイプに仕上げたと仮定する」

恭介は機械の様にそう言った。

すると、VTシステムが動く。

右肩の砲身をこちらに向け、緑色の高出力ビームを放つ。ゼロはそれを大型ウイングで無理矢理軌道を曲げた。ビームはそのままアリーナのシールドに直撃し、弾ける。

「……戦闘レベル、ターゲット確認。排除……開始」

ゼロは左手に『ツインバスターライフル』、右手に『ビームサーベル』を持ってVTシステムに突撃する。VTシステムは右手に付いているビームライフルを撃ってくるか、全て大型ウイングで防ぎ、一瞬もスピードを緩めない。

『ビームサーベル』と、左肩についていた剣がぶつかりあう。

が、ゼロは弾き飛ばすと言った事をせずにそのままVTシステムを蹴り上げた。そしてそれを追い、『ツインバスターライフル』を腹に突き刺す。

閃光がVTシステムを飲み込む。

閃光が消えた所には、未だ健在のVTシステムが。

それを見たゼロは『ウイング・ファンネル』を展開、オールレンジ攻撃を開始する。ダメージはかなりたまっているらしく、動きが鈍い。避けきれずにほとんど全弾命中する。そこへ更に『ビームサーベル』を叩き込み、もう一発閃光を放った。直撃し、VTシステムが叩き付けられた地面から煙が上がる。

煙を突き破って高出力ビームが放たれた。

紙一重でゼロはそれを避け、『ウイング・ファンネル』を撃ちながら接近する。

VTシステムは、右手のビームライフルと右肩の大型ビーム砲、更に腰からビット兵器らしき尖ったものが飛び出した。それらはビームを吐きながら接近してくる。

「ビット兵器確認……」

それらすらも避け接近するゼロ。そして、思いきり『ビームサーベル』を胸に突き刺した。

ガガガ……と動きを完全に止め、倒れた。ドロドロと再び溶け、ボロボロのシュヴァルツェア・レーゲンに戻った。

「排除完了……」

ゼロは辺りを見回し、叫んだ。

「俺の……俺の敵はどこだああああああああああ……!」

「ここだ、馬鹿者」

突如、背後が爆発した。

「全く……妙な所で世話をかけさせる。まあ、今回は私の落度のよ
うな物だが……」

そこにいたのは『侍』。

黒と白の『侍』だった。

「さあ。とつとつと目を覚ましてやろう。来い。今のお前なら私でも
勝てる」

第12話「暴れる雨と暴走の天使」（後書き）

結構展開早かったりぐだつてたりしたかな……？

あ、ちなみに出番と活躍が全くなかったけどラウラのいなくなつたVTシステムは、スローネのアインとツヴァイを混ぜたような奴……ってイメージです。なんとなく分かった人いたかな？

スサノオ・零式（前書き）

ツインドライブ多いなー。まあまだ増えるけど。

スサノオ・零式

『スサノオ・零式』

搭乗者

織斑千冬

武装

- ・強化サーベル『シラヌイ』・『ウンリュウ』
- ・GNクロー
- ・ビームチャクラム
- ・トライパニッシャー
- ・ガントレット

特殊機能

- ・零落システム
- ・GNフィールド
- ・ツインドライブシステム

特殊技能

- ・TRANS-AMシステム

特殊導力

- ・GNドライブ（オリジナル）

詳細

千冬専用機体。

搭載された零落システムは、強化サーベル及びビーム兵装に擬似的に零落白夜を発動させる。が、かつての機体である『暮桜』や『白式』ほどの出力も威力もないため、バリア無効化攻撃は可能だが一撃でしとめられるほどのダメージは与えられない。それでもそこそのシールドエネルギーは削る。

ウイングゼロの『バスターライフル』は斬るだけで留まり、『ツインバスターライフル』となると抑えるだけで精一杯になり、斬る事も無効化、消滅させる事もできない。あくまで擬似的なので、白式などの零落白夜ほどの効力は発してはくれない。

このシステムは任意の時のみOFFになる。それ以外は常時展開。第一リミッターON（シールドエネルギーが関係あるとき）の時、三〇秒に一〇シールドエネルギーが減る（最大SE700）。

この機体のコンセプトは『最高のスピードと最強の剣』である。

鎧武者風の装甲形状と後頭部のエネルギーケーブルが特徴。

背中の中央にはGNコンデンサーが装備されており、GNDライブは腰のサイドバインダーに一基ずつ搭載されている。

装備は、刀身にGN粒子を纏わせる事でビームサーベルとしての特性を併せ持つ強化サーベル『シラヌイ（不知火）』と『ウンリユウ（雲竜）』。背中のGNコンデンサーから直接粒子補給が行われる。『シラヌイ』と『ウンリユウ』の柄を連結させる事で、双刃の薙刀『ソウテン（蒼天）』となる。

『ビームチャクラム』は頭部左右の強化型クラビカルアンテナの間に形成された、円環状の粒子ビームを射出する。

『トライパニッシャー』は、腹部と両肩の装甲下に作られた方向を展開し、三門のビームを球状に集束、圧縮して撃ち出す物。

『GNクロー』は、サイドバインダー先端に作られた開閉式の大
型クロー。

『ガントレット』は、強化サーベルからのエネルギー逆流を防止する目的で、利き腕の右腕に装備された籠手。単純な防御装備としても使用される。

『GNフィールド』。両肘と両肩に設置された突起状の GN バ
ーニアはGNフィールド発生器としての機能を併せ持ち、二刀流と
いう戦闘スタイルから、盾を持たない本機の防御装備。

第13話「侍と仲間と破壊天使の戦い」

「さあ。とつとと目を覚まさせてやろう。来い。今のお前なら私でも勝てる」

千冬は言つて左手の長刀、『シラヌイ』をゼロに向ける。

堂々とただそこにいるゼロは、千冬の乗るスサノオ・零式を見つめ、ゆらりと浮き上がりながら呟く。

「……敵機捕捉。これより戦闘行動に入る」

「……行くぞッ!」

動いたのは同時。右の『ウンリユウ』とゼロの『ビームサーベル』が激しくぶつかりあう。お互い出力の第一リミッターなどかかっていない。ゼロには第二リミッター、つまり殺傷モードにする事は不可能なはずだからお互い状況は同じ。

実体剣である『強化サーベル』が溶け斬られないのは、『シラヌイ』にも『ウンリユウ』にも刀身にGN粒子を纏わせ、ビームサーベルとしての特性も併せ持っているからだ。

すると、ゼロの足が何かに掴まれた。

「!」

「射撃などほとんどした事が無い。が、この距離なら外さん」

言つと同時に、腹部と両肩の砲口が展開される。三門から発せられるビームが球状に集束、圧縮され、徐々に巨大になって行く。当然目の前にいるゼロにはそれが直に当たる訳で、さつきからガガガ、と装甲が悲鳴を上げている。それでも足がクローに掴まれ、手は『ツインバスターライフル』と『ウンリユウ』を受け止めた『ビームサーベル』で埋まり突き放せない。

「ふっ……貴様にスサノオのデータは入っていない。故に対抗されはしないだろうと思っていたが……所詮、未来を見るとは言っても機械という訳だ……っ!」

瞬間、ゼロの体が『トライパニッシャー』に押し出された。バリ

バリバリ！！と音を立てながらアリーナの壁まで押し出され、更に押し付けられても『トライパニッシャー』は消滅せずにゼロを攻め、爆散する。

が、それだけではゼロは倒せるはずも無い。

煙の中から閃光が飛び出す。

「はあっ！」

千冬は零落システムを機動させ、『強化サーベル』でそれを受け止める。スサノオへ迫るエネルギーの奔流が千冬を避けるかの様に裂けて行く。

零落システムは擬似的に零落白夜を再現した物である。あくまで擬似的なので、本来の零落白夜の様に完全なエネルギーの無効化は出来ない。当然、白式のように一撃でシールドエネルギーをほとんど奪ったりするような事も出来ない。一応、バリア無効化攻撃もどきは可能なのだが。

実証した事が無いので零落白夜ではどうかは分からないが（おそらく完全無効化するだろうという予想は立てられている）、高出力のエネルギー砲。つまり『バスターライフル』なら斬る事は出来るらしい。が、『ツインバスターライフル』は止めるだけに留まり、斬る事も出来ない。それ以上ならおそらく止める事も出来ない。斬れた、ということはおそらくは『バスターライフル』。咄嗟にツインではないと判断して斬る事を選んだが、もし外れていたらどうしようも無い隙が出ていた、と千冬は冷や汗をかく。いくら千冬でもゼロ相手に早々隙など見せられる物ではない。

と、ゼロが煙を突き破って上空へと舞い上がる。『マシンキャノン』で牽制しつつ、『ウイング・ファンネル』を展開。二四機全てが千冬を取り囲む。

一斉に火を吹いた。

二四方向から放たれる三六〇度オールレンジ攻撃。しかしそれらは千冬に擦る事すら叶わず、大きく動きすぎず、小さく動きすぎず、無駄な動きを全て省いた動きでそれらを避ける。

千冬は突如大きく動いたかと思うと、相変わらず無駄な動きをせずにファンネルの包囲網を突破した。すれ違い様にあったファンネルを三機斬り落とし、更に千冬を追いながらビームを放つファンネルに向かつて行き、全てすれすれで避けながらも、すれ違い様に愛刀の届く範囲にあるファンネルは全て斬り落とした。その数一七機。ファンネルは残り四機となった。

瞬間、背中に衝撃が走りスサノオが弾き飛ばされる。

ゼロが背中を蹴り跳ばしたのだ。

「ぐうつ……！」

「『ウイング・ファンネル』 帰還を確認。『ツインバスターライフル』 チャージ完了、ターゲット、ロックオン……！」

「『ツインバスターライフル』が発射体勢に入る。連結された『バスターライフル』の銃口に光の粒子が凝縮されて行き、銃口の奥が眩しく光る。

「破壊する……！」

「ちつ……トランザム……！」

極光が発射されると、機体が赤く染まるのは同時だった。ふつ、と千冬のスサノオの姿が消え、一瞬前まで千冬のいた所をエネルギーの奔流が突き抜ける。地面に着弾したそれは、大爆発を起こし黒煙を上げる。

一時的に通常の三倍のスペックになったスサノオは、着弾した頃には既にゼロの背後にいた。

「せえいつ……！」

ガキン！ と、大型ウイングの一枚が『ウインリウ』を受け止める。ガンダニウム合金Gで作られたウイングゼロの八枚の翼は、ブルー・ティアーズの『スターライトmk?』の出力だと一時間当て続けていないと（照射で）一〇センチも削れないほどに硬い。

が、スサノオは『最高のスピードと最強の剣』がコンセプトの機体。両手に持つ『強化サーベル』は、ただのGNソードなどよりも遙かに切れ味を増している。故に、一瞬では断ち切れなくとも、数

秒押し込みさえすれば。それがトランザム状態ならば尚の事、

断ち切れる。

翼を断ち切ったそれは当然のごとくゼロの装甲に傷を付ける。更に零落システムが稼働中の『ウンリユウ』は、シールドバリアなど完全無視。つまり直に装甲に刃を当てている訳だ。ガンダムタイプと同等の切れ味を持つ刃の前では、いくらウイングゼロの装甲でも容易く斬り裂く。

生命に別状があると判断され、絶対防御が発動された。

第二リミッターの解除されていないスサノオでは、絶対防御はどんな出力だろうと貫通しない。故に中にいる恭介を傷つける事は出来ない。

しかし痛みは感じるはずだ。

「いい加減に目を覚まさんか！！ 私達は無事だ！ 誰一人死んでなどいない！ だからとつとゼロシステムなどねじ伏せて戻ってこんかあッ！！」

一瞬、ほんの一瞬、赤く染まったセンサー類とツインアイが緑色の戻った。が、

「ぐ……ぐうおおおおおおおおおおおおおおおおおお
！！」

ガリガリガリ ツ！！ と、装甲に火花を散らせながらゼロは無理矢理『ビームサーベル』を振るう。光刃は一部の狂いも無く千冬の横腹に叩き込まれた。装甲が溶かし斬られ、絶対防御が発動する。

「うぐうっ……………！！」

「トランザム……………ッ！！」

「ちいッ！ 撃たせるかあッ！！」

ゼロがトランザムを発動し、急速に『ツインバスターライフル』のチャージを進める。通常二、三〇秒かかるはずのチャージを、ま

さに五秒で終わらせる。トリガーに指がかかる。

それを止めんと千冬が高速接近するが、いつの間にか展開されていた残りの『ウイング・ファンネル』四機のビームが邪魔をする。

瞬間、連結した二つの銃口から極光が走った。

視界が 光に包まれた。

* * *

リトルバスターズ？
背中のネコ園、総合医療区画第三手術室は大騒ぎだった。

「輸血急げっ！ 結合促進ナノマシンの用意は！？」

「完了しています！」

「よし！ これより織斑一夏の救命手術を行うっ。切断面は非常に綺麗だ！ おそらく敵が薙げたと思われる偽物の『雪片』が、かなりの切れ味で細胞を潰さずに分離させたのと同等の効果をもたらしたのだと思われる！ 素早く！ 正確確実に！ 一辺の後遺症も残さずに彼女の右腕を結合するぞっ！ 失敗したら恭介さんと千冬さんにフルボッコだ！ 良いな！？」

『はいっ！！』

「よしっ、オペを開始する！！」

沙耶はそんなやり取りのされている第三手術室を、手術見学用モニターの総合医療区画第一待機室で見ていた。

「ふう……とりあえずは何とかなりそうね。いつも意味不明な発明をしてるマッド鈴木も、ドクターモードになればさすがに真面目ね」と、一人呟きつつ一息つく。

正直、沙耶としては一夏が死のうが死ぬまいがどうでもよかった。いや、むしろ死んでくれた方が恋のライバルが減る。故にどちらかと言えば死んでくれた方が良い。

が、そんなことになってしまうと、恭介がリーダーとして機能し

なくなる可能性が非常に高い。いくら周りが励まそうとも、だ。恋愛は大事だが、現状それよりもソレスタル・ビーイングがちゃんと稼働する方が大事なのだ。

朱鷺戸沙耶は棗恭介の事が好きだ。

一〇歳の頃、戦地や大規模災害地などに赴いて活動する医者である父親と母親について様々な国を点々としていた時、沙耶は誘拐された。いや、正確には父と母を殺し、沙耶を連れ去った、と言うべきか。

それから連れ去られた先でやらされたのはスパイの訓練。

スパイと一言で言っても、テレビで逮捕された、と報道されるようなスパイではない。暗殺や盗みはもちろん、様々な事をやってのける超危険なスパイ。

いつの間にか侵入し、いつの間にか喉頸のどへいに噛み付く蛇。

好きでやっていた訳ではない。ただ自分一人が抵抗するには大きな組織だった。そうして抵抗を諦め、従順に任務を遂行していく仲間は大勢いた。

そんな中、その組織を壊滅させたのがソレスタル・ビーイングだ。彼らはちょうど仲間を集めている最中だったらしい。違法研究施設や沙耶がいた組織などを潰して、協力してくれる人には仲間になってもらう。仲間になる気がない人には、人脈を使って仕事を紹介し、普通に生活出来るよう環境を整えてあげたり、働ける歳ではない子達は、引き取ってくれる人を探したり……と、その頃からいろいろやっていたようだ。

単純に考えれば、表の世界になど戻れない人を探している、そう思ってしまうだろうが、ソレスタル・ビーイングに入ってからそんな考えをしていた頃の自分をぶん殴ってやりたくなる。

表も裏もない。ただ暖かく、どんな事情があろうと受け入れてくれる。そんな場所だった。

ソレスタル・ビーイングに入っている人でも、常に背中のネコ園ニコにいる訳ではない。普通にお店を経営したり、結婚したりしている

人だつて大勢いる。

背中のネコ園にいれば、仕事がない限りは毎日がお祭り騒ぎだと言つても過言ではないくらいに騒がしい。そういう所はリトルバスターズと同じなのだろう。時にはシリアスに、でも基本は楽しく。そうして、第一部隊『闇の執行部』に所属しているせいだけではないだろうが、恭介とよく行動を共にする事が多くなり、いつの間にか惹かれていた。

……正直ライバルが多い、と沙耶は思う。

数ヶ月前に保護したESP研究で生み出されたビャーチェノワ姉妹、社霞^{やしろ}、鑑純夏^{かすみがみすみか}を含める他数名、いや、もしかしたら数一〇名だつたりするかもしれないが、ソレスタル・ビーイング内にもライバルは多い。IS学園でも着々と増えてきているとか。

まあ、それで諦める沙耶ではないのだが。

「さて……一夏ちゃんはお届けしたし、助かりそうだし、お仕事にでも行こうかしらね」

言つてストライクノワールGを展開し、転移を始める。残念ながら加勢には行かない。というよりも行つても仕様がないうつべきか。千冬達がいれば十分なはずだ。少なくとも暴走したゼロを止めるだけならば。

沙耶の足下がきらりと光る。

転移場所は 企業秘密である。

* * *

やられた、そう思つた千冬だったが、何故か何の衝撃もこなかった。

放たれたエネルギーの奔流が止むと、思わず瞑つていた目を開ける。そこには緑色の壁があつた。

「ふう……間に合つた。すいません、入る隙が見つからなくて、全然援護も出来ませんでした……」

「いや、私ともあろう者がお前の事をすっかり忘れていたよ。助かった、デユノア」

「いえ。ギリギリでビットの耐久値が保って良かったです」

千冬の目の前を遮っていた、というより周りを囲むように配置されていたのはケルデйм・サバーニヤの『GNホルスタービット』達だった。

「敵機の破壊失敗を確認……戦闘を続行する……！」

「来るぞデユノア！」

「はいっ……！」

トランザム状態のウイングゼロが動く。通常状態でもガンダムタイプの中では動きの速いウイングゼロの更に三倍の速度は、もはや目で追えるような物ではなかった。見えるのはその場に残った、装甲内に流れるGN粒子の赤色化と量の増大による残像のみである。

しかし、そんな状況でも千冬は背後から迫り来る『ビームサーベル』を受け止めてみせた。

「目で追えなければ感覚で察すれば良いだけだ。まあ、こんな事が出来るのは限られるだろうが、なっ……！」

スサノオの足がゼロの腹を思いきり蹴りとばす。瞬間、ゼロの背中が大爆発を起こした。シャルロットが放ったGNミサイルが大量に迫っていたのだ。それらが全てゼロに直撃し、何十もの爆発を起こす。

爆発で起こった煙から出てきたのは、ボロボロになったウイングゼロだった。だがまだゼロは動く。ツインアイもセンサーも全て真っ赤だ。ゼロは『ツインバスターライフル』を分離させ、シャルロットと千冬に向けてトリガーを引く。

ゼロの頭部アーマーが『GNライフルビット？・トンファーマー』に思いきりぶん殴られた。

ガッツキンッッ！！ とツインアイにひびを入れ頭部アーマー

を思いきりへこませた一撃をくらったゼロは、クルクルと微妙に回転しながら地面に叩き付けられた。

ふつ、と、ツインアイとセンサーから光が消えた。そしてゼロが解除される。

土煙を小さく上げながら、中から恭介が放り出された。

……いつてえ……、と言い残して恭介は気絶した。

……もしかしたら、戦闘メンバーに入っていたはずなのに出番の無かった八つ当たりなんじゃないか、と千冬は微妙に思ったりもしたが、あえて言わないでおく事にした。

第13話「侍と仲間と破壊天使の戦い」（後書き）

なんじゃこの終わり方！？　しょうもなさ過ぎる！？　自分で書いてただけで戦闘シーンとか頑張ったのに何だこれ！？　すいません！　こんな変な終わり方ですいません！　でもなんかちよつと疲れちゃって少しばかり血迷っちゃったというかなんというか……。

……とりあえず、次の話で第二章「貴公子＋ウサギ＋リーダー」
また騒ぎ（笑）は完結です。多分短いと思われます。
第三章の『』の間のタイトル、どうしようかな……。――

今更だけどサブタイトルと中身に偽りありだよね……。

第14話「終結と喜びとまさかの悲劇」

「ん……」

最初に感覚器官を刺激してきたのは消毒液の臭いだった。

視界に飛び込んだきたのは、どこまでもまっさらに白い天井。肌を包むのは、おそらくは布団かベッドだろうが、ふかふかと柔らかいもの。そして　感覚があるような無いような変な感じのする右腕。

「あ……！？」

思い出した。あの時何かが（もしかしたら『雪片』かもしれない）飛んできて、自分の体に当たった事を。突如走った激痛の中で消え失せて行く体温と、視界の中で舞っていた腕。

何故か動かない体に、一夏は視線だけを変えた。そこにあるのは

包帯でグルグル巻きにされた何か。

義手……では無い、と一夏は思った。大分まわってきた頭は、それが自分の右腕であると判断している。包帯に巻かれながらも自分の右肩口に繋がっている辺り、落とされた右腕を結合しているのかもしれない。という事は、さっきから感じているあるような無いような右腕の曖昧な感覚はそのせいなのか。

シューーン、という音が、ベッドを囲む白いカーテンの向こうから聞こえた。誰かの足音がこちらへ近づいてくるのが聞こえる。足音の主が一瞬止まると、シャツと音を立ててカーテンを開けた。

その先にいたのは　千冬だった。

「あ……千冬……姉……」

「一夏……っ！　目を覚ましたのか！？」

千冬は心底嬉しそうな声を出して走り寄り、右腕に荷がかからないように抱きしめた。

「良かった……一夏……！」

「千冬姉……心配、させて……ごめん……」

「良いんだ……っ、こうして生きていてくれるなら……」

一夏の暖かさを確かめるように、少し抱きしめる力を強める千冬。当の一夏は、力が入らず動けずにいる。が、表情はとても嬉しそうだった。

しばらくそうしていた千冬は、ふと一夏から離れ一度カーテンの外に出ると、丸いすを持ってきてベッドの隣に座る。

「千冬姉……あれから……？」

「全て終わった、みんな無事だ」

「そっか……良かった……」

一夏は心底安心したような笑みを浮かべる。

……実は現在恭介が（シャルロットの一撃によって）危篤状態なのだが、まああの男の事だからどうせひよっこり復活しているだろう、とあえて黙っておく事にした。

すると、一夏はあ、と声を漏らし、

「ボーデヴィッツさんは……？」

と聞いてきた。

「ああ、ラウラか。アイツなら無事だ。特別外傷も無いらしい」

「良かった……」

「……私が言うのもなんだが、よく安堵など出来る物だ。アイツはお前を殺しかけたのだぞ？」

まあそうだけど……と、一夏は目を細める。

「それでも……一応クラスメイトだから」

「……はあ。まったく、とんだお人好しに育った物だ。これもアイツの影響か？」

「はは……かもね……」

一夏は力弱く苦笑した。

恭介に影響された そんな物は出会ったあの瞬間からの事だ、と一夏は思う。

あの瞬間から始まったお祭り騒ぎの様な毎日は、あの時の辛かった日々と打って変わって楽しかった。何かを悪に仕立てて毎日毎日

いろいろとやったり、毎度恭介が遊びを考えては遊んでいた。

あの頃はいつでもどこでも恭介、理樹、鈴、真人に謙吾、箒と一夏。時々鈴音。途中でメンバーが若干変わりはしたが、七人はいつも一緒。ある意味で、今時珍しいんじゃないか、と今なら思える。まるでマンガのようだとも思った。

まあ、やはりそれだけの絆を築ける恭介が凄いのだろうが。なんとなく昔の事を思い出すと、自然と笑みがこぼれた。

それを見た千冬は、ため息をつきながらも口端がつり上がっている。

「それにしても……大変だな、お前達は」
アイツに惚れた奴

「？ 何が……？」

「お前も理解しているだろうが、アイツはまさしくフラグメーカーだ。奴に落とされた奴が今までに何人いるか……。しばらく外国にも行っていたようだから、どうせ日本外にもいるだろう」

「否定出来ない……」

「そしてどうやらラウラもその内の一人になったようだ」

「………………。……はあ？」

「クロッシング アクセス
相互意識干渉。IS同士の情報交換ネットワークの影響から、操縦者同士の波長が合う事で起こる現象……両者間の潜在意識下で会話や意思の疎通を図る事が出来るのだが、その中でいつの間にか何かしら会話していたようだな。何を話したか知らんが、またやらかしたようだ」

「……またライバルが……」

しかし……と一夏は思う。

……何故あんなにも嫌悪していたようなラウラが……。いや、そんなラウラですら惚れさせる事が恭介には出来る、というだけなのだろう。

少々呆れるが。

「ま、頑張れよ。私は応援しか出来ん」

「……千冬姉もね」

、そう考えはするな』

それに、と千冬は続けた。

『アイツは強いがなんだかんだで脆い。失敗やら何やらを激しく気にするような繊細な訳でも、罵倒されて気にするような奴でもないんだが……なんだろうな。表現し辛いけど、とにかく脆い所がある。どうやら女という生き物はそういう脆さを見てしまうと、母性というか、支えてやりたいと思ってしまつようだな。純粋な子供を見て保護欲をかき立てられるのと似ていると言つか……』

頬を紅潮させながらそんな事を言つた事を覚えている。

暗く暗い、沼の底の様な場所で、ラウラ・ボーデヴィツヒは千冬との事を静かに思い出していた。

棗恭介という男の話をしている千冬はとても楽しそうだった。いつも凜々しく、堂々としている千冬とは違って、自然に溢れるその笑顔が眩しかった。その笑顔がラウラには許せなかった。

底があるかも分からないようなこの暗い空間の中で、ラウラは遙か遠い沼の外に手を伸ばしてみた。

光なんて一筋もない。気を抜けば水圧で圧殺でもされてしまつかもしれない。

一時は慣れていた孤独感は、どうしてか心を締め付けた。

瞬間。誰かが彼女の手を掴んだ。

(　　っ!?)

『随分寂しそうな顔してるな。さつきとは大違いじゃないか』

棗恭介。

教言

あの人^{教言}がたどり着けないといった強さを持つ男。

『……何故だ』

『ん?』

『何故……お前はそんなにも強い……』

目の前の男は、突然のそんな言葉に一瞬キョトンとした顔をしたが、次の瞬間には苦笑しながら、そんなに強くはないさ、と言つた。『俺は十分弱い。仲間や友達つて支えが無きゃ、俺はここまで戦え

やしない。俺はいつもアイツらに助けられてばかりだ」

だから、と、ラウラの手を掴む力を強めながら自分の方に引き寄せ、

「だから守りたいのさ。仲間に助けられるだけってのは嫌だからな。アイツらが俺を助けてくれるから、俺はアイツらを守るんだ。そのためにここまで力をつけてきた」

「守る……ただそれだけのためにか……？」

「お前が憧れてる千冬さんだってそうだ」

「教官が、か？」

「あの人はただ一人の家族を守るために強くなったんだ。だからあそこまでやれるのさ」

よく分からなかった。

だが、少なくともあの人とこの男は、今の私にはない物を持っている……そんな気がした。

「分からないなら良い。その内分かるさ」

でも、と恭介は続ける。

「とりあえずだ。そんな情けない顔してるんだったら、俺の仲間リトルバスターズになれ」

そうすれば、分かるまで、強くなれるまで守ってやる。

(ああ……なるほど。)

この男は確かに危険カッコいいだな。

「う、あ……」

一夏が目を覚ます少し前、……ふと、ラウラは目を覚ました。

自分が寝ている場所はおそらく保健室、VTシステム、どうやらアレは止まったようだ。

「目が覚めたか」

ごく近くから聞こえたその声は、自分が最も尊敬する人物の物だった。そちらへ視線を移すと、ラウラが教官、と呼んで憧れる織斑千冬がベッドの横に座っていた。

「私……は……？ 何が……？」

そう尋ねてくるラウラに、千冬は一つため息をついた。

「一応、重要案件である上に機密事項なのだがな。『VTシステム』を知っているか？」

「はい……正式名称、『ヴァルキリー・トレース・システム』。過去のモンド・グロッソ部門受賞者の動きをトレースするシステムです。ですが、確かアレは……」

「そうだ。IS条約で現在どの国家、組織、企業に置いても研究・開発・使用全てが禁止されている。それがお前のISに積まれている」

「……………」

「巧妙に隠されてはいたが、操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意志……いや、願望か。それら全てが揃うと発動するようになっていたらしい」

「私が……望んだからですね」

そう呟くラウラに、千冬は真つすぐ向き直り、いつものような堂々とした態度で、

「ラウラ・ボーデヴィツヒ！」

と叫んだ。

突然過ぎて、思わず「は、はいっ！」と声を上げてしまった。

そんなラウラを無視して、千冬は口を開く。

「お前は誰だ？」

「わ、私は……私、は……」

「誰でもないなら丁度良い。お前はお前ラウラになるといい。なに、時間は山ほどあるんだ。何せ三年間はこの学校に在籍しなければならな
いからな。その後も……まあ死ぬまでである。たっぷり悩めよ小娘」
「あ……………」

千冬は立ち上がり、ベッドから離れる。そのまま何も言わずに入り口の方へと歩いて行き、ドアに手をかけた所で、振り向かずに、
「ああ、それから……」

ドアを開ける。

「お前はどうか足掻いても私にはなれないぞ。アイツの姉とアイツらの保護者は、こう見えても心労が絶えないのさ」

言って千冬は保健室を後にし、ドアを閉めて行った。

……それから数分経つと、何だか急におかしくなってきた。思わず口の端をつり上げ、笑い声をこぼす。

今日から彼女は 始まった。

* * *

目を覚まして最初に見えたのは超アップの、目を瞑った沙耶だった。あれ、仕事じゃなかったっけ？

「……なにしてるんだ？」

「うつひゃああッ!？」

恭介が声をかけると、思いきり後ろに飛び退いた。

「あ、あなたねえ! いきなり目覚めないでよ!」

「いや、意味が分からないんだが……」

「何よ! 責任取れるの!? あたし処女なのよ!? どうしてくれんのよ!？」

「何の責任だ……」

沙耶はこうしてたまに意味不明な事を吐く。いわゆる『自虐パフオーマンス』もその中の一つだ。

彼女は、一つ深呼吸をすると、

「まあ良いわ。目を覚ましたなら本題に入るわよ」

「本題……? VTシステム関係か？」

「ええ。先程、束さんが見つけたシュヴァルツェア・レーゲンにシ

ステムを積んだと思われる研究所……で良いのかしらね。そこを潰したわ。私達『闇の執行部』がね」

つまり彼女は、仕事をサボっている訳ではなく、終えてきたらしい。

「……で、それだけか？」

「仕事として報告すべきはね。あとは、ラウラ・ボーデヴィツヒの無事と、一夏ちゃんの手術が無事成功、臨海学校が始まる前までには完全完治だそうよ。ついさっき目を覚ましたとも聞いたわ」

「そうか……良かった」

恭介はふつ、と笑う。沙耶は若干顔を赤らめながらも、続ける。

「……彼女の専用機の事だけど」

「ああ、『U・B』の事だろう？」

「ええ。アレ自体は臨海学校の日辺りに完成させられるみたい。ただ……渡すかどうかはあなた次第ね。出来ればこちら側の世界には来て欲しくないんでしょう？」

「……ああ。でも」

恭介には分かっている。

一夏は……いや、一夏達は否応無しに、ソレスタル・ビーイングとその敵との戦いに巻き込まれる。彼女達との関係を、敵は知っているのだから。

「……搭乗者のいない状態でのVTシステム稼働……やはり奴らの仕業か……？」

「ええ。そうね……」

二人は窓に目をやる。

そこに映っているのは、どこまでもどこまでも暗く、広く、そして所々に光の見える広大な宇宙。

「私たちの敵……『八卦龍』の、ね」

＊ ＊ ＊

……恭介は、目を覚まして少しすると、IS学園へと戻って行った。時間は太陽が沈んで行った時間。時間帶的にそろそろ夕飯なので食堂に向かうと、シャルルが先に食べていた。そんなシャルルに声をかけ、先程貰ってきた料理をテーブルに置いて隣に座る。

何やら周りの女生徒達が騒がしいが。

「……優勝……ちゃんすが消え……」

「……交際、無効……」

『うわああああああん!!』

叫びながら滝の様に涙を流して、女生徒達は走り去って行く。

さっぱり状況が理解出来ない恭介は、ただ見送る事しか出来なかった。

「……なんだったんだ？」

「さ、さあ……？」

と、そんな怒濤の勢いで去って行った女生徒達の向かった方の視界の端で、一人取り残されている女生徒が一人いた。

「？ 箒、どうしたんだ？」

「う……恭介……」

先程の女生徒達のように滝の様な涙は流していない物の、同じようにがっかりした風なのは同じだった。

そんな箒はトボトボと恭介の方に歩いてくる。

やってきた箒は、俯きながら一つため息をついた。

恭介は、そんな箒を見ながら、そういうば、と口を開いた。

「お前と先月約束してたよな。優勝したら買い物がどうか、ってやつ。あれ別に行っても良いぞ」

瞬間、箒は顔を上げ思いきり嬉しそうな顔をした。

実は先月、突如部屋に現れた箒が、「優勝したら買い物に付き合ってもらおう!」と、言ってきたのだった。恭介は特に気にするでもなく、二つ返事でOKしたわけだ。

「ほ、本当か!？」

「ああ。別に予定も無いし、久しぶりに町の様子も見てみたいしな」
「そうかそうかつ！ 絶対だぞ！ 約束だからな！！」

「そんな詰め寄らなくても破りはしないさ。詳しい日時とかは連絡する」

「ああっ！ ではな！！」

さつきとは打って変わって、とてつもなく歡喜の表情を見せる篤は、スキップすらしながら食堂を後にした。

……なんだか目に星が見えたのは気のせいだろうか。

と、恭介は何やら不穏な空気を感じ取り、シャルルの方に視線を移す。何故か機嫌が悪そうな顔をしていた。

「どうした？」

「……恭介って女の子の前で他の女の子と出かける約束とかしちゃうんだね。最低」

「は？ いや、ちょっ、なんだ突然！？」

「ふんっ！」

……何故か超不機嫌そうに顔を背けるシャルル。

恭介の頭の中には？で埋まっていた。

「あ、ここにいましたか。棗君、デユノア君！」

そう言いながら食堂に入ってきたのは真耶。その身長に不釣り合いなバストを思いきり揺らしながら恭介達の元へ走ってくる。

「……何ガン見してるのかな？」

「は？ 何を？」

「ふんっ」

恭介達の元まで来た真耶は、ふう、と一息つく、と、

「今日は大変でしたね。棗君は大丈夫ですか？」

「ええ。暴走も止めてもらいましたし、怪我も特には」

「そうですね、それは良かったです。……では、今日は二人に朗報です」
言ってガッツポーズを取る。

……狙っているのだろうか。胸は。

「ついに大浴場の使用が男子も可能になったんですよっ！」

そんな事を真耶は言った。

……二人が悩むには十分な、そんな事を。

* * *

「……で、どうする？」

「どうする、って言われても……」

恭介達は一旦部屋に戻り、準備を終えると、大浴場に向かった。扉の前には真耶が鍵を持って待つており、恭介達を見つけると鍵を開けて扉を開けた。

という訳で現在、大浴場の脱衣所にいる訳だが……やはり男と女一緒に入るとかは出来ない。

「はぁ……仕様が無い。俺は適当にシャワーを浴びて二、三分風呂に入ったらとつと出てくるから、その後シャルはゆっくり浸かってるよ」

「え？ でもそれじゃ恭介が……」

「別に良いさ。それに、でかい風呂に入りたければ背中のネコ号リトルバスターズ？にでも行けば良い」

天使湯があるしな、と恭介は付け加える。

「という訳で、行ってくる」

「あ、ちよつと！」

一瞬でバツ、と服を脱いでタオルを持って恭介は大浴場へと入って行った。

そんな恭介を見ながら、シャルロットは何かを決意したような表情を浮かべたかと思うと、自分のボタンに手をかけはじめた。

恭介は宣言通り、シャワーを浴びて、湯に浸かり、そろそろ二、三分経たんという所で上がろうとした。が、振り返った所で、その

アクションはキャンセルされた。

「お、お邪魔します……」

シャルロットが現れた!!

「な、なんで入ってきてるんだ!? まだ俺がいるって!」

「あ、あまり見ないで……!」

「うえ!? あ、わ、悪い!」

いつもの兄貴分的な感じはどこへ行ったのか。慌てて後ろを向いて、湯に浸かり直す。

シャルロットは、シャワーで体と髪を洗い終わると、湯に入り、中央辺りに移動していた恭介と背中合わせになるよう座った。ちゃぶん、と湯の揺れる音が浴場に響く。

シャルロットは少しだけ恭介に体重をかけ、一息ついた。

……二人の間には会話がなかった。あるのはさっきからバクバクと音を立ててくる、心臓の音だけ。

そうした時間をしばらく過ごしていると、シャルロットが口を開いた。

「あ、あのね、恭介」

「ど、どうした……?」

「あの……ね? お礼を言いたかったんだ、いろんな事に」

「いろんな事?」

「うん……僕を助けてくれた事とか、守ってくれた事とか……僕を友達、って呼んでくれた事とか」

「そんなの当たり前だろ、お前は友達でリトルバスターズのメンバーなんだ」

「あはは、恭介らしいね。それに」

突如、シャルロットが小さく悲鳴を上げた。

「どうした!?」

「す、水滴が落ちてきて……びっくりしただけ……」
「なら良いけど……」

再び沈黙。

瞬間、ちやぶ……と、音を立てながら、シャルロットが動き始める。思わず振り向きかけた。

「? どうした?」

「こ、こつち見ちゃダメっ! あつち向いてて!」

「わ、悪い……」

何をしようとしているのか、ちやぶちやぶと地味に音を立てながらなにやら動いているシャルロット。

ぴとつ、と恭介に抱きついた。

「~~~~~ツ!? しゃ、シャル!?!」

「恭介……僕、恭介に言われなかつたらずつとあのままだったと思う。父や本妻の言いなりで、『生きながら死んでいる人形』のままだった……」

恭介がフランスを発ち、母親も亡くなって。頼る事が出来なくなった彼女は、ただ流されるままになってしまった。状況に流され、人の都合や感情に流され、最後には親の我が侘と理不尽に流されてきた。

あるとき、時風^{恭介}に止められていなかったら、もしかしたら後に襲いかかる罪悪感と後悔で押しつぶれていたかもしれない、とシャルロットは思う。

助けられてばかりだ。初めてあつた時から。

だからこそ、今度は自分が助けたいと思った。だからソレスタル・ビーイングに入った。後で説明された、ソレスタル・ビーイングに
いることの危険性も、誰かを殺す覚悟をしなくてはならない事も、
全て受け入れて、だ。

「本当に……感謝しきれないよ」

「俺は……背中を押しただけさ。お前はそれで一步前に進めた、それだけだ。世界なんてものはそれだけで変わってくれる。その変

化がでかい小さいかは、進んでみないと分からないが……それで
もきつと、良い方に進んでくれるはずだ」

「うん。分かるよ……分かる」

きゅっ、と抱きしめる力を強める。恭介は一瞬びくっ、と反応し
たが、何も言わずに黙った。

大浴場には、しばらく心地のいい沈黙が続いていた。

* * *

翌日。何故かホームルームになってもシャルロットは来なかった。
先に行つてて、と言つてきたため恭介は食堂で分かれたが、理由
は聞かなかつたので何故かは分からない。見ると、あのラウラもい
ない。まあこちらは事情聴取、と考えれば合点は行くのだが。

すると、扉を開けて、真耶が教室に入つて来たのだが、何故かふ
らふらとしていた。また何かやらかしたのか、それとも朝っぱらか
ら痛恨の一撃でも食らつたのか。

「み、みなさん……おはようございます……」

なんだか声もふらふらだった。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します……あ、いや、
転校生と言いますか、既に紹介は済んでいると言いますか……ええ
と……」

やけに齒切れが悪かった。

周りの女生徒達は、「また転校生？」とか、「もう二人いるよ？」
とか囁きあっている。

「じゃあ、入つてきてください」

「失礼します」

ん？ と、なにやら聞き覚えのある声に、恭介は反応した。
ガラ、と教室のドアを開けて入ってきたのは……、

「シャルロット・デュノアです。みなさん、改めてよろしく願います」

……スカート姿のシャルロットだった。

クラス内。啞然。

「えーっと……デュノア君は、その……デュノアさん、でした、ということですから……はあ、また寮の部屋割りを組み直す作業が始まりますよう……」

どうやらふらふらしていたのは、その辺が原因だったらしい。

……ん？

「え？ デュノア君って女！？」

「おかしいと思った！ 美少年じゃなくて美少女だったわけね！」

「つて棗君！ 同室だから知らないって事は……」

「ちよつと待って！？ 機能って確か男子が大浴場使ってたよね！」

瞬間、スパァン！！と音を立ててドアを開け放ち入ってきたのは……鈴音だった。

嫌な……とても嫌な予感がした。

「恭介えーーーーーッ！！」

鈴音はISを展開し、衝撃砲をフルパワーで発射した。

「ちよ、ちよつと待てえーーーーーッ！？」

死ぬ！ それは俺でも死ぬーーーーーっ！！？ と叫びながら思わず目を瞑る。

……何の衝撃も来なかった。それどころか痛みも。

ゆっくりと目を開けてみると……そこにはいつの間にかラウラが、ISを展開して間に入っていた。手を鈴音の方へと向けている辺り、
アキラギザンシュル衝撃砲をAICで相殺したのだろう。

ちなみに、肩にはレールカノンが無かった。

恭介は思わず安堵の息をつく。

「ラウラ、助かった。サン　むぐっ！！？」

瞬間、ラウラの顔が思いきり近くなった。

恭介は安心し過ぎて、ラウラの行動に気付けなかったらしい。

突如。

ラウラは。

恭介の胸ぐらを掴み、引き寄せ。

『キス』をした（唇に）。

.....。

！？！？！？

「お、お前は私の嫁にするっ！ 決定事項だ、異論は認めんっ！」「
恭介の頭が俺が金棒でガンダムだ！！ となっている中、ラウラ
はそんな事を言いおった。

恭介は何かツツコミを絞り出し、口に出す。

「よ、嫁？ 婿じゃなくてか？」

..... どうでも良い方だった。

「日本では気に入った相手を“嫁にする”というのが一般的な習わ
しだと聞いた。故にお前を私の嫁にするっ！」

「誰だそんなうそっぱちを教えやがったのはあッ！！ 今からぶつ
とばしにいつてやる！！」

思わず（キャラも軽く崩壊して）声を荒らげる恭介に、後ろから
肩に手を置かれた。

..... 何故かいる朱鷺戸沙耶だった。

「..... 恭介..... いっぺんしんでみる？」

「ひいつ！？」

思わず恭介ですら悲鳴を上げる、超冷えた声で沙耶は言った。冷
や汗が止まらない。どうにも止まらない。

思わず逃げ出した恭介は、教室から出ようと入り口の方へ走った。
が、

「..... シャル」

「恭介ってさあ、他の女の子の前でキスしちゃうんだね？　僕びつくりしたなあ」

「いや、あの……したっていうかされたんですが……とりあえずそのISをしまってくれ」

「い・や」

逃げた。

恭介は踵を返して教室を走り抜け、窓枠に足をかけて外に飛び出した！

瞬間、背中に衝撃砲が直撃した。

……窓の外で、一人の男の悲鳴（緑川ボイス）が上がった。

第14話「終結と喜びとまさかの悲劇」（後書き）

八卦龍は、知る人は知っているであろうゼオライマーの鉄甲龍のバクリです。ちなみに、八卦衆は出ません。

そういえば今更なんだけど、シャルロットにはロックオン・ストラトスのコードネームをあげたんだっけ。使う機会あるのかな？

さて、とりあえず。

第二章「貴公子＋ウサギ＋リーダー」また騒ぎ（笑）は完結です。
第三章は……まだ名前考えてません。

では、また次回！

短編1「邪見にあしらわれるとは……ならば君の視線を釘付けにするッ!!」

短編って言うだけあって結構短いです。五〇〇〇、いや、四〇〇〇文字もないんじゃないかな。下手したら二〇〇〇文字とかもありえたりして…。

あと、初のクリス力登場回です！

短編1「邪見にあしらわれるとは……ならば君の視線を釘付けにするッ!!」

……む。もう始まっているのか？

あー、どうも。クリスカ・ビヤーチェノワだ。今は近くにはないが、イーニア・ビヤーチェノワという子もいる。この子は……まあ何と言うか、妹みたいな感じ、だろうか。とにかく大切な家族だ。ああ、ソレスタル・ビーイングのみんなも家族……と言えなくもない、と思う。

それと、言うまでもないがキョウスケが好きな人間の一人だ。もちろんイーニアも。

前に一瞬だけ説明があつたはずだが、私はESP、つまり超能力を持った人間を造り出すための研究所で生まれた。どうやら私達は成功品……っていうとみんな怒るんだが、とにかく超能力が使える。その超能力が、リーディングとプロジェクト読心能力だ。この二つは共通で、私とイーニアがどちらも持っている。

前者はありきたりな物で、心を読む能力だ。だがまあ、戦闘にはこれほど使える能力はないだろう。相手の行動が分かるのだから。まあ、たまにキョウスケの様に頭では何も考えずに戦ってくるアホ変態もいるので、あまり過信は出来ないとこの前知った。

後者は言葉を伝えず、直接相手の頭にイメージを送り込む能力だ。ぶっちゃけて言うとなんかこんな能力があるのか分からないが、まあ戦闘では相手に多少の動揺を誘ったりする事は出来るかもしれない。使いようだな、まさに。

ああ、でもリーディングを使っても恭介がどの女を好いているとかタイプはどんなのとか全く分からないんだ。くそっ、これもアイツ束の言っていた『いのべーたー』とかいうのになったせいなのか？ いや、そもそも力に頼るのが間違っているのか……。

まあそんな事は今どうでも良いんだ。

そっ……あの変態の前ではッ!!

だと！ ミスター・ブシドーなどとふざけた呼び名で呼ばれるだけの事はあるという事が……！

チィっ、仕方ない！

「来いっ、チエルミナートル・アイン！！」

私が叫ぶと同時に、手首につけられていた腕輪が光り、私の体にI Sが展開される。

チエルミナートル

アイン

『S U - 37 U B ・？』。私がいた研究所で開発されていた私とイーニアの専用機を、C Bの連中が改造した機体だ。

動力には疑似G Nドライブを採用している。まあオリジナルは結構な数あるんだが、メンバーに一個ずつ、なんて言えるほどありはしない。作るのに時間がかかるからな、あれは。

だから私のチエルミナートル・アインと、イーニアのツヴァイには三つの疑似G Nドライブが搭載されている。武装もそれに合わせて大分変えられた。まあ私達はまだこの二機には乗ってなかったから、特に愛着もなかったし改造は別に構わなかった。おかげでかなり性能が上がったしな。

アインとツヴァイは、前者が中近距離特化、後者は遠中距離特化の機体となっている。私が切り込みイーニアが支援。まあ今まで通りだ。

「よく言った、クリスカアアアッ！！」

「何だ！？ 私が何を言っただんだ！？」

「来たまえっ、ブレイブウッ！！」

奴のI S、ブレイブが展開される。

あちらも疑似G Nドライブ搭載型だが、私のチエルミナートルよ
り性能は上。くっ、だが機体の性能差が勝敗を分つ絶対条件ではない！

リトルバスターズ？

私はチエルミナートルの出力を最大にして背中のネコ園の廊下を駆け抜ける。時折通行人が現れるが、そんな物は難なく避ける。が、後方で一々悲鳴が上がるのは何故だ？

「くっ、スピード自体はこちらが上回っているというのにつ！！」

「ああそつだ。認めよう。宣誓も矜持も、行動の源であるが、所詮は建前でしかなかった。この感情は誤魔化しようも無い。私、グラハム・エーカーは、この機体をもつてクリスカを追いかけられる事に、これ以上も無く　悦びを感じている……っ！！」

「改めて言わせてもらうが貴様は本当に正真正銘の変態だなッ！女を追いかけ回して悦びを感じているとは！　ていうかどう考えても会話が成り立っていないだろう！」

「だが、ブレイブの力で勝ち取った物は私の物ッ！」

「何を言っているんだ！？」

「あの時の決着はまだついていないのだよ、クリスカ。心ゆくまで踊り明かそうではないか、クリスカ。豪快さと繊細さの織りなす武の舞いによつてだ、クリスカ。そつだ、君は私のプリマドンナ！エスコートをさせてもらおう！」

「ッ！！」

叫ぶと同時に、グラハム・エーカーのブレイブの速度が上がる。バカなッ！　スペック状はブレイブがチェルミナートルで追いつくのは不可能とされているのにつ！？

「言つたはずだクリスカッ！　そんな道理、私の無理でこじ開けるとッ！！」

「チイツ、変態のくせに厄介な奴めッ！！」

「そつさッ！　私は変態だ！　いや、私だけではない！　男はすべてからく変態だアッ！！　そつとも！　君達が好いている少年ですら！！」

「キョウスケは変態ではッ！」

「それはそつだ！　私の様に常時変態を晒しているような男ではないからなあ！　だが！　男とは一度その理性というダムが崩れれば、誰だろうと男は変態となるのだ！　そつ！　あの女性のような顔立ちの直枝少年ですら！！」

「な、なんだと……ッ！？」

な、何だ？　何故私はこうも反応してしまう……！　所詮はド変

態の言う事だぞ！？

だが……奴の言う事が本当ならば、私が、いや、私とイーニアがその理性というダムを崩してしまえばアイツは……！

だが、どうすれば！？

「抱きしめたいなあ……クリスカッ！！」

「し、しまった！ ついいらん事を考えてしまったあー！！」

ガシッ！！ と、ブレイブの腕が私の腕を掴む。

そのまま押し倒してくるグラハム・エーカーによって、チエルミナートルが床に接触し、火花を上げながら引きずられて行く。

「まさに……眠り姫だ……！！」

その後……チエルミナートルが強制解除され、食堂に連れ戻された私はグラハム・エーカーに元気に挨拶とやらが出来るまで拘束された。

……悪夢だ。

ようやく解放された私は、先に帰っていたイーニアを抱きしめながら、ベッドに潜り込んだ……。

「邪見にあしらわれるとは……ならば君の視線を釘付けにするッ！」

……今日は眠れないかもしれない……。

短編1「邪見にあしらわれるとは……ならば君の視線を釘付けにするッ!」

グラハムファンの皆さん、ほんとにごめんなさい! 思い切り変態態言っちゃってほんとにごめんなさい!

クリスカファンの方々、しゃべり方等違ったらごめんなさい。

間章「八卦と白き牙と偽・革新者」（前書き）

先日……とんでもない事実が発覚しました。

イーニアって『ビャーチェノワ』じゃなくて『シエスチナ』じゃん……！

聞いた時はマジで？　って思っちゃいましたよ……。指摘してくださった京勇樹さん、改めてありがとうございます。……名前出して大丈夫かな？

で、ちよつとばかり考えたりしましたが……。

……元々『姉妹』って言ってるので、もうビャーチェノワで良くね？　って結論に至りました。

ごめんなさい！　思いきり面倒感が溢れ出てますけどごめんなさい！　指摘もしていただいたのに！

でも、もしマブラヴ知らない人とかが読んでくださっていて、「あれ、ビャーチェノワじゃなくなってる？　何で？」とか思われてもアレかなー、と思いました（今）。

言い訳臭いですが、どうかご容赦していただけると幸いです。

では、間章「八卦と白き牙と偽・革新者」をどうぞ。

間章「八卦と白き牙と偽・革新者」

ファントムタスク

亡国機業という組織がある。

古くは五〇年以上前から活動している、第二次大戦中に生まれた組織だ。国家によらず、思想を持たず、信仰は無く、民族にも還らない、故に目的も不明。存在理由も不確かでその規模も分からない。唯一分かっているのは、組織は大きく分けて運営方針を決める幹部会と、スペシャリスト揃いの実動部隊の二つが存在する事だ。

そんな亡国機業は……今、存亡の危機に立たされていた。

「クソっ！ クソっ！！ クソオオオオオッ！！ なんなんだ、なんなんだよお前らはああアーーーーーッ！！」

「オラオラオラあッ！！ どしたどしたどしたアッ！？ 元気がねえぞコラあ！！ 行けよフアングウッ！！」

「クッ……こっんのおおおおおおおおおおッッッ！！」

とある施設上空で戦っているのは二人の人物。

一人は、ロングヘアの口が悪い、IS『アラクネ』を駆る女。

一人は、肩まで伸ばした、あちこちに跳ねる茶色の髪をした、ISを駆る男。

男が叫ぶと同時、両腰に装備されたバインダーから、一〇機の牙の形状をした何かを射出した。『GNフアング』と呼ばれるそれは、ファンネル同様遠隔操作が可能な移動ビーム砲だ。唯一違うのは、先端部にビームサーベルを発生させ、敵機を貫く事も出来るという事だ。

高速で動くフアングを、女、オータム背中にPICを展開している装甲脚に装備された砲門で撃ち落とそうとするが、一発も擦る事すらしない。それがオータムを焦らせていた。

今、この周辺で戦っているのはオータムと男だけではない。彼女の恋人であるスコール・ミューゼルや、エムと呼ばれる織斑マドカ

ドガガガガガアアアアン！！ と、装甲脚が六機爆散した。

「ひゃっはははははははははは！　どうしたんだよお、最初の勢いはよお！？　こんなもんなのかあ？　亡国機業のスペシャリスト様って奴はよおおおおおッ！！」

「ひゃっははは！　ちよいさあ！！」

「あ、　あがぁああああああああああああああああああ
ああああッッ！！！」

男のISに装備された大剣、『GNバスターソード』がオータムの左腕と左足をアラクネもろとも斬り落としたのだ。

突如、アラクネの通信回線が開いた。

「あ、ああ……う、腕が……足があ……あ、あたしの……腕……」

「オータム！　しっかりしなさい！！　クツ……邪魔をしないでツ

「クツ……！」

「クツクツク……スコールとか言う女も大変みてえじゃねえか。あつちは結構強えんだろ？ あつちとやりたかったぜえ、IS同士のとんでもねえ戦争つて奴をよお!!」

「く、そ……」

失血のせい意識が朦朧とする。

次の瞬間、オータムの意識はもうなかった。

* * *

『オータム！ 返事をしなさい！！ オータムッ！！』

「ちっ……あの女やられたか……」

「ははっ、まああの程度の人が、彼を相手に数十分相手に出来たのだから誇れると思うけどね」

「ふん……」

彼女、エムはイギリスから強奪した実験機体、サイレント・ゼフイルスを装備しオータム達の付近で同じように敵と相対していた。

彼女の目の前にいる敵 リヴァイブ・リバイバルと名乗る、声から判断して若干男っぽい人間。容姿を含めて判断するとなると、女とも言えなくもないのだが。

「……貴様ら、何が目的だ？ 一体何者なのだ？」

「前者に答える気はないから、あえて後者に答えさせてもらおうかな。僕たちは」

人類の革新だよ。

そう、

何の躊躇いもなく答えた。

「ほう……とんだ妄信者もいたものだ」

「何も知らなければそう言うのも仕方が無いかもしれないけどね」

リヴァイブは愉快そうに笑う。

……正直、エムとしては亡国機業など、どうなろうと知った事ではない。元々組織に対し従順でもなかったし、己が目的さえ達成出

来るならぶつちやけどこでも良い。たまたま亡国機業がそれに適していて、たまたま自分がそこに所属していた。ただそれだけだ。

自分には監視用のナノマシンが注入されているが、どうもいつの間にかやらそれが働いていないらしい。どういう事なのかはさっぱりだが、エムには好都合。別にエムはリヴァイブへの戦意はないのだ。「オイ」

「ん？　なんだい？」

だから　正直、自分の目的が達成出来るのならコイツらの仲間になっても何の問題も無い。

*　*　*

スコールは焦っていた。

先程、彼女の恋人であるオータムからの連絡が途絶えた。今彼女と相對しているヒリング・ケア、ブリング・スタビティ、デヴァイン・ノヴァと名乗る三人を相手にする彼女は、なかなかオータムの安否を確認しに行けずにいた。

三人のISはこの国にもないものだった。

フルスキン
全て全身装甲で、一機はISなのかと疑ってしまうような物だった。

ヒリングのISは遠距離戦用ISらしく、手に持った巨大なランチャーで高出力のビームを撃ってくる。

ブリングのISは接近戦用のISのようで、たまに撃ってくるビームのバルカン以外撃ってこないし、展開もしない。主に拳や肩に設置された突起に赤い膜のような物を形成して殴ってきたり、両指先から発生する爪状のビームサーベルで攻撃してきたりしている。

そして問題なのが、デヴァインの駆る謎の機体。

オータムのアラクネの様に人形ではないが、こちらは人形の部分など一欠片もなかった。

アームのような物を持ち、その先端にはクローが装備されている。

外観は新型戦闘機と言えばもしかしたら通るかもしれない、と言った風だ。これをISとして装備していると、正直言って信じられない形状だった。

役割が決められて作られているようで、唯一の共通点は、何の意味があるかは分からないが、赤い粒子を放出している所だけだ。

はつきり言って一体一体であるならば、これほど手こずる事も無かっただろう。が、こちらよりも性能が高く、三体揃い、その上完璧なコンビネーションまで取ってくる彼らには、さすがのスコールでも少しばかり押されるのも無理は無かった。

「クッ……こんな奴らの相手してられないのに……っ！」

「落とす……ッ！」

ブリングが爪先にビームサーベルを展開させ、オータムに突っ込んでくる。後方からはブリングの砲撃による支援が迫り、オータムの背後からはデヴァインが機首の高出力ビームを放ちながら、クローアーム内に内蔵したミサイルを撃ち、高圧電流を流してくるアンカーを両クローアームから射出した。さらにそのアンカーから四機のアンカーが飛び出す。

スコールは、ほぼ一斉に迫り来る高出力ビームを紙一重で避け、飛び出した四本のアンカーを高速軌道によって避けつつ元々の一本を斬り落とした。

そんな彼女に迫るブリングのビームサーベルを避けて胴体を蹴り跳ばし、追尾してくるミサイル群には、なんと逆に突っ込んで行き、その隙間を通り抜けた。それを無理矢理追尾しようとしたミサイル達がぶつかり合い爆散して行く。

「邪魔よッ……！」

瞬間、急接近したスコールのISの右腕が、絶対防御すら無視してデヴァインの腹をブチ抜いた。

「ぐ、ガアアアアアアアアアアアアアアアッ!?」

「デヴァイン……ッ……！」

「エム……ISによる殺しをあなたには禁止しておいてなんだけど

……今はやらせてもらっわ……ッ！」

「う、嘘でしょ……？ な、なんでアンタなんか……それを……ッ！？」

ヒリングが指差す先。スコールのISの背中に装着された箱形の物から放出される赤い粒子。

「……棗恭介、唯一ISを使える男。いえ、もう唯一ではないわね。オータムの目の前にいたようだし。彼が使っているISから放出される緑色の粒子を何とか再現しようとした結果がこれよ。現物入手は、CBの存在を警戒して出来なかったけど、何か特殊な動力であるのは分かった。まあ最終的に、トポロジカル・デیفエクトを用いているらしいことは分かった。でも完全再現には私達では一〇年だかかってしまう。だから擬似的に造り出してみたの。完全に同じ物かは知らないけど、あなた達のも似たような物でしょう？ おそらく性質も」

疑似GNドライブによって生成されたGN粒子を利用した装備は、どんな出力だろうと絶対防御を貫通する。どれだけリミッターをつけようが、ビームスプレーガンの威力で、装甲さえ貫通すれば相手の体にビームは直撃する。

彼女たちはオリジナルを持たないが故に知る由もないが、実はオリジナルのGNドライブを使用しても同じ性質を持つ。が、こちらはどつという訳か専用のリミッターさえかければ、非殺傷、絶対防御を貫通する事なく攻撃出来る。逆に疑似GNドライブにそれをかけても、何故か非殺傷にはならない。現在、東とカタギリがなんとか出来ないかと検討中ではあるのだが。

「まさか……人間ごときが疑似GNドライブを完成させるなんて……」

「正確には粒子の生成に成功しただけで、ドライブ化はまだね。おかげでまだこんな……そうね、GNコンデンサーとでも言おうかしら。これだけしか使えないのだけれど……」

デヴァインに突き刺した腕を抜かずにそのまま振り上げた。デヴ

アインの体が、脳漿と血をぶちまけながら墜落して行く。

「あなた達をただ殺すだけなら余裕だわ」

スラスターに火を吹かせながら、スコールはヒリング達に接近し

『それは少々困るな』

その腕をガシツ、と掴まれた。

「なっ……！？」

「悪いね。でも、まだ彼らをこれ以上やられる訳には行かないんだ。計画に支障が出てしまうからね」

スコールの目は、その機体の頭部アーマーに釘付けだった。見覚えのあるフェイスアーマー。V字のアンテナを額につけたそれは

「ガンダム……！」

「そうさ……」

赤と白のペイントカラーの両腕に一つずつ疑似GNドライブを装備したガンダムは、表情すら見えていないというのに、自信が満ちあふれて見える表情をして、

「このガンダムこそ……この機体こそ、人類を導くガンダムだ！」
叫んだ。

そのまま掴んだ腕を引き寄せ、ガンダムフェイスが文字通り目と鼻の先にまで顔を近づける。

すると、何故か頭部アーマーを解除しだした。

……エメラルドグリーンの髪をした男にも女にも見える顔をした彼は、フフっ、と微笑み、

「すまない、彼らは些か目的を忘れていたようだね。僕はリボンズ・アルマーク。僕たちは君を、いや……君達をスカウトしてきたんだ」

そんな事を……言った。

＊ ＊ ＊

……薄暗い部屋の中、唯一光を放つモニターの光が眩しい。

そんなモニターの前で、ライティングカウント閃光の伯爵と周りからは呼ばれている、

『八卦龍第一執行部隊白き牙』ホワイトゥアングの部隊長である男と、そんな男について行く事を誓った女が二人して立っていた。

モニターにはスコールやオータム達と相対しているリボンス達が映っていた。

「……………」

「ゼクス、やはり気に入りませんか？」

ゼクスと呼ばれた男は、いや、と頭を振った。かぶり

「私はトレーズの様に純粋な騎士にも、ヒイロのような戦士にもなれん。なれるのは……ただ目的のために血塗られた運命を行く罪人だけだ」

「……そのトレーズ様ですが、近々動くそうです」

「ほう？ 目的はヒイロか？」

「おそらく」

そうか……、とゼクスは呟いた。

かつて彼を追いつめ、対等に戦った少年がいた。自身をヒイロ・ユイと名乗り、天使のような機体を駆る少年は、今まで何度かぶつかったことがある。あちらがどう思っているかは分からないが、ゼクスにとってはもはや宿命の相手となっていた。

「ゼクス……？」

「……いや。なんでもない」

「良いのですか？ ヒイロ・ユイはあなたの」

「良さ」

あの男は私以外には倒されてはくれないだろうからな。殺されて

そう。

焦る必要も、慌てる必要も無い。

ただそれが事実。

自分が彼以外に倒されてはやらないのと同じように。
殺されて

彼もまた、自分以外には倒されてはくれない。
殺されて

一度地に落ちようと、必ず再びその翼を羽ばたかせ、彼以外の者の
のどくひ喉頸を掻き切るだろう。

それが必然。

それが運命。

ゼクス ヒイロ
彼と彼は、どちらかがどちらかを殺さない限り止まりはしない。
それが ことわり 理。

ゼクスの口は、楽しそうに、嬉しそうにつり上がっていた。

間章「八卦と白き牙と偽・革新者」（後書き）

パーフェクトにオリジナルルートです。

って言うても、原作沿いにそのルートを行くわけだけど。

さてさて…この物語はいつたどこに向かうやら…

第15話「夢と夫婦とリーダーと二人っきり」(前書き)

……恭介的接し方とか反応とか、なかなかイメージし辛い。今更
だけどね。

でも頑張ります！

第15話「夢と夫婦とリーダーと二人っきり」

「ごめんね、恭介。手伝ってもらっちゃって」

「気にするな。これくらいなんでもないさ」

輝く夕日が差し込む放課後の廊下。

恭介とシャルロットは、今月の学校行事である臨海学校について書かれているプリントを持って、二人並んで歩いていた。

「でも良かったの？ 今日みんなと予定あったんでしょ？」

「それこそ気にする事じゃない。アイツらと遊びに行くのも楽しいが、シャルと二人きり、つても同じくらい楽しいからな」

「ふえ？ ひゃっ！」

唐突に恭介の右手がシャルロットの腰にまわされ、抱き寄せられた。そのせいでついプリントを落としてしまったが、そんな事は頭には無い。

恭介は残った左手でシャルロットの顎を持ち上げ、夕日のせいか、それとも本当か、若干頬を紅潮させながら、

「好きな娘といるのはみんなといると同じくらい楽しいってことさ」

「きよ、恭介……」

夕日が照らす廊下で、二人を映す影が段々と近づく。

そして……。

見えたのは寮の天井だった。

「あ、れ……」

まだ覚醒しきらないばーとした頭で状況確認をする。いるのは、先日変わった部屋のベッド。当然ベッドの上には一人で寝ている。ぶっちゃけプリント類を恭介と一緒にどうこうした記憶が無い。

数回まばたきし、そうした事が頭を流れて行く中、理解した。

「夢……」

深く深く深いまさに深海二〇〇〇〇マイルくらい超えそうなほどのため息を一つく。

（ああ……せめてあと一〇秒くらい見ていれば……）

そう思うと、再び夢の中身が脳内リプレイされた。

瞬間、シャルロットの顔が真っ赤に染まる。

（が、学校の廊下でなんて……）

胸に手を当てると、はつきりと早鐘を打っているのが分かった。

（ぼ、僕は何を考えてるんだろっね……）

あの日以来、本来の性別に戻ったシャルロットは、当然のごとく別々の部屋になっている。そのせいなのかそうでないのか、一週間に一、二回は同じような夢を見て、いないと頭では理解していても隣にある同室となったラウラのベッドに目を向けてしまう。

と、いつも通りに目を向けたシャルロットは、「あれ？」と声を漏らした。

その肝心のラウラがいなかった。もつと言えばベッドを使った形跡がない。

「……まあいいや」

シャルロットはラウラの所在よりも夢の続きを優先し、また見れるよう祈りながら横になる。

（でもせっかく夢なら、もうちょっとエッチな内容でも僕は全然構わな　　）

「な、何を言ってるんだろっね！　僕はっ」

再び真っ赤になった顔を隠すように頭まで布団をかぶり、もはや手を当てずとも音が聞こえるほどに高鳴った鼓動を鎮めようと苦心するシャルロットだった。

ちなみに。

「ひゃ、ひゃあああああああああああッ!!?」
一夏も同じような夢を見て、真っ赤になっていた。

……と、シャルロットと一夏がそんな事をやっている頃、一人部屋と化した恭介の部屋で、当然寝ている恭介は、ゆっくりと目を覚ました。

「ん……」

いや、正確には目を覚ましたというより、ベッドでもぞもぞと動く何かに起こされた。

覚醒しつつある頭の中、無意識のその正体を見極めようと、ベッドの中に手を突っ込む。

ふにゆっ、と柔らかくてすべすべした感触が指に伝わった。

「ん……」

……一人部屋のはずなのに、何故か恭介以外の声が聞こえた。改めて見ると、今触っている辺りが膨らんでいる。

嫌な予感がした。

がばっ！ と、思いきり布団を捲った。

全裸のラウラがいた。

「んなあッ!?!」

思わず後退った恭介は、ドスン!! と音を立てながらベッドから転げ落ちた。

ば、バカな！ やらかしたか？ やらかしたのか!?! んな訳あるかッ!! そんな記憶は ッ!! と、いつもの冷静さを欠き、混乱し出す恭介。

と、ラウラがもぞりと上半身を起こす。

「ん……何だ……? 朝か……?」

「な、なんているラウラ……? ていうか前を隠せ!」

「おかしなことを言う……夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ」
「いや、そりゃそうだが……って、だからって毎日全裸では過ごさないぞ!? しかも包み隠さぬものって体くらい基本包み隠すから!」

が、ラウラは何の反省もせずに、

「日本ではこういう起こし方が一般的だと聞いたぞ。将来的に結ばれる者同士の定番だと」

「恋愛マンガじゃないんだからそんな一般的な起こし方はねえっ!」
いや、恋愛マンガにも無い。

恭介は肩で息をしつつ、気を落ち着けようと深呼吸を一つする。

「落ち着け……っ、いつも冷静でクールな俺はどうした……!」

「冷静とクールってあまり変わらなくないか? 二つ一緒に言う意味が無いと思うのだが……」

「細かいことは良いんだっ。とにかく、とりあえず服着ろ。とつとと

食堂行くぞ」

「うむ。嫁がそう言うなら仕方が無い」

「やっぱり俺は嫁なのか……」

朝っぱらから若干疲れてきた恭介だった。

* * *

「あ、恭介。お、遅かったね。ラウラちゃんもおはよ」

若干遅い時間に食堂についた恭介とラウラを出迎えたのは、食堂から出て行くこうとしている一夏だった。恭介を見た一夏は、朝シャトルロットと似たような夢を見たせいか若干頬が紅潮している。

ちなみに、現在一夏とラウラはそこそ良い関係を築いている。

正直に頭を下げて謝った甲斐があつて、箒達もどうやら許してくれたようだ。一夏も事情が事情だけに、特に何か言うでも無く普通に許した。が、それでは納得がいかない、とラウラが食い下がってきた。

と、言う訳でつい先日、お仕置きと称して着せ替え人形化させていたようだ。後に凄く可愛かった！ という感想をいただいた。

「今から朝ご飯？ 急いで食べた方が良いでしょう？」

「分かっている」

「ああ。とつとと食べるさ。じゃあまた後でな」

「うん、後でね」

言って一夏は食堂から出て行き、教室へと向かった。

恭介とラウラは適当に料理を受けとって空いている席につく。

「教室までの移動時間を考えると食べる時間はあまり無いな……」

「私としては嫁との食事を楽しみたいのだが……教官に殴られるのは好ましくない。……教官には失礼だが、あれは人間の受けるべき攻撃ではない」

たたり、と冷や汗を垂らすラウラ。なるほど、恭介は今まで気付かなかったがどうやらいつの間にかやら一撃貰っていたらしい。無意識なのか、頭頂部をさすっている。

それから二人は朝食を素早く食べ終え（経過時間3分）、早く教室に向かおう、と立ち上がる。

すると、

「わああっ！ ち、遅刻っ……！ 遅刻するっ！」

どたばたと騒がしく食堂に駆け込んできたのはシャルロットだった。余っている定食から一番知覚にあった物を手に取り、立ち上がった恭介達に気付いてばたばたと二人のいた席に隣に座る。

「寝坊か？ 珍しいな」

「う、うん。……その、二度寝しちゃったから……」

言って、急ぎめに朝食を食べ始める。

なんとなく見捨てるのもアレだったので、一応恭介達は待っている事にした。

数分して「ごちそうさまっ」と、シャルロットが立ち上がる。

瞬間、キーンコンカンコンとチャイムが鳴った。

「！ 今のは予鈴だな……。急ぐぞ！」

走り出した恭介に、シャルロットとラウラが続く。

本鈴がなるまであと二分、と言った所で、生徒玄関へと到着するが、何故か恭介はそこを通り過ぎた。

「ちよつ、恭介!？」

「おそらく嫁には何か考えがあるのだろう。行くぞ」

「え!？ ま、待つてよお！」

……と、ついに行つた先には、

「シャル！ ラウラ！ 掴まれ!!」

何故か屋上から下ろされているロープを掴んだ恭介がいた。

恭介の言葉にラウラは躊躇い無く、伸ばす腕を無視して恭介に抱きついた。シャルロットも若干躊躇いながらも恭介の手を取る。

それを確認した恭介は、残った手に持ったスイッチを押した。

グンっ！ と、ロープが一気に引き上げられ、三階、恭介達の教

室の窓に到着した。中のクラスメイト達がビクッ、と驚いた物の、

ああまた棗君かぁー、と一息つく。

三人が教室に入り終えると、ちょうど本鈴がなった。

「ギリギリセーフだな」

「うむ」

「び、ビックリしたよ……」

「おう、朝からご苦労な事だが窓から入ってくるなと言っているだろうバカ者」

スパアンスパアン！ ひらりバシッ！

「チッ……受け止めたか」

「まさか二連撃で来るとは少しばかり思わなかった」

「クソっ、お前相手に同じパターンを連続で使っても通用せんからな。次はどうするか……」

ブツブツと言いながら教壇の方へと歩いて行く千冬。

……最近、千冬が恭介に出席簿アタックを当てる事に生き甲斐を感じているような気がする、と一夏は思うのだが、それを言ったらきつと連続出席簿アタックが飛んでくる気がするので、黙っておく

事にする。

すると、千冬が教壇前でふと振り向き、

「ああ、そうだ。棗とデュノアは放課後教室を掃除しておけ。ボーデヴィツヒは私の手伝いだ。二回目は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」

言い終えると、そのまま教壇につく。

「さて……今日は通常授業の日だったな。IS学園生とはいえお前達も扱いは高校生だ、赤点など取ってくれるなよ？」

実はIS学園にも、IS関係の授業よりか少ないが一般科目の授業もある。そしてテストは中間がなく期末だけしかない。ここで赤点を取ると、夏休みを補習で過ごさなくてはならない。

「それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。三日間だけとはいえ学園を離れる。自由時間もあるが羽目を外し過ぎないように。……特に棗、お前はな」

「善処しまーす」

「はあ……まったく……。では、これでホームルームを終了する。各人しっかりと勉強に励め」

ちなみに、真耶がいなのは校外実習の現地視察に行っているかららしい。

さっぱり存在していない事すら気がつかなかった恭介を以外のリトルバスターズは、心の中で真耶に謝っていた。

* * *

放課後。言われた通り恭介とシャルロットは教室の掃除を。ラウラは千冬の手伝いに向かった。

恭介とシャルロット、二人以外誰もいない教室は夕日に照らされている。そんな中シャルロットのような美少女と二人きり……案外このままラブコメ突入！なんて事になるんじゃないか？と恭介は掃除しながら考えていた。

と、そんな思考を捨て、シャルロットの方を向き、

「悪いな。俺に付き合わせたばかりに」

「うっん、普通に上つても遅刻だったからあんまり変わらないと思う。だから気にしなくて良いよ」

言つて、近くにあった机を持ち上げようと手をかける。が、

「ん、んんっ！」

さっぱり持ち上がらなかった。どうも、教科書を全て置きっ放しにしてあるらしい。

「無理すんな。俺がやるよ」

「へ、平気だよ。一応これでも専用機持ちなんだし、体力は人並みに」

瞬間、重量に負けて足を滑らせた。恭介が咄嗟に後ろから体を支える。そのせいで、まるで抱きしめているかの様な格好になった。シャルロットの頬が紅潮する。

「あ……………」

「大丈夫か？」

「う、うん……………あ、ありがとう……………」

ゆっくりと恭介が手を離すと、少し残念そうな顔をする。

「つと、確かに少し重いな……………。シャルは他のを頼む」

「う、うん」

頷きながら、さっきの机の隣にあった机を持ち上げ、運んで行く。未だに少し頬が熱い。更に、バクバクと耳に聞こえる心臓の鼓動がシャルロットの思考を掻き回している。

そんな中、思い出すのは今朝の夢。よくよく考えてみれば、今の状況は微妙に似ている。その事実が更にシャルロットの鼓動を強くしていた。

「あ、そうだ。シャル」

「ひゃ、ひゃいつ!？」

思わず声が裏返った。

「……………大丈夫か? 思いきり裏返ってたけど……………気分でも悪いのか

？ 顔赤いぜ」

「だ、だだ、大丈夫っ！」

「ますます赤くなっただが……。本当に大丈夫か？」

言って恭介は、その手をシャルロットの額に当てた。

ひゃっ、と可愛く悲鳴を上げ、顔を真っ赤にする。

「……オイ、大分熱いぞ。熱あるんじゃないか？」

「だ、大丈夫だよっ！ ゆ、夕日で温められてるだけだからっ！」

「いや、結構無理があるぞそれは……」

あまり無理すんなよ、と言い残し、再び作業に戻る。若干名残惜しい物の、正直にそうと言うのは少し恥ずかしかった。

すると、あ、と思い出したように、

「そうそう。話があったんだった。今さっきの事なのに忘れてた」

「な、何？」

「ああ。ちよつとな」

……付き合ってくれないか？

「………………。………………。え？」

時が 止まった。

第16話「デートとデートと一日デート」

「お、来たな……って、何そんな不機嫌そうな顔してるんだ？」

日曜日。IS学園も休日となっているこの日、シャルロットと恭介は学園の正門で待ち合わせをしていた。

恭介は待ち合わせ時間の一〇分ほど前に来ていた。待ち合わせ時間までの短時間に二、三回に逆ナンパされる事もあったが、適当にスルーしているとシャルロットがやってきた。のだが、待ち合わせ時間ジャストに来たシャルロットは、何故かむすつ、とした顔をしていた。

「別に。自分の胸に聞いてみたら？」

「……何怒ってるんだ」

「別に怒ってないよ」

「いや、どう考えても」

「怒ってないっ!!」

「そ、そうですか……」

あまりの気迫で迫ってくる物だから、思わず圧されてしまう。何かした覚えも、何か怒るような事を言った覚えも無いのだが、どうも自分に非がありそうな感じがした。

「あー、シャル？」

「恭介」

「なんだ？」

「乙女の純情を弄ぶ男は馬に蹴られて死ぬと良いよ」

「……それ、俺に言ってるのか？」

「ふんっ」

前言撤回。ありそう、ではなくあるようだ。

「はあ……どうせ、どうせね……そんな事だろうと思ったよ……。でもあんな風に言われたら普通はそう思ったって仕様がないうね……そう、僕は悪くない。全部恭介のせい……本当、馬に蹴られて地

獄に堕ちれば良いのに……」

……対応は急を要するようだ。

(さて……どうするか……)

正直に謝る、というのも一つの手だが、自分の何が悪かったのかさっぱり理解せずに謝る方が相手を怒らせる事もあることにはある。ならばここはあえて流し、少しばかり卑怯ではあるがこちらで鎮めさせてもらう事にした。

謝罪については……気付いた時か、教えてもらった時にでもする事にする。

「それにしても……」

「……………」

「服、似合ってるじゃないか。すごい可愛い」

と、服装を見ながら言う。冷や汗が出た。

「か、可愛い！？ 本当に！？」

「あ、ああ。俺は基本嘘はつかないぞ」

「そ、そっか……」

「ご機嫌取りである事は違いないが、実際可愛いのは間違いない。

ふと、再びシャルロットの服装に目をやる。

……普通にIS学園の制服だった。

が、そんな事はお構い無しに何やらブツブツと呟いているシャルロット。本気で冷や汗物だったが、この一時を乗り切る事は出来たようだ。可愛い、に反応してくれたのかもしれない。少しばかり罪悪感の残る対策方法だったが、それに関しては今日少しずつ償っておこう。

さて、と恭介はシャルロットの手を一方的に握る。

「ふえ！？」

「そういう関係でもないけど、一応デートなんだ。エスコートさせていただきますしうか、お姫様」

「お、おお、お姫様あっ！？」

「ははっ、行くぞ、シャル」

「あ、ちょ、ちょっと待ってよお！」

さっきまで不機嫌顔だったシャルロットの顔は、今や赤い。が、それでも嬉しそうに笑っているのだった。

……所少し変わって恭介達から少しばかり離れた地点。正確に言えばぼぼ真後ろ。圧倒的な違和感を醸し出す草の塊があった。どう考えてもそんな所にあるはずの無いその草の塊からは、どす黒いオーラが漏れている。

キラーン、と草の塊から何かが光った。

「……ねえ」

「なんですの……？」

「……あれって……手え握ってない……？」

「握ってますわね……」

ボスつ、と音を立てて声の主が草の塊から顔を出す。

……現れたのは目からハイライトを消し、不気味な笑みを浮かべる鈴音とセシリアだった。二人の事を見た丁度周りにいた生徒達は、真っ青になつて顔をそらす。

鈴音は手に持っている、ストロー付きの牛乳パックを握りつぶした。当然、ストローから中身が飛び出す。

「そっかぁ……見間違ひでもなく白昼夢でもなくて……やっぱりそっか……」

突如目を見開き、更に不気味な笑顔を浮かべて右腕に甲龍シエンロンを部分展開し、

「よし……っ、殺そうー!!」

と、満面の笑みで言った。

すると、背後から「ほう、楽しそうだな」と、聞き覚えのある声をかけられた。

声の主は、

「ラウラさん！」

振り返る二人は、警戒の色を示す。が、気にした素振りもなくラウラは口を開く。

「そう警戒するな。今の所お前達に危害を加えるつもりは無い」
「信じられるのですかっ！」

当然と言えば当然なセシリアの言葉に、しかしラウラは何を思うでも無く「そうか」と一言。そして二人を無視し、どこかへ歩いて行く二人に視線を向ける。その二人に向かって、唐突に足を進め出した。

それを鈴音は思わず手で遮る。

「ちよつと待ちなさいよ！」

「どうするつもりですの!？」

「決まっているだろう、あの二人に混ざる。それだけだ」

淡々ととんでもない事を告げたラウラに驚きを隠せない二人だが、しかしそれでもラウラを引き止める。

「未知数の敵と戦うには、まず情報収集が先決でしょ！」

「そうですね。ここは追跡の後、^{のち}二人の関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきですわっ！」

うんうん、と鈴音が頷く。

目を閉じてしばし考え込むラウラ。数瞬して顔を上げると、

「なるほど……一理あるな」

と、同意の意志を見せた。

頷きあう三人は、恭介とシャルロットの歩いて行った方に再び目を向ける。

……遠くに見える二人は、相変わらず仲睦まじく手を繋いでいた。鈴音とセシリアはこめかみに青筋を浮かべながらも、追跡を開始するのだった。

「……ところで一夏さんは？」

「あ……伝え忘れてた」

* * *

恭介とシャルロットは駅前のショッピングモール、『レゾナンス』
にやってきていた。

交通網の中心でもあるため、電車、バス、タクシーのそりい踏み
の上、市内のどこからでもアクセス可能、逆もまた然りと来る場所
だ。

中身もなかなかの物で、和洋中揃った店舗に、安物から超一流ブ
ランドまで存在する。当然、老若男女対応可能なここ、レゾナンス
に無いのならば、市内のどこに行っても無いとまで言われるほどの
凄さ。

「うわああ……！」

あつちを見てもどつちを見ても様々な物が売っているレゾナンス
内に、目を輝かせるシャルロット。そんな微笑ましい光景を見なが
ら、恭介も適当に見回す。

すると、ある物を見つけた。

「？ どうしたの恭介」

「悪いシャル、ちよつと先に行つてくれ。ちよつと別の買い物が
あるんだ」

「別の買い物？ みんなに何か頼まれた物でもあるの？」

「似たような所だ。すぐ追いつくからさ」

恭介達から少し離れた場所では、赤髪の男女（おそらく兄妹）が
歩いていた。男は両手に大量の店の紙袋を持ち、女は周りを見渡し
ながらまだ何か探している。

男はさすがに疲れたのか、若干肩で息をしている。

「しっかり持つてよお兄い。落つことしたら承知しないんだから」

「いくらなんでも買い込み過ぎじゃねえ……？」
前を歩く妹、五反田蘭に疲れきった顔で男、五反田弾は言う。
すると蘭は手を握りしめながら振り返り、弾を睨みながら言う。

「中三の夏は特別なのよ。プール用水着、ビーチ用水着、勝負用水着、ウルトラ勝負水着、超・ウルトラ勝負水着！ 各種取り揃えて、いざって時に備えないと！」

「いざって時が何だって？」

突如蘭の背後から声がした。二人にはメチャクチャ聞き覚えのある声。

「はい？」と蘭が振り向いた先には、何やらリボン付きの箱を持った我らがリーダー、棗恭介がいた。

瞬間、叫びながら顔を真っ赤にしたりした。

「恭介！ お前も買い物か？」

蘭の後ろにいた弾が言う。

ちなみに、二人は恭介がIS学園に通い始めてからすぐに顔を出したので、帰ってきた事は既に知っている。

恭介は手に持った箱をポケットにしまいながら、「まあな」と返答した。

「そっちは凄い量だな……全部水泳グッズか？」

「ああ。こいつが^蘭お前に見せつけるんだ、って気合い入ってぐぶはあッ……！」

後ろ蹴りで蹴り跳ばされた。

「えっと……アイツは大丈夫か……？」

「大丈夫ですつ、殺しても死にませんから！」

「普通に死ぬわーっ！」と、後ろから叫び声が聞こえるが、蘭は無視して恭介を輝かせた目で見つめる。

「えっと、恭介さんも水着を買いに？」

「あ、ああ。臨海学校が近いからな」

「くっ……そうと分かっていれば、恭介さんを選んでもらうんだっ
た……！」

「ん？ なんだって？」

「なんでも無いです！ そうだっ！ 私、来年は恭介さんの後輩になるんですよっ！」

「って事は、IS学園を受けるのか？」

「はいっ、第一志望です！ よろしく願いしますね！」

「そうか……受験勉強頑張れよ」

「はいっ！ ありがとうございますっ！！ えへへ……えつとお、お兄いったらどこ行っただらあ？」

瞬間、突如走って来たシャルロットに手を掴まれて連れ去られた。
「恭介っ、ちよつと来て！」

「お、おい！」

……………。

「本当にどうしようもないお兄いで」

「あれ、恭介は？」

「えっ？」

気がつけばいない恭介を見た蘭は、何故か弾を蹴り跳ばすのだった。

* * *

連れ去られてきた恭介は、女性用水着売り場に引っ張られる。

そのまま何故かシャルロットは恭介と一緒に試着室に入り込んだ。

さすがの恭介も予想外の行動に動揺を隠せない。

「！？ しゃ、シャル！？」

が、当の引きずり込んだ犯人は閉めたカーテンを若干開けながら外に目を向け、何やら呟いている。

「うう……どうしてここに鈴音やセシリア達が……」

耳を澄ますと、外から『アイツらどこに行ったの！？』『まさか、

わたくし達の尾行に気付いた……！？」などと、どう考えても鈴音とセシリアの声が聞こえてきた。

やっぱりアイツらだったのか……、と尾行の存在に気付いていた恭介は、一人嘆息する。

尾行グループの一人、ラウラは、周りにある水着達を見て驚愕していた。

「……これが全て水着か……この世にはこんなに様々な水着があったのか……」

すると、右の方から「しっかり気合い入れて選ばなくっちゃねー！」と、他の女性の声がした。ふと視線をそちらに向けてみると、二人の女性が水着を選んでいる所だった。

「似合わない水着を着ていたら、彼氏に一発で嫌われちゃうもん！」
「他の事が全部一〇〇点でも、水着がカッコ悪かったら致命的だもんねー！」

瞬間、ラウラに銃弾で撃たれたような衝撃が走った。

ラウラはすぐ様携帯を取り出し、黒ウサギ部隊の副隊長へと電話をかける。

「クラリツサ、私だ。緊急事態発生！」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ隊長。何か問題が起きたのですか？」

クラリツサのその言葉に、皆一斉に彼女の方へと視線を向ける。

「う、うむ……例の棗恭介の事なのだが……」

「ああ……織斑教官の知り合いで、隊長が好意を寄せているという彼ですか……」

「そうだ。お前が教えてくれた所の……いわゆる私の、“嫁”だ！ラウラは続ける。

『実は今度、臨海学校と言う物に行く事になったのだが……どのよ

うな水着を選べば良いか、選択基準が分からん。そちらの指示を仰ぎたいのだが……」

クラリツサは一瞬の間も開けずに、「了解しました」と返した。「この黒ウサギ部隊は、常に隊長と共にあります。ちなみに、現在隊長が所有しておられる装備は……？」

『学校指定の水着が一着のみだ』

瞬間、クラリツサは目を見開き、

『何をバカな事をッ！！』

唐突に叫ぶクラリツサの声に思わず携帯から耳を離してしまう。

驚きを隠せぬまま、再び耳を当てる。

『確か、IS学園は旧型スクール水着でしたね……ッ！？ それも悪くはないでしょう』

だが……しかしそれでは……ッ！！ と、何やら熱弁している。どうやら何か大変な事態なようだ。ラウラはそれでは……？ と息をのんで返答を待つ。

正直、別にそれでも良いとは思うのだが……しかしクラリツサの答えはその考えを根底から覆してくる物だった。

『イ口物の域を出ないッ！！』

「ッ！？」

『隊長は確かに豊満なボディで男を籠絡する、というタイプではありません。ですが、そこで際物に逃げるようでは、“気になるアイツ”から前には進まないのですッ！！』

何やら携帯の向こうで「さすが黒ウサギ部隊の副隊長！」「伊達に日本のアニメやマンガを愛好してはおられないっ！」と騒いでいるが、さっぱりラウラの耳には入っていないかった。

焦った様子でラウラは、「ならば……どうする……！？」と、ク

ラリッサに縋るように問う。

ふっ、と携帯の向こうで彼女が笑った。

『私に……秘策があります……！』

なんとなく　クラリッサの目がキラーン、と光った様子がイメー
ジされた。

カーテンの中から鈴音達を見ながら、見つかったら絶対邪魔される……ッ！　と、冷や汗をかいていた。無論、後ろにいる恭介も別の意味でだが。

「あー……シャル？」

「良いからとにかくここにいてっ。すぐに着替えるからっ！」
「！？」

突然腰のベルトを外し、スカート兼上着となつてゐるそれを脱ぎ去った。中から出てくるのは青いリボンと真っ白なブラウス。

反射的に恭介は後ろを向いた。

恭介の後ろで、シャルロットは真っ赤になっている。

（うう……勢いでこんな事しちゃったけど……どうしよう……！）

（さ、さすがのおにーさんでも突然着替え始めるとかは想像出来なかったぞ……！？　ど、どうする……外に出るのはダメらしいし振り返るのも男として、いや、人間として出来ない……っ！　くそっ、最近俺の鋼の冷静さをぶち壊してき過ぎだろうみんな……！）

ぎこちない空気の中、シャルロットは意を決して一気にリボンを引き抜く。その音に恭介の動揺も激しくなる。

（ほ、本当に脱ぎ出した！？　だ、だめだ……考えるな……何も考えな……想像するな……！　クリスカとの模擬戦の時みたいに何も考えるんじゃない……！！）

が、無情にもスルスルと肌を布が擦る音が恭介の耳に入ってくる。一瞬、下着姿のシャルロットの姿が脳裏を通り過ぎた。振り返れば本物がそこにある……。

瞬間、恭介は試着室の壁に頭を打ち付けた。

後ろでは更に下着を脱ぎ出すシャルロット。

その音すら若干聞こえてくるので、更に恭介の頭の中にもっと危険な光景が脳裏を駆け巡る。

（お、落ち着け……クールになれ棗恭介……ッ！！俺はいつもみんなの兄貴分……！いつも頼りになるナイスガイ！ここで冷静さを欠いたらリーダーなんてやってられん！っていうかIS学園には俺以外女子しかないんだぞ！？この程度で焦ってたらあんな所になんていられないっ！！）

落ち着け……俺は大丈夫……いつも通りだ……、とシャルロットにも聞こえないほどの声で呟き始める。若干、考えてる事がナルシストであったのは自覚しているが、それくらい冷静さを欠いているのだと認識してもらいたい。

（そうだ……大丈夫……落ち着いてきた……いつもの俺だ。いつもの俺が帰ってきた……！行ける！行けるぜ！）

「も、もう良いよ……？」

ぴくつ、と肩を揺らした恭介は、ゆっくりと振り返った。

目からゴボウだった。

最初に目に映ったのは、鮮やかなサンライトイエローの水着で包まれた上半身と、水着によって強調された胸の谷間。更に、特別光が当たっている訳でもないのに艶やかな肌は輝いて見える。

水着はセパレートとワンピースの中間のような物で、色は夏をイメージさせるサンライトイエロー。どうも黒いリボン状の物で上下をつなげ、背中ですそれをクロスさせているらしく、背中からそれが下の水着に繋がっていた。

最近、水着みたいなISスーツばかり見ているせいか、何だか本物の水着を見ると若干新鮮な気分だった。その上シャルロットのような美少女が着ているのだから、一応男である恭介は、若干の興奮

を自覚していた。

「変……かな……？」

恭介は首を横に振る。

「いや……良い。凄く似合ってる……おにーさんとした事が思わず見とれちまったぜ……」

「ほ、本当……！？じゃ、じゃあこれにするね……！」

「そ、そうか……じゃ、じゃあ先に俺は外に」

この時、まだ冷静さが若干欠けていた恭介は、外に人の気配があるのに気付く事が出来なかった。

瞬間、恭介がカーテンに手をかける前に、独りでにカーテンが開いた。

「……？」

そちらに視線を向けると

一人の店員と、危険人物織斑千冬と山田真耶、ついでに一夏がいた。

「……何をしている、バカ者共が……」

刹那、パニックになった真耶の悲鳴が店に響いたのだった。

* * *

「はあ、水着を買いにですか。でも試着室に二人で入るのは感心しませんよ？ 教育的にもダメです」

恭介とシャルロットは正座させられ、真耶の説教を受けていた。真耶の後ろで千冬がため息をつき、一夏は笑顔で恭介を睨んでいる。

「そっぴや、何で千冬さんと山田先生が？ 水着でも買いにきたのか？」

恭介が二人が手に持った水着を見て言う。

「はい、そうです。あ、それと今は職務中ではないですから、無理に先生って呼ばなくて良いですよ」

「じゃあやまや」

「それは止めてくださいっ！」

真つ赤になりながら言う物だから、思わず笑ってしまふ。

すると恭介は、あ、そういえば……と、後ろに振り向きながら、
「で、お前らはいつまで隠れてんだ？」

ギクツ、という音が恭介の視線の先から聞こえてくる。と、渋々と言った感じで鈴音とセシリアが出てきた。

「そろそろ出てこようかと思ったのよ」

「え、ええ。タイミングを計っていただけですわ」

ぞろぞろと現れた鈴音達を見て、一夏は苦笑し、千冬は再びため息を一つついた。

すると、真耶が唐突に立ち上がり、

「あ、あー。私ちよつと買い忘れがあったので行ってきます。えーつと、場所が分からないので鳳さんとオルコットさん、それにデユノアさんと織斑さんもついてきてください」

「えー!? 僕もですか!？」

すると、真耶の意図を察したらしい恭介は、

「手伝つてやれ。買い物はまた今度、だ」

言いながら恭介はひっそりとシャルロットの手に何かを握らせた。
「ふえ? え、あ、うん……恭介がそう言うなら……」

二人も立ち上がると、真耶が四人を連れて去って行った。

「全く……山田先生は余計な気を使う」

「まあ、言っても仕様がないうんじゃないか？」

「ふっ、そうだな……」

久しぶりに笑った所見た恭介は、釣られて思わず笑みを浮かべる。
千冬は恭介の方を見て、手に持ったハンガーにかけられた水着を差し出しながら、

「で、だ。どっちの水着が良いと思う？」

差し出したのは二つ。片方はメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出する黒い水着。

もう片方は、一切の無駄を排除した機能性重視の白い水着。

恭介の答えは即答だった。

「黒」

「……適当に言っていないだろうな？」

「まさか。そっちの方が似合ってると思ったから言ったんだよ。それに、千冬さんはその辺の男になびくような人でも無いだろ？ だったらよりその人が映えるを選んだ方が良い。ただでさえ美人なんだから」

「……はあ……、全く、お前は平然とそういうことを言う……。これはつかうかしているとますます……。いや、やはり直枝と同じ道を辿るべきなのか……？」

「？ あの、よく聞こえないんだけど……」

「気にするな。独り言だ」

と、言いつつ嘆息。

千冬は白い方を戻し、黒い方を手に持って話題を変えんと話を振った。

「ところで……どうなんだ？」

「何が」

「お前は彼女を作らないのか？ 学園内には腐るほど女がいるし、選り取り見取だろう？」

「いや、まあそうだけど」

「なら……ラウラなんかはどうだ？ いろいろと問題はあるだろうが、あれで一途な奴だぞ。容姿も悪くあるまい。それにキスだってした仲だ」

「まあそりゃそうなんだけどなあ」

恋愛愛的に見て、確かに好きか嫌いかで言えば好き、という部類に入るのだろうが、正直それは現リトルバスターズメンバー全員に言える事だ。当然と言えば当然ではあるのだが、鈍感でもなんでもな

い恭介は、みんなの好意に一応気付いてはいるが、

「……全員満更でもないが、選び辛いかな？」

「まあ……な。俺はこういふときは、自分で言うのもなんだけど優柔不断だ」

誰か一人に限定してしまえば、リトルバスターズが壊れてしまいかもしれない。無い、とは思っていても、やはりそういう可能性に捕われてしまうのだ。リーダーとしても、棗恭介としても。

だから選び辛い。誰か一人に限定し辛い。

ハーレム、なんて道を辿れたらなんて楽か……と、恭介は思う。いや、実際その道を辿った人物が一人いるにはいるのだが……。

恭介は一つため息をつく。

「じゃあ話を変えるが……さっきデュノアに何を渡した？」

「え、ああ。あれ？」

やっぱり気付かれてたか……、と苦笑する。

「当然だ。私を誰だと思っている」

「まあ、そうだよな」

「ラブレターか？」

クツクツク、と笑う千冬。が、若干汗が滲んでいる。一応言っておくが暑い訳ではない。

「別に、単なる夕食のお誘いさ。一応、デートだったんだし、中途半端に終わるのは嫌だからな」

「……惚れているのか？」

「さあ、どうだろうなあ？ 惚れているかもしれないし、単純にそう思っているからかもしれない」

「はあ…… 本当にズルい奴だ」

そう言いながらも笑う千冬は、呆れと仕様がないう空気が入り交じっている。

少しばかり冷や汗物だったが、心の中で安堵の息をつく。

誰か一人を選べた訳ではない。それが分かるからまだ安心出来る。

が、安定した状況ではない。

千冬が思うチャンスは臨海学校。

千冬はそのとき、大ギャンブルをする事を決意していた。

* * *

「ご、ごめんね……！ バレないように抜け出すタイミングを掴んでたら時間かかったちゃって……」

「いや、さほど待ってないさ」

二人は、レゾナンス内にある噴水の前で待ち合わせていた。息を切らして走ってきたシャルロットに、笑みで恭介は答える。

「じゃあ……行くか」

「うん、うんっ！」

嬉しそうに頷くシャルロットに、ますます笑みを浮かべる。

今日のデートは、とてつもなく楽しかった、二人がそう言えるような夕食だったことだけを書いておく。

第16話「デートとデートと一日デート」(後書き)

最後の夕食のシーンは力つきました……ごめんなさい。

今回、結構地の文を書けたんじゃないかな、って勝手に満足しています。完成度はどうかは分かりませんが……まあ、面白い事を祈る。

ところで最近の悩み……インフィニット・バスターズ(今更だけど、このタイトルの事を今度から『I・B』って呼ばせていただきます)に没頭し過ぎて、早く完結させたいオリジナル作品、『ワールド・クライシス』が書けない……っ!!

設定超リメイク版も書きたいのに……!
とある本で、「完結させずに別のを書くのはダメだ!」って言うていたから未完で次のに行くのだけは避けたい!

数少ない(私的にそう思っている)ワルクラ読者の皆さん! どうか私にワルクラ執筆の時間を作る力を……!!

……まあ大分どうでも良い事を叫びました。
では、また次回。

第17話「海と水着とハウドラゴン」(前書き)

気がつけばお気に入りに入れている人が一〇〇人超えてた

……！

みんなありがとう！ これからも頑張って行くよー！ー！！

第17話「海と水着とハウドラゴン」

「ふ、ふっふっふ……素晴らしい……まさに僥倖……なるほど、こんな物を隠していたのか」

どこかの真つ暗な部屋に、一人の男がいた。

金色の髪をし、鬼をイメージするような仮面を被って陣羽織を着た男は、一枚の紙を手にとって気持ち悪い笑みを浮かべていた。

男は何やらブツブツ言い出しながら、手に持っていた紙を放り捨てた。

「ふむ……早々に準備しなければならないな。急ぎ始めなければ……！ ええい、みなが隠してさえいなければもうとくに着いている頃だと言うのに！ まずはあれだ！ あれがまず必要だっ！」

男は言つとどこかへと走り去って行った。

放り捨てられた紙には、『臨海学校について』。

そう書かれていた。

* * *

「海っ！ 見えた!!」

「来た来た来たきたアアア ツ!! 俺達のサタデーナイトフ
イーバーがああ っ!!」

「いや土曜でも夜でもないからね？」

トンネルを抜けた瞬間、クラスメイトの女子が窓から見える海を見て声を上げた。

臨海学校初日、雲一つない空の中、窓から吹き込む心地よい潮風が肌を撫で、目に映る海は日の光が海面に当たってキラキラと光って見えた。

海、という事でいつもよりテンションの高い恭介は思わず立ち上

がり、最初に声を上げた女生徒と同様に声を上げていた。そんな彼の発言に、通路を挟んで隣に座る一夏がツツコミを入れる。

恭介の後ろに座るラウラは、そんな恭介を見て隣の箒に、

「おい、嫁は海が好きなのか？」

「そりゃあ好きなのだろうが、アイツは基本楽しい場所ならどこでも好きだぞ。夏祭りとかクリスマスとかメチャクチャはしゃぐからな」

「今も昔の何ら変わらないな、アイツは」と苦笑気味に箒は言う。彼女の言う通り恭介は基本的に祭り事は思いきり騒ぐ。メンバーの誰かの誕生日だったり体育祭だったり文化祭だったり、とにかく楽しめる物は思いきり楽しむ男だ。そんな彼の性格は、IS学園に入学してからよく見せていた。

「そうねえ。あたしの時の夏祭りは、店全制覇するぞ！　ってあたしたち連れてあちこち回ったし、クリスマスパーティーの時なんかサントのコスプレして出てきたわ」

ひよこっ、と顔を出して恭介を見ながら言うのは鈴音。

「私の時はトナカイだったな。わざわざ赤い鼻までつけて」

「なんだか恭介さんらしいですね」

と、騒ぐ恭介に千冬の怒鳴り声が襲いかかる。が、相も変わらず平然とそれを受け流す。

誰もがまた始まるのか……？　と不安とわくわくが混じった視線を向けるが、さすがの千冬もバス内では出席簿アタックを繰り出すとは思わなかったようで、戦闘^{じゃあたい}にはならなかった。

「やっぱ海はテンション上がるぜ！　なあっ、シャル！」

「ふえ！？　う、うんっ！　そうだね！」

唐突に話しかけられたシャルロットは、気が別の方向へと向かっていったためか声が裏返っていた。

シャルロットはさっきから左手首に巻かれたブレスレットを、えへへ、と笑みを漏らしながら大事そうに撫でていた。

と、それを見た一夏が、

「？ シャルロット、それどうしたの？」

「ああ、俺があげた。水着買うのに付き合わせちまったからな」
『ええっ！？』

さらっと言う恭介に一夏達は思わず驚きの声を上げた。

実は五反田兄妹と会っている時に持っていた箱がこのプレスレットだった。多少高めの物だったが、なんだかんだで貯金がそれなりに貯まっている恭介には特別高過ぎる物を買ったという訳でもなかった。

千冬達に出会ってしまったりでタイミングを少しばかり見逃したが、最後の最後、夕食時にさらっと渡した。そう、まさにさらっと言ってしまったえば特別何事も無く終わったと言っ事である。まあシャルロットはそんな事は気にならないほど、恭介からのプレゼントで頭がいっぱいだったようだが。

「くっ……あのときか……ッ！ 油断したわ……！」

「羨ましいですわ……」

「いいなあ……」

「……………（むすっ）」

「おい恭介。お前は私の嫁だろう、私にも何か」

「ん？ ほい」

と、ラウラに手渡したのは 五本のナイフ。

「ナイフ……？」

「そいつはな、お前が投げて」イン区キルレント「IS発動、ラン ルデトナイター」
って言うのと爆発す

「それリリカルな別作品だからっ！ 確かに銀髪で眼帯してるし声も同じだけどっ！」

「そ、そうなのか……このナイフにはそんな機能が……うむ、嫁からのプレゼント、ありがたく貰おう」

「あ、ついでにこれも……」

言いながらとりだしたるは、穂先がねじれた戦乙女な銀色の槍と、ヴァルキユリア同じく戦乙女な銀色の丸い盾。

「確かに銀髪だけドラウラはヴァ　キュリア人じゃないからねっ！？」

「そうなのかつ！？」

「なんでびっくりしてるの！？」

「いや、だって銀髪美少女はみんなヴァルキュ　ア人だろ？」

「そんな訳ないから！！」

「ふむ……なんだかこれを持つと力がみなぎってくるな……今ならビームとかも出せそうな気がするぞ……」

「！？　なんか青いオーラ出てる！？　え！？　嘘でしょ！？」

「ははっ、やっぱり銀髪美少女はヴァ　キュリア人だろ？」

「え！？　何！？　私がおかしいの！？　私が間違ってるの！？」

思わず頭を抱える一夏を無視して恭介とラウラは二人盛り上がるのだった。

ちなみに、槍と盾は没収された。「アイツにこれ持たせたら生身でISを倒してしまうだろうが……」と冷や汗かきながら呟く千冬によって。

それを聞き、再び頭を抱える一夏がいたとかいないとか。

* * *

それからしばらくして。

バスから降りた恭介達の目の前にあるのは、学生の力では経済的に泊まるのは不可能そうな立派な旅館。宿泊費が高いのか安いのかと言ったら確実に高いと思われる。

正直、高校生の臨海学校で使うような場所ではない、と恭介は思ったが、まあそこは国立。学園の生徒がわざわざ気にするべき事でもないだろうと結論づける事にした。ごちゃごちゃどうでも良い事を考えていつの間にか楽しい時間が過ぎていた、なんて事は避けたい。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

『よろしくおねがいしまーす』

千冬が言つと、全員で挨拶する。すると着物姿の女将さんが、はい、こちらこそ、とお辞儀を返してきた。

「あら、こちらが噂の……？」

と、恭介を見て言う。

「ええ、まあ。今年は男子がいるせいで浴場分けが難しくなつてしまつて申し訳ございません」

「いえいえ、いい男の子じゃありませんか。しっかりしてそんな感じを受けますよ？」

「感じがするだけです。挨拶をしる馬鹿者」

千冬の手が恭介の頭を押さえつけようと伸びてくるが、それを当然のごとく避け、軽く頭を下げる。

「棗恭介です。よろしくお願いします」

「ふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

景子もにこりと笑つて、先程していたように一つお辞儀。

空振りした千冬は額に青筋を浮かべながらも何とか堪え、内に抑える。

「このバカと妹達共々、よろしく願います」

「あらあら、織斑先生は教え子には厳しいんですね」

「甘やかしたら怠けるだけですから」

言いながら靴をしまい、宿の中へ入つて行く。

外観からも分かる通り、中もまた高級旅館と言つた感じだった。

どこまでかはまだ分からないが、ここから見回す限りは洋の混じらない純和風。歴史を感じさせるオブジェや装飾が惜しみなく使われ、旅館内が外よりもキラキラ輝いて見える様な気すらしてしまうほど。暑さを全く感じない辺り空調は利いているようで、ちょうどいい涼しさだ。

「それではみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館

で着替えられるようになってますから、そちらをご利用ください。
場所が分かなければ、そちらにいる従業員にお聞きください」

しばらく歩いた所の、個室の前で景子が言う。はい、と女生徒
達が返事を返し、各々割り振られた部屋へと荷物を運んで行く。

するとそんな中、布仏本音のほとけほんねが相変わらずダボダボな制服を着、眠
たいつもの顔そんな目でやってくる。

「ね、ね、ねー、なっつーの部屋どこ？ 一覽に書いてなかった
！。遊びに行くから教えて

」
瞬間、周りの女生徒達に耳がこちらに向いたのが分かった。完璧
に目の色が変わっている。

「いや、俺も知らされてないな」

「棗、お前の部屋はこっちだ。ついてこい」
と、背後から千冬の声が。

「つと、ご案内のようだ。後で教えるよ」

「りょーかい。ちゃんと教えてね」

「ここだ」

そう言う千冬が指差した部屋には、

『教員室』、と書かれていた。

「最初は個室と言う話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無
視して女子が押し掛けるだろうからな。こういう処置になった」

なるほど……、と恭介は呟く。

まあ確かに、一〇〇パーセントどころか二〇〇パーセントと言っ
ても良いくらい女生徒達は恭介の元に押し掛けてくるだろう。それ
なら先生方の判断も分かる。

恭介自身、部屋がどの辺りとかは気にするつもりは無かったので、

異論は無かった。

「まあそう言う訳でお前は私と同じ部屋だ」

「寝てる隙に出席簿アタックとかやめてくれよ？」

「安心しろ、何もしなければそんな事はしない」

にやり、と千冬は笑いつつ、部屋の戸を開け中に入る。

想像はしていたが、部屋もまた豪華だった。トイレに洗面所、テレビに冷蔵庫完備。部屋は二人部屋のはずだがかなり広く、目の前には窓に広がる海が。

「へえ……こいつは凄いな」

「風呂は一応、大浴場も使えるが男のお前は時間交代だ。本来なら男女別になっているが、何せ一学年全員だからな。お前のためだけに残りの全員が窮屈な思いをするのはおかしいだろう。よって、一部の時間だけだ。深夜、早朝に入りたければ部屋を使え」

「了解」

さて、と千冬は荷物を置きながら、

「今日は一日自由時間だ。荷物も置いたし好きにしろ」

「千冬さんはどうするんだ？」

いつもの千冬ならここで、「織斑先生だ」と言って出席簿アタックを繰り出すのだが、若干諦めてきたようで、一つため息をつくだけで終わった。

「私は他の先生と連絡なり確認なりした後は、まあ軽く泳ぐくらいはしよう。どこかのバカがわざわざ選んくれたのだからな」

「相変わらずのツンデレ、思わず脱帽しちまうぜ」

「や、喧^{やかま}しい！」

ひらり、と繰り出された出席簿アタックを躲す。が、千冬はそんな事は気にせず、とっとと海にでも行ってこい！と、部屋から最低限の荷物だけ持たせて追い出した。

部屋の外で、恭介は苦笑しながら水着の着替え場所へと向かった。

別館へと向かう途中、簾と合流した恭介は、ふと視界の端に目を向けた。

……何故か道中の茂みに『引っ張ってください』と書かれた看板が立てられ、機械的なウサギの耳が地面から生えていた。

「……………」

二人の意志は、その時一つとなった。

無視するか

瞬間、そのウサミミ上空で「えーっ!？」という叫びが響いたとか響かなかったとか。

* * *

恭介は水着に着替えると、ダッシュで海へと向かった。
とうっ! というかけ声と共に、砂浜へと降りる階段を無視し、柵に足をかけて砂浜へとダイブした。

ズシャアアアアア! と、砂煙を立てながら恭介は砂浜に着地する。当然、砂煙の方には誰もいない事は確認済だ。

まあさすがに急な事だったので、周りの女生徒達は一斉に驚きの悲鳴を上げていたが、音の主が恭介だと分かると今度は各々騒ぎ始める。

「あ、棗君だ!」

「う、うそっ!? わ、私の水着変じゃ無いよね? 大丈夫だよねっ!?!」

「わゝ、体カッコいいゝ。鍛えられてるよー」

「棗君気合い入ってるな!。そんなに海が好きなのかなあ?」

ザっザっ、と歩きたびに砂が鳴る。

恭介はビーチサンダルを履いているため足が砂に焼かれるような事はない。麦わら帽子とサングラスで頭と目は日光から守られてい

る。手にはシュノーケリンググッズを持ち、一枚の灰色のパーカーを前を開けて羽織っていた。

まさにフル装備。格好から既にはしゃぎまくっている事がうかがえる。

さて、と恭介は準備体操をし始めるが、屈伸中に突如背中になんかが乗ったかと思うとそれは肩車の形で恭介に乗った。

瞬間、肌色の柔らかい何かが恭介の首を挟んだ。

おおーっ、高い高いっ！ と恭介の肩の上ではしゃぐそれは

鈴音だ。

「とっ、とと……。鈴音^{すずね}、危ないって。危つく倒れる所だったぞ」

「アンタがそんな事になる訳ないじゃない。だからやったのよ」

恭介の頭に両手を置いて、肩車状態で顔を覗き込む鈴音はそう言う。もはや苦笑するしか無い。

と、後ろから「あっ、あっ、あぁっ！？」と、何やら慌てた様子の声が聞こえた。

振り返ってみると、青いビキニとパラオをしたセシリアがいた。

水着で胸が強調され、正直エロい。

「な、何をしていらっやいますの！？」

「見れば分かるでしょー？ 移動監視塔ごっこ！」

「うおっ、お、オイ鈴音！ 前が見えないだろっ」

現れたセシリアに見せつけるがごとく、肩車をしながら恭介の頭に抱きつき始めた。おかげで鈴音の手で眼が塞がれ、前が見えなくなる。

ぴきっ、とセシリアは青筋を浮かべ、

「恭介さん……？ バスの中でわたくしと約束したのを忘れました、の”ッ”！」

ドスッ！！ と、思いきり手に持ったパラソルを砂浜に突き刺す。何やら相当に怒っているようだ。

いや、まあ実はここに向かう途中のバス内でちょっとした約束をしはしたが、別に破った訳でも無しに何故そんなに怒っているのか

……と恭介は思った。

セシリアはそのままパラソルを開き砂浜にシートを敷いて、水着の紐をほどいて寝転び、サンオイルを自分の隣に置く。

「さあ恭介さん……！　お願いしますわ……！！」

恭介から飛び降りた鈴音は、「アンタこそ恭介に何させるつもりよっ」と食いつく。が、セシリアはさっき鈴音がやったように、「見ての通りい？　サンオイルを塗っていたたのですわ！　レディとの約束を違えるなど、紳士のする事ではありませんですわよっ？」

「あ、ああ。分かつてる」

言って俯せで横になるセシリアの横に腰を下ろし、置かれたサンオイルのふたを開けて手に垂らす。そのまま少し手をこすり、少し温めておく。

「セシリア、行くぞ」

恭介はセシリアの背中に手を伸ばし　若干躊躇いがちに触れた。ピチャっ、とサンオイルまみれの手とセシリアの肌がぶつかる音がした。

ふあっ、と小さく声を漏れたのが耳に入ったが、無視してそのまま塗っていく。

「んっ……ふあ……きよ、恭介さん……慣れてますのね……？」

「妹とかにもやった事があるからな。アイツ、ちよっとてもミスるとハイキックしてくるし」

「そ、そうですの……妹さんに……」

そういえば妹さんがいたなんて初耳ですわね、と気持ち良さげな声を漏らしながらセシリアは言う。

「そっぴや話した事無かったか？　鈴、って言ってな。結構な美少女だぞ」

「それは……恭介さんの妹さんなら当然でしょうけど……んっ」

「まあ……今や俺の親友の恋人だけどな……」

サンオイルを塗りながら何か遠い目をする恭介。彼が結構なシス

コンであることを知っているからか、鈴音はそれを見てあはは……、と苦笑する。

「ていうか……何で鈴は俺の事を『お兄ちゃん』って呼んでくれないんだ……いつも『きょーすけ』か『バカ兄貴』ばかりで……くそっ、何故だっ……！」

「そ、そうですか……」

が、そんなシスコンぶりを知らないセシリアは、若干引いていた。と、背中にサンオイルを塗り終える。

「背中だけで良いんだよな？」

「はふう……い、いいえ……せつかくですし、手の届かない所は全部お願いします……」

と、やけに色っぽい声で言う。

「ぜ、全部か……？」

「足と……その……お尻も……」

瞬間、笑顔の鈴音が恭介とセシリアの間に入った。

「はいはい！ アタシがやったげる！」

いつの間にやらオイルまみれの手をワキワキさせながら、ニヤリと笑う鈴音は、そのまま腰やら足やら膝裏、足の裏やらにオイルを塗って行く。更に塗りながらくすぐってでもいるのか、突如笑い出すセシリア。

「あはっ、あははははっ！！ くすぐった、くすぐったあい！ 止め、あはははははははッ！！」

「ほれほれっ、隅から、隅までっ！ うっふふ」

……………。

忙しなく動き回りながらオイルを塗る鈴音は、悪戯な笑みを思いきり浮かべると、

「あっ、こつちも塗って欲しいんだよね？ ほいほいほいっ」と！

と言って、下の水着を持ち上げ、思いきり手を突っ込んだ。当然の様にセシリアが悲鳴を上げる。

「鈴音さんっ！ もういい加減にっ！！」

「「!？」」

文句を言わんと思わずセシリアは起き上がる。が、よく思い出してみて欲しい。

セシリアは恭介にオイルを塗ってもらおうと水着の紐をほどいていた。

現に今、セシリアが俯せになっていたシートには青い水着がある。……つまり。

それで起き上がったと言う事は、水着で包まれ強調されていたセシリアの豊満な胸が光の元に晒される訳で……そして目の前には当然恭介がいる訳で……。

ふるん、と起き上がった勢いで二つの山が揺れる。

恭介はセシリアの悲鳴と共にブルー・ティアーズの右腕でぶっ飛ばされた。

* * *

ぶっ飛ばされ、しばらく気絶していた恭介は復活すると、麦わら帽子、サングラス、パーカーを脱いで、さっきまで持っていたシュノーケリンググッズを装着。思いきり海に飛び込んだ。

夏のため若干海の水は暖かめだが、それでもひんやりとする海は、夏のこの時期には最高に気持ちよかった。ゴーグル越しに見える魚達は元気に泳ぎ回り、恭介が潜って行くと、その周りを泳ぎ回った。まるで恭介を歓迎しているかのようだ。

そうしてしばらくシュノーケリングを続け、一度休憩のために砂浜に戻りシュノーケリンググッズを外し、さっき自分で立てたパラソルの下に座り込む。

すると、

「あ、潜りに行ってるって聞いたけど、戻ってきたんだ？」

「おかえり恭介ー」

とシャルロットと一夏の声が。恭介は返事をしようと振り返りながら、

「ああシャルに一夏、ただい　っ!？」

ただいま、と言いかけた瞬間、恭介は固まった。

……二人の隣に、全身をバスタオルで包んだバスタオルお化けがいた。心無しか火の玉が浮いているように見える。

「な、なんだそれは……。ミイラか……？」

「ほら、恭介に見せたら？　大丈夫だよ」

「そうだよ、全然恥ずかしくないって」

「だ、大丈夫かどうかは……。私が決める……」

なんとバスタオルお化けから聞き覚えのある声がした。

「あー……。そいつ、もしかしくてもラウラか？」

「あはは……。まあね。水着姿を見せるのが恥ずかしいみたいだね」

と、シャルロットがラウラの耳元に近寄り小声で、

「ほら、せっかく水着に着替えたんだから、恭介に見てもらわないと」

「ま、待て！　わ、私にも心の準備と言うものがあって……」

ふーん、とシャルロットは悪戯な笑みを浮かべる。

「だったら、僕と一夏だけで恭介と海で遊んじゃうけどお、良いのかなあ？」

「な、何？」

「うん！　そうしょ。一夏、恭介、行こっ！」

「そうだねー、恭介行こ行こー」

二人は片方ずつ恭介の腕に自分の腕を絡めて恭介を引っ張って行く。

「ま、待て！　そ、それはダメだっ！　私も行くぞ！！　うう……ええいつ!!」

何やら慌て始めたラウラが、全身に巻いたバスタオルをパージした。それと同時に、ラウラの白い肌と水着が露になる。

ラウラが来ているのは黒のセパレート。それも若干布面積が少な

く、レースをあしらい、黒いリボンが下の水着には左右に一つずつつけられている。右の太腿辺りにつけられたシュヴァルツェア・レーゲンの待機状態であるレッグバンドも相まって、ラウラの体型でも十分にセクシーに見える。

「わ、笑いたければ笑うがいい……」

「おかしな所なんて無いよね？ 恭介」

「ああ、似合ってるし可愛いと思うぞ」

「ほら、私達が言った通り大丈夫でしょ？」

と、ラウラは顔を赤くしながら目の前で人差し指をツンツンしつつ、「そ、そうか……わ、私は可愛いのか……」と嬉しそうに呟いた。

すると、ラウラの後ろの方で本音とクラスメイト二人が手を振って恭介を呼んだ。

「棗くん！」

「ねえねえ！ ビーチバレーしようよ！」

「おおっつ、なっつーと対戦！ ばきゅんばきゅん……！」

正直真ん中にいる本音の着る、某電気ネズミみたいな着ぐるみ状のそれは本当に水着なのか疑いたくなるが、ビーチバレーに関しては異論は無い。

それっ、と片方のクラスメイトがボールを投げってくる。

「こっちは四人になっちまうな……」

「あ、じゃあ私が抜けるよ」

「一夏いいの？」

大丈夫大丈夫！ と一夏は笑う。

「悪いな。んじゃ、やるかつ！ 『マスク・ザ・斉藤』と呼ばれた俺の実力を見せてやるぜ……！」

「な、なんなの『マスク・ザ・斉藤』って……？」

「あはは……ランキングバトルやってればその内分かるよ」

「さあ、『夏のサマーデビル』と呼ばれたこの私の実力、とくと見よー!」

瞬間、相手の打ったジャンピングサーブがラウラの顔面に直撃した。

「だ、大丈夫ラウラ!？」

「らしくないぞ、どうした？」

「か、かわ、可愛いと、言われると……私は……はう……」

「ひょ、ひょっとして……まだ照れてたの？」

「ここまでピュアだとは……」

と、恭介がラウラを見、目が合った瞬間、ラウラの顔が真っ赤に染まった。

「あ、ああ……」

ラウラは絶叫しながら海へと脱兎のごとく走り去って行った。

「あー……放っておいた方がいいか？」

「……そうだね」

苦笑気味に言うシャルロット。

すると、後ろの方から「ビーチバレーですか、楽しそうですねー」

と、真耶の声がした。

「先生も、一緒にやりますか？」

「ええ。いかがですか？ 織斑先生」

ざっ、と真耶の後ろから現れる千冬。同時に周りの女生徒達が騒ぎ始める。

いつも纏めている髪を下ろした千冬は、大人のカッコ良さ抜群と言った感じた。

「織斑先生、モデルみたい!」

「かっこいいー……!」

「先生、どうぞ！ あたし交代しますから!」

「では」

「はい！ やりましょう!」

「ははっ、千冬さん、返り討ちしてやるぜ!」

「面白い、やってみせろ」

「一夏あー、こっち入ってー！」

「うん！」

全員が配置に付く。

「さあ、サブ、行きますよ！」

結果。

引き分け。

参加メンバーと観戦者の感想。

千冬と恭介の身体能力は化け物級。

同時刻。花月荘上空。

赤い粒子を撒き散らしながら、青の機体はそこにいた。

「ふっふっふ……来た……私は来たぞ……少年ッ！！」

男。ミスターブシドーと呼ばれる男。グラハム・エーカーは、満面の笑みで叫んでいた。

* * *

八卦龍について分かっている事は、ソレスタル・ビーイングにも少ない。

一つは、部隊が大きく分けて二つある事。

一つ目が閃光の伯爵ライトニングカウントと謳われるゼクス・マーキス率いる八卦龍第一執行部隊『白き牙』ホワイトファング。八卦龍が二つの部隊で、より多くソレスタ

ル・ビーイングと戦闘を繰り返してきた部隊だ。

特徴としては、ゼクスの駆るIS、いや、正式名称『IS・G』

（Gはガンダムと読むが、語呂が悪いため基本Gと読まれる）である『白銀の騎士0・？』^{ゼロ フォー}や、恭介のウイングゼロに積まれているゼロシステムを使用した無人独立行動型IS・G^{モビルドール}を使い、大多数で攻めて来る事だ。

今の所確認されているのは、対ビーム用の円盤形ジェネレーター、『プラネイト・ディフェンサー』を搭載したビルゴタイプと、変形可能な高機動型であるトーラスタイプの二種類。どちらも接近武装を持たないが、ゼロシステムによって制御されているが故に対人戦闘に関しては驚異的な性能を誇っている。故に多数対多数を基本得意とする。

それに対し数ではなく質で攻めるのが、リボنز・アルマーク率いる、八卦龍第二執行部隊『偽・革新者』^{イノベイド}。

メンバーは基本的にリボنزを始め、人類の革新へと導く役割を担っているとされるイノベイドと呼ばれる存在であり、普通の人間とは様々な能力において超越する。更に特殊なナノマシンが体内に含まれており、不老不死（病気や寿命が無いだけ）である。

彼らの使うIS・Gは疑似GNドライブを使用した、機体の基本性能にものを言わせるガ・シリーズやガンダムタイプばかりで搭乗者も手練ばかりなので、一対多数の戦闘を難なくこなしてくる。

ちなみに、『偽・革新者』とソレスタル・ビーイングが戦う事はあまりない。偶々なのか『偽・革新者』が避けているのかは定かではないが。

そしてもう一つ分かっている事。それは彼らが掲げる目的だ。

それが『紛争根絶』と『世界の支配』。

力で世界を恐怖させ、『戦う意志』を根こそぎ奪い取り、その上で世界を支配し操る……それが八卦龍の掲げる目的。まあ簡単に言ってしまうと世界征服である。

馬鹿げた話だが、彼らと戦ってきたソレスタル・ビーイングには

存外笑い飛ばせない話だ。彼らは八卦龍の力を知っているのだから。おそらく、現状の技術力では世界が一致団結して八卦龍に挑もうと手も足も出せずに終わるだろう、とソレスタル・ビーイングは考えている。MDによる数の暴力と、ガ・シリーズとガンダムタイプによる現代ISを凌駕する圧倒的な性能差による虐殺。

世界は 誰もが思うよりも非力だった。

＊ ＊ ＊

リボنزに連れられたスコール、撃墜され片手足を奪われたオータム、そして自ら早々に投降したエム。三人は八卦龍が本部、『ハウドラゴン』へと案内されていた。

オータムはここまで運ばれてすぐに医療班らしき人間達に運ばれて行った。恋人であるスコールは表情には出さないまでも、まだ彼らを信用する事が出来ない彼女は、不安を覚えていた。

しかし、そんな彼女の完璧なボーカフェイスすらも見抜いて心を読んだがごとく、二人の目の前を歩くリボنزが口を開いた。

「不安がる事は無いよ。彼女は助けるし妙な事はしない。君達には僕らの仲間になってもらいたいんだからね」

「……そう言われて、はいそうですか、と安心出来ると思う？」

「思わないさ。でもね、僕は非道で冷酷で血も涙も無いと言われるような存在だけど、人間と違って守るべき約束は守る。まあ言葉通り、守らなくてもいい約束は守らないけどね」

フフッ、とリボنزは笑う。助からないなどとは微塵も考えてはいない事を思わせるような、自信に満ちた笑いだ。スコールはこの男（だと思われる）が浮かべるこの笑みがさつきから大嫌いだった。カツカツとハウドラゴン内を歩いて行く。地下に作られたこのハウドラゴンの中は、しかし地下施設とは思えないほどに豪華だ。施設内の明かりは若干暗い物の、それが逆にどこぞの城内っぽさを醸し出している。

「さあ、ここだ」

ギイ、と音を立てながらリボンスがやけに大きなドアを開け放つ。
「来たよ盟主。スコールと、エムだ」

「ああ、分かつてる」

そこは、まるで城の中にあるような食事場だった。巨大なシャンデリアに部屋は照らされ、三〇人近くは食事出来そうなほどの長さを
持つテーブル。その一番奥にその人物はいた。

はつきり言って、外見上の第一印象は最悪だ。

服装はただワイシャツにジャケットを着ているだけ。顔は平凡。
だが目つきやら雰囲気やらがすこぶる悪く、まるで悪の組織の頭で
もやっついそうな男だった。彼の浮かべる悪質な笑みは、リボンス
が浮かべていた笑みよりも好きになれそうに無かった。

「初めましてだな。俺様は八卦龍を仕切る、まさに天を司る男。秋^あ
津マサキだ」

男は。

二人を見ながら、偉そうな口調でそう言った。

第17話「海と水着とハウドラゴン」(後書き)

マサキを出してみた。あの俺様キャラをうまく書けるかな……。

短編2「はあ？ 転生者あ？ ……こいつ頭大丈夫か？」（前書き）

超短い超短編です。

ちよつと所用で一週間くらい投稿出来ないんで……。

すいません、大分ダメダメな完成度と長さですが、許してください！

短編2「はあ？ 転生者あ？ ……こいつ頭大丈夫か？」

突然だが、俺こと風間卓也^{かざま たくや}は死んだ。

そう。突然目の前に爆発寸前の爆弾を抱えた男がぶつかってきて、次の瞬間俺は木っ端微塵だった。後で見せてもらった時には思わず吐いちまったぜ……。

ん？ 見せてもらったってどういうことだ、って？

実はな……。

「すまんー！」

「は、はあ……」

俺は神様に間違っで殺されてしまったらしいんだ。

どうやら俺の運命表みたいなのをシュレツダーにかけてしまったらしい。意味が分からん……。

で、だ。そのせいで起きた俺の死。その証拠を見せてみる！ っ
て言ったら、俺のスプラッタな現状をモザイク無しで見せられた。
もはや面影なんか残ってない、肉片と化した俺の姿を……。ううっ、
思い出したらまた吐きなくなってきた……。

あー、とにかく。それで俺は何かしてもらえらしいんだが……。

「と、言う訳でお主には別の世界に転生してもらいたい」

「転生！？ 転生って、あの二次創作によくある奴か！？」

「うむ。その転生じゃ」

こいつはラッキーだ！ まさかとは思っていたが、本当にそんな
ことになってくれるとは！！

「じゃ、じゃあ！ IS！ ISの世界がいいー！」

「インフィニット・ストラトスの世界か……。良かるう。ああ、で
も、あくまでISの平行世界じゃからな。原作に無い展開が起きて
も不思議ではないと言うことを覚えておくのじゃ」

「ああ！ で、特典とかはないの？」

「特典か……。そうじゃな、ISバージョンのストライクフリーダム

と、スーパーコーディネイターにしてやろう。ストライクフリーダムにはGNドライブもつける」

「ついでにニコポ、ナデポもだ！ ハーレム作成を目指す！」

「仕様がなしのお……」

よっしゃあ！ これで……俺はハーレム王になる！！ 待ってい

ろ！ 俺のヒロイン達！

「じゃ、行ってくるのじゃ」

「おう！ 行ってくるぜ！！」

そう神様と会話を終えると、俺の視界が光に包まれた！ よしっ、
いっくぜえーーーー！！

「……あ。あの世界のヒロイン達にはニコポもナデポも、一人の男
の以外は効かないんじゃない……」
神様うっかり てへぺろ

* * *

来たな……ってうお！？ とつくに臨海学校！？ オイオイオイ

！ それじゃあもう一夏フラグが……！

「一夏あ！」

ん？ お、あれはシャルじゃないか！！ ひゅう、水着姿超可

愛い……！ しかし一夏を呼んでいるのはムカつく って、あれ？

あれが……一夏？ な、なあーんだ！ 一夏TSパターンかよ！

マジビビったぜ……一夏殺さなきゃハーレム作れないかと思つた

……。

さあて、このタイミングだと俺が介入出来るのは銀の福音が来た
ときだけだな……。それまでは、女の子達の水着姿を堪能しますか

！！

「ちよつとアンタ。そこで何してるの？」

「！？ な、なんだ！？ この某はるん声は！？ ISキャラにそんな声の奴は って、こいつリトバスの朱鷺戸沙耶じゃねえか！！ なんでここに！？ はっ……まさかコイツ……！！」

「て、てめえ……転生者か！！」

「……はあ？ 何意味不明なこと言ってるのよ。……テンセーシャ、って何かの暗号？」

「とぼけんな！ 原作に朱鷺戸沙耶なんていないぞ！！」

「……！？ ちょ、ちよつとアンタ。何であたしの名前を知ってるのかしら？」

「何で、だあ？ 本気で言ってるのかよ、リトバスを知ってる奴が、朱鷺戸沙耶を知らない訳ねえだろうが！」

「リトバス……リトルバスターズ、の事ね……。でも、残念だけどそれは理由にはならないわ。リトルバスターズ正式メンバーにあたしはいないもの。いるのは裏執行組織だけ……あなた、何者？」

「せ、正式メンバー、って。そもそも、朱鷺戸沙耶は超一流スパイだろ？ それで、理樹と学園に忍び込んで秘宝を」

「理樹！？ 理樹君の事まで漏れてるなんて……くっ、ソレスタル・ビーイングにスパイでもいるの……？」

「なんだコイツ。突然ぶつぶつと……。いや、そんなのは関係ねえ。オリ主は俺だけで十分だ！」

「なんだか知らねえが、瞬殺させてもらうぜ！！ 来い！ ストライクフリーダム！！」

「！？」

瞬間、俺の腕についた腕輪が光った！ するとなんと……俺の体にストライクフリーダムが！ おお……！ ちよつと感動だぜ！！俺は一気に沙耶（暫定的にそう呼ぶ事にした。ちよつと癪だけだな）に近づきながらビームサーベルを抜き放った！

「これは……エンドレスフリーダム！？ い、いや……形状が微妙

に違う……！ しかもあの粒子の色……オリジナル！？ あなた、そのGNドライブをどこで！？」

「死にやがれ！ オリ主は俺だけで十分なんだよおおお！！」

「くっ……来なさい！ ストライクノワールG！！」

バチバチバチ！！ と、沙耶が展開したISのビームサーベルとぶつかりあう。ストライクノワールって名前から察するに、スウェーデンの機体だな。だが、ストライクフリーダムとやり合うには、そいつじゃ役者不足だぜ！！

俺は腰のレールガンを展開し、放つ！

「へっ、くらいなあ！！」

「ちっ……舐めんじゃないわよ！」

って、うお！？ 急に力抜いてきたら俺がうべぶぶぶぶぶぶぶぶ！！？

俺は顔から思いきり地面に激突した。俺は急いで立ち上がる。

「くっ……この！」

「遅い！！」

ドッオオオオン！ と、俺の両肩にストライクノワールのレール砲が直撃した。その衝撃で後ろに吹っ飛ばされる。更に今度は『ビームライフルショーティー』を連射してきた。吹っ飛ばされるがままの俺は全弾命中。一気にシールドエネルギーが無くなった……。

「うげえ！？」

倒れた俺の腹を、沙耶は思いきり踏みつけてくる。で、出る！

中から何か出ちゃう！！

「何よコイツ……ガンダムタイプの上オリジナルのGNドライブ積んでるくせにまるでザコじゃない。戦い方も完璧素人だし……。そんなのであたしに勝とうなんて、一万と二〇〇〇年早いわよ」

まあ良いわ……、と俺の頭をストライクノワールの手で鷲掴みにして持ち上げてくる。

「とりあえず……アンタのガンダムをどこで手に入れたのかとか、GNドライブはどこから流れたのかとか、いろいろ話してもらわなく

ちやいけないわねえ……？」

沙耶がそう言った瞬間、俺の頭に声が流れた。

『だあから言っただじやろうに……そこはあくまで平行世界。原作とは違う事くらい起きると。その朱鷺戸沙耶は転生者でもなんでもなく、その世界の住人じゃ』

な、なあにいい！？

リトルバスターズ？

「じゃ、話は背中^{リトルバスターズ？}のネコ船で聞くから、とっとと行くわよ。（ピッ）

あ、千冬さん？ ちよつと不審者捕まえるのにドンパチやったけど気にしないでくださいねー。じゃっ、あたしはとっとと不審者連行しますんで。あ、後で顔出しますねー？」

と、途中ISのプライベート・チャネルを使って千冬に連絡したらしい。っていうか、背中^{リトルバスターズ？}のネコ船って何だ！？

「じゃあ……拷問くらい覚悟しなさい。転移、開始！ー」

瞬間、神様の所から旅立った時の様に俺の視界は光に包まれた……。

俺……どうなるんだあ！？

* * *

その後。

風間卓也は、「俺はオリ主なんだ！！」とか、「な、なんでニコボが効かない！？」とか、「神様あー！？ 助けてくれ！！」とか意味不明な事を散々わめき散らした挙げ句、拷問に耐えきれずに精神崩壊した。

……仕様がないので、彼の持っていたエンドレスフリーダムの真似をした機体だと思われるストライクフリーダムと、それに搭載されていたオリジナルのGNドライブだけを貰い受け、風間卓也は始末^殺された。

……神様はただ一言。「残念な奴じゃ……」と呟いていた。

短編3「今まで出てなかったけど……ちゃんと更新はされてるぜ？」（前書き）

どうも！ 約一週間ぶりです！

ちょっと言うのが遅れ気味ですが……みなさん！ お気に入り登録一〇〇件突破、及びPV十万件突破、ありがとうございます！
いつの間にか突破してびっくりしました！ これからも頑張ります！

さて、本編はもう少しお休みして、久しぶりのランキングバトルを、ちょっと短編で書いてみました。最近本編じゃ出せてなかった物で……。

それでは、どうぞ！

短編3「今まで出てなかったけど……ちゃんと更新はされてるぜ?」

日が暮れ始めたIS学園校庭。

そこでは二人の男女が戦っていた。

「な……なんなのこの人……っ、強過ぎる……!」

片方は先日女だという事を暴露したシャルル・デュノア改めシャルロット・デュノア。

「もう逃げられはしないぞ、シャルロット・デュノア。いや、うまう」

もう片方は……謎の男。

「だからうまうってなんなのさ!?!」

「お前が知る必要は無い。行くぞ……はーりやほーれうまう!」

「っ、うわああああああああああああああああ!?!」

校庭にはただ、シャルロットの悲鳴だけが響いていた。

* * *

ランキングバトル。

それはリトルバスターズ内で行われる、ちょっとした決闘である。ルールは簡単。周りに集めた人々から投げ入れられる“どーでもいー”物を、正しい使い方で戦う、というもの。例えば、音楽プレイヤーなら音楽にノッてダンスを踊る（ノッているため目は瞑る）。3Dメガネだったら、眼鏡らしくかける、などなど。故にそれなりに安全な決闘が可能なわけだ。

さて、現在のランキングは……。

第一位 織斑一夏

称号：バトルランキング

暫定王者

第二位 織斑千冬

称号：乗り越えられた壁

第三位 凰鈴音

称号：わたくしの下僕

第四位 ラウラ・ボーデヴィツヒ

称号：隻眼（嘘）のチビ

黒ウサギ

第五位 篠ノ乃箒

称号：石化した総理大臣

第六位 セシリア・オルコット

称号：ゴールドンドリル

第七位 シャルロット・デュノア

称号：金系の貴公子な彼女

第八位 棗恭介

称号：私の嫁

第九位 マスク・ザ・斉藤

称号：謎の男

……と、なっている。

……ん？ なんか変なのが混じってないか？

あ、また更新されたようだ。

第九位 シャルロット・デュノア

称号：斉藤初段

第七位 マスク・ザ・斉藤

称号：謎の男

* * *

「こ……これは!？」

おはようございます。織斑一夏です。

先日、あの強敵である私のお姉ちゃん、千冬姉を倒し、ランキングの一位に上り詰めました！ いやぁ……強かったなぁ……。武器の差がなかったら確実に負けてたよ……（私……ペーパークラフト・城 千冬姉……3Dメガネ）。

さて、私のルームメイトは箒なのですが、この朝っぱらから突然声を上げるものだから目が覚めちゃいました。

隣のベッドを見ると、何やら携帯を見て驚愕した表情を浮かべて

いる箒が。

私は寝起きな口調で箒に話しかけた。

「箒……？ どおしたのお……？」

「一夏……！ これを見る！」

と、私に携帯を見せる箒。

えーっと、なにになに？ これって……ランキングバトルのランキング表じゃん。

「これがどうかしたの？」

「バカっ！ 下の方を見る！ 第七位だー！」

第七位……って。確かシャルロットだったよね？ それがどうかした　っ！？

こ、これは……！？

「奴が……奴が来たんだー！」

「最強の称号として掲げられているランキングバトル最強の男……」

そう。第七位にシャルロットの名は無かった。それどころか第九位にいて、称号が『斉藤初段』になっている。

そして第七位には　、

『称号：謎の男　マスク・ザ・斉藤』

ついに……ついにリベンジの時が来た……ッ！！

* * *

「見つけたぞ。鳳鈴音」

「ん？」

あたしは鳳鈴音。中国の代表候補生兼リトルバスターズのメンバ
ーよ。

最近リトルバスターズ内ではランキングバトルが流行ってる。と
いうより、大分人数が増えてきてバトルする回数が増えてきた、っ

という方が正しいのかしら。とにかく最近はランキングの上下が激しい。あたしもつい先日、セシリアに負けて屈辱的な称号を受けたわ……。まあ、後でランクを上げてやったけど。

今の所、ラウラが絶対調みたいね。何戦かしたらしいけどまだ初期の称号のまま……。さすがは軍人、って所なのかしら。どんな武器でも使いこなしていたわ。

さて、そんな中の昼休み、私は昼食に向かう途中男に話しかけられていた。普段ならナンパだと思って適当にあしらう所だけど……
あいにく生憎ここはIS学園。ここで男に話しかけられるということは普通ありえない。

ふと、振り返ってみる。

そこには……。

「あ、アンタは……マスク・ザ・斉藤!？」

「久しぶりだな。凰鈴音」

そう。私の振り返った先には、ランキングバトル最強の称号（自称だけど）であるマスク・ザ・斉藤がいたのだ!

容姿は簡単。

どこかの黒い上着とズボンに青緑のネクタイという、どこかの制服らしき物を来て、頭にはどこぞの民族の物みたいな仮面を付けている端から見たらただの変質者な男だ。いや、顔見てないから男じゃないかもしれないけど、声からして多分男。

ハッとした私は急いで携帯を開く。

いつの間にか簞がやられていた。称号が斉藤七段になっている。

つまりマスク・ザ・斉藤は現在五位。三位であるあたしに対する挑戦権を持っている訳だ。

「ふふっ……まさかアンタが現れてるとはね……。気がつかなかったわ」

「俺は風と共に現れ、風のように去っていく男だからな。うまっ」

「あいつかわらずその意味不明な口癖なのね……」

「これは俺の象徴だ。うまあう」

「そっちの仮面は象徴じゃない訳？」

「これは飾りだ。偉い人には分からのだよ、はりゃほれうまうー」
「ジオ　グの足扱い！？」

一番目立っている部分は実は飾りだった！

「さて……もう生徒達は集まっているようだ。始めるとしようか、
凰鈴音、いや、うまうー」

「そうね……アンタの大進撃、ここで食い止めさせてもらうわよ！
！」

謎の男

第五位　マスク・ザ・斉藤

VS

わたくしの下僕

第三位　凰鈴音

「はりゃほれうまうー！」

マスク・ザ・斉藤は土偶を使った！　マスク・ザ・斉藤の体力が
八〇上がった！

マスク・ザ・斉藤はシタールを使った！　マスク・ザ・斉藤の全
能力が二〇上がった！

「うまうー！」

「これを使うわよ！」

鈴音はカップゼリーを使った！　鈴音の腕力・体力・集中力が三
〇上がった！

「力がみなぎってくるわ……！」

マスク・ザ・斉藤

凰鈴音

腕力

263

120

運	判断力	集中力	反射神經	俊敏性	体力
87	219	278	197	245	312
53	157	122	132	101	131

周囲の生徒達から様々な武器が投げられる！

「はりやほれうまうー！」

マスク・ザ・斉藤の武器……MP3プレイヤー（60GB）
現在の最小・最大Hit数 3 - 5（限界）

「いねよ!」

1-1 鈴音の武器……ソフビ製のヒーロー 現在の最小・最大Hit数

BATTLE START!!

マスク・ザ・斉藤の攻撃！

「はーりゃほーれうまうー!!」

マスク・ザ・斉藤は音楽に合わせて踊り出した！

リズムミカルに踊って攻撃！

鈴音に二二のダメージ！

鈴音に二五のダメージ！

鈴音に二一のダメージ！

鈴音に二九のダメージ！

鈴音の攻撃！

「行くわよ!!」

鈴音はソフビ製のヒーローを手で戦わせた！

マスク・ザ・斉藤に二八のダメージ！

マスク・ザ・斉藤の攻撃！

「はーりやほーれうまうー！！」

マスク・ザ・斉藤は音楽に合わせて踊り出した！

リズムカルに踊って攻撃！

鈴音に三六のダメージ！

鈴音に四一のダメージ！

鈴音に三七のダメージ！

鈴音に三四のダメージ！

鈴音に四三のダメージ！

鈴音の攻撃！

「くらいなさい！」

鈴音はソフビ製のヒーローを手で戦わせた！

しかしマスク・ザ・斉藤はひらりと避けてみせた！

マスク・ザ・斉藤の攻撃！

「はーりやほーれうまうー！」

マスク・ザ・斉藤は音楽に合わせて踊り出した！

リズムカルに踊って攻撃！

クリティカルヒット！

鈴音に六二のダメージ！

鈴音に六四のダメージ！

鈴音に六一のダメージ！

鈴音に六二のダメージ！

「く、ここまでね……！！」

鈴音は倒れた！

マスク・ザ・斉藤の勝利！

「はりやほれうまうー！」

「お前はこれから……こう呼ばれる」

鈴音は『斉藤三段』の称号を得た！

「うう……何よそれえ……」

ランキング表

第一位	織斑一夏	称号：バトルランキング
暫定王者		
第二位	織斑千冬	称号：乗り越えられた壁
第三位	マスク・ザ・斉藤	称号：謎の男
第四位	ラウラ・ボーデヴィツヒ	称号：隻眼（嘘）のチビ
黒ウサギ		
第五位	凰鈴音	称号：斉藤三段
第六位	セシリア・オルコット	称号：ゴールドンドリル
第七位	篠ノ乃箒	称号：斉藤七段
第八位	棗恭介	称号：私の嫁
第九位	シャルロット・デュノア	称号：斉藤初段

* * *

鈴音が斉藤に倒された。

その情報がリトルバスターズ内に広まるのはそう時間がかかる物でもなかった。

二つ飛ばしで来ている所を見ると……次の狙いになりそうなのはこの私、織斑一夏。

というかさつき斉藤の能力値見たけど……小学校の時よりも圧倒的にパワーアップしてるよ……。私もそれなりに強くなったと思うけど勝てるかな……？

いや、勝たなきゃ。千冬姉に勝った私が、負けるわけにはいかない。それは千冬姉の顔に泥を塗る行為だ。たとえランキングバトル最強を謳われるマスク・ザ・斉藤が相手でも私は勝たなくちゃならない。そう……絶対に！

私の目の前にどこぞの民族の仮面をした男が現れた。

……。

うわっ……いきなり過ぎる……。

さすがに心の準備が出来てないよ……。

気付かないフリして通り抜けよう……。

「そうそう、こんな仮面かぶった奴、たまに外でも見かけるからなー、流行ってんのかなー。……んなわけないだろうっ！」

なんか一人でノッて一人でノリツツコミしながら思いきり肩をつかまれた！

「こいつは強さの象徴さ。一番強い奴しか持てない。どうだ、欲しいだろ？ うまうー」

「いや、特には……っていうかそれ飾りだって言ってたって鈴音から聞いたんだけど……」

「お前そんな人生で良いのかよっ、うまうー」

「前も言っただけど、そのうまうー取って話してよ」

が、そんな言葉も無視する斉藤。

「今お前が一位なんだろっ、一番強いんだろっ、みんな倒してきたんだろっ。それを誇りに、俺と戦えよ。うまうー」

「そんな大した……事だけどね、千冬姉とか……」

「逃げるのか？ 逃げ続けるのか？ そしてヒーローが現れるのを待つのか？ そいつが代わりに戦ってくれるのか？」

斉藤はやれやれ、と顔の横で両手をやりながら、

「そんなそんなヒーローはどこにもいないぜ、一夏、いや、うまうー」

ー

……いくらなんでも今のは頭にかちんときた。確かに今まで恭介や千冬姉達に守られてきたけど、今は多少なりとも自分自身くらいは守れるようになってきた。

そうだ。私はそんな甘えん坊じゃないはずだ。

「よし、戦う男の目になったじゃないか」

「いや私女なんだけど」

「人を集める」

「いや無視しないでよ……」

斉藤は携帯を取り出し、片手で操作して耳に当てる。

「うまうー」

この場所を伝えてるみたいだけど……ちゃんと伝わってるのだろうか。凄く心配なんだけど。

すると、驚く事に心配は無用だったようで、ぽつぽつと人が集まり始めた。

「リトルバスターズ最後の砦、織斑さんがみんなの無念を果たすのかしら!？」

「マスク・ザ・斉藤の強さは半端じゃないよ、いくらランキング一位の織斑さんでも無理でしょ」

「とにかく、良い試合になりそうね。面白い……!」

瞬間、斉藤が指をパチン、と鳴らすと共にバトル結界が展開される。何やら空中にHPゲージみたいなのが現れ、横に私たちの能力のパラメーターが映し出される。

「よし、じゃ、バトルスタートだ!」

『いやっほおー!ーう!ー!（野次馬達）』

謎の男

第三位 マスク・ザ・斉藤

VS

バトルランキング暫定王者

第一位 織斑一夏

「これを使うよ！」

一夏は《学園革命スクレボ》第一〇巻を使った！ 腕力が七〇上がった！

一夏はキャストパズル・難易度5を使った！ 集中力・判断力が三十上がった！

一夏は芸術に達した変な絵を使った！ 全能力が二〇上がった！
「これなら……行ける！」

「はーりやほーれうまうー！」

マスク・ザ・斉藤は土偶を使った！ マスク・ザ・斉藤の体力が八〇上がった！

マスク・ザ・斉藤はシタールを使った！ マスク・ザ・斉藤の全能力が二〇上がった！

「うまうー！」

マスク・ザ・斉藤		織斑 一夏	
腕力	2 6 3	1 6 9	
体力	3 1 2	1 3 7	
俊敏性	2 4 5	1 4 2	
反射神経	1 9 7	1 2 6	
集中力	2 7 8	1 5 2	
判断力	2 1 9	1 6 4	
運	8 7	6 5	

周囲の生徒達から様々な武器が投げられる！
「はりやほれうまうー！」

マスク・ザ・斉藤の武器……かごとくに 現在の最小・最大

Hit数 1 - 1 (限界)

「これだっ！」

一夏の武器……ゴム風船・大 現在の最小・最大Hit数 1

- 3

マスク・ザ・斉藤の攻撃！

「はーりやほーれうまうー！」

マスク・ザ・斉藤はかごとくにを投げつけた！

しかし一夏はひらりと避けてみせた！

一夏の攻撃！

「行くよっ！」

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

合計一個の風船が転がっている！

マスク・ザ・斉藤の攻撃！

「うまうー！！！」

マスク・ザ・斉藤はかごとくにを投げつけた！

一夏に九三のダメージ！

一夏の攻撃！

「それっ！」

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

合計二個の風船が転がっている！

マスク・ザ・斉藤の攻撃！

「はりやほおれっ！」

マスク・ザ・斉藤はかごとくにを投げつけた！

しかし一夏はひらりと避けてみせた！

一夏の攻撃！

「行くよっ！」

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

合計五個の風船が転がっている！

マスク・ザ・斉藤の攻撃！

「はりゃほおれっ！」

マスク・ザ・斉藤はかごとうにを投げつけた！

一夏に一〇四のダメージ！

一夏の攻撃！

「それっ！」

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

合計八個の風船が転がっている！

マスク・ザ・斉藤の攻撃！

マスク・ザ・斉藤はゴム風船・大を踏んづけてしまった！

ゴム風船・大が一斉に破裂する！

マスク・ザ・斉藤に四三のダメージ！

マスク・ザ・斉藤に四四のダメージ！

マスク・ザ・斉藤に四一のダメージ！

マスク・ザ・斉藤に四三のダメージ！

マスク・ザ・斉藤に四〇のダメージ！

マスク・ザ・斉藤に三九のダメージ！

マスク・ザ・斉藤に四五のダメージ！

マスク・ザ・斉藤に四一のダメージ！

一夏の攻撃！

「行くよっ！」

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

合計三個の風船が転がっている！

マスク・ザ・斉藤の攻撃！

「はりゃほおれっ！」

マスク・ザ・斉藤はかごとうにを投げつけた！

一夏に一〇三のダメージ！

一夏の攻撃！

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

一夏はゴム風船・大を膨らませて地面に置いた！

合計五個の風船が転がっている！

マスク・ザ・斉藤の攻撃！

マスク・ザ・斉藤はゴム風船・大を踏んづけてしまった！

ゴム風船・大が一斉に破裂する！

マスク・ザ・斉藤に四一のダメージ！

マスク・ザ・斉藤に四三のダメージ！

マスク・ザ・斉藤に四五のダメージ！

マスク・ザ・斉藤に四二のダメージ！

マスク・ザ・斉藤に四〇のダメージ！

「うまううう……」

マスク・ザ・斉藤は倒れた！

一夏の勝利！

「やったあ！！ 私の勝ちだあっ！！」

* * *

「え……勝ったの……？ 私、勝てたの……？」

喝采の中、私は自分の声すら聞き取れないでいる。

「やるじゃないか一夏、いや、うまうー」

と、喝采の中でも良く通る声で斉藤は言う。

「お前は俺をも乗り越えた」

そのマスクに手をかけ……そして外した。

……恭介だった。

「ふ……」

「……」

「驚いたか」

得意げに恭介が言う。

「え、まあ……」

「なんだ、その適当なりアクションはっ！？」

「い、いや……びっくりしてるんだよこれでも……うわー恭介だったんだー、って心の中で」

「ま、いいか……」

恭介は若干冷や汗をかきつつも、気を取り直して、自分の手に持つマスクを私の方に差し出しながら、

「そして、これからはお前がこれを引き継ぐ」

「え……？」

意味が分からなかった。

「マスク・ザ・斉藤は今日からお前だ」

「えええー……っ！！？？」

「そっちの方が仰天するんだな……ま、いいか」

再び恭介は気を取り直し、

「綿々と続いてきたこの学校の伝統だ。最強がこのマスクを継ぐ。次は一夏、お前だ」

「えーっ!？」

マスクを差し出される。

ていうかそんな伝統がIS学園に本当にあるの!？

一夏は『マスク・ザ・斉藤のマスク』を手に入れた！

……なんかそんな表示が目の前に出てきた。っていつかいつの間にかマスクが私の手に!？

……捨てようと思ったけど捨てられなかったので、仕様がなくキヤストパズル難易度5を恭介にあげた。

「かぶってみる」

なんだかみんなから期待の視線を感じる……。

「ほら、早くしろよっ」

「う……うん……」

恭介に急かされ、仕方なくかぶってみる。

「つて、えー!？ これ前見えないのっ!？」

「心眼で捉えよ」

「むちゃくちゃだあーっ!！」

ていうかこれで恭介は戦ってたんだよね……凄過ぎる……。

と、周りの野次馬である女の子達から、「さーいーとう! さーいーとう!」と、何か斉藤コールが巻き起こっている。

「ようしお前ら! きょうは朝まで斉藤祭りだ! 手始めに新しい斉藤を胴上げしながら、校内一周だ!」

「え!？ うわ、ちょ、やめ、うわああー!ー!ー!ー!っ!！」

……THE END

んなわけない。

短編3「今まで出てなかったけど……ちゃんと更新はされてるぜ？」（後書き）

始まり方適当でごめんなさい。

ていうか……原作リトルバスターズの斉藤よりも圧倒的に強いぞ
I・Bの斉藤……！ パラメーターは二〇〇越えは一応してみた
いけど、I・Bの斉藤ほどの能力は無い……。適当に能力つけた
けど、かなり強くなってしまったようです。

一応、斉藤の使う武器の最小・最大Hit数は全部限界に達して
いる設定。まあ中身は恭介だし、あんまりおかしくないのかなー、
とかちよっと思ったりしちゃってるんだけど……みなさんはどう思
いますか？

次回は今度こそ、本編に入ります！

第18話「夜と食事と恋バナ恋バナ」

時が過ぎて夕食の時間。

「昼もだったが、夕飯も豪華だな。ワサビは本ワサ、刺身はカワハギ……すげえな」

茶碗片手に言うのは浴衣姿の恭介。ちらりと見える胸元に周りの女生徒達はちらちらと恭介に視線を向けたり向けなかったり。

そんな恭介の横に座っているのはシャルロットとセシリア。セシリアはともかく、シャルロットは少し前まで使えなかった箸をいつの間にやらマスターし、完璧に使えている。

「ほんわさ？」

シャルロットが首を傾げながら聞く。

「ん？ シャルは知らなかったか。本物のワサビをすりおろしたのを本ワサって言うのさ」

「？ でも学園の刺身定食にもワサビってついてるよね？」

「あれは練りワサ、いろいろやって本ワサに近づけた奴だよ」

へえ……とシャルロットは本ワサを箸で掴み、

「じゃあこれが本物のワサビなんだね？」

食べた。

「~~~~~ッ!!?」

「……大丈夫か？」

シャルロットは、本ワサを思いきり口に入れば当然だが、プルプル震えながら涙目で鼻を抑えている。

「ら、らいひょうふ……ふ、ふうひがあっておいひいね……」

「そんな時まで優等生じゃなくていいぞ……。ワサビは刺身と食べるんだ、今度はそのまま食べるなよ」

「お、覚えとくよ……」

言いながら渡してくる茶を受けとりながらシャルロットは言い、そのまま一気に飲んでいく。

と、今度は反対側から「うつ……くうつ……」と呻き声が耳に入ってきた。

「セシリア……正座が辛いならテーブル席に行った方が良いでしょう」

「い、嫌ですわ……こ、この席をつ……確保するのは……く、苦勞しましたし……」

そうは言いながらも俯きながら呻く。さっきのジャンケンはそんなに激戦だったのだろうか。それにしてはかなり早く終わっていたが。

恭介は嘆息すると、自分の箸でセシリアの料理を取り、セシリアの方へとやった。

「へ……？」

「そこまで言うなら、ほら。食わせてやるよ」

「ほ、本当ですよ！？」

（し、しかもこの箸恭介さんの……か、かか、間接キス……！）

「嘘言つてどうする」

頬を赤らめながら内心で感動しつつ唾液を思わず飲み込んで言うセシリアに、恭介は何も思わないかの様に返した。が、今のセシリアには気にしている余裕は無い。

「で、ではお願いしますわ！　せっかくのお料理を残してしまうのはもったいないですよのね！」

辛さも忘れて笑顔になり詰め寄ってくるセシリアに、若干赤くなりながら「お、おう」と答えながらセシリアの口に箸で取った刺身を持つていく。小さく口を開け、食べた。

美味しくて笑顔になっているのか、それとも間接キスが嬉しいのか（おそらく後者だが、恭介はそちらの可能性は考えていない）満面の笑みで咀嚼する。それを見ながら笑みを浮かべつつ、茶碗から白米を一口。目の前から小さく、あつ……と眩くのが聞こえた。すると、

「あーっ！　セシリアが棗君に食べさせてもらってるー！！」

「ええーっ！？　セシリアズルい！」

「そつだそつだ！ 卑怯者ーっ！」

「正々堂々勝負しなさいーい！！」

さすがと言うべきか。一人が騒ぐと連鎖的にみんな騒いでいく女生徒達、思わずセシリアが驚いたのも無理は無いと言える。

セシリアは何か言い訳しようと口を開く。が、何か言う前に大広間の外から中に響くほどの足音が聞こえてきた。その正体は 鬼教師、織斑千冬だった。

「お前達は静かに食事をする事が出来んのか！？」

「お、織斑先生……」

さつ、と千冬は恭介に視線を向ける。

「この騒ぎの元凶はお前か、棗」

「みたいだな」

「お前と言つ奴は……一体どこに行けばお前は騒ぎを起こさないんだ」

「どこに行つてもだ」

「つまり……諦めろと言つ事か？」

「平たく言えば」

「そうか……だが断る！！」

「だよなあ……」

睨みつける千冬に苦笑する。

「悪いなセシリア、これ以上は千冬さんとのガチバトルになっちゃうからここまでだ」

「むうう……！！」

「本当わるい。そつだ、埋め合わせになるか分からないが、後で俺の部屋に来いよ、千冬さんと同室だから」

「へ？ そ、それは……もしかして？」

「まあ、無理強いはしないが……来るなら多少期待してろ」

「~~~~~っ！」

一夏ほどじゃないけどマッサージ出来るからな、と心の中で呟く恭介を他所に、何を勘違いしているのかセシリアは顔を赤くしてい

る。

たらし、と恭介の頬から汗が垂れた。

……恭介は向けられる、とある少女達の視線にバスターライフル並みの貫通力を感じていた。

* * *

夕食後、生徒達が入浴し終えた頃、セシリアは鼻歌を歌いながら嬉しそうに何やら準備していた。

何か予感していた……訳ではないが用意しておいた新品の勝負下着を穿き、適度な感じで香水も使用する。

ふふっ……完璧ですわ、と心の中で一人呟く。

と、彼女の後ろで談笑している生徒達の声が入ってくる。

「あーあ……せっかく棗君と一緒に遊ぼうと思っっている持ってきたのに……」

「織斑先生と一緒にの部屋じゃねえ……」

「それにさっき出て行った娘もなんかトラップに引っかかって掴まっちゃったみたいだし……」

ちなみに、トラップを仕掛けたのは千冬でも恭介でもなく、先日不審者を捕まえた沙耶だったりする。

（そつえば恭介さんは織斑先生と同じ部屋でしたわね……）

恭介ならなんだかんだで一、二時間ほどどこかに行かせるくらい出来そうな気はするが……やはりそれだけは懸念事項だ。いや、恭介がその程度の懸念事項見逃すはずが無い。下手したら外で。そこまで考えた所でセシリアは自分の顔が赤くなるのを感じた。が、それでも口の端が上がるのは止められない。

が、これからの事について妄想しているセシリアは気付かなかった。目の前に誰か居るのを。

「あゝっ！！　せっしーがえっちい下着付けてるうゝ！！」

「んなっ！？」

いたのは布仏本音。通称のほほんさんだった。

「なにっ！？ 脱がせ脱がせえ！！」

「身包み剥がすんだー！！」

「ちよっ、まつ、きやあああ！？ や、やめ……っ！！」

現代の十代女子の戦闘力は時として某龍玉の悟すらも上回る。

それが数人いる時点でセシリアの敗北は決定していた。あつという間に浴衣を脱がされ下着姿に。

「うわゝ、本当にエロいの付けてる……」

「エロいなゝ、セシリアエロいなー」

「ていうかこれ勝負下着？ 棗君の所に行けないのにそんなの着ちやってえ」

『セシリアはエロいなあ』

「え、エロくありませんっ！ こ、これはその……み、身だしなみ

……そう、身だしなみですわー！！」

顔を真っ赤にして反論する。が、露あひだになっっている黒い下着のせいで全く説得力がない。実際、目の前の本音達は一向にニヤニヤを止めない。

「も、もう！ わたくしは行く所がありますの！！ では！」

しゅばっ、と乙女パワー全開で包囲網を一気に突破し、部屋を飛び出す。「ああっ！！」と後ろの方で声がしたが気にせず、器用に走りながら浴衣を整え、さっきまでと元通りの姿に。

目指すは恭介のいる部屋。鬼が出るのか、それとも幸福が降ってくるのか。扉を開けてみないと分からない。

そろそろ恭介のいる部屋が近づいてきた頃には、セシリアは若干ニヤけながらも余裕を持って歩いていった。さっきまでの事は過去にして、今はもうすぐたどり着く幸せの園の事だけを考える。

実はここまで来るのに少しだけ苦労した。最初こそは普通に歩い

ていたのだが、何故か落とし穴が空いたり麻醉付きの小さい針が飛んできたり、etc、etc。とにかく、普通の旅館とは思えない様な仕掛けの数だった。偶々目の前を通った人が落とし穴に落ちたり、浴衣の裾を踏んで針を避けたり、といった風な幸運に助けられて何とかここまで来れた。

そして、若干警戒しながらも時折ねじの数本はずれた妄想しつつ、目的の部屋の前にたどり着く。

と、その部屋の扉の前で不審な行動を取る者達がいた。

一夏と鈴音だ。

「……みなさん、なにをなさってますの？」

「シッ！」

一夏は一瞬セシリアを睨みつけ人差し指を口元に持ってきてそう言った。

怪訝な顔をするセシリアに鈴音が耳を当ててみる、とジェスチャーで示してきた。何を……と思ったが、別に断る理由も無いので、とりあえず耳を当ててみる。

うつ……くあ……！ と、千冬の艶やかな声が聞こえた。

「！？」

驚きが隠せないセシリアを他所に、中の状況は動く。

「やっぱり、固くなってるぜ？」

「そんな訳あるか馬鹿者……んっ！ お、おい！ 加減をしろ……！」

「だが断る。そら、ここはどうだ？」

「くう……！！ そ、そこは止め……！！！」

「ここが良いのか？ じゃ、もっと攻めさせてもらおう」

「うつ……んあっ……！」

「こ……ここ、これは……！？」

だらだらと汗をかきながら顔を引きつらせるセシリア。ふと一夏

達を見ると、二人とも顔を赤くしながら真っ青にするというなんと
も器用な事をしつつ、通夜の様な暗いオーラを溢れさせている。

『さーて、じゃあ次は……』

『少し待て』

『あ、やっぱり気付いてたか……』

瞬間、ドアがいきなり開かれた。中からだど引く形で開ける使用
のため、耳を当てていたセシリア達は中に雪崩れ込む形で倒れる。

「ふぐうっ……」

「何をしているか馬鹿者ども」

「こ、こんばんは織斑先生……」

「さ、さよなら織斑先生……」

逃げようとするセシリアと鈴音は肩をつかまれ、部屋に引っ張り
込まれた。

「一夏、ボーデヴィツヒとデュノアを呼んでこい」

「う、うん……」

一夏が駆け足で呼びに出る。

「ちょうどいい、セシリア。こっち来な」

「え？ あ……」

手招きする恭介に若干の戸惑いを覚えるセシリア。ちらりと千冬
の方を見ると、顎で行け、とのご命令。

まさか……人前ですのですか！？ そ、そんな……恥ずかしい
ですわ……、と顔を赤くしながらも恭介の元に寄り、ベッドに横た
わる。

「あー、仰向けより俯せあおむせになっうつむてくれ」

「う、俯せですか？」

日本では俯せですから……、とマニアックっぱさをどこと
なく感じつつも言う通りにする。

「じゃあ、行くぜ」

「は、はい……」

く、来る……！！

瞬間、セシリアの腰を恭介の指が強く圧した。

「痛たたたたた　　ッ!!?」

思わず仰け反る。

「な、何を……?」

「何、って……マッサージ」

「……………」

絶望と羞恥が一気に襲いかかってきた瞬間だった。

恭介のマッサージを受け続けて数分。

「どうだ?」

「き、気持ちいいです……」

一夏ほど上手くはない、と言いつつさっきからマッサージされ続けていたが、実際結構な腕だと思っているのは嘘偽りない。と、言うよりも、好きな相手にマッサージされている分、もしかしたら一夏がするよりも気持ちよかったりするのではないか、とセシリアは思う。

すると、突然尻を鷲掴みにされた。

（きよ、恭介さん……?　マッサージとはいえ大胆な……）

「ふむ、派手な下着だな」

何故か千冬の声がした。

反射的に振り向く。

鷲掴んでいたのは千冬だった。

「しかし、歳不相応の下着だな。その上黒か……」

「きゃあああああッ!!?」

騒ぐ隣で恭介が若干赤くなりながら目をそらす。

「せつ、先生っ。は、離してくださいっ!」

ぱつ、と離す。

「やれやれ……教師の前で淫行を期待するなよ、一五歳」

「い、いい、いんこつ……!？」

セシリアはトマトのごとく赤くなる。

「冗談だ。おい、聞き耳立てている三人。そろそろ入ってこい」
「……………」

千冬が言つと、恐る恐るといった感じでドアを開け、一夏、シャルロット、ラウラが入ってきた。

「恭介、マッサージはもういいだろう。ほれ、全員好きな所に座れ」
手招きしてくる千冬に、緊張気味に一夏達は各々の場所に座る。

「恭介、風呂に行つてこい。部屋を汗臭くされては困る」

「ん、そうだな」

特別汗をかいている訳でもない事は分かっていたが、何かしら男には聞かせられない話、いわゆる女だけの話というのが行われるのだろうと判断して、適当に着替えとタオルを持って部屋を出た。

恭介が出て行った後、女だけの話があるという事をなんとなく感じ取っていた一夏達は、たたり、と汗を垂らす。

「おいおい、葬式か通夜か？　いつものバカ騒ぎはどうした？」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは……ええと……」

「は、初めてですし……」

「あ、あはは……」

と、千冬は一つため息をつく。

「全く、仕様がないな。私が飲み物をおごつてやろう」

言つて冷蔵庫からオレンジジュースやらスポーツドリンクやらを取り出し、一夏達に一つずつ渡していく。

「い、いただきます」

各々が受けとった飲み物を一口飲む。

「飲んだな？」

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの!？」

「失礼な事を言うな馬鹿者め。なに、ちょっとした口封じだ」

言いながら取り出したるはキンの缶ビール。ぷしゅっ、といい音を立ててプルタブを開け、ゴクゴクと飲む。

『……………』

思わず啞然とする一夏達。

ぷはあっ、と息を漏らし、上機嫌な様子でベッドに腰掛ける。

「ふむ、本当なら恭介か鈴にでも一品作らせる所なんだが……それは我慢するか」

「鈴？　鈴音の事？」

「あ、ううん、恭介の妹よ」

「妹!？　嫁には妹がいたのか!？」

「うん。ちよつと人見知り気味な娘なんだけど、なんだかんだでブラコンっていうか……」

「そして恭介はシスコンだ。前に恭介にロリコン疑惑が出た時に『近寄るなド変態!』って言われて自殺しかけたからな」

少し引いた。

「まあ前座と鈴の話はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」

あ、忘れてた、と千冬の方に視線を戻す。いつの間にかビール二本目に突入していた。

「お前ら、アイツのどこがいいんだ？」
恭介

瞬間、全員の脳裏に恭介の顔が通り過ぎた。

「わ、私は別に……未だに勝てない自分が腹立たしいだけですの
で」

言ってラムネを一口。

「あたしは……腐れ縁なただだし……」

スポーツドリンクのペットボトルを手中で弄^{もてあそ}びながら鈴。

「わ、私はクラス代表としてしつかりして欲しいだけです……」

「ふむ……そうか。なら、そう伝えておこつ」

「「伝えなくていいですっ!」「」」

箒達を無視して一夏達の方に目を向ける。

「わ、私は……その……最初は、強くてカッコ良くて、優しくって、そんな恭介に憧れてて、私もああいう風になりたいな、って思ってたんだけど……ずっと一緒にいる間に……い、いつの間にか好きだった、っていうか……」

「ふむ……まあ、お前らしいかもしれないな。デュノアはどうだ」

「え、えっと、優しいところ……です……」

「アイツは誰にでも優しいぞ。特に仲間にはな」

「そうですね……そこがちょっと悔しいかなあ……」

苦笑しながら、熱く火照った頬を手で扇ぐ。

「お前はどうか、ボーデヴィツヒ」

ぴくつ、とラウラは肩を揺らす。

「つ、強い所……でしようか」

「ふむ……まあ、強いが弱いかなと言えばアイツは確かに強いな」

「はい、強いです……少なくとも私より……」

聞きながら千冬のビールは三本目に突入。

「まあ、アイツは役に立つぞ。一夏ほどじゃないだろうがマッサージも上手いし料理もそこそこ出来る」

実際、一夏が一人家にいる時は家事の手伝いしてもらっていたようだしな、と付け加える。

「付き合える女は得だな。だが、反面心配が絶えん」

「え？」

「アイツは強い。が、その強さがあるせいか、仲間のためなら結構な無茶くらい余裕です。ついでになんだかんだで脆い。お前も見ただろう、その一端を」

ふと脳裏によぎったのは学年別トーナメントの時。一夏が傷つき、

千冬達も死んでしまったと勘違いした恭介がゼロシステムに飲み込まれた時の事。

「あれはある意味誰もが心神喪失しても仕様がなと言えるかもしれない。が、本来のアイツならば絶望はしてもゼロに飲まれるほど油断はしないはずだ。だがあの時はした……」

仲間が消えれば一瞬で崩れる　そういう脆い強さなんだ、あいつのは。

だが、と千冬は加える。

「逆に言えば、私達が誰一人消えなければ良いだけの話なんだがな」「えーっと……？」

「つまりだ……」

一夏が首を傾げると、千冬は人差し指をぴつ、と立てて、

「お前ら。恭介のハーレムを作る気はないか」

『……………は？』

状況は加速する。

第18話「夜と食事と恋バナ恋バナ」（後書き）

やっちゃまったZE……。ヒロイン決められなくて思わず完璧なハ
ーレム目指す事になってしまった……。

ま、まあ恭介なら案外全員愛せそうな気もするし……。

第19話「話と仮面と襲撃のリーダー」

「お前ら。恭介のハーレムを作る気はないか」

.....
.....は？
『

しばらく思考回路がフリーズした。何とか復活させた一夏達の思考がまず至ったのは、何を言ってるんだこの教師（？）は、だった。唖然とする一夏達を見て、まるで予想通りとでも言つようにふつ、と笑う。

「ち、千冬姉？ な、なんでそう言う話に……？」

数瞬の硬直の後、最初に口を開いたのは一夏だった。

「いやなに。アイツの場合、私たちの中から誰か、なんて選べない
 と思っただけだ。だったらいつその事、ハーレムの方が良いのではない
 か、そう思っただけだ」

アイツなら全員本気で愛する事くらい出来るだろう、と千冬は付け加える。

……確かに、恭介ならそれくらいは出来るかもしれない。いや、おそらく出来る。が、かといってハーレムと言うのはどうなのだろうか。

それに、と干冬は続ける。

「お前ら、恭介以外に惚れられる自信があるか？」

!?

「無いだろう。いや、もしあるとしてもそれは相当先の事になるだろうなあ、アイツほどの男、もしくはそれ以上の奴など早々いるものでもあるまい」

誰も反論出来なかつた。千冬が言っている事は全て紛れも無い事実だ。例えるならば、世界一の料理を食べた後にその辺のレストラン

ンで食べたらずマズく感じる（そうでなくとも美味しくは感じない）
ような物。恭介に触れ、話し、その存在の大きさを知ってしまった
一夏達に、他の男を好きになれというのはなんとも酷な話と言える。
「そして……非常に癪な話だが、私もそうだ」
『ええっ！？』

一夏以外は驚愕の声を漏らした。

「まあ、一夏に好きなんですよ、とか言われた時は思わず否定して
しまったが……」

「いや、あれは否定になってなひぎゃっ！？」

「黙っている一夏。まあとにかく、私もお前達も、恭介以外に惚れ
るのは極限的に難しいだろう」

一夏達は頷く。

「そして恭介もまた、私達から誰かを選ぶなどおそらく出来ん。出
来ても案外関係が壊れる可能性があるだろうな。リトルバスターズ
を壊したくないと言う、アイツ自身の願いによって」

ありそうで怖い話だった。

「だったらいつその事、全員を選ばせてやれば良いじゃないか、と
思い立った訳だが……どうだ？」

「どうだ、って言われましても……」

セシリアは若干曖昧に答える。確かにそれも選択の一つだ、とい
う気持ちはある物の、なんとなく一步が踏み出せないというのが現
状だった。

「ああ、ちなみに。ハーレムの選択をしたのは私だけではなくてな」
「え？」

突然の切り出しにシャルロットが問うような視線を向ける。

「一夏と凰、篠ノ乃は知っているだろう。直枝理樹という奴でな」
「……理樹いつ！？」「……」

一夏達（声には出さなかったがソレスタル・ビーイングで会って
いるシャルロット含める）は瞬間的に童顔な幼馴染みの一人の顔を
思い出す（シャルロットは幼馴染みではないが）。やはり可愛い系

の男の子というのはモテるのか、小学校の時から中学の時まで、謙吾と同じくモテていた。地味にファンクラブも出来ていたらしい事も聞いた事がある。

だがまさか……ハーレムを作るほどだとは思わなかった。

「確かアイツの所は七人だったか……。いやはや、鈴達が揃って理樹の元に押し掛けていた時は私もビックリした物だが……」

「ああ……鈴も入ってるんだ、理樹ハーレム……」

「恭介……血の涙でも流してたんじゃないかしら……」

「いや、案外理樹なら鈴を任せられる、とか言って暖かく見守るよな気もするが……」

「ああ、アイツは確かに篠ノ乃言う通り見守っていたよ」

あとでリアルに血の涙を流していたがな……、と誰にも聞こえない声で呟く。

「で、どうなんだお前ら。私の話に賛成か、それとも反対か」

黙り込む一夏達。

反対すれば……もし恭介が誰かを選んだとき、その誰かは幸せになるだろう。逆に選ばなかった誰か達は枕を涙で濡らす事になる。それは普通の事であり、常識的な恋愛における成就と失恋だ。ただし、恭介にとっては仲間も恋人と同じくらい大事な物のはずだ。もしかしたら千冬の言う通りになってしまいう事も考えられなくもない。逆に賛成すれば、自分一人だけを見てもらえない代わりに全員が幸せになれる。その後の、関係が壊れるかそうでないかは、全て恭介次第。

どちらにしても結局は恭介次第。ただ、誰か一人が全員か。今後の展開。それらが違うだけに過ぎない。

言葉にすれば簡単。だがそう簡単に割り切れる事でもない。事でもないはずだが、一〇秒も経たずに決断し口を開いたのは一夏だった。

「私は……良いよ」

『！――』

一夏以外が彼女に視線を向ける中、ほう、と千冬は口を歪める。
「私だって独占欲くらいあるけど……でも、誰か一人を選んで、千冬姉の言うような結末になつて……恭介が傷つくのはみたくない。そうなるかどうか分からないのは理解してる、でも、少しでもそういう可能性があるなら私は潰したいな、って思つて。それに、恭介ならハーレムでも幸せにしあえるかな、って思えるからね」

あはは、と微笑む一夏。

「……そうね。ったく、変な所で世話かけるんだから」

言いつつも微笑む鈴音。それに続くように残りの四人も笑みを浮かべて頷く。

「そうか……よし、ならこの七人で、恭介ハーレムを結成す、

「ちょっと待たんかアアーーーーー！ーーーーー！ーーーーー！
ーーーーー！」

ドゴォン！！と、天井がの一部が抜けた。と、同時に何かが落ちてくる。

それは一人の浴衣の女。それも美少女。金色に輝く髪を揺らしながら滑らかに着地し、同様に立ち上がる。

その女を見た千冬とシャルロットは目を見開いた。

女はビシッ！とでも聞こえてきそうなほど勢いよく指を指してきた。

「なあにが七人よ織斑千冬っ！私を含めたら八人じゃないっ！！」

「朱鷺戸（沙耶あ）っ！？」

思わず叫ばずにはいられなかった。それでも千冬はツツコミを忘れない。

「貴様っ、どこから入ってきているかぁ！！」

「見て分らない？天井からよ」

「何故貴様はいちいち天井から現れるのだ！直すのが大変だから止めると言っているだろう！」

「そんな事はどうでもいいのよ！ 第一天井から入るクセは私の仕事のせいよっ」

「どうでもよくないだろう！！」

「どーでもいいの？。とにかく！ 織斑千冬！ よくも私や他の連中に相談もせずにこんなハーレムを作ろうなんてしてくれたわねっ！」

沙耶は再び指を指す。

「第一何よ七人って！ あたしを含めて八人！ ついでに二木とビヤーチエノワ姉妹と更識姉妹！ そんなでもって鑑に社も含めたら五人でしょうが！！」

『一五人！？』

初耳だった。

「千冬姉！？」

「……恭介はIS学園に来るまでいくつかの国を渡り歩いていた。そんな事は手紙にもあったから知っているだろう。今朱鷺戸が挙げた女は、そんな中で恭介にオトとされた奴らだ」

しまった……！ と一夏は思った。そもそも中学の頃にその可能性を危惧していたのを忘れていた。これだけ惹かれる女がいるのだから、外国で同じ結果を招いてもおかしくない、と。まさかライバルが二倍になるとは思わなかったが。いや、今となっては仲間のような物か。

「と、言う訳で、ハーレム作るなら一五人よ一五人っ！ あたし達を仲間はずれになんてさせないんだから！」

「別に仲間はずれにした訳ではないんだが……。一応お前の存在は機密事項だろう？」

「……あ、そうだった」

「スパイが機密事項漏らしてどうする……」

真っ青になった沙耶を見た千冬は嘆息する。

「ふ……ふふっ……」

すると突然沙耶は小さく笑いながら肩を振るわせた。

部屋を飛び出したラウラを追いかけるようにシャルロットも部屋を飛び出す。

「ち、千冬姉！」

「分かっている。風呂の方からだった、行くぞ！」

千冬の声に残った四人は頷き、千冬の後が続いた。

部屋には、まだ手について落ち込んでいる沙耶だけが取り残されていた。

* * *

一人で大浴場に入る、というのは、貸し切り気分である意味楽しくはあるが、一人で入るには広過ぎる空間に若干の寂しさを覚える物である。

千冬に風呂行きを命ぜられた恭介は、そんな寂しさの予感とちよ追い出されつとしたワクワク感を覚えつつ大浴場に向かっていた。IS学園の風呂も広くはあるのだが、やはり旅行先の大浴場となると、入る前の感覚も違ってくるらしい。いや、もしかしたら楽しい事第一な恭介だからこそ、似たような広さでも新鮮さのような物を覚えられるのかもしれない。

戸を開けて脱衣所に入る。いたってシンプルな脱衣所だが、それでも和風感と高級感だけは忘れていないらしい。

浴衣と下着を脱いでタオルを腰に巻き、脱いだそれらは適当な籠に入れておく。

ガラガラと音を立てて大浴場内とを隔てる戸を開けて中に入る。思わず感嘆の声を漏らした。

さすがに旅館の大浴場なだけあってなかなかの広さだった。風呂を跨またいだ先にある大きな窓からは、綺麗な星空が一片の曇りも無く見える。明るすぎず、暗すぎない照明もそれにマッチしていい雰囲気醸し出していた。

数瞬感動に心を浸し、適当なシャワーで髪と体を洗う。一応流し

はしたが、海の塩がまだ残っている可能性は捨てきれないので、いつもより少しだけ念入りに洗っていく。

シャワーでリンス&シャンプーとボディソープをそれぞれ流し終わると、体を洗う際に使った、さっきまで腰に巻いていたタオルを桶で洗って絞る。キツく絞って出来る限り水気を落としたそれを手にもって、湯に足を入れる。心地よい暖かさが体に染み渡っていく。

「ふう……」

全身を湯に浸かせて一息つく。さっき持っていたタオルは頭の上。ベタだとは分かっていても、乗せずにはいられないのが恭介だった。

真ん中辺りまで移動し、窓から星空を眺める。これだけ綺麗な星空を見るのは久しぶりな気がして、思わず笑みがこぼれた。

「機会があれば理樹達でも連れてくるか……。たまには旅行くらいさせてやらないとな」

「うむ、理樹少年達も喜ぶと思うぞ」

「だろ？ 夏休みにでも時間作れば良いんだが……」

「仕事に関しては他のメンバーがやってくれるだろう。きっと時間くらいは作れる」

「そっちにも休暇をやりたいんだが ……」

………
ん？

今俺は誰と話してるんだ……？

たたり、と汗が一筋頬を流れて行った。当然、風呂のせいではない。

恐る恐る背後に振り返ってみた。

仮面をつけた金髪天然パーマの男がいた。

「待ちわびたぞ……っ、少年ッ!!」

「ううおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおお！？」

水しぶきを上げて両手を大きく開きながら飛びついてくる謎の男
まあ仮面をつけていてもグラム・エーカーにしか見えないの
だが に、思わず手加減も何も無い蹴りを腹に決めてしまった。

「フグウー……！……！……！……！……！」

ドンガラガツシャー……ン！！ と、男は積まれていた桶に
突っ込んでいった。が、すぐに起き上がる。

「フッ……良い蹴りだ。だがその程度では、この燃え盛る私のパト
スは止められないっ！！」

「クソっ、何でお前がここにいるっ、グラム！」

「今の私はミスター・ブシドーだあ！！」

叫ぶと同時に、猛スピードで恭介に接近してくる。ちなみに、グラ
ハムは文字通り何も身につけていない。タオルすらも。

恭介は窓側の風呂の縁に飛び乗って右に転がり、飛びかかってく
るグラムを避ける。「ぶへっ！」と窓に顔から激突した。その隙
に手に持ったタオルを腰に巻き、出入り口側に移って、一気に戸に
手をかける。

「逃がさんよっ、少年！！」

「ぐおおっ！？」

まるでランザムでもしたかのようなスピードで恭介に急接近し
突進してきた。戸を突き破って脱衣所に飛び込み上下を何度も逆転
させながらゴロゴロと転がる二人。

途中、恭介が上になった瞬間にグラムを蹴り跳ばして床に叩き
付け、着地すると、グラムから距離を取る。

瞬間、脱衣所の出入り口が思いきり開けられた。

「大丈夫かつ、我が嫁よ！！」

何の躊躇いも無く突入してきたのはラウラだった。

「ら、ラウラ！？ 何入ってきてんだ！？」

「嫁の叫び声が聞こえた。襲撃ではないのか？」

「いや……ある意味襲撃つちゃあ襲撃だけど……」

「う、うわあっ!？」

今度はシャルロットが突入してきた。恭介の姿を見た瞬間に顔を真っ赤にして後ろを向いたが。続くように千冬達も入ってくる。千冬以外はシャルロットと同様。

「貴様……っ、グラハム・エーカー! 一体どこから湧いて出たのだ!」 というかタオルくらい巻け!」

「フッ、何を今更。少年ある所にグラハム・エーカーあり。そしてミスター・ブシドーたる私もありだ!! そしてタオルは持ち合わせていない!」

「意味の分からんことを言うな! 何故風呂に入った!」

「さあ少年! 私と男同士のスキンシップと言う物をしようじゃないかッ!」

しかし千冬を無視してグラハムは気持ちの悪い笑顔を浮かべて恭介に近づく。

「お前のやろうとしてるのはもはやスキンシップの域を超えてるだろうが!」

「私のやろうとしているところがスキンシップではないと言うのだ!」

「男同士で裸で抱き合う所のところがスキンシップだ! 友情とかそういうのじゃなくなってるだろ、どう考えても!」

「友情も超越すれば愛情となるっ! 行き過ぎた愛情が、ヤンデレを誘発するように!」

「気持ち悪い事言ってんじゃねえッ!」

ゼエ、ゼエ、と肩で息をし始める。なんかコイツと直に会うといつもこんな感じがするな、と恭介は思った。

「さあ、心行くまで踊り明かそうではないか、少年。そうだ、キミは私のプリマドンナ! エスコートさせてもらおう!」

「誰がされるかッ!」

「よく言った、少年

ッ!」

ダッ、と今までで一番速いスピードで接近してくる。

瞬間、グラハムの頭頂部に某鉄槌の騎士の『ツエアシユテールン
グス ンマー』よりも重い出席簿の一撃が直撃した。

「 ツ！？」

グラハムは声にならない悲鳴をあげ、そのまま倒れた。

ちなみに。

グラハムはタオルは巻いていない。

今更の様に一夏達は悲鳴を上げた。

第19話「話と仮面と襲撃のリーダー」(後書き)

グラハムをド変態にしてみましたw

第20話「紅と緊急と作戦会議」（前書き）

ていうか今更だけど、八卦龍のメンバーってちょっとだけ少ないよね……。だからちよつといろいろと入れてみようかと思っています。適当に思いついた人を増員していきますよー。

では、今回ちよつと長めかな？ どうぞ。

第20話「紅と緊急と作戦会議」

「ようやく全員集まったか。……おい、遅刻者」

二日目。今日は夜までデータ取りが目的の稼働試験、特に専用機持ちは大量の装備が待っているため、結構ハードな一日となる事が予想されている。

だから朝から外に集まっている訳だが……という訳か、一番遅刻しそうにないラウラが五分遅刻してきた。恭介を含めた専用機持ちは珍しそうな視線を向けている。当のラウラは若干固くなりながら背筋を伸ばし、裏返った声で「は、はいっ」と返事をした。

「……そうだな。ISのコア・ネットワークについて説明してみろ」
「は、はい。ISのコアはそれぞれが相互情報交換のためのデータ通信ネットワークを持っています。これは元々広大な宇宙空間における相互位置情報交換のために設けられた物で、現在はオープン・チャネルとプライベート・チャネルによる操縦者会話など、通信に使われています」

すらすらとラウラは説明を続ける。

「それ以外にも、『非限定情報共有^{シェアリング}』をコア同士が各自に行う事で、様々な情報を自己進化の糧として吸収している事が近年の研究で分かりました。これらは制作者の篠ノ乃博士が独自発達の一貫として無制限展開を許可したため、現在も進化の途中であり、全容は掴めていないとの事です」

「……さすがに優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」
ほっと安堵の息をつくラウラ。さすがのラウラも教官殿の怒りは恐いらしく、胸を撫で下ろしていた。

そんなラウラから視線を移した千冬は、集まった生徒達全員に目を向ける。

「さて、今日は各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

一年全員が一斉に『はい』と返事をした。さすがに人数が多いせいか、少しうるさく感じた。

「専用機持ちはこっちに來い。篠ノ乃もだ」

言われて恭介達は千冬についていく。何故箒もいるのか、という事に関しては、恭介は前から知っていたので特に何も思わなかったが、やはり一夏達には疑問だった。

「千冬姉……じゃなくて、織斑先生。どうして箒も？」

専用機持ちを代表して（？）、一夏が尋ねる。

「それはだな、

「ちいーちゃああああああんツ！！」

突如、恭介達を影が覆った。

反射的に上を見てみると……崖から人が飛び降りてきていた。それも、何故かメカニックなウサミミを付けた女性。

千冬はそれを「フンっ！」と、殴り飛ばした。

「へブウーーーーーッ！！？」

女はやけに大きい胸を暴れさせながら崖に激突する。

「……束、普通に現れる事は出来んのか。思わず殴り飛ばしてしまつたではないか」

「痛たた……、さすがちーちゃん！ なんと容赦のない一撃！

思わず目覚めちゃいそうになつたよ！」

「黙れ。そしてとつと用を済ませろ」

「はうっ！ 久々の再会なのになんて冷たいお言葉！ そこに痺れる憧れるよちーちゃん！」

「はあ……」

片手を額にやり思わず嘆息する。しかし束は既に次の目標を口ツクオンしていた。

立ち上がった束は、千冬の横を通り過ぎ、妹である箒の元に向かう。

「やあ！」

「……どうも」

しかし、姉妹の再会にも関わらず箒は嬉しそうな顔をしない。目の前に束もそれには気付いているだろうが、あえてそれを無視するようだ。

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、箒ちゃん。特におっぱいが！」

何かで殴りつけられる音がした。

「……殴りますよ？」

「殴ってから言ったあ！ しかも日本刀の鞘で殴った！ 酷いよ箒ちゃん！ きょーくんにも殴られた事ないのにいっ！！」

「いや、ある」

嘘泣きしながら嘆く束に冷静にツツコむ恭介。

と、何やら周りが騒がしくなってきた。今更ではあるが辺りを見回してみると、女生徒達の目がこちらに向いていた。それらは全て、篠ノ乃束不審者に向けられている。当然と言えば当然だし仕様がな事なので、とりあえず不審者ではなくするために恭介は口を開く。

「束さん、うちの生徒達が困ってるから、せめて自己紹介くらいしてくれ」

しかし束は顔を顰しかめ、

「えー、めんどくさいなあ」

「……じゃないと不審者扱いされて、警察呼ばれるぜ。いいのか？」

「むう……警察程度どうって事ないけど、プレゼントが渡せないなあ……」

非常に。否、とてつもなく面倒くさそうで嫌そうな顔をした束は、「私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」と、限りなく適当な自己紹介をした。が、あの篠ノ乃束本人だと知った女生徒達は、当然騒さわぎ始める。

「それで、頼んでいた物は……？」

やはりというか何と言うか、うるさくはなったが、箒は話しを進

ニヤリ、と束は笑うと、

言つて束は上空を指差す。専用機持ちだけでなく、周りの生徒達もそれに釣られて空を見上げる。

何か赤い光が見えた。それはこちら段々、いや、かなりのスピードで接近し、ズツドオオオオオオオオオオ！と、小さいクレーターを作り、凄まじい砂煙と衝撃を撒き散らした。近くにいた恭介達はもちろん、東や千冬もそれに吹き飛ばされた。生徒達の悲鳴が耳に入ってくる中、恭介は海に突っ込んだ。

「ぐふおお！」

足が浸かる程度場所だったので、なんとか溺れるとかはしなくて済んだ物の、思いきりびしょぬれだった。

（あの光……大気圏突入の光だったのか……。何で気付かなかった俺……）

ウイングゼロのスクリーンを開くと、リトルバスターズ？背中ネコ園がちょうど地球の近くまで来ていた。わざわざ射出させたらしい。

「くっ……束え！！　もっと穏便な方法は無かったのか!？」

崖に衝突したらしい千冬が怒声を上げる。

[illegible]

「そんな理由で軌道上から射出するなあつ！」

アイアンクローを束にかます千冬に、まったく持って同意したいと恭介は思った。

解放された束は痛そうにこめかみを押させていたが、すぐに復活して咳払いをすると、

「えー……これぞ！ 箒ちゃん専用機こと『紅椿』あかつばき！！ 全スペックが現行するＩＳ全てを凌駕するお手製ＩＳだよ！」

あ、きょーくんのとかは除外してねー、と束は付け加える。

「束さんでも、恭介のゼロには勝てないんですか？」

「んー、ゼロ、というよりはガンダムに、って感じだけだねえ。私だけじゃあ、先生の作品には届かないかなー」

「？ 先生？」

「そんなことより！」

話しを変えるように束は紅椿の方に向き直る。

「篝ちゃん！ とつと最適処理化とパーソナライズを済ませちゃおう！」

「……はい」

紅椿はまさに武者といった外観をしている。重装備ではなく甲冑のような物で、装備も腰にある二振りのブレードのみ。単純に武装だけを見るなら近距離特化型だろうと推測出来る。が、束が作っているだけに、なんの仕掛けもないとは断言出来ない。

篝は紅椿に乗り込む。それを確認すると同時に、束は空中投影のディスプレイとキーボードを呼び出し、なんでも無いことの様に膨大な量のデータ処理、更新していく。こんなことが出来るのはこの人とカタギリぐらいだな……と恭介は思う。

数分経った所で、「フィッティングしゅーりょー！」と、軽い声で言う。

「後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終了、っ」と

と、周りの生徒達の声がふと聞こえた。

「ねえ、あの専用機って篠ノ乃さんが貰えるの？ 身内ってだけで

……」

「だよねえ、なんかズルいよねえ……」

そんな彼女たちに最初に反応したのは、恭介でも篝でもなく、束だった。

「おやおや？ 歴史の勉強をしたことが無いのかな。有史以来、世界が平等であつたことなんて、一度も無いのだよ？」

聞こえていた事もあるだろうが、ピンポイントな指摘を受けた彼女たちは気まずそうに作業に戻っていく。束も追撃したりすること

無く、興味を無くしたように恭介の方に向き直る。

「きょーくん。ウイングゼロ見せてよ。結構限界来てるんでしょ？」

「そうだな。一応、普通に戦うくらいだったら出来るが……」

「普通じゃダメだよね？」

「まあ……な」

言って恭介は首に付けていた、ウイングゼロの待機状態。リトルバスターズのイメージマーク（謙吾作）の形をしたネックレスを束に渡す。

「ふむふむ……ああ、ガンダニウム合金Gもそろそろ限界だねえ。一回貫通されちゃってるけど……これはちーちゃんのかな？」

「ああ。一回だけゼロにコイツが飲まれた物でな」

「おー、さすがちーちゃん！あの状態のきょーくんを止めるなんてさすがだね！」

言いながらキーボードを操作する束。

「んー……ダメだね、やつぱり。さすがのゼロも限界みたい。これ以上改造も出来ないし……早く『スクウェア』持ってきてもらわないと」

「『スクウェア』……完成したのか？」

「うん！あとはゼロのGNDドライブをセットして、同調させるだけ！まさに、あとはきょーくん次第だね！」

「……そうだな」

ぐっ、と拳を握りしめる。

男の子な顔してるねえー、と心の中で思いつつ、ウイングゼロからケーブルを抜く。

「さてさて、紅椿は……終わってるね！」

「よし。篠ノ乃、試運転も兼ねて飛んでみる」

「はい！」

紅椿に接続されていたケーブルが、空気の抜ける音と共に外れていく。目を閉じた筈は、瞬間、空気を斬り裂くようなスピードで上空に舞い上がる。急加速の余波による衝撃はで砂が舞う。

恭介は筈を目で追ってみたが、全く見えなかった。

「どう？ 筈ちゃんの思う通りに動くでしょ？」

「ええ……まあ……」

「じゃあ今度は刀使ってみてよー。右のが『雨月』^{あまつぎ}で、左が『空裂』^{からわれ}ね。武器特性のデータ送るよん」

筈はデータが送られてくると同時に『雨月』と『空裂』をその手に持つ。そしてすぐに構え、軽く振るって手応えを確かめる。ウィングゼロ越しに見る恭介は、小さく感嘆の声を漏らした。

「解説してあげるね！ まず『雨月』は対単一仕様の武装で、打突に合わせて刃部分からエネルギー刃が放出されるよ。射程距離はアサルトライフルくらい。スナイパーライフルの間合いだと届かないけど、紅椿ならスペックでカバー出来るのだ！」

試しに、とばかりに突きを放つ。瞬間、赤いレーザー（エネルギー刃とは言い難い）が大量に放たれた。それらはその辺りの雲を突き破り、そして見えなくなった。

「次は『空裂』ね。こっちは対集団戦仕様の武器だね。斬激に合わせて帯状の攻勢エネルギーぶつけるんだよー。振った周囲に自動で展開するから超便利！ それじゃ、これ撃ち落としてみてねー。ほーい、っと」

言って束は巨大なミサイルポッドを展開し、全弾筈に向けて発射した。その数三〇発前後。

だが筈は怯むこと無く、それどころか「やれる！ この紅椿なら！」と叫びながら『空裂』を一振り。束の言う通り、先程のレーザーが帯状になって広がり、全てのミサイルを撃墜した。

「凄い……」

思わず声を漏らしたことに気付けない一夏。威力はウィングゼロのバスターライフルには届かないだろうが、結構な威力を持つているように思えた。更にあの範囲。初見で放たれば避けることはほぼ出来ないと思っていいかもしれない。

と、突然慌ただしく聞き覚えのある声で、「織斑先生――」

「っ！！」と叫ばれるのが聞こえた。

そちらに目を向けてみると、相も変わらず慎重に合わない胸を揺らしながら真耶が走ってきていた。いつも慌てているというか落ち着きの無い彼女ではあるが、今回はいつも異常に落ち着きが無く慌てていた。

「たっ、たた、大変ですっ！ お、おお、織斑先生っ！」

千冬もいつもより落ち着きの無い真耶を見てか、表情を引き締める。

「どうした？」

「こっ、こ、これを！！」

真耶は手に持った小型端末を千冬に渡す。何が書いてあるのか、それを見た瞬間に千冬の様子が曇った。

「特命レベルA以上……現時刻より対策を始めろ、だと……？」

それを聞いた恭介の表情が引き締められる。

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働していた……」

「しっ、機密事項を口にするな。生徒達に聞こえる」

「す、すみません……」

「専用機持ち？」

「ひ、一人欠席していますが、それ以外は……」

生徒達の視線に気付いてか、小声で会話を始める二人。

……しばらくすると、再び慌てた様子の真耶が、

「そ、それでは、私は他の先生にも連絡してきますのでっ！」

「了解した……全員注目！！」

真耶が走り去ったのを見て、千冬はパンパンと手を叩き生徒達を全員振り向かせる。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自自室待機すること！ 以上だ！」

「ちゅ、中止……？」

「特殊任務行動……って？ 全然状況が分かんないんだけど……」

まったく予想もしていなかった事態に、生徒達が騒がしくなる。

「とつとと戻れ！ 以後許可無く室外に出た者は我々で身柄を拘束する！ いいな――！」

『は、はいっ――！』

千冬の怒声に、全員が大急ぎでISを片付け始めた。そしてその怒声は、真に緊急自体なのだと言うことを一夏達に知らしめていた。

「専用機持ちは全員集合しろ！ 棗、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰――！」

一夏達はそれに従って千冬の元に集まり、ついていく。

何か胸騒ぎがする。

とてつもなく、嫌な予感が恭介を襲っていた。

* * *

専用機持ち達と教師陣は、旅館の最奥、宴会様の座敷に集められていた。照明が落とされ薄暗くなった部屋に、空中投影型のディスプレイが映し出されている。そこには映し出された世界地図上を、何かをサーチするような光が何度か行き来し、何枚かのウィンドウが開かれ 『フィールド圏内 未確認IS』と表示した。

「……二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあつたアメリカ、イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルバリキスベル銀の福音』、通称『福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

授業中よりも尚真面目な表情をする千冬は、そう切り出した。

「その後、福音は衛生による追跡の結果、福音はここから二キロメートル先の空域を通過することが分かった。時間にして五〇分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態の対処をする事になった」

恭介達の目の前のテーブル状モニターが、動き始める。

「教員は学園の訓練機を使用して空域、及び海域の封鎖を行う。よ

つて、本作戦の要は、専用気持ちに担当してもらっ

苦々しい表情をする千冬の言葉に、一夏が思わず「は、はい!？」と抜けた声を出した。

「つまり……暴走したISを我々が止めるということだ」

ラウラが淡々と告げる。

「ええ!？」

「……いちいち驚かないの」

驚愕する一夏に鈴音が言う。

「それでは、作戦会議を始める。意見がある者は挙手するように」
「はい」

最初に手を挙げたのはセシリアだ。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「ふむ……分かった、だが決して口外はするな。福音については二カ国の最重要軍事機密だ。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と、最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

セシリアが言うと、モニターに次々とデータが表示される。

「……広域殲滅を目的とした特殊射撃型……。わたくしのISと同じ、オールレンジ攻撃を行えるようですね……」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だね……」

「この特殊武装がクセ物、って感じがするね。連続しての防御は難しい気がするよ」

「……このデータでは格闘性能が未知数だ。偵察は行えないのですか？」

「いや、無理だろう」

恭介が稼働するモニターを見ながら告げる。

「どうやらコイツは、今も超音速飛行を続けているみたいだ。データでは最高速度は時速四五〇キロ……アプローチは一回が限界だ」
「その通りだ」

「一回きりのチャンス……ということはやはり、一撃必殺の攻撃力

を持った期待で当たるしか……ありませんね」

真耶の言葉に千冬は頷く。

……その一撃必殺の攻撃力を持った張本人は、他人事のようにうんうん、と頷いていた。が、すぐに全員の視線に気付いて、「え！？」と振り返った。

「一夏の零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね……ただ問題は……」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね……。エネルギーは攻撃に全部使わないと難しいだろうから、移動をどうするか……」

「目標に追いつける速度を出せるISでないといけない……。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ゼロならやろうと思えば五、六分の調整でそれくらいの速度は出せるぞ」

「じゃあ運ぶ役目は恭介が良いかな……？」

と、勝手に進む話しについていけない一夏が、たまらず声を出した。

「ちょ、ちょっと待って！ わ、私が行くの！？」

『当然！』

見事にはもった。

「……織斑、これは訓練ではない、実戦だ。もし覚悟が無いなら無理強いはいしない」

「っ！？」

ふと一夏は振り返る。そこには苦々しく、躊躇いの混じった表情をした千冬がいた。

ぐっ、と拳を握りしめる。

「……やります。私が やってみせます」

「……そうか」

千冬はいつもの表情に戻し、全員に目を向ける。

「よし、それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せる機体はどれだ？ ウィングゼロか？」

「ちょーつと待ーったあーっ！」

がこつ、と天井の一パネルが空いた。そこから束が頭を出す。

「その作戦はちょつと待ったなんだよー！！」

「……何をしにきた」

「ちーちゃん、ちーちゃん！ もつと良い作戦が私の頭の中にナウ・プリンティングー！」

「……出て行け」

思わず頭を押させ始める千冬。

「聞いて聞いて！ ここはだーんぜん、紅椿の出番なんだよーっ！」
「何……？」

びくつ、と恭介が反応する。

「紅椿のスペックデータを見て！ パッケージなんか無くても最高速機動が出来るんだよ！ 紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいと。ほらっ、これでスピードはばっちり！」

話しの展開についていけない一夏達。それを見た束は、

「束さんの『なぜなにIS』！ 説明しよう！ 展開装甲というのはだね、この天才束さんが作った第四世代型ISの装備なんだよー！ 驚愕する一夏達を置き去りにして説明を続ける。

「いっちゃんの為に解説しよう！ まず第一世代と言うのが『ISの完成』を目標とした機体。次が『後付武装イコライザによる多様化』、これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェース利用した特殊兵器の実装』。空間圧縮作用兵器とかBT兵器、あとはAICとか色々だね」

で、と束は続ける。

「第四世代というのが、『パッケージ換装を必要としない万能機』という、現在絶賛机上の空論中の物。はい、いっちゃん理解出来ましたかー？ 先生は優秀な子が大好きです」

「は、はあ……」

理解出来たような出来なかったような……、と呟く一夏。

「で、その第四世代ISの装備である展開装甲は、具体的には白式の『雪片式型』に使用されてまーす。試しに私が突っ込んだー」
「ええ!？」

千冬と恭介は頭を抱えなくなった。

「それで上手く行っただので、なんとなく紅椿の全身のアーマーも展開装甲にしてありまーす。システム最大稼動時には、スペックデータはさらに倍プッシュだ!」

「ちよつ、ちよつと、ちよつと待ってください! え? 全身?

全身が『雪片式型』と同じ? それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。一言で言うとな最強?」

啞然とする一夏達。

「ちなみに、紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代機の目標である即時万能対応機^{リアルタイムクロナルトレス}つて奴だね。にやはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい」

啞然、それすらも通り越して黙る。

紅椿。まさしくこれは世界の努力を否定する機体だ。今まさにあらゆる研究者、開発者達がしているゴールなどなかなか見えない途方も無いと言っても良いほどの努力を無意味にした。これほどバカげた話があるだろうか。

……いや、だが恭介には分かっている。ガンダムという力を所持し、使用している自分が言えることではないと。確かにこの紅椿は強い。が、スペックだけで言えばガンダムには劣る。これが真の姿にでもなればあつという間に追いつくのだろうが。

「はにや? あれ、なんでみんなお通夜みたいな顔してるの? 誰か死んだ? 変なの」

しかしそんな事にはさも気付いてません、とでも言っているように、束はふざけてみせた。

「……束、言っただはずだぞ。やり過ぎるなと……」

「そうだっけ？ えへへ、つつい熱中しちゃったんだよ。あ、でもほら、紅椿はまだ完全体じゃないし、そんな顔しないでよ！ ちゃん。いっちゃんが暗いと束さんはイタズラしたくなっちゃうよん」

「……千冬さん、紅椿のスペックはもういい。時間がないんだ、とつとと作戦を決めよう」

「うむ……そうだな」

これ以上束に関して話させるともつと雰囲気が悪くなる。だから早く作戦の話をし、という恭介の意図を読み取り、頷く千冬。

恭介は束の方に視線をやり、

「ゼロの調整は五、六分だ。紅椿はどれくらいで終わる？」

「七分くらいかな？」

「なら一夏を運ぶのは俺がやる。今は一分でも時間は無駄に出来ない」

「「なつ……！」」

束と箒の表情が驚愕に染まった。

「……最高速度では紅椿の方が上だよ？」

「速度だけの問題じゃない。専用機での実戦経験不足、機体の使用时间、スペック・特性の完全把握。その他にも挙げようと思えば挙げられるぞ。箒が実戦に参加するのは危険過ぎる」

「じゃあいつちゃんは？」

「少なくとも俺が今挙げた三要素は、箒よりはある。第一、何かイレギュラーが起こらないとも限らない。そうなったらどうする？

紅椿は確かに強いらしいが、戦闘経験を含める諸々の不足分を補えるほどのスペックなのか？ 俺クラスの奴がもし乱入してきた時、対等に戦えるほどのカバールをしてくれるのか？ 紅椿は。どうなんだよ、束さん」

「そ、それは……」

絶対大丈夫、とは言えなかった。機体性能が勝敗を分つ絶対条件

ではない。経験、技術、その他諸々が重なりあつてそれは決まる。

確かに性能で押し切れる相手も状況もあるだろう。だが……それがいつでもどこでも、と言うわけにはいかない。事実、八卦龍なんかがもし出てきたら。

「それでも行かせたいならアンタが責任を持て。誰かが大怪我したり死んだりした時、アンタが全力で責任を果たせ。だが言っておくぞ、俺は万能じゃない」

それは間接的に、八卦龍や、恭介、千冬クラスのイレギュラーが来たら絶対守りきれぬ訳じゃない。そう告げていた。

「きよ、恭介……」

背後で箒達が見守る中。束は、

「……良いよ。責任は私が持つ」

『……』

「……そうかい。なら、俺と一夏、箒の三人で行く。それで良いか？ 千冬さん」

「……ああ」

作戦は……決まった。

第20話「紅と緊急と作戦会議」(後書き)

何文字くらい書いたかなあ。

はて、ちよつとシリアスな感じ、かな？　とうとう福音との戦闘に入ります。

今回は早かったけど……今度はいつ投稿出来るかな……？

第21話「天使と福音と人形達」

作戦開始時刻になると、恭介、一夏、箒の三人は、それぞれISを展開して浜辺に立っていた。ちなみに、ウイングゼロの第一リミッターは解除されている。

『三人とも、準備はできたか』

「オーケー、なにも問題は無い」

「だ、大丈夫、です」

「問題ありません」

恭介と箒は緊張しているなど微塵も見せないほど堂々と、一夏は明らかに緊張しながら言った。

「じゃあ……箒、よろしくね」

「ああ。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいれば良いさ」

「……うん」

やけに自信満々で張り切っている箒に、若干の不安を一夏は覚えた。

『さて……今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がける』

「了解」

「りよ、了解」

「織斑先生、私は状況に応じて二人のサポートに回ればよろしいですか？」

『そうだな……だが、無理はするな。お前は、先程棗が言ったように紅椿あかつきはきでの実戦経験やその他諸々が無い。フォローは棗に任せろ。

お前は棗がフォローしきれなかった分をやれ』

「了解しました」

あたかも落ち着いているかのような振る舞いだが、表情や目からは相も変わらず自身と過剰なやる気が見て取れた。

と、不安げな表情をした恭介の顔がモニターに映る。プライベート・チャネルのようだ。

『一夏。今千冬さんに言われたんだが……分かってるよな？ 箒の事』

「う、うん……なんか、浮かれてるっぽい」

『ついでに張り切り過ぎだ。余計なこと言わなきゃ良かったかな……』

恭介が言っているのは、先程の束との会話だろう。おそらく、専用機があるのだから私もやれる事を証明してやる！ くらいの勢いなんだろうな、と一夏は思った。

「私達がフォローしろ、って事だよな？」

『ああ。でも、だからってお前も先輩風吹かして無茶するなよ？』

「そんな事しないってばっ」

『なら良い。……そろそろだな。通信、切るぞ』

フツと、恭介の映ったモニターが消える。

『では……作戦開始だ！！』

* * *

白式を背負った紅椿、その横に追隨するウイングゼロは、数分で目標空域まで到達した。目の前には目標である『銀の福音』シルバリオスベルが悠々と音速飛行していた。

フルスキン全身装甲で背中に大きな翼を持って飛ぶその姿は、どこか天使にも似た姿だった。

「一〇秒後に接触する！ 一夏、構えてろ！」

「了解！」

恭介の言葉に、一夏はその手に零落白夜を発動させた『雪片式型』を握りしめ、先程までの緊張など微塵も見せない声で答える。

猛スピードで福音に接近する紅椿の上に乗った一夏は、もはや目イクニッショレストと鼻の先、と言える距離まで縮んだ瞬間、瞬時加速を発動。一瞬で

福音の真後ろまで行き、「はあああああああ！！」と叫びながら『雪片』を振り下ろした。

やった！　と一夏が思った瞬間。

敵機確認。迎撃モードへ移行、『銀の鐘』シルバーベル起動開始

ひらり、と福音は一撃必殺を避けた。

「ッ！？」

「一夏あつ！！　避けるおツ！！」

恭介が叫ぶと同時に、福音の翼が動きだし、大量の青白い光弾を吐き出した。いや、レーザーと言った方が正しいかもしれない。光の線達は真つすぐ一夏に向かっていく。

一夏は体勢を変えずにそのまま急降下し、海面ギリギリまで来た所で、水しぶきを上げながら急上昇する。海の中に突っ込んだレーザーは、しかし十数本が海を突き抜けて追いかけてきた。どうやらホーミング性能があるらしい。

が、それらは全て光の奔流に飲まれて消えた。

光を辿った先には、『バスターライフル』を持った恭介が。

「一夏！　お前は右から。箒！　左からだ！　俺は正面から行く！

！」

「了解！！」

恭介の指示通りに動く二人。

恭介は福音の吐き出す光弾の雨をかくぐりながら、『バスターライフル』を連結させて『ツインバスターライフル』にし、放つ。単体よりも尚射程も威力も段違いな光の奔流が福音に向かう。が、福音はそれを余裕で避ける。

しかし避けた先には、紅椿を駆る箒が。

「はあああああああ！！」

その手に展開した『雨月』あまつぎを振り下ろす。当然の様に避けられるが、箒はそれを追撃し、左の『空裂』からわれも使いながら連激を繰り返す。

ガキーン！ と『空裂』が腕に受け止められる。

その隙に恭介が真上から福音に掴み掛かる。福音が気付いた時には既に遅く、急降下したウイングゼロの腕に捕らえられていた。そのまま体勢を変え、無理矢理上空へと持っていく。

「一夏あッ！！」

「うん！！」

上昇していく福音を抱えた恭介とは別に、上空から一夏が『雪片』を構えながら急降下してくる。

が、しかし。

「！？ あれは……！！」

福音と恭介の先。海上。そこに映るはずの無い物が映った。

船。空域・海域は封鎖されたはずのこの海域に船が走っていた。

そちらに気を取られたからだろうか。タイミングがずれ、素通りしてしまった。

「！？ どうした、いち うおッ！！」

突如暴れ出した福音に思わず手をほどいてしまった。振り返った福音の放つ光弾がウイングゼロに直撃し、小さな爆発を起こして吹き飛ばした。

「一夏！ なにをしている！！」

「だ、だって船が！」

「船だと！？」

一夏の指差す方へと筈は視線を移す。そこには確かに、海上を走る船が一隻いた。

「な、なぜこんな所に！？ この辺りは先生達が封鎖しているはずだ！」

「チッ……密漁船か……！ こんな時に！」

「密漁船！？」

空高く舞い上がった福音が光弾の雨を吐き出す。すると、一夏が船を庇うように船への斜線の前に立ち、『雪片』でそれらを弾いていく。

「なにをしている一夏！ 犯罪者を庇うなどッ！」

「だって、それでも民間人なんだよ！？」

「ッー？」

「……そんな寂しい事言わないでよ……。力を手に入れたら、力の無い、弱い人達が見えなくなるなんて……！ そんなの………そんなの筈らしくないよ！！」

「あ……わ、わ、私は……」

一夏の言葉に動揺したのか、後退る。

その時、恭介のレーダーに反応が出た。

「！？ 対GN粒子用レーダーが反応……！ この数は……マズい……」

レーダーに映るは大量の反応。それも十や百じゃない。千単位の反応だ。

瞬間、福音の後方から大量の光弾が放たれた。雨どころではなく、もはや嵐の様に。

恭介は一夏達の前に立ち、大型ウイングを全面に展開してそれらを弾く。

「チッ……こんな時に……」

「恭介！？」

「な、なんだこれは！ 福音の攻撃……じゃない！？ レーダーには何の反応もないぞ……」

「クッ……筈、一夏！ 撤退する！ この数を相手に俺達だけじゃ無理だ……」

「なっ……福音はどうするんだ！？」

「こんな状況でどうやって落とすんだ！ 逆にこっちが落とされるぞ……」

しかし筈は食い下がる。

「ふざけるな！ ここで逃げると……？ そんな事が許されるか……」

「意地張ってる場合か！ 一夏、筈を引きずってでも連れて行け！」

！ 俺は後退しながら弾を弾く！」

「りよ、了解！！」

「恭介！！」

「箒！ 撤退だつてば！！」

一夏が箒を引っ張つていこうとするが、しかしパワー負けでもしているのか連れて行けない。

と、更に恭介の対GN粒子用レーザーに反応。

「また来る……！ データ照合……こ、コイツは……まさか！！」

「そのまさかよお！！」

瞬間、食い下がる箒を蹴り跳ばした恭介は、『ビームサーベル』で大質量のなにか 大剣を受け止めた。バチバチバチ！！ と『ビームサーベル』が火花をあげる。

突然突っ込んできた機体……血のように赤い塗装を施された全身装甲の機体だ。箒の紅椿とは比べようも無いほどスグロい赤。両腰には巨大なバインダーを装備し、頭部はV字のアンテナとツインアイ。背中から放出する赤色のGN粒子。

それは……ウイングゼロやケルディムサバーニャ、ストライクノワールGとは全く似てもいない、しかし ガンダムだった。

その搭乗者を、恭介は知っている。

「アリー・アル・サーシエス！ アンタか！！」

「そのとーりよお！！ さあ、始めようぜ！！ IS同士の、とんでもねえ戦争つて奴をよお！！」

サーシエスの背後からは、大量の黒いISが迫つてきていた。

* * *

同時刻。作戦本部とされていた宴会場でも、大騒ぎになっていた。
「お、織斑先生！！ レーダーも映像も、突然消えましたあ！！」
一番慌てて落ち着きの無いのは、案の定真耶だった。

（オリジナルのGNドライブは第二リミッター……殺傷モードにし

ない限り妨害効果は出さない……。なら……やはり……！」

「織斑先生……敵、ですか……？」

いつの間にか近くまで寄っていたシャルロットが、千冬の耳元で小さくそう尋ねた。

シャルロットの言う敵とは……八卦龍の事だ。

「……そのようだ。厄介な事にな……」

「じゃ、じゃあ！ 私達に出撃命令を……！」

「ダメだ。お前はともかく、オルコット達のISでは腕を覆すほどの性能を持っていない。束、対GN粒子用レーザーを開け。デュノア、お前は背中リトルバスターズ？のネコ園の直枝に連絡。あちらから映像を送らせろ」

「わ、分かりました！」

「うん……」

慌てて部屋から出て、連絡に向かうシャルロットとは対象に、束は元気が無い。

「……後悔するのは後にしろ。今は……」

「分かってる……大丈夫だよ、ちーちゃん」

言って作業を始める。機材の前から真耶を無理矢理どかし、取り出した小型端末とをプラグで繋ぐ。そしてキーボードを展開し、しばらく打ち込むと、テーブル状のスクリーンに、マップ型レーザーが表示された。それも見たセシリアは、思わず声をあげた。

「な……何ですの！？ これはっ……！」

“WING ZERO”、“AKA・TSUBAKI”、“BYAKU・SIKI”と書かれた反応とは別の反応、つまり敵を示す反応は……まさにレーザーのあちこち、半分を占める勢いで表示されていた。福音が大量増殖したんじゃないか、そう思えるほどに。

すぐ様、敵機の照合がされ、レーザーの横にデータが表示される。

「八卦龍第一執行部隊……『ホワイトゥアング白き牙』モビル開発MD、トーラス……？」

聞いた事の無い言葉に羅列に、ラウラが千冬に意味の提示を求める視線を送る。

「ちーちゃん！ あの戦争屋もいる……！ きょーくんが相手してる

けど……こんな状況じゃ……！それに、福音の反応が消えた……！」

「サーシエスカ……一番いなくていい奴がいるとは……！」

アリー・アル・サーシエス。元は傭兵だったようだが、八卦龍に雇われて以来、ここ数年ずっと八卦龍で戦っている戦争好きな最低最悪の人間。自分自身でもそう名乗っている、それがサーシエスだ。

腕はその辺の国家代表よりも立ち、彼の使う『ブラッディアルケ―ガンダム』の性能も相まって、八卦龍の中でも五本指に入る厄介な敵の一人だ。が、サーシエスがいるのと他の五本指に入るメンバー全員、どちらがいた方がマシかと聞かれれば、ソレスタル・ビーイングのメンバー全員後者だと答える。

強さもそうだが、敵の倒し方は最低だし、残酷なんて言葉が生易しく聞こえるほどの殺し方をする。今までに何人、このアリー・アル・サーシエスの餌食になった事か、と考えると、圧倒的に後者の方がマシなのである。

今、その最低最悪の敵が戦闘空域にいる。考えるだけで最悪だった。

「ちーちゃん！ 背中のネコ園からの映像、来たよ……！」

「出せ……！」

空間投影型スクリーンに映像が映し出される。

そこには、圧倒的な弾幕を受けながらサーシエスと戦う、ボロボロのウイングゼロの姿があった。

* * *

恭介とサーシエスは、もう何回目かも分からない鏖迫り合いを弾いて距離を取る。

「行けよッ、ファングウ……！」

サーシエスがそう叫ぶと、両腰のバインダーからなにか尖った物

が六個ほど射出された。それは鐳のような物を開くと、赤いGN粒子を吐き出しながら飛び回り始め、血のように赤いビームを吐き出しながら恭介に迫ってきた。

恭介はビームを大型ウイングで弾きつつ、『マシンキャノン』で迎撃するが、動きが速過ぎて弾が全く当たらない。

更に、サーシエスの背後にいた大量のトーラスが、その手に持つ『ビームカノン』を放ち、圧倒的な弾幕を形成し出す。

「くっ…… 箒と一夏は……！？ ツー！」

視界に映る二人、その片側である箒は一夏を振りほどき、サーシエスに突っ込んでいく。

サーシエスと箒の実力差は致命的に空いている。更に疑似GNドライブ搭載機は、例外無く絶対防御を文字通り貫通し、人体まで届く。箒がサーシエスと戦ったりすれば。

最悪のイメージが頭をよぎった。

恭介は迫り来る弾幕を無視して、何発か当たりながらもサーシエスに接近する。

「はあああああああああああああ！！」

サーシエスに接近する箒が『雨月』を横薙ぎに振るった。

「ハッ！！ 俺とやり合う気かあ？ 止めとけよお、その命、散らす事になるぜ？」

「なっ！ 男！？」

「ワリイなあ！ 男でよおッー！」

ガキーン！ と、箒の『空裂』とサーシエスの『GNバスターソード？』がぶつかりあう。あうはずだった。

が、『GNバスターソード？』は一瞬の鐳迫り合いも無く『空裂』を斬り裂く。

「なっ！ー！？」

「ちよいさあッー！！」

更に、至近距離で放たれた『ファンゲ？』が紅椿の手足に突き刺さり、爆発する。完全に吹き飛んだ紅椿の手足に、素肌の手足を晒す。

「グウっ!!」

「どうしたあ？ 一瞬でさっきまでの勢いが無くなっちゃったぞお？ ええ？ 専用機持ちさんよお!!」

ガッ!! と箒は蹴り跳ばされる。瞬間、紅椿が強制解除された。福音戦でのエネルギー消費に次いで突然の乱入。エネルギー切れの証拠だった。

「箒!!」

落ちていく箒を一夏が受け止める。サーシエスがそんな二人にニヤリと笑いながら、ライフルモードの『GNバスターソード？』を向ける。砲口が赤く光った。

わ、私は……死ぬのか……？ こんな所で!?

が、それでも天使は箒を見捨てなかった。

「俺を忘れてもらっちゃ困るぜ!!」

ビームを放つ直前、緑色のビームサーベルがバスターソードの腹を蹴り上げ、軌道をずらした。赤いビームが明後日の方へと飛んでいく。

「ちっ……しぶてえんだよお! ソレスタルなんたらアッ!!」

「それはこっちの台詞だ! アリー・アル・サーシエス!!」

再びぶつかりあうウイングゼロの『ビームサーベル』とブラッディアルケーの『GNバスターソード?』。火花を散らしながら鏖迫り合う。

恭介はサーシエスの腹を蹴り飛ばし、第二リミッター殺傷設定への移行の解除を開始した。目の前に リミッター解除、コード入力 と表示される。

「第二リミッター解除、解除コード、俺達が『We are GUNDA M^だ!!』」

同時、ウイングゼロの胸部センサーが光り輝く。第二リミッター解除完了、と表示されるのを確認すると、恭介はサーシエスに

突撃する。その傍ら『ウイング・ファンネル』を射出し、一夏達の方に回してゼロシステムに制御を任せる。

一夏達に回された『ウイング・ファンネル』は四機ずつで円を作り、合計七個の部分的なGNフィールドを形成する。一夏と箒を囲むそれらは、トールラス達の放つ弾幕を全て防ぐ。

「へっ、女共の心配より、自分の心配したらどうなんだよッ!!
オラ! 人形共!! 働きやがれエツ!!」

サーシェスがそう叫ぶと、さっきから動かずに弾幕を張るだけだったトールラス達が動き始めた。相変わらず『ビームカノン』を撃ちながら、恭介達を囲まんと広がっていく。

「包囲する気か……! くっ……一夏、箒!!」

「な、何!?!」

「お前らは早く撤退しろ! いくら俺でも、お前らを守りながら……のヤロオっ! コイツと戦うのはキツイ!! 俺が殿^{しんがり}をやる! 行け!!」

サーシェスと弾き飛ばしながら恭介は言う。

「そ、そんな! 恭介だけ置いてなんて!」

「箒を抱えたまま戦えるか!!」

『GNバスターソード?』から放たれるビームを大型ウイングで弾き、左手に持った『ツインバスターライフル』を放つ。サーシェスは当然の用に避けるが、トールラス達は十数機巻き込んだ。

「そのまま戦って箒に当たったらどうする! 怪我じゃ済まないんだぞ!!」

「ッ!!」

「早く行け! お前らが撤退すれば、俺も下がる! とっとと行けえッ!!」

視界を埋め尽くしていくトールラス。コイツらに囲まれれば、撤退なんて出来ない。ただでさえ何の装備もしていない箒を抱えていると言っのに。

白式のエネルギーも限界だ。おそらく花月荘についた瞬間にエネ

ルギーが切れる。

「……絶対、恭介も帰ってきてね」

「ああ……。俺だって、まだ死にたくない」

死。それを聞いた瞬間、体が震えた。

振り払うように一夏は恭介から背を向け、撤退を始めた。箒に負担がかかり過ぎない程度に速度を出して飛ぶ。

背後からは……。まだ火花の散る音が聞こえていた。

「……逃がしても良い、だと？ チツ、つまらねえ。まあ良いか。まだ獲物は残ってるからなア」

「良い趣味してるぜ……。まったく」

一夏達が撤退して数分。おそらくもうそろそろ花月荘に着く頃だろう。

ウイングゼロはボロボロだった。大型ウイングは二つ壊れ、小型は三つ壊されている。V字のアンテナも片方欠けてしまっている。

装甲はあちこち傷だらけで、ツインアイにもヒビが入っていた。

（……そろそろ限界、か）

二つあるGNドライブの同調率の低下が見られ始めた。機体の限界、そして背中中のウイングが五つも壊されたのが原因だろう。機体の出力が低下してきているし、もうすぐ動かなくなるかもしれないというより、今もまともに動かない。飛んでいるので限界だ。

「さーて、いい加減死ねよッ！ ソレスタルなんたらあ！！ トレーズの旦那共が来る前に、ぶっ殺してやるよオ！！」

ガチャリ、と全面を覆うように配置されたトールラス達が『ビームカノン』を構える。

そして。

ウイングゼロは『嵐』に飲まれた。

第21話「天使と福音と人形達」(後書き)

んー……戦闘シーン久々に書いたけど……難しい！
ていうか今回の終わり方はどうなのかな？ 微妙だったりしないかな？

感想、待ってます！

ブラッディアルケーとトールス

『ブラッディアルケーガンダム』

搭乗者

- ・アリー・アル・サーシエス

武装

- ・GNバスターソード？（バスターソードモード・ライフルモード）
- ・GNフアング？ 10機×2＝20機
- ・脚部GNビームサーベル
- ・背部GNミサイル
- ・GNシールド

特殊機能

- ・GNステルスフィールド

特殊技能

- ・TRANS-AMシステム

特殊動力

- ・疑似GNドライブ×3

- ワンオフ・アヒリディー
単一仕様能力
ブラッディアルケー
- ・死への誘い手

詳細

格闘特化の機体。疑似GNドライブは、両肩と背中に設置されている。

GNバスターソードは、バスターソードモードとライフルモードがあり、前者は当然ビームサーベルと鰐迫り合う事が出来る。

GNフアングは腰のバインダーに一〇機ずつ装備されており、機動性などが向上されている。

両脚部の爪先には一基ずつビームサーベルが内蔵されている。蹴りと同時に斬撃を与える事が可能。

GNミサイルは、ポッドを背中に二つ装備している。二五発ずつで、全弾合計五〇発。

GNシールドは、左腕に装着している実体盾。表面にGN粒子を定着させることでビーム・実弾問わず防御可能。更に、両側面の赤いパーツを展開する事でビームシールドを形成可能。このビームシールドは武装にも転用可能である。

トランザムはGNドライブ二つで行われる。限界時間まで使用すると、爆散。

特殊機能であるGNステルスフィールドは、両腕、両足、バインダーからGN粒子を広域に最大散布し、レーダーなどを無効化する巨大なジャミングフィールドを形成する。このフィールド内ではビームが拡散される。さらにフィールド領域も操作可能であり、やり方次第ではこちらだけビーム兵器を使用出来ると言う運用法も可能。

『死への誘い手』は、搭乗者の感情の高ぶりによって機体性能が上昇するというもの。機動性や耐久力などに影響。

『モビルドール トーラス』

武装

- ・ビームカノン

特殊機能

- ・ゼロシステム制御MD

特殊技能

- ・なし

特殊動力

- ・疑似GNドライブ

詳細

八卦龍第一執行部隊『ホワイトファング白き牙』開発のモビルドール。

武器は高出力ビームを放つビームカノンのみ。

基本的に搭乗者は無く、ゼロシステムに制御された機械人形オートマトンとして戦場に出される。モビルドールの中で一番遭遇する機体。

ブラッディアルケーとトールラス（後書き）

ブラッディアルケーのワンオフ適当です。

第22話「絶望と不屈と新たなG」

恭介が落ちた。リトルバスターズ？背中のネコ園から送られてくる映像の中で、そんなフアンタジーは起きた。ありえない事

「……そうか。分かった」

千冬は現在、東、シャルロット、沙耶、グラハムしかない

一夏達は部屋に戻した、先程まで作戦本部だった宴会場で背中のネコ園にいる直枝理樹と連絡を取っていた。空中投影型スクリーンに映る童顔の少年は、不安げな表情を浮かべながら通信を切る。

「どうやら、なんとか少年は回収されたようだな」

「ええ。転生者不審者を捕まえた時に近くまで来させてたから、ちょうど良い所にいたみたいよ」

「気絶はしてるけど、重傷ってほどでもないみたいだね。ウイングゼロが頑張ってくれたんだ……」

リトルバスターズ？恭介を回収したのは背中のネコ船。ソレスタル・ビーイングの地上用戦艦だ。基本的に海中移動で、出てきても光学迷彩によって周りからは見えない。その上GNDライブに寄るレーダー・通信妨害効果により、完全な神出鬼没と化せる船だ。それは八卦龍相手にも同じ。

回収された恭介は、熱中症のような状態だったらしい。が、常人なら軽く全身火傷やけどか丸焦げな状況だったとの事で、すぐ様ネコ船内の医療室に運ばれていったようだ。

「だがそう樂觀もしていられまい。現にブラッディアルケー……アリー・アル・サーシエ達はまだ先程の空域にいるのだ。どうも向こうも戦艦を持ってきたようだな……」

「うん。海に突っ込んでいく機体とかもあるしねー。ちーちゃん、これからどうするの？ 明らかに私達を待ってるみたいだけど」

「……ゼロの戦闘映像から、サーシエスはトレーズが来ると言っていたな」

「トレーズか……。八卦龍においておくには惜しい男だ……」

トレーズ・クシュリナーダ。ホワイトゥアング『白き牙』の副隊長だ。「事は全てエレガントに」が心情の、根っからの騎士気質。人は戦ってこそ人だ、と彼の言動から分かる通り、モビルドールは好きではないらしい。

腕は立つ。隊長であるゼクス・マークスに勝るとも劣らない腕前だ。それでいてカリスマもある。グラハムが“惜しい男”と言うのも理解出来る気がする、と千冬は思う。

「トレーズが来るからにはアイツの補佐であるレディ・アンも来るだろう。私とグラハム、朱鷺戸、デュノアだけで、あの三人とあれだけのモビルドールを相手にするのはさすがにキツイ」

「そうですね……。僕のケルディムサバーニヤのマルチロックオンも、相当な数ロック出来るとはいえあれだけの数を一気に、は無理ですし……」

「千冬嬢、援軍の要請は出来ないのか？」

「もう要請した。が、どうやら第二部隊『ロンド^{アイ}ベル』は『偽・革新者』に足止めされているようだ。一応、アルゴス隊を呼んだんだがな……」

アルゴス隊は、クリスカとイーニアの所属する部隊だ。『ロンド^{アイ}ベル』の三部隊のうちの一つで、二人のチェルミナートル？と？を元にしたISを使用する精鋭部隊である。

「だったらどうするのよ、無視でもするつての？」

「そうしたら連中はここまで攻めて来る可能性がある。トレーズがそんな事をするとは思えないが……サーシエスがいるからな」

「独断で来るかも、って事ですか？」

「今までのデータを見る限り、『白き牙』と『偽・革新者』は各々独立した指揮系統のようだからな。サーシエスはトレーズの指示など基本的に受けんだらうよ」

上司から命令でもされていない限りはな、と千冬は付け加える。

「ふむ……。その方が楽そうではあるが、生徒達に被害が出る可能性

はかなり高い。それは避けるべきだな」

「だから早急に手を打たなければならんだが……戦力がな」

サーシエスとトレーズは強敵だ。二人ほどではないにしろ、強敵であるトレーズの補佐、レディ・アンもいる。この三人には、千冬、グラハム、沙耶の三人が行くしか無い。しかし、そうなると残りの数千もいるトールラスはシャルロットだけで対応しなくてはならないやろうと思えばケルディムサバーニヤの全力乱れ撃ちで半分以上は削れるだろうが……囲まれれば蜂の巣だ。ガンダムの装甲は確かに固いが無敵ではないのである。

が、それでもやらなければならない時もある。

「……仕方が無い。デュノア、やれるか？」

「やらなきゃみんなが危ないですよ？ だったら……多少の危険くらい、ガンダムマイスターになった以上、覚悟はしてます」

「そうか……よし、ならば、私がスサノオでトレーズの相手をする。グラハムはブレイブでサーシエス、朱鷺戸はレディ・アンをやれ。アルゴス隊の到着はあまり期待出来ん。だが……死ぬなよ」

「……了解（その旨を良しとする）！」「」

と、戦闘準備に取りかかるうとする四人。

「ちよーっと待ってくれるかなー？ ちーちゃん」

「……束。何だ？」

くるり、と回転椅子を回して千冬達の方に向く束。

「戦力なら……まだあるでしょ？」

「何？」

「当人達はやる気みたいだよ？」

ピッ、と束はキーボードを操作する。空間投影スクリーンに映像が出された。そこは浜辺。そしてそこにいるのは、
「アイツら……！」

恭介を除く、リトルバスターズだった。

＊ ＊ ＊

自室待機が出されている中、篠ノ乃箒は部屋を抜け出して砂浜に座り込んでいた。

「……………」

一夏に運ばれ、帰還して最初に聞いたのが恭介が落とされた、という事だった。先程何とか回収されたとは聞いたが、あれだけ危険な相手と大量の敵を相手にしたのだ、少なくとも軽傷ではないだろう。

（私は…………）

力が欲しかった。今朝まではただ嬉しかった。

クラス代表対抗戦の時や、ラウラのVTシステムの時。自分はずっと、ただ見ているだけだった。何も出来ずにいた。ただ守られて過ごしてきただけだった。かつては自分よりも弱かった一夏でさえ、自分の身程度は自分で守っていたと言うのに。

だから専用機を欲した。専用機があれば、一夏達の、恭介の隣に立てると思ったから。

だが 現実はそのままで甘くなかった。

（…………私が…………私が浮かれていたから…………）

ぎゅっと膝を抱く。

紅椿のダメージは大きい。三日ほどは使えないとまで言われるほどだ。

（恭介だって言ったじゃないか…………私には紅椿での実戦経験も、使用時間も、スペックなどの把握も、実戦に出るには何もかもが足りていない。なのに私は、一専用機を手に入れただけで強くなった気になって…………出るべきじゃなかった、私はあそこで出撃を断るべきだったんだ…………なのに…………）

全ては今更。なにを言っても、なにを後悔しても遅い。

（恭介の命令を聞いていれば良かったんだ…………それなのに…………）

「私、は……」

もう、ISには乗らない……。

膝を抱く手に力を込める。潮風が肌を撫でると、体が少し震えた。夏でも夜風は寒く感じるらしい。

と、背後から砂を踏む音がした。

箒は無気力なまま振り返る。

「アンタ、こんな所で黄昏れてた訳？」

ふあん
「鳳……」

呆れ顔で鈴音は歩いてくる。

箒はなにを思うでも無く、視線を海に戻す。

「あー、あー、分っかかりやすいわねー」

真横まで来た所で、鈴音は立ち止まった。

「あのさあ」

箒に目を合わせようとせず鈴音は続ける。

「恭介が落ちたのって、アンタのせいなんですよ？」

「……ッ」

鈴音らしい（失礼かもしれないが）オブライトなど一ミリも無い
ド直球をまともに受けた箒は、思わず顔を顰^{しか}めた。

「で、落ち込んでます、ってポーズ？」

「ざっけんじゃないわよッ！！」

ガッ！ と、鈴音は箒の胸ぐらを掴んで無理矢理立ち上がらせる。

「やるべき事があるでしょうがッ！ 今戦わないでどうすんのよ！」

「わ、私は…… もうISには乗らない……」

「っ！！」

肌を叩く音が夜の海に響いた。思わず箒は砂浜に倒れ込む。

「甘ったれてんじゃないわよ……！ 専用機持ちつてのはね、そん

なワガママが許される立場じゃないのよ！ それともアンタ」

戦うべき時に戦えない、臆病者？

頭の何かがキレたような感覚がした。

「ど……どうしろと言った！ 紅椿はしばらく使えない！ 実力の差だつて圧倒的だ！ その上数も性能も段違いなんだぞ！？ どうやって戦えと言う！ まさか打鉄うちがねでも使えと！？ そんなものは自殺行為だ！ あの血の様に赤いISとその使い手と直に戦った私には分かるっ！ あの男は……たとえ私が紅椿を使えたとしても、私達は何十人、何百人集まろうと、勝てない相手だ……ッ！」

大袈裟ではない、と箒は思う。あの男の強さは、はつきり言つて異常だ。もし箒達のISが第四世代で、もし数百人、それこそ千人近くいたとしても全て斬り捨ててくる そんな想像が箒には容易に出来てしまう。

あの巨大な剣は『雨月』を紙の様に斬り裂いた。腰から出た謎の刃は一瞬で紅椿を大破させた。予想外とかそういうレベルではない。まさに異常だ。

そして、

「あのとき……私は確かに死を感じた、死を意識した……！ 死が目の前まで来ているのをはつきりと感じたんだ！ 私は……恐い……！ 恐いんだ！ アイツと戦うのが！」

無意識に抱きしめた自分の体が震えている事に箒は気付いた。

今でも鮮明に思い出せる。紅椿が大破させられ、赤いIS持った巨大な剣が銃の形態となり、銃口が赤く光つて自分を撃ち抜こうとしているのを。

死を身近に感じたとかそういうレベルじゃない。もはや目の前だった。寸前だったのだ。恭介がいなければ、今頃海の藻屑もくずとなっていたはずだ。

だが。

「だから？」

「何……？」

思いも寄らぬ返しに顔を上げる。

「だから何だ、って聞いてんのよ。怖いから戦わない？　だったらあたし達だって戦おうとなんてしてないわ。あたし達だって怖いもの。凄く怖い。でもね　」

鈴音は告げる。

同じ女として。人間として。

そしてなによりも、同じ男に惚れた者として。

「それでも戦うの。戦わなきゃならないのよ。それが例え、文字通り命がけの戦いだとしても、惚れた男がやられたんだもの。その時点で、あたし達に逃げるなんて選択肢は選べない、選びたくなくなるのよ。選択肢を壊してでも、ね」

鈴音が振り返った先には、一夏達がいた。

一夏がわざわざ運んできたらしい打鉄を砂浜に置く。

「で、どうだった？」

「見つけた、というより、連中は動いていないようだ」

「そう……じゃあ、逆に都合じゃない。シャルロットは？　まだ

先生達の所？」

「みたいですわね」

「なーにやってんのかしらねえ。まあ良いわ」

鈴音は再び箒の方に向き直る。

「あたし達は恐くても連中に仕返ししてやるって決めたわ。アンタはどうするの？　そこで恐がってブルブル震えてるのか、それとも。どうする？」

ずっと差し伸べられる手。差し伸べてくる鈴音。どちらも箒には太陽の様に眩しく見えた。

自分も彼女たちも怖いのは同じ。

違うのは、恐くてもスカズ力と前に進めるか進めないか。

箒はその手を　取った。

「ふん、やつとやる気になった？」

「ああ……癩だが、喝を入れられてしまったようだ」
ガッ、と拳をぶつけあう。

「打鉄では足を引つ張ってしまいかもしれないが、もう私は逃げない。みんな、よろしく頼む……！」

一夏達に頭を下げる筈。

「頭なんて下げなくていいよ。大丈夫、私達が筈を守るよ」

「ですからあなたは、わたくし達を守ってくださいな。それでギブアンドテイクは成立しますわ」

笑顔でそう言う一夏とセシリア。

「ふんっ、まあ、ちよつとくらいは守ってやつても良いぞ」

そっぽを向きながら少しだけ頬を染めながら言うラウラ。

「決まりね。んじゃ、とつとと行きますか！」

『おうつ！』

鈴音達は一斉にISを展開し

「どこに行く、というのだ？」

一斉にぴたりと止まった。

ギギギ、と全員が振り向くと、

『……お、織斑先生（きよ、教官）（ち、千冬姉）……』
阿修羅がいた。

「全く……貴様らと言う奴らは……」

額に青筋を浮かべ、口元をヒクヒクと引きつらせる。

「ち、千冬姉！ お願い、行かせて……！」

「行つてどうする？ お前らだけであの数とあの赤いISを倒せるのか？」

「そ、そんなの分からないけど……でも！」

「先程、増援が来たとの情報も入っている。それでも、勝機があるのか？」

「そ、それは……」

増援が来た、というのは初耳だった。いや、そもそもあれだけの数いたのだ、増援が来るなどと考える方がおかしい。それともそう考えるのは素人だから、と言う事なのだろうか。

千冬の気迫と状況の絶望さに、思わず黙る一夏。

だが、黙らない女もいた。

「それでも、あたしは行きます」

「鳳……」

「行かなきゃ、あたしがあたしでなくなる気がするんです。だから

……たとえ行けば死ぬとしても……それでもあたしは行きます！」

千冬の気迫に負けんと、一瞬も揺らぎを見せずに立ち向かう鈴音。

「……お前達も同じか？」

千冬の質問に全員が頷く。

一つため息をついた。

「……なら、せめて」

「せめてプレゼントを受けとってから行ってねーっ!!」

とうつ、と束がどこからか飛び、千冬と一夏達の間に着地した。

そしてポケットから通信機を取り出し、

リトルバスターズ?

「あー、あー、こちら束ー。背中のネコ船応答せよー。準備は整っ

た、入り口を開けたまえー！ オープンオープン！」

束がそう言った瞬間、一夏達の背後からガッコン、と何かの開く音がした。

でかい戦艦が大きな口を開けていた。

「!?!」

「さあ入った入った！」

「え!?! ちょ、あの!?!」

「いいから入れ。出なければ出撃などさせん」

「ちよつと！？ この戦艦はなんなんですよ！？」

「入れば分かる」

『んな無茶苦茶な！？』

「ほら、どーん」

一夏達は、束の取り出した巨大マジックハンドで押し入れられた。

* * *

戦艦の中は意外と広かった。押し入れられた場所は、どうも格納庫だったらしく、様々な機材やら資材やらが置いてあった。

そして、一夏達が連れてこられたのは、そんな格納庫の中心。置かれているのは 全身装甲のISだ。
フルスキ

「これは……恭介とシャルロットのISと同じ……？」

「総称は同じだ。武装や性能は全く違うがな」

ふと置かれた端末を束が操作すると、置かれた三機のISの上のモニターに、一夏達の名前が表示される。

「じゃ、自分の名前が書いてある機体の所に行つてねー」

「え？ それってどういう」

「これをお前達にやる、と言っているんだ」

『ええ！？』

「連中と戦いにいくのだろう？ ならばガンダムくらいは使わなくては、今のお前達では歯が立たんだろう」

「あ、でも覚悟しておいてね？」

束は少し真面目な顔で続ける。

「これを……ガンダムを手にする、って事は、私達ソレスタル・ビーイングの仲間になるってことだから」

「ソレスタル……ビーイング？」

ラウラが問うように呟く。

「ソレスタル・ビーイング、まあ有り体に言えば、世界征服をもく

るむ八卦龍と名乗る組織と対立している正義の味方だ」

「せ、世界征服う？」

胡散臭い物を見るような目で鈴音が言う。

「悪いが、私達には笑い飛ばせない話でな。考えてもみる、第四世代である紅椿を瞬殺するような機体が数千数万規模あつて、それを一気に使えるんだぞ？ 四六七機しかないISでどう立ち向かうんだ？」

「……………」

「話、続けるね？」

束はガンダムの装甲に手で触れる。

「私達はそんな世界征服を企む相手と戦っている。でもね、これは今で言う絶対防御に守られた戦争じゃない。一撃一撃が命に関わる、完全な殺しあいなんだよ」

「！！！」

「だから……私たちの仲間になる、って事は、人を殺す覚悟をしてもらわなきゃいけない。そして 殺される覚悟も」

「無理強いはせん。が、CBに入らなければガンダムはやらないし、出撃もせん。卑怯だとは思うが……」

「いえ、ありがたく使わせてもらいます」

「ほう……………」

答えたのは 一夏だった。

「だって、恭介がガンダムを持つてるって事は、CBにいるって事でしょ？ だったら私も貰うよ。命をかける覚悟はさっきした。人を殺す覚悟は……する。しなきゃ恭介と同じ戦場に立てないなら、する」

一夏の目には躊躇いも不安も何も無かった。ただあるのは絶対的な決意。それは他の四人も同じようだ。

彼女たちの瞳の中にある、その曲げ様が無いらしい決意に千冬は、嘆息するどころか思わず笑みすら浮かべてしまう。

「そつか……………ならば受けとれ。お前達の新しい力だ」

「つて言っても、今の専用機捨てる訳じゃないけどねー」

鈴音、セシリア、ラウラは各々の名前が書かれたガンダムに腰掛ける。

「箒ちゃんは、これ」

「これは……」

束が渡してきたのは、紅椿の待機形態である金と銀の鈴二つが付いた紐だった。

「なぜ、紅椿を……？」

「紅椿はね、本当の姿じゃないんだよ。ただガンダムを隠すための借り初めの鎧……。ほら、呼んであげて。『ガンダムグレン』つて」

「ガンダム……グレン……」

瞬間、紐がピカアツ！と光り、待機形態を解除する。

現れたのは……紅蓮色の機体。

腰には相変わらず『雨月』あまつぎと『空裂』からわれが。左腕には巨大な爪が折り

畳まれている。目の前に表示されたデータから分かった事だが、背中にはエナジーウイングという飛行装備がされているらしく、そこからビームが撃てたりもするらしい。

「また……私と飛んでくれるのか？ 紅椿、いや、グレン」
グツと、手を握りしめる。

その手は今まで感じた中で、一番力強く感じた。

一夏はこっちだ。

そう千冬に言われて付いてきたのは、同じ格納庫内ではあるが、四人から少し離れた所。

そこには 白がいた。

「これは……」

「お前のためのガンダムだ。名は、『ユニコーンガンダム・白式』」

「ユニコーン？ それに白式、つて……」

「白式のデータを元に作った。故に白式、と付いている。まあ、それ以外の意味は無い」

「ユニコーン……」

ぺたり、とその真つ白な装甲に手を触れる。

角の付いたフェイスアーマーが特徴的だ。が、ガンダムというには違和感がある。

「千冬姉、なんでこのガンダムはアンテナがV字じゃないの？」

予想通りの質問、とても言うように千冬は即答する。

「それは……そいつがお前を乗り手と認めてこそ、ガンダムとなるからだ」

「？ 私専用って……」

「確かにお前専用の機体だよ。でも、それは私達が決めた事だ。そいつはまだ、お前を自分の真の力を使うに相応しいか見定めている状態なのさ」

「見定める……」

「そいつをガンダムにしたければ……強い、誰よりも強い意志を持つ事だ。そして叫べ。己の思いを。自分の一致した、やりたい事とやるべき事をそいつにぶちまけてみる。それをユニコーンが認めれば……絶対に応える」

しばらくユニコーンを見つめていた一夏は、小さく頷き、ユニコーンに乗り込む。

* * *

発進用ハッチが開いた。外はまだ夜。しかし星や月の照らす空は、決して暗くはなかった。

カタパルトにガンダムの足を固定した一夏は、思わず唾液を飲み込む。

『全システムオールグリーン。リニアボルテージ正常。発進タイミングを織斑一夏に譲渡します』

「りよ、了解……！」

すー、はー、と一夏は息を整え、

「ユニコーンガンダム・白式、織斑一夏、行きますッ!!」
戦いが始まる。

第22話「絶望と不屈と新たなG」（後書き）

今更だけど、ユニコーンガンダム・白式、って名前にどうなんだろう。『U・B』とか言ってたから今更変えよう無いなー、って思ってた変えなかったけど。

さて、次はサーシエス達との戦闘です。

第23話「3rd BATTLE START!」

サーシエスは疑似GNドライブのチャージを終えると、再び出撃した。もはや慣れ、親しみすら覚える発進カタパルトからの発進時に襲ってくるGを、心地よさすら覚えながら出る。

海上には相変わらずモビルドール・トールスの部隊がいた。数にして数千。全て無人機だ。これだけの数で完璧な連携がとれるらしい、と聞いた時は戦いたいと思った物だが、さすがに数千単位とまで来ると、さすがのサーシエスも無理だ、と諦めた。

定位置に付くと、先程増援（実はサーシエスがトールスを連れて勝手に先行しただけなのだが）として来たトリーズから通信が入った。

「おう、アンタか」

「サーシエス、命令違反はさっきのだけにしてくれたまえ。一応、私は君の部隊の隊長から君への命令権を貰っているのだからね」

命令権、と言った物の、実際はサーシエスにトリーズの命令は聞くように、と言われただけである。が、それを命令権と呼称するのは、八卦龍内で決まっている事のようなものだった。

「ははっ、すまねえなア。ついついいてもたつてもいられなくなっちゃまってよお。この前は不完全燃焼だったからなア」

彼が言うこの前、とは亡国機業を潰しにかかった時の事だろう、とトリーズは解釈した。

「仕様がないさ。君の実力に見合う敵は、CB以外にはそういないだろうからね」

「だから思わず先行しちまった訳よ」

「ふむ。まあ、君の気持ちも分かるよ。私も戦士だからね」

君とは違った種類ではあるが、とトリーズは付け加える。

「まあ今回の命令違反に関しては、とやかく言うつもりは無いんだ。レディが言うておけ、と言ってきたからこうして一応言っているだ

けだからね』

「はっ、相変わらず補佐の女には頭が上がらねえんだな」

『それは違うな。彼女は優秀だ、私に出来ない事をやってくれる。』

そんな彼女が言った方が良く、と言ったなら、私が考えるよりもその方が良いのだろう、と判断しただけさ』

「それを頭が上がらねえって言うんじゃないか？ ま、俺には関係ねーけどよ」

画面の奥のトレースは愉快そうに微笑んだ。

『さて。くだらない話は置いておこうか。先程、『イノベイト偽・革新者』の部隊がC Bの部隊と戦闘を開始したらしい。増援の足止め、という奴だね』

「ま、これだけの戦力差だからなア。それくらい呼ぶだろうよ」

『足止めは成功している。だとすると、織斑千冬の付近にいる戦力はかなり限られてくる』

「ガキ共生徒でも出してくる、ってかア？」

『おそらく、妹を含める専用機持ちだろう。おそらく……ガンダムを使わせるはずだ』

「へエ……」

ニヤリ、とサーシエスは笑みを浮かべた。普通の人間が浮かべないような、悪質な笑みを。

瞬間、サーシエスの後方にいたトールラス部隊が桃色の光に横一線に薙ぎ払われた。

「来たみたいじゃねエか、そのガキ共が使ってる、ガンダムって奴がよオ！」

* * *

ラウラの放った桃色のレーザー状のビームが、あのトールラスという機体を薙ぎ払った。当然全てではないが、確実に数十体は破壊した。

ガンダムアリオスハルート、ラウラの駆る、ISにして変形が可能な超高機動戦闘型ガンダムだ。基本カラーはオレンジ色。背中には大出力ビーム砲『GNキャノン』兼『GNシザービット』と呼ばれる近接型ビットを搭載した、四つのサイドコンテナを装備し、四つのサイドコンテナの中心にはミサイルコンテナであるテールユニットが設置されている。手にはビーム砲とソードを結合した『GNソードライフル』が二つ。脚部には、バーニアがコーン状の、機動性を向上させるための追加装備『GNバーニアユニット』を装備している。

約七〇機撃墜。まあまあじゃないかしらはっ、まだまだの間違いだろ？

「どっちでも良い。狙わずにあてずっぽうだったからな」

ラウラの前に喋ったのは、アリオスハルートの専用AIである『ハレルヤ』と『マリー』だ。搭乗者のサポート、及び特殊システムを使うために搭載されている。

「私はサーシエスを相手しよう。千冬嬢はトレースを、朱鷺戸君はレディ・アンを頼む」

「分かった。いくぞ、朱鷺戸」

「了解」

「君達はトーラスの掃討を頼む。無人機だからと言って油断は禁物だ。ゼロシステムで制御されている分、その辺の無人機よりも強いぞ」

『了解！』

グラハムは満足そうに頷くと、赤い粒子を撒き散らしながら飛び立っていった。それを一瞥した一夏達も飛び立つ。

と、ラウラが、

「一塊で行動しても効率が悪い。ペアを作って分散するべきだろう」「じゃあ二人ずつに別れるわよ。そうね……一夏は筈と。ラウラはシャルロットと。あたしはセシリアと。それで良いかしら？」

「異議はありませんわね」

「んじゃ、散開！」

「ペア同士や他のペアのフォローに回りやすい様、全員、離れ過ぎるなよ」

一夏達は各々散開していった。

* * *

第のガンダムグレンは紅椿同様、近接戦闘型だ。対して一夏のユニコーンは基本的に中近距離だが、遠距離も出来る万能型。このペアなら基本戦術は一夏が援護し第が切り込む、と言った物が妥当な物なのだろうが、ユニコーンを駆る一夏に射撃による支援が出来るかと言うと、残念ながら否。

ならばどうなるか、というところ。

「はあああああああああッ！！」

二人が一齐に振り放った『空裂』からわれと、『雪片参型』ゆきひらさんがたが、トールスを五、六機斬り捨てる。

トールス達は『ビームカノン』を撃ちつつ、二人を取り囲まんとするが、

「吹き飛ベツ！！」

グレンの左腕に折り畳まれていた爪が展開し、左腕に装備される次の瞬間、紅い膜がトールス達を襲った。放たれた膜内、つまり第の目の前にいたトールス達は次々に内側から膨れ上がり爆散する。

『ふくしゃすいしんがたじざい 輻射推進型自在可動有線式左腕部』、通称『かどうゆうせんしきむだりわんぶ 輻射波動腕部』。

左腕に装備した爪の掌から、高周波を短いサイクルで対象物に照射する事で、膨大な熱量を発生させて爆発・膨張などを引き起こして破壊する装備だ。直に照射する事も出来れば、集束して放ったり、拡散して放つ事も出来る。

他にも輻射波動によって発生する振動波によって、機体を丸ごとガードする障壁としても使う事が出来る。

その輻射波動の膜が消えると同時、輻射波動腕部から、輻射波動

のエネルギー源であるカートリッジが一つが射出される。

「す、凄い……」

幕の後ろで、『雪片』を振るいながら一夏が呟く。

「だが、これに頼ってばかりでもいられない。コイツのカートリッジは無限じゃないからな」

「ん、じゃあ、油断せずに行こうか」

「ああ！」

二人は更に切り込んでいく。

ラウラとシャルロットは、ペアとは名ばかりにほとんど連携などはしなかった。

かといって仲が悪い、と言う訳ではない。機体の相性が悪いとでも言うべきか。ラウラのアリオスハルトは超高機動戦闘・一撃離脱を、シャルロットのケルディムサバーニャは乱戦下での『乱れ撃ち』を主軸に開発された。どちらも単独戦闘を得意としている。故に連携は邪魔にしかないのだ。

しかし、だからと言ってペアを蔑ろにはしてない。ないがし

ラウラはこんな状況でも、しばらくはシャルロットの『GNホルスタービット』や『GNシールドビット?』による防御が抜けない事を理解している。その上であの乱れ撃ち。故に自分が攻撃に徹していても、問題は無い。

対してシャルロットは、自分が防御面では今の所問題が無いし、囲まれてタコ殴りなどまずありえないので、三六〇度乱れ撃ちしつつ、適度にラウラのフォローをしている。

シャルロットがハリセンボンか何かかと思うほどのビームを連射する中、ラウラは通り過ぎ様に斬り裂き、照射ビームで掃討し、四つの『GNキャノン』で薙ぎ払う。更に、AIのマリーが『GNシザービット』をコントロールし、周囲のトーラスを斬り裂きバラバラにして回る。

ラウラが通り過ぎるたびに周囲のトールスは爆散し、シャルロツトが一発ビームを放つたびに同じくトールスが爆散する。
現在、このペアの掌握した空域は何の問題も無かった。

鈴音とセシリアは、前のような無様な戦いは見せなかった。

鈴音の駆る『ガンダムブレイブナタク』は接近特化型。対するセシリアの『エンドレスフリーダムガンダム』は射撃特化。役割が完全に分けられる二人は、各々の得意とする攻撃法で敵を撃墜しペアをフォローする。

鈴音は当然の様に敵陣に切り込み、セシリアが少し離れ、マルチロックオンシステム使用して出来る限りロック、背部ウイングに搭載された一二機の『スーパードラグーン』、後ろ腰の『ドラグーン』四機、更に両肩に装備された『GNライフルビット？』四機、全二〇機のビット兵器と、ウイングに収納されたプラズマ集束ビーム砲『バラーナ』を展開する。

「キラさん、ドラグーン達は任せましたわ」

了解だよ、セシリア

瞬間、エンドレスフリーダムの全二七の砲門が火を吹いた。全てが吸い込まれるようにトールスに命中し、当たったトールスは全て爆散する。

それだけに留まらず、砲門が吹く火は止まらない。次々にビームやら砲弾やらを吐き出し、トールス達を落としていく。ただただ撃ち続けるだけではなく、鈴音の通るルートを邪魔しないよう、その上で鈴音の気付かないトールスを破壊する。

そんなセシリアの砲撃の雨をすり抜け、鈴音は『GNツインビームトライデント』で斬り裂き、『ドラゴンハング』でブチ抜き、『二連装ビームキャノン』で撃ち貫く。

初めての機体とは思えないほどに順調な戦場だ。

生徒達の戦闘を横目に、千冬はトレーズと罅迫り合っていた。

トレーズが駆るISはガンダムタイプ。赤い塗装のそれは、背中に大きなウイングを一对持ち、装備は右手に『ビームソード』、左手にシールドと、そのシールドに装備された『ヒートロッド』だけ。
「ふつ、さすがは君の生徒達だな、織斑千冬」

「私だけではない、十分性能に助けられているさ。命がけと言う状況にもな」

一夏達が数の暴力に負けず、あれだけ戦えているのは自分の教えもあるだろうが、他に二つの理由がある、と千冬は思う。

一つは特性・武装の類似性。ラウラのアリオスハルトは、シュヴァルツェア・レーゲンと似てる所など無いが、他はかなり似通っている。

例えば、セシリアのエンドレスフリーダムはブルーティアーズの『ブルーティアーズ』の似たようなビット兵器を使用する上、射撃特化。鈴音のブレイブナタクは、甲龍シエンロンと似たような武装（ドラゴンハング以外）で近接特化。グレンに至っては紅椿が姿や動力などが変わり、武装が増えただけと言っても過言ではない。

ある種似たような機体で、各々に合わせた整備をしてあるゆえ、性能の差以外に違いを感じられないはずだ。

そしてもう一つは……この命がけと言う状況。

「戦場は兵士を成長させる、命を賭けると言う状況が、奴らを鍛え続けているのさ」

死ぬ覚悟はしている、でも絶対に死ねない、そんな思いが一夏達を戦場で強くしている。そう千冬は言う。

バチィー！ と、『シラヌイ』とトレーズのビームソードがぶつかりあう。

「なるほど、戦いは人を成長させる。それがどんな戦いで、どんな結果に終わったとしても」

「だからこそ、戦いは人同士でやるべき、か？」

「そうだ。故に私は、モビルドールを肯定しない」

千冬のスサノオを押し返して突き飛ばし、左手のシールドに付けられた『ヒートロッド』を振るう。千冬はそれを『ウンリユウ』で弾く。

「モビルドールでは未来を作る心は作れない。例え我々八卦龍が勝つために必要な戦力だったとしても、私は肯定は出来ない」

トレーズは振るわれた『シラヌイ』をシールドで防ぐ。

「相変わらずだな、トレーズ。貴様と話しているといつも、貴様が八卦龍にいるという事実が許せなくなる」

「すまないな織斑千冬。だが、私が八卦龍にいるのは理由があるのさ」

「理由だと？」

「私は……敗者になりたいんだよ、勝者ではなく、敗者に……」

「敗者……だと……？」

『ウンリユウ』と『ビームソード』が鏝迫り合いになる。

「君達ソレスタル・ビーイングの存在を知ったとき、私は君達の持つ“未来を作る”心に感銘した。今まで嫌われ者は強くなくてはならないと勝利を求めてきた私には、カルチャーショックにも似た衝撃を受けたよ。未来は勝利だけでは手に入らない、人の心がなくてはならない。君達に出会わなくては、もしかしたら私はモビルドールの存在を肯定してしまっていたかもしれない」

『ウンリユウ』を流れるように千冬の手から弾き飛ばし、横薙ぎに『ビームソード』を振るう。千冬はそれを残った『シラヌイ』で受け止める。

「くっ……！」

「君達ソレスタル・ビーイングは、私達八卦龍に勝利するだろう。私はそれを間近で見たいんだよ」

「ならばこちら側でも良いはずだ！」

「残念だが、私にその資格は無いのだ、織斑千冬」

千冬は『零落システム』を発動させ、トレーズの『ビームソード』

を消滅させる。光刃が消滅した事で振り切った柄を引き戻さず、その勢いで回転しながら千冬を蹴り跳ばす。

「そんな私が、君達が勝利し、未来を作る姿を見るには八卦龍に入るしか無い。そのために、私は敗者になるのだよ。ただそれだけのために」

「ならばその機体は……そのガンダムはなんだっ？」

「このガンダムエピオン？は勝者になるための機体ではない。いや、この機体に乗って勝者になってはならないのだ。エピオンは兵器ではないのだから」

「理解出来ん、悪いが、全く理解出来んよ、トレース！」

「理解してくれなくて良い。私の理解者はゼクスとレディだけで十分だ」

振るわれる『シラヌイ』をシールドで弾き、光刃を再展開させた『ビームソード』を振るう。が、体を反らしながら後ろに下がる千冬に、装甲に傷をつけるだけで終わる。

しかしトレースはバーニアをフル出力で吹かし、後退した千冬に急接近し、一気に懷に潜り込む。右手には既に振るわれようとしている『ビームソード』。

残像すら残すほどの急激な加速に、千冬は一瞬反応出来なかった。

「ッ！」

「悪いが君を殺すつもりは無い。少しばかり眠っていてくれ、織斑千冬」

フツ、と振るわれた『ビームソード』は、スサノオの手首から先を斬り落とす。そして『ヒートロッド』を振り下ろして千冬をたたき落とし、先程の速度で腹を蹴り跳ばす。

「う、グッ……！！」

機体内部まで届く強烈な一撃に、千冬は思わず意識を手放した。

「……さあ、早く来てくれヒイロ・ユイ。私の最期を飾る最後の相手は、君でしか勤まらない……」

栗恭介

青い機体と赤い機体がぶつかりあう。ビームを放ち、刃をぶつけあう。

「ひやははッ！！ やるじゃねえか！ ソレスタルなんたらあー！！」
「いい加減、ここで落とさせてもらうッ！」

ブレイヴの左手が持つGNビームライフル『ドレイクハウリング』のチャージを完了し、銃口を展開して最大出力モードで放ち、薙ぎ払うように照射状態のまま銃身を横に振るう。まるでビームサーベルのように放たれたそれを、ブラッディアルケーを駆るサーシエスはすれすれで避ける。避けられたエネルギーの奔流は、少し離れた辺りにいたトールラス達を飲み込んで爆散させた。

サーシエスは避けた状態から接近し、『GNバスターソード？』を振り下ろす。バチバチバチ！ と、グラハムが右手に持った『GNビームサーベル』とぶつかりあう。が、サーシエスはそれを強引に突き飛ばす。

「グウッ……！！」
「ひゃっ、はははははー！！ オラオラオラあッ！」

単純なスペック状は、ブレイヴがガンダムタイプではないとはいえ互角。だがそれでパワー負けしたのは、搭乗者の問題ではなくシステムの問題だ。

ブラッディアルケーワンオフ・アビリティーブラッディアルケーの単一仕様能力『死への誘い手』、搭乗者の感情の高ぶりに機体性能が上昇する能力だ。基本的に機動性や耐久力などに影響してくるが、パワーも例外ではない。久々の強者との戦いに、感情が高ぶりまくっているサーシエスに、ブラッディアルケーの性能が急上昇しているのだ。

バッチィッ！！ と強烈なパワーで振り下ろされる『GNバスターソード？』を受け止め、罅迫り合う事無くグラハムは吹き飛ばされる。

「行けよファンゲウツ!!」

ブラッディアルケーの両腰のバインダーからファンゲが五機ずつ射出される。ファンゲ達は鰐を展開し、飛び回りながらビームを放ってくる。グラハムは『デیفエンスロッド』で数発弾きながら体勢を整え、水しぶきを上げながら海面スレスレで急上昇する。

振り返ると、いつの間にか背後から迫っていたファンゲ三機をビームサーベルで破壊し、下方面からビームを放ってくるファンゲに、両腕部に内蔵された『GNビームマシンガン』を掃射する。が、一機に当たり破壊しただけで避けられてしまった。残った六機のファンゲは尚も接近しながらビームを放ってくる。

「ちよいさあつ!!」

更に後方から『GNバスターソード?』を振るわんとするサーシエスが接近していた。上昇してそれを避ける。

(ええいつ……! サーシエスの戦闘能力だけでも厄介だと言うのに、そこへワンオフまで加わっては……! だが!!)

「負けられんよ!!」

『ドレイクハウリング』の最大出力モードを横薙ぎに放って残ったファンゲを破壊し、『GNビームマシンガン』でサーシエスを牽制し、『GNビームサーベル』を右手に構えながら突撃する。

「おらアツ!!」

「ふツ!!」

振り下ろされた『GNバスターソード?』を、グラハムはビームサーベルを斜めに構えて受け流す。

「!?!」

「はアツ!!」

「んなろお!!」

ガッ!! とサーシエスの膝蹴りがブレイヴの腹に突き刺さる。かわりにグラハムは、蹴られてズレはしたが、振り下ろした『GNビームサーベル』で(こちら側から見て)右側のバインダーを斬り落とした。バインダーは海へと落ち、消えた。サーシエスはそれを

見て舌打ちする。

「ったくよお、アルケー直すのだってタダじゃねエんだぜ？ それ
が例えバインダー一個だとしてもだ」

「安心すると良い。君のガンダムはまだ壊れる」

「ハッ！ 言ってくれるぜ、ええ？ ソレスタルなんたらさんよお
！！」

「悪いが一気にケリをつけさせてもらおう。君のガンダムは、皆見
飽きている！！」

「上等だア！ やってみせやがれ！！」

「「トランザムッ！！」」

赤く発光する二機は、再びぶつかりあう。

第23話「3rd BATTLE START!」(後書き)

まさかの千冬さん即撃墜。多分、千冬さんならこんなあつさりと落とされたりはしないんだろうなあ。

でもトレーズの相手に向かっちゃった千冬さんを落とさないで、恭介と戦わせられないんだよ……。ついでにこれ以外に方法が思いつかなかったと言うか考えるのが面倒だったと言うか……。

千冬さんファンの皆さん、ごめんなさい。

沙耶とレディ・アンとの戦闘は次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5118x/>

IS～インフィニット・バスターズ！～

2011年12月20日19時53分発行